

京都府遺跡調査報告書

第 29 冊

浦入遺跡群

<本文編>

2001

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター



(1)浦入湾全景（平成7年、南から）



(2)浦入湾全景（平成9年、南から）



(1)M地点（嶋遺跡）全景（真上から、上が北）



(2)N・B地点全景（東から）



(1)A地点全景（東から）



(2)O-1地点全景（南東から）



(1)O-2 地点全景 (真上から、上が北西)



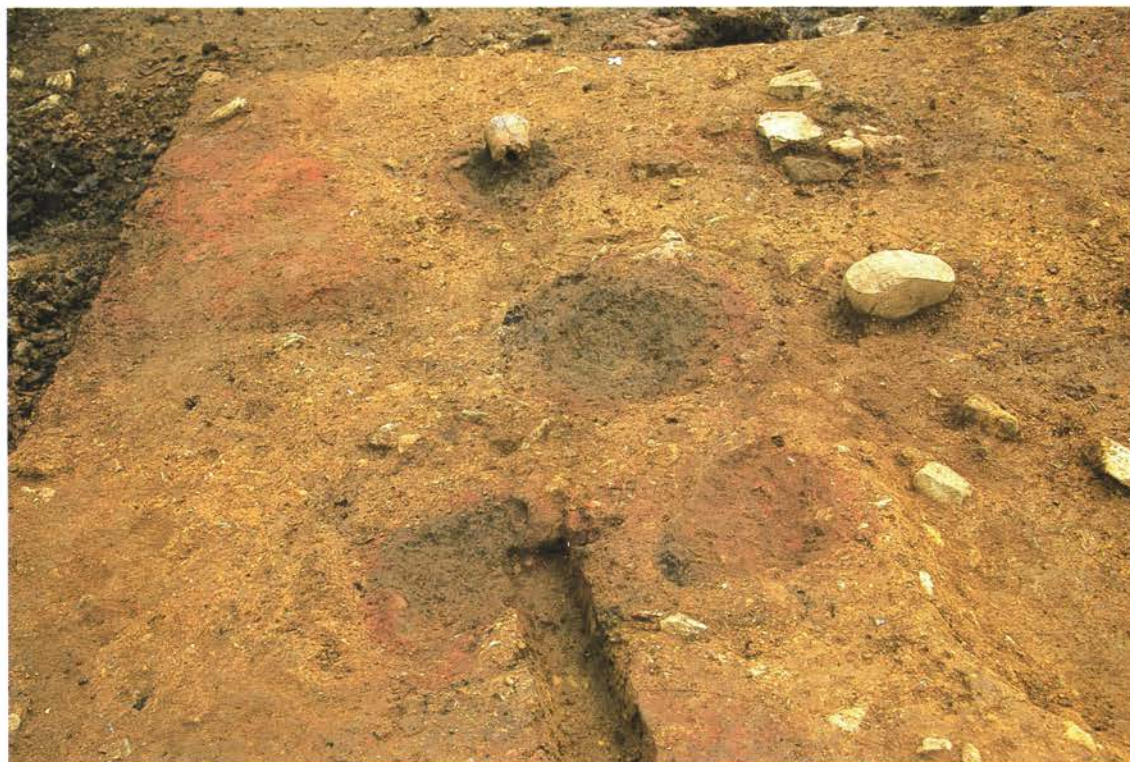
(2)O-2 地点石敷き炉全景 (南東から)



(1)O-2 地点SK02全景（北東から）



(2)O-2 地点下層焼土面全景（南西から）



(1)O-1 地点鍛冶炉 5・8~10 全景 (西から)



(2)O-1 地点鍛冶炉14断面 (東から)



(1)丸木舟出土状況（南東から）



(2)丸木舟出土状況（東から）



(1)O地点ほか出土製塩土器



(2)N地点出土弥生土器

序

舞鶴市字千歳小字池カナル・花ヶ口ほかで実施した、浦入遺跡群に関する報告書を『京都府遺跡調査報告書』第29冊として、ここに刊行いたします。

この発掘調査は、関西電力株式会社による火力発電所建設に伴い、舞鶴市の依頼を受けて、舞鶴市教育委員会と協議した調査計画案に沿って、舞鶴市教育委員会と(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターとが主体となって、平成7年度以降、平成9年度までの3年間にわたって実施致しました。各年度の調査成果の概要については、逐次『京都府遺跡調査概報』・『京都府埋蔵文化財情報』に掲載してきたところであります。

本書は、各年度の概要報告で果たせなかった詳細な事実の報告を行うとともに、それらの諸事実を分類・集成し、考察を加えたもので、これをもって記録保存の責務を果たしたものと考えます。

刊行にあたりましては、舞鶴市教育委員会には現地での発掘調査の実施から本書の刊行に至るまで、多大のご理解とご協力を賜りました。また、京都府教育委員会をはじめ、関係各方面から、有益なご指導ならびに助言をいただくことができました。この場を借りまして厚く御礼申し上げる次第であります。

最後に、この仕事にかかわった担当職員諸君の労苦をねぎらうとともに、本書が京都府のみならず、わが国の考古学研究の進展に寄与することを、心から願ってやみません。

平成13年3月

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
理事長 樋口 隆康

例 言

1. 本書は、京都府舞鶴市大字千歳字池カナル・花ヶ口ほかに所在する浦入遺跡群^{うらにゅう}の報告書である。本調査は、関西電力株式会社が計画された火力発電所の建設工事に先立ち、舞鶴市の依頼を受けて実施した。調査は、平成7年6月19日から平成10年3月18日まで行った。
2. 現地調査および本報告にかかる諸経費は全額舞鶴市が負担した。
3. 発掘調査は、舞鶴市教育委員会と当調査研究センターとが分担して行った。発掘調査区は、舞鶴市教育委員会が、火力発電所の建設計画等に基づいて、A地点から順にR地点までを設定した。このうちA・B・D・E・F・G・H・M・N・O・Rの各地点について、当調査研究センターが発掘調査を実施した。本書は、上記各地点のうち、A・B・M・N・O・Rの各地点について、報告するものである。
4. 本書に掲載した遺構図の方位は、鍛冶炉実測図を除き、国土座標平面直角座標系第VI系による座標北を示す。鍛冶炉実測図の方位は、磁北である。
5. 本書に掲載した遺構図のうち、特にことわらない限り、薄い網点は焼土、濃い網点は炭層を示す。
6. 本書で報告する遺構略号・番号は全て調査時のものである。
7. 本書の執筆は、辻本和美・田代 弘・筒井崇史・藤井 整(以上当調査研究センター)・松本達也・水野聡哉(舞鶴市教育委員会)・和泉大樹(千早赤阪村教育委員会)・岡田憲一・伊藤栄二(以上奈良大学大学院)が分担して行った(所属は執筆当時のもの)。
8. 遺構・遺物の出土状況は、丸木舟の出土状況を除き、各調査担当者が撮影した。丸木舟の出土状況および遺物の写真撮影は調査第1課資料係主任調査員田中 彰が撮影した。
9. 本書の編集は、調査第1課資料係の協力を得て、田代・筒井が行った。
10. 本書で報告した資料のうち、出土遺物については全て舞鶴市教育委員が保管されている。調査に関わる実測図・写真等の記録は当調査研究センターにおいて保管している。
11. 本書は、舞鶴市教育委員会の調査報告書と不可分の関係にある。浦入遺跡の調査成果については本書のみならず、同市教育委員会刊行の『浦入遺跡群発掘調査報告書』(平成13年刊行)もあわせて参照されたい。

本文目次

第1章 序説	1
第1節 調査にいたる経過	1
1. 調査にいたる経過	1
2. 調査体制	2
第2節 浦入遺跡周辺の環境	4
1. 地理的環境	4
2. 歴史的環境	6
第3節 発掘調査の経緯	10
1. 舞鶴市教育委員会による試掘調査	10
2. 地区の設定	10
3. 調査の経過	12
4. 舞鶴市教育委員会の調査成果	14
第2章 検出遺構	19
第1節 M地点(嶋遺跡)の調査	19
1. 遺跡の位置	19
2. 調査の方法	19
3. 検出遺構	19
4. 砂嘴の形成と土層堆積状況	20
第2節 N地点の調査	25
1. 縄文時代	25
2. 弥生時代後期～古墳時代前期	27
3. 古墳時代	30
4. 飛鳥時代	31
5. 奈良時代	33
第3節 B地点の調査	35
1. テラス状遺構	36
2. 土坑	37
第4節 A地点の調査	37

1. A-1 地点	38
2. A-2 地点	42
3. A-3 地点	42
第5節 O-1 地点の調査	44
1. 調査成果	44
2. 基本層序と遺物の出土状況	44
3. 北半部の調査	47
4. 南半部の調査	50
第6節 O-2 地点の調査	53
1. 調査成果	53
2. O-2 地点の地区割りについて	54
3. 土層堆積状況と遺物の出土状況	54
4. 上層検出遺構	57
5. 下層検出遺構	63
6. 最下層検出遺構	65
第7節 R 地点の調査	66
1. 調査経過	66
2. 土層の堆積状況	66
3. 丸木舟の検出状況	67
4. 丸木舟の形状と年代	67
5. 丸木舟下層検出の種実貯蔵土坑	68
第3章 出土遺物	69
第1節 M地点の遺物	69
1. 縄文土器	69
2. 弥生土器	70
3. 土師器	72
4. 須恵器	72
5. 陶磁器類	73
6. 石器類	73
第2節 R 地点の出土遺物	73
第3節 N 地点の出土遺物	74
1. 縄文土器	74
2. 弥生土器	80
3. 飛鳥～平安時代の土器	86

第4節	B地点の出土遺物	100
第5節	A地点出土土器	101
第6節	O-1地点出土遺物	107
1.	製塩炉第1群出土土器	107
2.	鍛冶炉群・製塩炉第4群出土土器	108
3.	海浜部出土遺物	109
第7節	O-2地点出土遺物	111
1.	遺構出土遺物	111
2.	包含層出土遺物	112
第8節	製塩土器	115
1.	製塩土器の分類	116
2.	海浜部出土製塩土器	118
3.	丘陵部出土製塩土器	122
第9節	墨書土器	123
第10節	鍛冶関連遺物	124
1.	鍛冶炉の認定と調査方法	124
2.	鍛冶関連遺物	126
第11節	その他の遺物	128
1.	木器・杭	128
2.	石器	129
3.	土錘	131
4.	銅鏃	132
5.	紡錘車	132
6.	土馬	133
7.	石錘	134
8.	砥石	135
9.	銭貨	135
10.	鉄製容器	135
第4章	まとめ	136
付編	自然化学的方法による分析結果	145

挿 図 目 次

第1図	調査地周辺地形図-----	5
第2図	調査地周辺主要遺跡分布図-----	7
第3図	浦入遺跡群小地区割り図-----	10
第4図	浦入遺跡群大地区割り図-----	11
第5図	P2・P3地点調査風景および出土遺物実測図-----	15
第6図	浦入遺跡群検出遺構配置図-----	17
第7図	嶋遺跡土層図-----	21
第8図	N地点縄文時代調査区土層柱状図-----	26
第9図	N地点縄文時代調査区検出石囲炉跡実測図-----	27
第10図	N地点流路跡SD01土層断面図-----	28
第11図	N地点流路跡SD01地区割り図-----	29
第12図	N地点竪穴式住居跡SH28実測図-----	30
第13図	A-3地点土層断面図-----	45
第14図	O-1地点北壁土層断面図-----	45
第15図	O-1地点製塩炉3実測図-----	48
第16図	O-2地点地区割り図-----	56
第17図	O-2地点石列1～3実測図-----	62
第18図	M地点出土石器実測図-----	73
第19図	N地点出土縄文土器実測図-----	80
第20図	N地点テラス状遺構SH10出土遺物実測図-----	91
第21図	B地点包含層出土遺物実測図-----	101
第22図	製塩土器容器分類図-----	117
第23図	製塩土器支脚の各部名称-----	117
第24図	製塩土器支脚分類図-----	118
第25図	墨書土器実測図-----	124
第26図	鍛冶炉模式図-----	125
第27図	O-1地点出土木器実測図-----	128
第28図	石器実測図(1)-----	130
第29図	石器実測図(2)-----	131
第30図	N地点流路跡SD01出土銅鏃-----	132
第31図	各調査地点出土紡錘車実測図-----	132

第32図	N地点出土土馬実測図-----	133
第33図	各調査地点出土石錘実測図-----	134
第34図	N地点出土砥石実測図-----	135
第35図	A-1地点竪穴式住居跡SH01土坑鉄釜実測図-----	136

付 表 目 次

第1表	調査期間表-----	3
第2表	竪穴式住居跡規模一覧表-----	172
第3表	テラス状遺構規模一覧表-----	172
第4表	N地点出土縄文土器観察表-----	173
第5表	N地点出土弥生土器観察表-----	176
第6表	N地点出土土器観察表-----	185
第7表	B地点出土土器観察表-----	194
第8表	A地点出土土器観察表-----	196
第9表	O-1地点出土土器観察表-----	202
第10表	O-2地点出土土器観察表-----	204
第11表	出土鞆羽口観察表-----	212
第12表	出土鉄滓観察表-----	212
第13表	出土木器観察表-----	212
第14表	出土石器観察表-----	213
第15表	出土土錘観察表-----	213

第1章 序 説

第1節 調査にいたる経過

1. 調査にいたる経過

浦入遺跡群は、京都府舞鶴市千歳池カナル・花ヶ口ほかに所在する。浦入遺跡群は、舞鶴市の北東部地域を占める大浦半島の西縁部に位置し、舞鶴湾の湾口に面している。大浦半島西端部の海側に突出した岬の先端には、松ヶ崎と通称される砂嘴が形成されており、この砂嘴によって外海と隔てられた小さな入り江は、浦入湾と呼ばれている。

今回、この浦入湾を埋め立てて、関西電力株式会社の石炭火力発電所が建設されることになった。浦入湾を取り囲む沿岸部や背後の丘陵地では、これまで縄文時代から中近世にかけての各時代の遺物の散布が知られていたが、この建設計画を受けて舞鶴市教育委員会では、平成4年度から建設予定地内の分布調査と試掘調査を実施した。この試掘調査によって、各地点から縄文時代から平安時代にかけての集落遺跡をはじめ、古墳、製塩・鍛冶生産に関連する遺構群の存在が確認された。これらの遺跡については、浦入遺跡群と総称することになった。

建設予定地に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、京都府教育庁指導部文化財保護課と舞鶴市教育委員会で協議が重ねられた結果、発掘調査の対象範囲が広大であること、また、工事着工までに速やかに発掘調査を終える必要があること等により、舞鶴市教育委員会では、調査対象地を大きく東西の2地区に分け、西側地区について当調査研究センターに発掘調査を依頼された。

当調査研究センターによる現地調査は、平成7年6月に開始し、平成10年3月をもって終了した。なお、現地での調査終了後、平成12年度までの3か年をかけて整理および報告書作成作業を実施した。今回の調査に係わる費用は、全額、舞鶴市が負担した。

各年度の調査内容については、本文で詳述するが、浦入遺跡群の調査は、京都府北部ではこれまで例のない大規模な調査となった。まず、製塩に係わる遺構が広範囲に遺存することが確認され、これまで不明な部分が多かった若狭湾西部の古代製塩の実態を知る上で重要な調査となった。さらに、今から約5300年前に遡る縄文時代前期の丸木舟や縄文時代早期から晩期に至る遺物が多数出土し、当初の予想を上回る多大の成果が得られた。また、今回の調査では、遺跡発掘という考古学的分野のみに留まらず、浦入地域の地質や古環境の復原に留意して作業を進めた。なお、この報告書をまとめるにあたっては、同時に実施された舞鶴市教育委員会の調査と不可分の関係であり、両者の調整をはかりながら実施した。

最後になりましたが、舞鶴市教育委員会をはじめ、関西電力株式会社および現地や室内の作業で献身的なご協力をいただき、ご助言を賜った多くの方々にお礼申し上げます。

(辻本和美)

2. 調査体制

発掘調査の調査体制は、以下の通りである。

調査主体者	樋口 隆康(理事長 平成7～9年度)
調査責任者	木村 英男(事務局長 平成7～9年度)
調査担当責任者	安藤 信策(次長兼調査第2課長 平成7～9年度)
事務局	園山 哲(次長兼総務課長 平成7・8年度)
	福嶋 利範(次長兼総務課長 平成9年度)
	安田 正人(総務課長補佐兼総務係長 平成7～9年度)
	杉江 昌乃(主事 平成7～9年度)
	今村 正寿(主事 平成7～9年度)
	鍋田 幸世(主事 平成7～9年度)
	松尾 幸枝(主事 平成7・8年度)
	西村 晃(主事 平成8・9年度)
	西林 紀子(主事 平成8・9年度)
調査担当者	奥村 清一郎(調査第2課課長補佐兼調査第2係長 平成7年度)
	辻本 和美(調査第2係長 平成8・9年度)
	石井 清司(調査第2係主任調査員 平成8・9年度)
	増田 孝彦(調査第2係主任調査員 平成8年度)
	黒坪 一樹(調査第2係調査員 平成7年度)
	尾崎 昌之(調査第2係調査員 平成7年度)
	田代 弘(調査第2係調査員 平成7・9年度)
	大岩 洋一(調査第2係調査員 平成7年度)
	奈良 康正(調査第2係調査員 平成8年度)
	筒井 崇史(調査第2係調査員 平成8・9年度)

発掘調査参加者(順不同・敬称略)

平成7年度：中西貞子・伊藤栄二・小西久美・榎本順子

平成8年度：奥田栄吉・藤田龍太郎・渋谷 悟・妹尾活明・谷後恒美・上羽真弓・柏木大延・田中昌樹・榎本順子・福田和浩・見持浩一・小西偉之・青木志帆・植村 悟・岡根 稔・尾根史郎・加藤秀典・加納幸正・鹿野 塁・佐々木英二・谷口隆司・萩谷良太・長谷川健一・平井和彦・藤井 直・三好清超・村下尚司・吉谷智美

平成9年度：和泉大樹・伊藤栄二・大洞真白・岡田憲一・加納幸正・谷後恒美・榎本順子・萩谷良太・福田和浩・水野聡哉

整理作業参加者(平成7～12年度)

谷口成美・中村ひろみ・真下春美・松本綾子・山下令乃・末武重美・安達幸子・西山久子・山田豊子・清水雅彦・陸田初代・榎本順子・森川敦子

第1表 調査期間表

年度	調査地点	調査期間	調査面積(m ²)
平成7年度	M地点(嶋遺跡)	平成7年6月19日～平成7年12月22日	3,200
	N地点	平成7年12月4日～平成8年2月28日	—
	D地点	平成8年1月8日～平成8年2月28日	—
平成8年度	N地点	平成8年4月16日～平成9年2月3日	5,800
	B地点	平成8年7月26日～平成9年1月21日	1,800
	A地点	平成8年10月21日～平成9年3月7日	—
	D地点	平成8年4月16日～平成8年6月11日	1,440
	F地点(浦入西2号墳)	平成8年8月1日～平成9年8月1日	600
平成9年度	A地点	平成9年4月14日～平成9年11月20日	7,200
	O地点	平成9年6月1日～平成10年3月18日	8,000
	R地点	平成9年11月26日～平成10年2月27日	650
(合計)			28,690

次年度に継続して調査を実施している場合は、調査面積は記していない。

また、現地調査および整理作業中は京都府教育委員会・舞鶴市教育委員会をはじめとする関係諸機関からご指導を受けるとともに、下記の方々から有益なご助言をいただいた。記して謝意に替えたい(順不同・敬称略)。

石部正志・岩本正二・入江文敏・近藤義郎・岸本雅敏・畠中清隆・水野和雄・橋本俊介・赤沢徳明・奥村牧弘・川村俊彦・中野拓郎・橋本勝行・加藤晴彦・山田真宏・高橋浩樹・岩田文章・泉拓良・長谷川達

第2節 浦入遺跡周辺の環境

1. 地理的^(註1)環境

浦入遺跡群の所在する舞鶴市は、東に丹後半島、西に越前海岸にはさまれた若狭湾西部にあたり、リアス式海岸特有の入江と半島が交錯して美しい景観を呈する。

舞鶴湾は、若狭湾より、幅約1kmの狭い湾口から湾入すると、正面には戸島が前面を塞いでいる。湾はその戸島の両脇からさらに東西に分かれてのびた後に南へ屈曲して良港を形成する。海の両脇には急峻な山地が迫る。両湾の奥部には沖積地が発達し、東舞鶴・西舞鶴として市街地が形成される。舞鶴市の地形はそのおよそ80%が山地で構成される。地理的に北側は若狭湾があり、隣接市町村との境界はいずれも山岳地帯となる。東は福井県大飯郡高浜町、南は京都府綾部市、南西は同加佐郡大江町、西は同宮津市と接している。また、舞鶴市の西部には丹波山地に源流を発する由良川が北流し、舞鶴湾口の西側で日本海へ注ぎ込む。

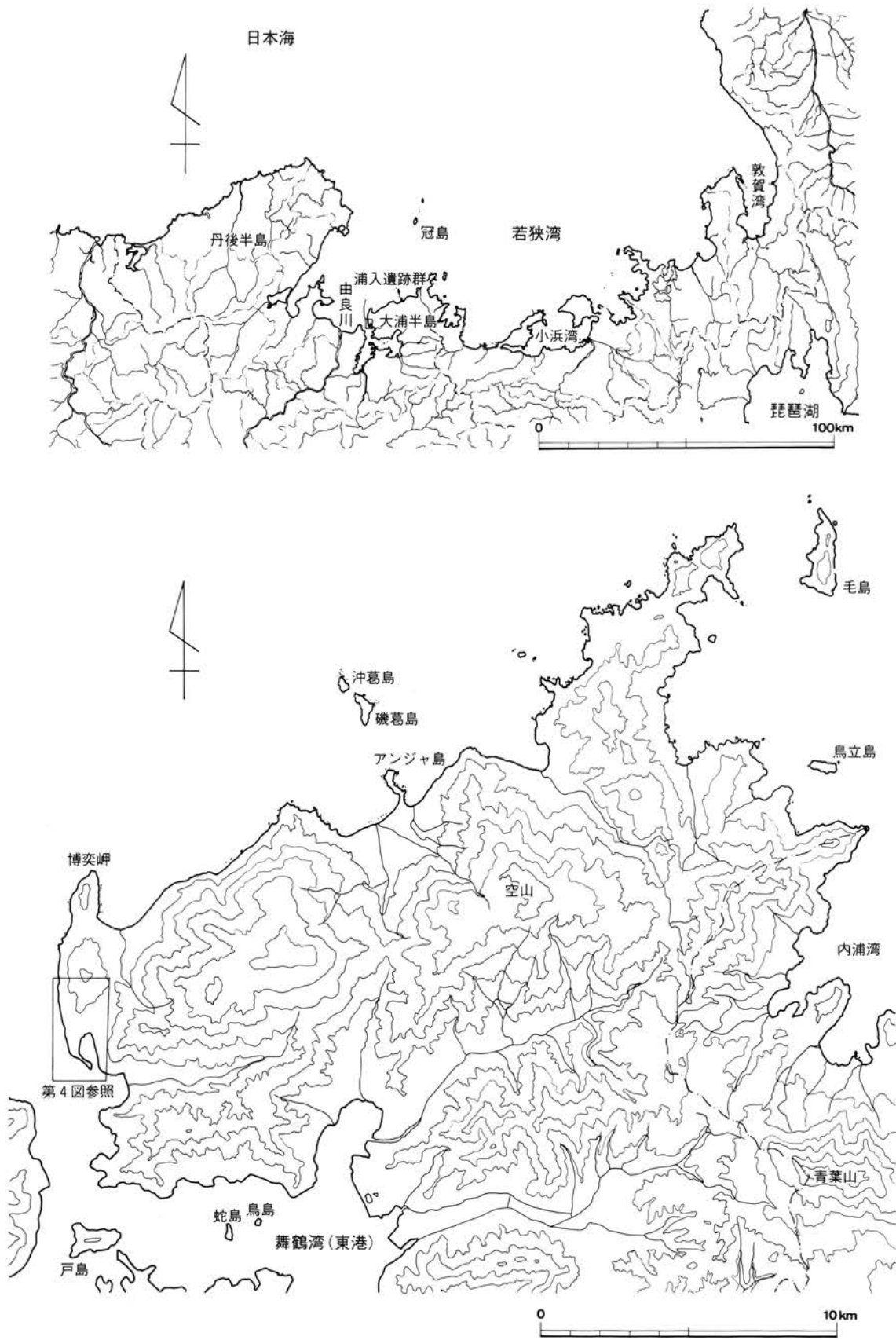
舞鶴市はこのような地理的条件から、市域北東部に位置する大浦半島の大浦地域、東湾奥部に位置し旧日本海軍の拠点となった東舞鶴地域、西湾奥部に位置し近世田辺城の城下町として発達した西舞鶴地域、市域西部に位置する由良川下流地域、の4つの地域に分けられる。

遺跡の所在する大浦半島は、舞鶴市域の北東部にあたり、標高300～500mの急峻な山岳地帯が全体の面積のほとんどを占め、その山岳地帯の間に流れる小河川が狭小な平野部を形成する。

浦入地区は大浦半島の西端、舞鶴湾口の東岸にあたり、北から湾入する湾口とは逆に南から湾入する浦入湾が形成される。湾の両脇には急峻な山地が迫り、湾奥部は北側から南方向の浦入湾へと開口し、東西北の3方向を山に囲まれた幅150m・奥行き600mの谷が広がる。浦入湾には西北西から東南東方向へ伸びる砂嘴がある。この砂嘴は舞鶴湾口の複雑な海流によって湾口の東岸を侵食した海流が、流れがゆるやかになる浦入湾手前で東方向へ入り込み、海流が運んできた土砂の堆積により形成されている。浦入湾は、この砂嘴によって舞鶴湾と隔てられており、入口部幅は約120m、湾最大幅は約300mを測る。谷は急峻で奥行きが狭く、河川も小さく流入する水量も少ない好条件に恵まれ、日本海側に発達した潟湖が古来の形状をそのまま残している。大浦半島には他にも古代の潟湖と推定される三浜地区があるが、土砂の堆積によりかつての形状は失われている。

地質構造はペルム紀に形成された舞鶴層群と夜久野岩類、志高層群そして古三畳紀に形成された荒倉層、難波江層群等が互層となり福井県西端から中国地方までの北東から南東方向へ続く細長い舞鶴帯と呼ばれる地帯上にある。浦入地区はその北帯にあたる夜久野岩類に該当する。浦入地区北側の山を越えると、舞鶴帯とその周辺部で見られる粗粒の黒雲母を含む花崗岩との境界線になり、博打岬の海岸線に広がる白(花崗岩)・黒(閃緑岩)のコントラストが美しい地層の分かれ目が見られる。浦入地区は花崗岩が風化して赤橙色を呈した花崗岩バイラン土が基盤層である。

(松本達也)



第1図 調査地周辺地形図(上：若狭湾沿岸部地形図 下：大浦半島周辺地形図)

2. 歴史的^(付2)環境

(1) 縄文時代

縄文時代の主要な遺跡については、浦入遺跡の周辺のみならず、京都府北部全域を対象とした。なお、京都府北部における縄文時代遺跡の分布状況については、大きく大浦半島周辺の大浦地域・由良川下流域・丹後半島内陸部・丹後半島海浜部、の4つの地域に分けて概観する。

大浦地域 これまで3遺跡が知られる。若狭湾に面してアンジャ島遺跡(13)と小橋遺跡(14)がある。アンジャ島遺跡では、乳棒状蛤刃石斧2点が出土し、周辺から縄文時代後期の土器片が採集されている。小橋遺跡では、サヌカイト製の有舌尖頭器が採集されている。大浦半島の付け根には、坪の内遺跡(9)がある。縄文時代後期の土器片や石鏃・磨製石斧等が採集されている。

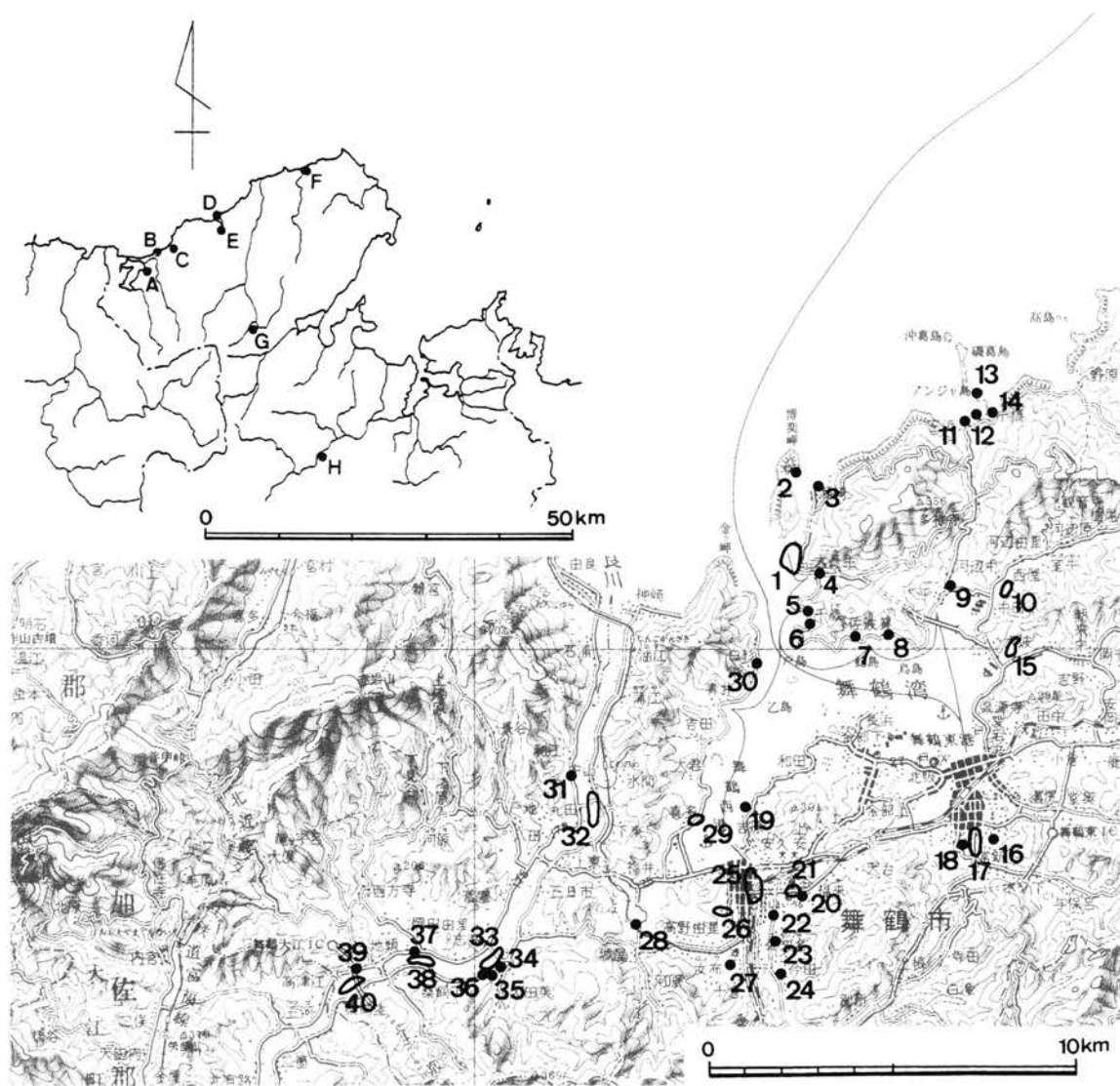
由良川下流域 代表的な遺跡として、志高遺跡(33)・桑飼下遺跡(38)・三河宮ノ下遺跡(H)などがある。志高遺跡は、由良川の河口から約10km上流の自然堤防上に立地する。縄文時代前期の土器群が層位的に確認されている。また、住居跡・炉跡・土坑等の遺構群が検出され、集落の存在が認められる。桑飼下遺跡は、志高遺跡から2kmほど上流の自然堤防上に立地する。調査の結果、縄文時代後期の北白川上層式期の良好な土器資料のほか、900点以上の打製石斧をはじめ、石棒・石柱・岩板・土偶・耳飾などが出土した。また、48基の炉跡が検出された。三河宮ノ下遺跡は、桑飼下遺跡からさらに約5km上流に位置する。出土遺物には、縄文時代後期の土器群を中心に、前期から晩期にかけての土器が散見できるほか、石鏃・石錘を中心とした石器類、塊状耳飾片などがある。また、住居跡も検出されている。以上のほかにも、川底の砂利採取に伴い土器片などが確認された散布地が、約2～3km間隔で確認されており、縄文時代を通じて、由良川遺跡群というまとまりを確認することができる。

丹後半島内陸部 代表的な遺跡として裏陰遺跡(G)がある。遺跡は扇状地に立地する。早期と後期の土器群を中心に出土したほか、出土遺物には石鏃・石斧・石皿・磨石・石錘などがある。また、この地域では、押型文土器が出土・採集されている遺跡が多い。

丹後半島海浜部 日本海に面した海浜部には、浦明遺跡(A)・函石浜遺跡(B)・浜詰遺跡(C)・宮ノ下遺跡(D)・柳谷口遺跡(E)・平遺跡(F)などが所在する。

久美浜湾付近には、函石浜遺跡・浦明遺跡がある。浦明遺跡は、久美浜湾を下に見る段丘上に立地し、晩期を中心とする遺跡である。浜詰遺跡は、現在の汀線から約400mのところの所に所在し、中期末葉～後期初頭の土器群を中心に石鏃・石錘・磨製石斧などが出土している。松ヶ崎遺跡は、浜詰遺跡から1kmほど内陸部に位置する遺跡で、近年、行われた調査において近畿地方北部における縄文時代前期の土器編年を検討する上で重要と考えられる土器群が出土した。さらに8～9km東には宮ノ下遺跡がある。宮ノ下遺跡は、表裏縄文土器等の早期末の土器群が出土したことで知られており、「宮ノ下式」と呼称されている。宮ノ下遺跡から約13km東に平遺跡がある。「平式」として知られる縄文時代中期末の土器群のほか、石鏃・石錘などの石器類も多く出土している。

(和泉大樹)



第2図 調査地周辺主要遺跡分布図

- | | | | | |
|----------------|-------------|-------------|-----------|----------------|
| 1. 浦入遺跡群 | 2. 白石浜遺跡 | 3. 瀬崎遺跡 | 4. 大丹生遺跡 | 5. 千歳下遺跡 |
| 6. 千歳上遺跡 | 7. 下佐波賀遺跡 | 8. 上佐波賀遺跡 | 9. 坪の内遺跡 | 10. 千田古墳群 |
| 11. 三浜遺跡 | 12. 三浜丸山古墳群 | 13. アンジャ島遺跡 | 14. 小橋遺跡 | 15. 朝来群集墳 |
| 16. 行永窯跡 | 17. 行永遺跡 | 18. 妙見山古墳 | 19. 匂ヶ崎遺跡 | 20. 倉谷丸山2号墳 |
| 21. 倉谷遺跡 | 22. 切山古墳 | 23. 菖蒲谷口遺跡 | 24. 上殿古墳 | 25. 田辺城跡(舞鶴城跡) |
| 26. 引土遺跡 | 27. 女布遺跡 | 28. 城屋窯跡 | 29. 喜多古墳群 | 30. 白杉古墳 |
| 31. 和江ニイザ古墳(群) | 32. 八雲遺跡 | 33. 志高遺跡 | 34. 川向古墳群 | |
| 35. シゲツ墳墓群 | 36. シゲツ窯跡 | 37. 水無月山遺跡 | 38. 桑飼下遺跡 | 39. 地頭山根古墳 |
| 40. 桑飼上遺跡 | | | | |

- A. 浦明遺跡(久美浜町) B. 函石浜遺跡(久美浜町) C. 浜詰遺跡(網野町) D. 宮ノ下遺跡(網野町)
 E. 柳谷口遺跡(網野町) F. 平遺跡(丹後町) G. 裏陰遺跡(大宮町) H. 三河宮ノ下遺跡(大江町)

(2) 弥生時代

弥生時代になると、舞鶴市域における遺跡数は増加する。以下では舞鶴市域の遺跡について述べることにする。

京都府北部では、弥生時代前期の土器に貝殻による施文が見られ、弥生時代の開始期にはこの文様が多い山口県西部の影響が考えられる。舞鶴市域では由良川下流域の八雲遺跡(32)・志高遺跡にその影響を認めることができる。

弥生時代中期には、由良川下流域に志高遺跡・桑飼上遺跡(40)、東舞鶴地域に行永遺跡(17)・匂ヶ崎遺跡(19)があり、由良川流域だけでなく東舞鶴地域まで遺跡が広がる。この時期には、志高遺跡の貼石墓、桑飼上遺跡・行永遺跡の松菊里型住居、匂ヶ崎遺跡の銅鐸(注3)があり注目される。

弥生時代後期には、由良川下流域に志高遺跡・桑飼上遺跡、西舞鶴地域に菖蒲谷口遺跡(23)・女布遺跡(27)があるほか、若狭湾岸にあたる大浦地域でも三浜遺跡(11)・坪の内遺跡(9)・大丹生遺跡(4)などがある。墳墓は、由良川下流域にシゲツ墳墓群(35)・水無月山遺跡(37)などがあるが、丹後半島ほど顕著ではなく、由良川下流域をのぞく3地域では未確認である。

弥生時代終末から古墳時代初頭の遺跡としては、由良川下流域の志高遺跡や三庄太夫墳墓がある。特に三庄太夫墳墓で一括して出土した供献土器は、外来系の二重口縁壺と在地系の後期弥生土器の系統を引く土器が共伴しており、土器編年の資料として、また、被葬者の性格を考える資料として重要である。

(3) 古墳時代

古墳時代前期の遺構・遺物は志高遺跡などで見られる。古墳は由良川下流域の川向古墳群(34)などがあるが、ほかの地域では切山古墳(22)が前期に遡る可能性をもつほかは不明である。

古墳時代中期では桑飼上遺跡で住居跡群が検出され、当該期の土器の良好な一括資料が得られている。大浦地域では近年、千歳下遺跡(注4)(5)で鏡・鉄器・玉・石製模造品が大量に出土し、海浜部における祭祀遺跡として注目される。また、これとともに大量の土器が出土しており、古墳時代中期の土器編年が遅れている当地域にとって重要な資料である。しかし、当該期の古墳の調査事例はなく、古墳時代前期～中期の古墳については不明な点が多い。

古墳時代後期には三浜遺跡・丹生遺跡などで遺物が散見されるが、明確な遺構は検出されていない。後期でも後半期から終末期にかけて古墳、特に横穴式石室を内部主体とする古墳が多くある。由良川下流域では和江ニイザ古墳(31)・地頭山根古墳(39)、東舞鶴地域では倉谷丸山2号墳(20)・上殿古墳(24)・妙見山古墳(18)・喜多家奥古墳などがあり、大浦地域とその周辺では白杉古墳(30)・田井古墳・三浜丸山古墳群(12)・朝来群集墳(15)・干田古墳群(10)などがある。特に平地の少ない大浦地域とその周辺地域に、舞鶴市域では最大の横穴式石室を有する白杉古墳が存在することは、海上交通や塩生産など、海との関わりが強かったことを想定させる。朝来群集墳は舞鶴市域では数少ない群集墳の一つであり、どのような階層の人々の墓域であったのか、被葬者の性格が注目される。

三浜遺跡・磯葛島遺跡で出土した製塩土器の中には、古墳時代にさかのぼる可能性のものもある。

り、近接する三浜丸山古墳の被葬者が製塩に関わった可能性も考えられる。

(水野聡哉)

(4) 飛鳥・奈良時代

この時期の主要な遺跡は由良川流域で多くの調査例があり、多くの成果を得ている。以下、由良川流域を中心にみていくことにする。

飛鳥時代の遺跡には、シゲツ窯跡(36)や志高遺跡・桑飼上遺跡・桑飼下遺跡などがある。集落遺跡としては志高遺跡・桑飼上遺跡・桑飼下遺跡などで竪穴式住居跡などが検出されている。この中には綾部市青野・綾中遺跡群などで顕著に認められる「青野型竪穴式住居跡」なども確認されている。シゲツ窯跡は飛鳥時代後半から末にかけての須恵器焼成窯である。当該期の須恵器窯は丹後地域でも検出例に乏しく、貴重な調査例である。

奈良時代の遺跡には、志高遺跡・桑飼上遺跡・桑飼下遺跡などで、大きな成果が得られている。とくに桑飼上遺跡では、奈良時代前半から中頃にかけての規格性の高い大規模な掘立柱建物跡群があり、遺物も転用硯や稜椀をはじめとする金属を模倣した須恵器杯類など「官衛的色彩(律令的土器様式)の強い遺物」が多数出土している。このことから、国衛・郡衛などではないとしても何らかの官衛的な施設であったと考えられている。また、志高遺跡でも、同様に掘立柱建物跡が多数検出されているが、桑飼上遺跡ほどの規格性がなく、遺物で硯や墨書土器が少ないという。奈良時代中頃まで竪穴式住居跡が残ることからも、一般集落と考えるべきであろう。桑飼下遺跡では、二彩陶器片が出土している。

以上のような由良川流域における遺跡の分布に対して、東・西舞鶴や大浦半島では顕著な遺構は確認されていない。しかし、東・西舞鶴地域では、奈良時代の須恵器窯として行永窯跡群(16)や城屋窯跡群(28)などが知られる。また、平安時代前期の倉谷遺跡(21)では、奈良時代の遺物も多数出土しており、東・西舞鶴地域にもこの時期の遺跡が多くあったことをうかがわせる。また、大浦半島周辺では、三浜遺跡・白石浜遺跡・大丹生遺跡などで、奈良時代ないし平安時代の製塩土器や製塩土器支脚が出土しており、浦入遺跡において製塩が最盛期を迎えた頃には、大浦半島全域で製塩活動が行われていたと考えられる。

(5) 平安時代

大規模な遺跡が存在した由良川下流域では、平安時代前期まで遺構の存在を確認できるが、その後、大規模な洪水に見舞われたため、顕著な遺跡はみられなくなる。これに対して、東・西舞鶴地域では新たに遺跡がみられる。代表的なものとして、倉谷遺跡と行永遺跡がある。倉谷遺跡は、平安時代前期を中心とする掘立柱建物跡群が検出されており、隣接する大溝からは大量の遺物が出土している。行永遺跡は平安時代末頃の遺跡で、丹後型黒色土器椀に丹波型瓦器椀・白磁椀などが一括出土した井戸などが検出されている。この資料は12世紀中頃に位置づけられ、浦入遺跡における製塩の最終時期を考える上で重要な成果である。^(注5)浦入遺跡における製塩活動は、この行永遺跡井戸資料に併行する時期をもってほぼ終わりを迎え、同時に浦入遺跡における人々の活動痕跡もみられなくなる。

(筒井崇史)

第3節 発掘調査の経緯

1. 舞鶴市教育委員会による試掘調査

調査地周辺の地形は南北に伸びる谷を中心とし、南に開口する浦入湾の東西沿岸部と西側の丘陵から南東へ伸びる砂嘴地形を含んで複雑な地形を呈している。しかし、昭和30年代から行われた果樹園のパイロット事業によって旧来の地形は大きく改変されている。

舞鶴火力発電所工事予定範囲内における周知の遺跡としては、湾沿岸部の浦入遺跡、砂嘴上にある嶋遺跡、そして市道平～瀬崎線の道路工事中に土器が出土した浦入古墳、浦入地区と舞鶴湾口の丘陵上にある浦入西古墳群の4つの遺跡・古墳群が確認されていた。

本調査に先立ち、平成4・5年度に埋蔵文化財の範囲と性格を確認する目的で、谷部や平坦地を中心として計70か所の試掘調査を実施した。試掘調査では、浦入湾奥部の東西の急峻な山地の裾を中心とした、湾沿岸部および砂嘴上が、遺跡として確認された。しかし、谷部において遺物の流れ込む状況が確認されたため、丘陵斜面においても当初の予想を越えて遺跡の広がる可能性が想定された。また、湾沿岸部で検出した製塩遺構の周辺には、製塩作業にともなう多量の炭・灰や製塩土器の廃棄層が確認されたため、浦入地区内において、これらの供給を行う生産場所の存在が想定された。試掘調査は主に谷内の平坦な地形を調査したことから、谷の枝谷や尾根頂部、丘陵斜面については本発掘調査と並行して新たに試掘調査を行った。

2. 地区の設定

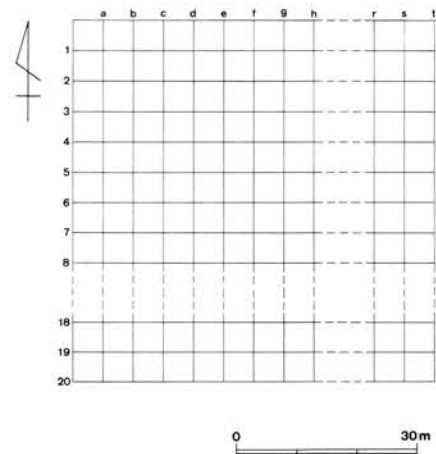
試掘調査によって遺跡の範囲を把握することを心掛けたが、工事予定範囲は約100万 m^2 (浦入湾を含む)の広範囲に及ぶことから、工事中の不時発見も想定された。そこで、試掘調査によって明らかになった遺跡の範囲だけでなく、工事予定地全域を覆うことのできる地区割りを設定した(第3図)。

地区割りの設定には、国土座標系を利用した。なお、調査地周辺は国土座標第VI系に含まれる。

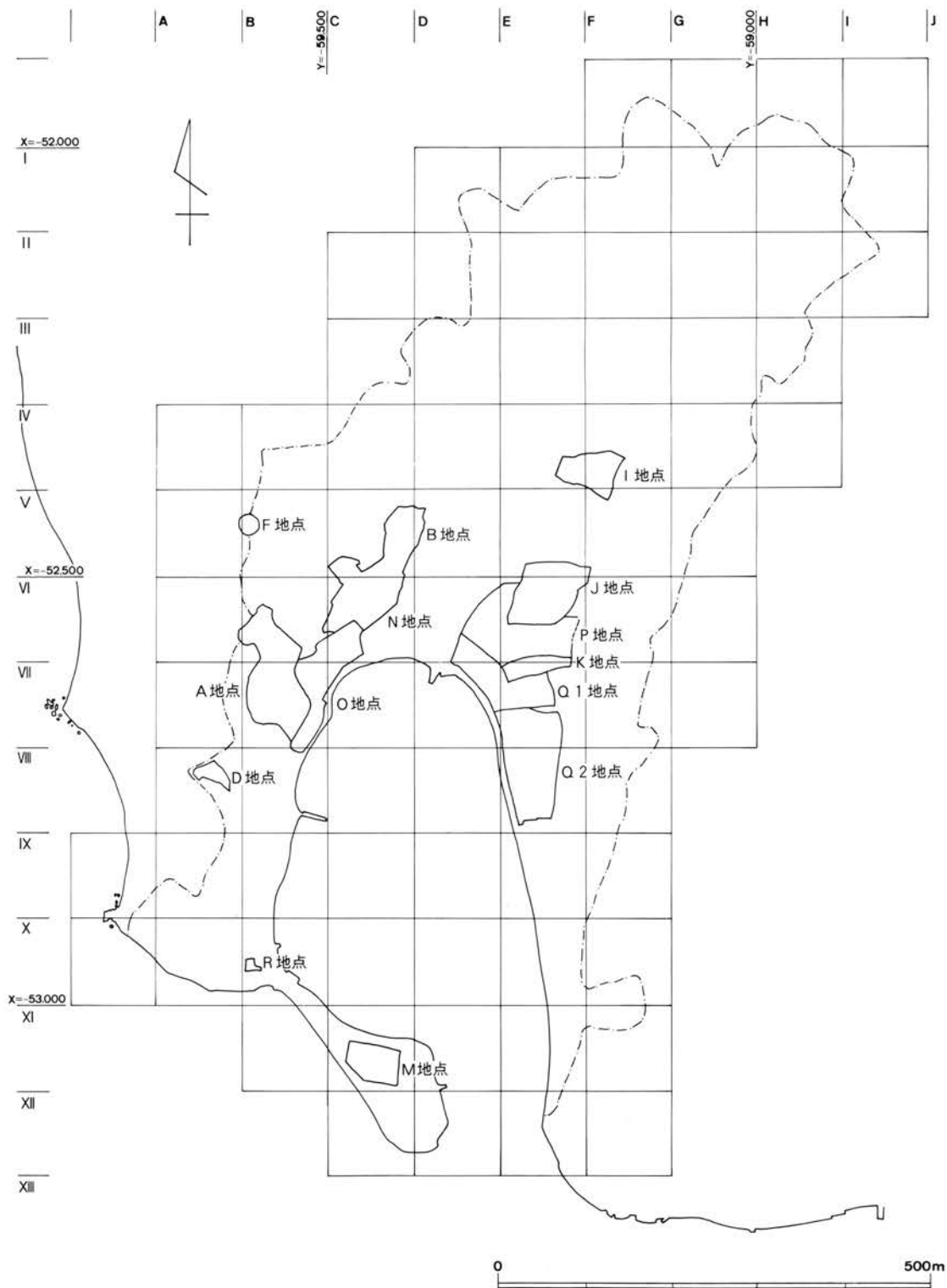
浦入遺跡の調査に当たって設定した地区割りは、その北西隅に位置する $X = -51,900 \cdot Y = -58,800$ を原点として工事予定範囲を覆うように設定した。

地区割りは、一辺100mの大グリッドを設定し、それをさらに一辺5mの小グリッドに分割した(第3・4図)。大グリッドは北方向よりI・II・III……XIIIとローマ数字で示し、13に分割した。また、西方向よりA・B・C……Jとアルファベット大文字で示し、10に分割した。なお、グリッドの名称はそのグリッドの東南隅交点をもって行った。

大グリッドの中には小グリッドが南北・東西おのおの20区画ずつ並び、計400の小グリッドからなる。小グリッドは北から1・2・3…20とアラビア数字で示した。また西からa・b・c……tとアルファベット小文字で示した。小



第3図 浦入遺跡群小地区割り図



第4図 浦入遺跡群大地区割り図

グリッドにおいても、南東隅交点の杭をもってそのグリッドの名称とした(第3図)。

なお、調査に伴う基準杭は可能な限り5mごとに設定し、杭の名称は大グリッド・小グリッドの名称をそれぞれ記入し、例えば「A I - a 1」というように表記した。地区名は、小グリッドの東南隅交点に相当する杭の名称に一致させた。

(松本達也)

3. 調査の経過

上記の試掘調査の成果を受けて、遺跡群の西側を対象として調査を開始した。以下、年度ごとに調査の経過について述べる。^(注6)

(1)平成7年度

現地調査の初年度にあたり、M地点(嶋遺跡)の全面的な調査に着手したほか、N地点(浦入遺跡)・D地点(浦入西古墳群)においても発掘調査を一部実施した。

M地点は、舞鶴湾口の東岸に形成された松ヶ崎と呼ばれる砂嘴上に立地する。調査の結果、縄文時代(中～晩期)・弥生時代(前～後期)・古墳時代・奈良時代の遺構・遺物が検出され、長期にわたってこの地点が利用されたことが判明した。M地点の調査成果としては、弥生時代中期以前に遡る海岸線を検出したこと、土層観察により縄文時代における海水準の変動を確認したことなどがあげられる。

N地点・D地点の調査は年度末に着手したため、表土掘削と遺構検出作業を実施したにとどまる。

(2)平成8年度

平成7年度に引き続きN地点・D地点の調査を実施したほか、新たにA・B地点(浦入遺跡)、E・F・G・H地点(浦入西古墳群)の調査に着手した。N地点は、浦入湾の最奥部にあり南東向きの丘陵斜面に立地する。調査の結果、弥生時代後期・飛鳥時代・奈良時代の大きく3時期の竪穴式住居跡・テラス状遺構・流路跡・鍛冶炉跡などの遺構を検出し、多数の遺物が出土した。とくに奈良時代の遺構群からは製塩土器・製塩土器支脚が出土し、製塩作業に従事する人々の居住域と推定された。また、N地点の東南部に位置する谷状地形から縄文時代早期から後期の遺物包含層が確認され、周辺にも当該期の遺構・遺物の存在が予想された。

B地点は、N地点の北東に隣接する丘陵斜面に立地する。奈良時代のテラス状遺構・鍛冶炉跡などを検出した。

A地点はN地点の南に位置し、東向きの丘陵斜面に立地する。調査は年度末に着手したため、表土を掘削し、遺構検出作業を実施したにとどまる。

浦入西古墳群の調査では、F地点において墳丘周囲に外護列石をもつ直径約11mの円墳(浦入西2号墳と呼称)が確認された。内部主体は、平面形態や羨道部の構造からみて、いわゆる竪穴系横口式石室に属するものである。全長4.25mを測る横穴式石室で、羨道部の前面には墓道を付設する。石室の天井石は全て抜き取られていた。築造時期は、副葬された須恵器から6世紀前半に比定される。また、D・E・G・Hの各地点は、調査の結果、いずれも自然の地形であることが判明した。なお、浦入西2号墳の石室については、関係機関と協議の結果、現地点から少し離

れた場所に移設保存されることが決まった。^(注7)

(3)平成9年度

平成8年度に引き続き、A地点の調査と新たにO・R地点(浦入遺跡)の調査を実施した。A地点では、舞鶴市教育委員会の試掘調査の成果をふまえて調査を開始したが、A地点の北側に隣接する谷部、およびO地点の調査にあわせて両者の間にある斜面部において、それぞれ遺物包含層・遺構が検出されたため、当初の調査区をA-1地点、北側の谷部をA-2地点、A-1地点とO地点に挟まれた斜面部をA-3地点とした。調査の結果、竪穴式住居跡・テラス状遺構・掘立柱建物跡・柵跡などの遺構を検出し、多数の土器類とともに、製塩土器や鞆の羽口などが出土した。なお、A-3地点では、平安時代後期の地滑りを確認し、遺構がこれによって破壊されていることが明らかになった。

O地点は、工房群と推定されるテラス状遺構が多数検出された、A・N地点の東に接する臨海部に立地する。南北に長いので、北半をO-1地点、南半をO-2地点と、2地点に分けて調査を行った。O-1・O-2地点ともに、旧日本軍関連施設の建設や耕作地造成に伴い、汀まですべて埋め立てられていた。このため、遺構の遺存状況を把握することは困難であったことから、調査に先立って、重機を用いて試掘調査を行い、遺構や遺物の包含状況を確認した。その結果、対象地すべてに製塩遺跡にかかわる遺構の存在が推定され、全面について調査を実施することとなった。

調査の結果、O-1地点では、広範囲にわたって、奈良～平安時代の汀とみられる海岸地形とともに、この汀線から丘陵裾にかけて奈良～平安時代の製塩炉跡や鍛冶炉跡が多数検出された。また、O-2地点では、A-3地点で確認された平安時代後期の地滑りに伴う流土によって、埋められていることが明らかになった。この地滑りの上下面から、製塩に係わる大規模な造成面や炉跡を検出した。上層の製塩炉に伴って出土した製塩土器・製塩土器支脚は、12世紀中頃に位置づけられるもので、若狭湾岸における土器製塩の終焉時期を知るうえで貴重な資料となった。

R地点は、M地点(嶋遺跡)の位置する砂嘴の付け根部分に当たる。調査の結果、縄文時代中期の遺物包含層を確認するとともに、その下層から縄文時代前期に形成された海成砂に埋没して丸木舟が出土した。丸木舟は、残存長5m・幅1.1mを測り、これまでの出土例のなかでは大形品に分類され、外洋航行に用いられた可能性も考えられる。なお、丸木舟は、ウレタンによる取り上げ後、平成10年度から3か年の計画で保存処理を実施した。

(4)平成10～12年度

当調査研究センターが実施した浦入遺跡の現地調査は、平成9年度に終了した。今回の調査の結果、各年度毎の出土遺物が多量にのぼることや調査内容が舞鶴市教育委員会担当分を含め多岐に及ぶため、平成10年度から、3か年の計画で整理作業および報告書作成作業を実施した。整理作業については、舞鶴市平整理事務所と当調査研究センター本部で行った。

(辻本和美・田代 弘・筒井崇史)

4. 舞鶴市教育委員会の調査成果

(1) 調査の経過

舞鶴市教育委員会では、本調査に先立ち遺跡の範囲と内容を確認するため、平成4・5年度に試掘調査を行った。その結果をうけて、A地点からR地点までの調査地点を設定して本調査を実施した。試掘調査を行っていない地点については、市教育委員会が本調査と並行して試掘調査を行い、遺構・遺物などの確認された地点については、その都度、協議により対応を決定した。遺跡の規模が広範囲であり、市教育委員会だけでは調査体制が不十分なため、湾西岸部については(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターに調査委託を行い、市教育委員会は湾東岸部について調査を行った。

市教育委員会による調査地点は、谷東側の丘陵部のI・J・K地点、J地点とK地点の谷から広がる扇状地形を呈するP地点(試掘調査によってP地点の下層に縄文時代の遺物包含層が確認されたことにより、上層遺構検出地点をP-1地点、縄文時代の遺物包含層の調査区をP-2地点、基盤層まで掘削した谷奥側をP-3地点とした)、湾沿岸部のQ地点(北半部をQ-1地点、南半部をQ-2地点と呼称した)、過去に須恵器が出土したL地点の6地点である。

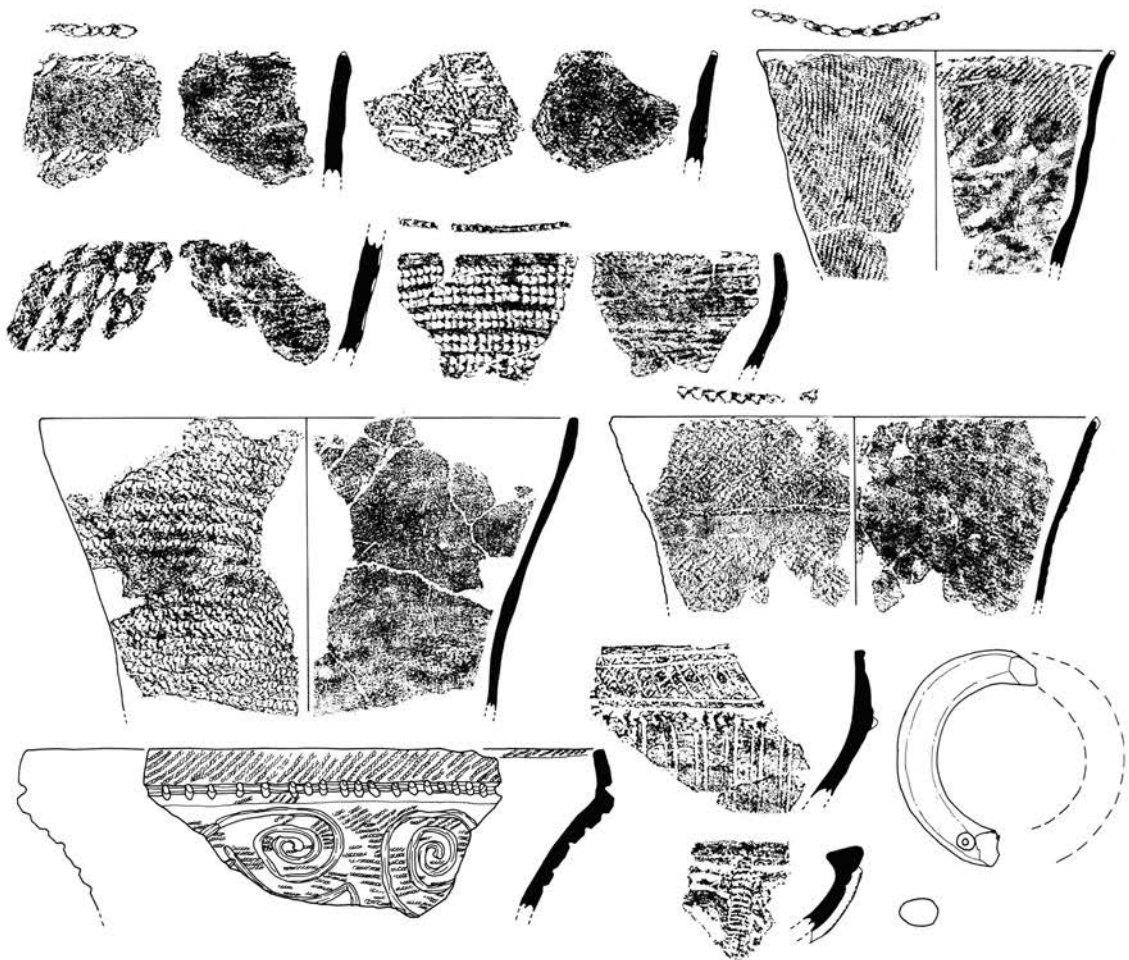
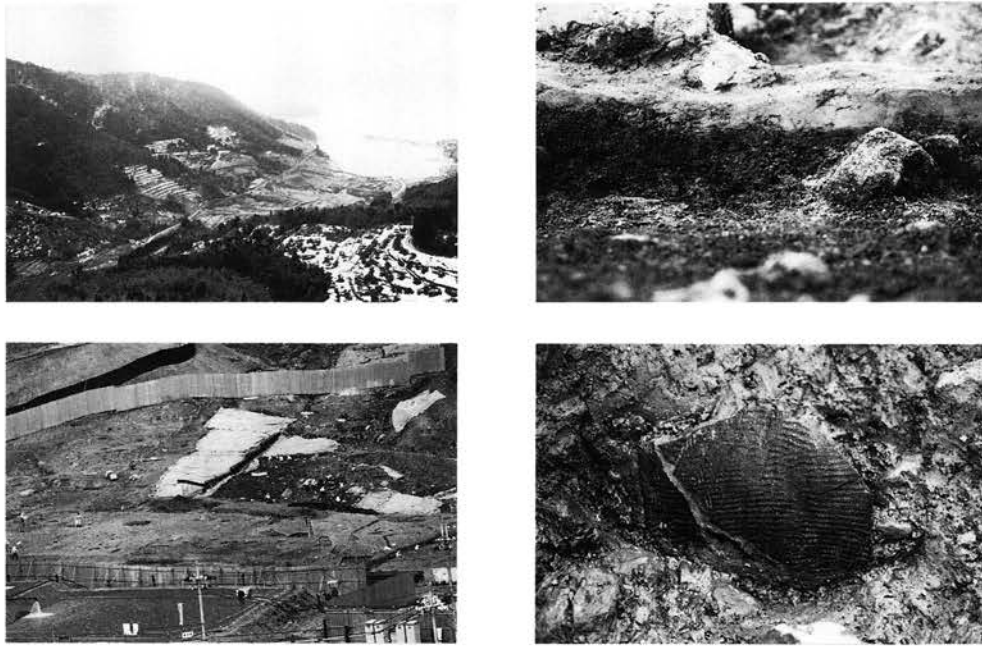
平成7年度はI・K・Q地点、平成8年度はJ・L・P-1・Q地点、平成9年度はP-2・P-3・J・Q地点、平成10年度はP-2・P-3・Q地点の調査を行った。以下、時代毎に説明を行う。

(松本達也)

(2) 縄文時代

P-1・P-2地点において縄文時代の成果を得た。P-2・P-3地点は、浦入湾の東側に位置し、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが調査を行ったN地点と、ちょうど浦入川を挟んで対岸に位置する。調査面積は、約2,400㎡である。

P-2地点は、浦入遺跡群の中で最も縄文時代の調査成果が顕著であった。谷地形であるため、土石流等の影響で二次堆積ではあるものの、一部で早期後半から前期初頭にかけて層位的に成果を得た。最下層からは、胎土に繊維を含み厚手で外面に縄文を施文する平底の土器と東海地方を分布の中心とする粕畑式土器が出土した。アカホヤ火山灰がブロック状ないしは層状に混在する遺物包含層からは、表裏ともに縄文を施す土器や、それらに半截竹管状の工具で刺突文、あるいは押しき文を施す土器が一定量出土した。また、これらとともに大形の滑石製の玦状耳飾りが出土しており、玦状耳飾りの最古型式の帰属年代を示す重要な資料となった。これより上層では、前期の羽島下層Ⅱ式や北白川下層式などの土器が出土した。また、これら層位的に確認し得た地点以外でも、早期後半から晩期にかけての土器型式が確認された。なお、他地域に分布の中心をもつ土器として、早期では茅山式・粕畑式・入海式・石山式、前期では関山式や北陸地方に多く見られる土器、中期では新保式・新崎式の各土器が出土した。また、当地点で出土した石器類では石錘類が多く、海の積極的利用が想定できる。多量の石鏃も海洋性生物捕獲具として用いられたと考えることも可能である。遺構は少ないが、集石炉や焼土・配石遺構などが検出された。



第5図 P2・P3地点調査風景および出土遺物実測図(舞鶴市教育委員会調査分)

以上のように、P-2地点では、住居跡こそ確認していないものの、多量の土器や石器類が出土しており、調査地周辺部に集落跡が存在することは、ほぼ間違いないものと考えられる。このことは、50点以上出土している石皿からも保証されるものである。

また、P-3地点では、縄文海進によって形成されたと思われる海蝕崖を検出するとともに、調査区最深部で表裏縄文土器などを検出した。

(和泉大樹)

(3) 弥生時代以降

弥生時代以降については、古墳時代前期の竪穴式住居跡、古墳時代中期の竪穴式住居跡や土坑、古墳時代後期の横穴式石室墳、飛鳥・奈良時代の竪穴式住居跡やテラス状遺構、平安時代の掘立柱建物跡などの遺構が検出された。また、浦入遺跡を特徴づける生産遺構として、奈良・平安時代の製塩炉、古墳時代・平安時代の鍛冶炉が海浜部で検出された。遺物包含層からは弥生土器も出土した。

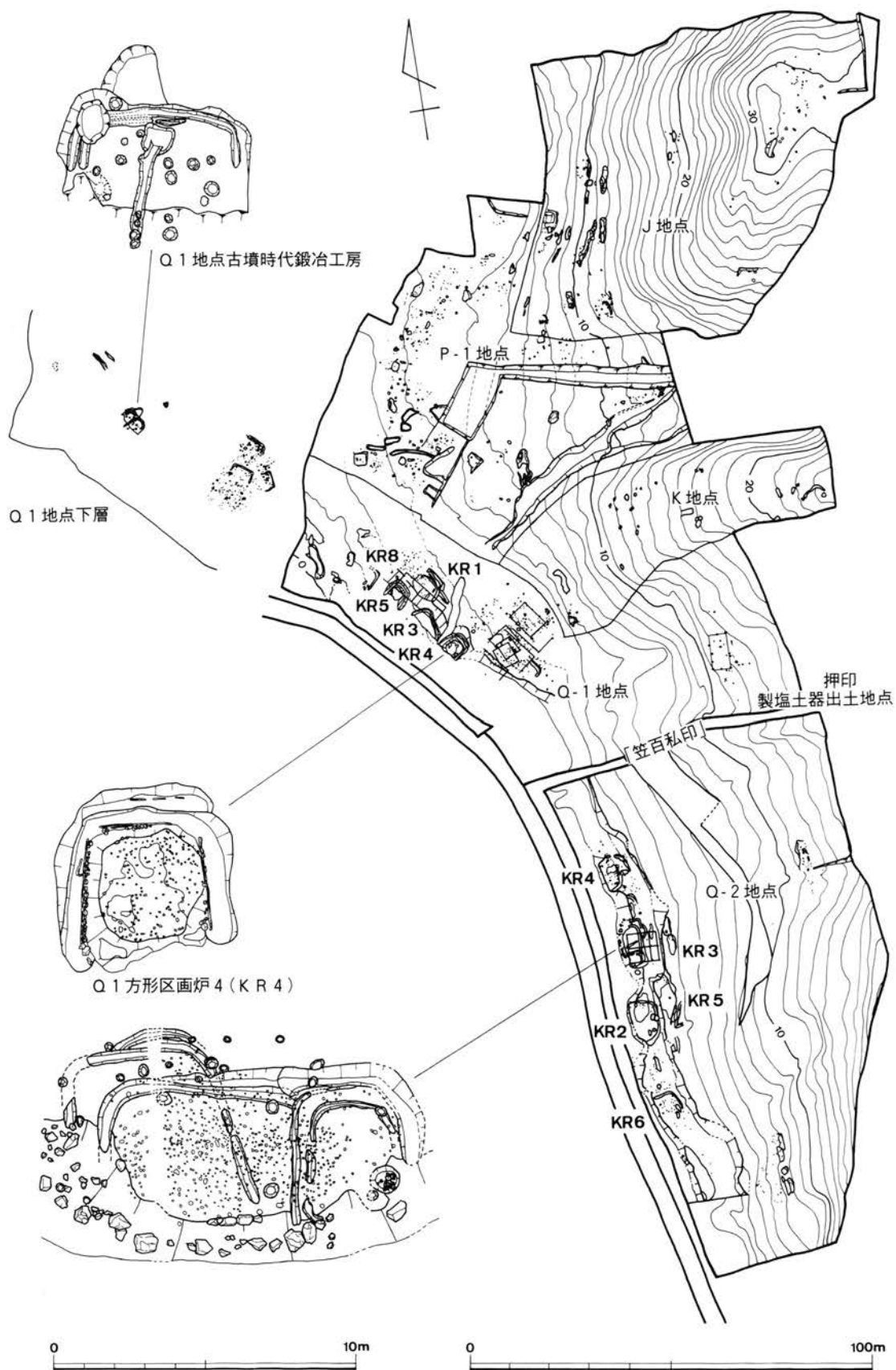
弥生時代は顕著な遺構が少なく、P-1地点で後期の不明遺構や溝などが検出されたが、住居跡は検出されなかった。また、P-1・Q-1地点で谷からの流れ込みと考えられる前期・後期の土器が遺物包含層から出土した。

古墳時代前期は、Q-1地点で竪穴式住居跡が1基検出された。中期になると、P-1・Q-1地点において出土する遺物量が飛躍的に増加し、鍛冶工房跡1棟・竪穴式住居跡3基・土坑・溝・不明遺構が検出された。後期になると、遺構は確認できないものの、遺物はP-1・Q-1・Q-2の各地点に普遍的にみられるようになる。湾を見下ろす尾根上には横穴式石室を内部主体とする浦入2号墳(K地点)や須恵器が出土した浦入古墳(L地点)が存在する。これらの古墳に先行して浦入西2号墳(F地点)があり、西岸部から東岸部へと墓域が移行していく様子がうかがえる。

飛鳥・奈良時代は、J・P-1・Q-1・Q-2の各地点で遺構が検出された。この時代は竪穴式住居跡および斜面地に造成されるテラス状遺構の数が飛躍的に増加し、居住域が海浜部からJ・P-1地点の丘陵斜面部に移る。これは、奈良時代になり、海浜部が製塩を行う場として機能したため、居住域は少し離れた地点に移ったと考えられる。また、Q-1・Q-2地点の包含層や平安時代の製塩遺構のベース層にも当該期の遺物が一定量存在しているので、東岸部の丘陵斜面にも西岸部のA・N地点同様に竪穴式住居跡やテラス状遺構が存在したことがうかがえる。

平安時代は、湾沿岸部が活動の中心地として機能し、Q-1・Q-2地点が主体となる。平安時代前半はQ-1地点において製塩遺構や掘立柱建物跡がみられる。後半になると製塩の中心地は湾口に近いQ-2地点へと移る。居住域には掘立柱建物跡が存在するが、製塩の生産量と比較すると少ない。しかし、日常雑器は一定量存在し、また、Q-1地点の丘陵の緩斜面地で掘立柱建物跡が存在するなど、飛鳥・奈良時代に引き続き緩斜面地を利用した居住域の存在が想定される。その他の地点は遺物もなく耕作地として機能していたのかもしれない。

Q-1地点の丘陵緩斜面地で「笠百私印」の押印をもつ製塩土器支脚が出土した。文字資料と



第6図 浦入遺跡群検出遺構配置図(舞鶴市教育委員会調査分)

してだけでなく、製塩土器支脚に押印されていたことが何を意味するのか不明であるが、出土した製塩土器支脚の年代観から、9世紀代に「笠」氏が製塩に関与していたことを証明するものとして重要である。

鎌倉時代は遺物が散見されるのみで、遺構も検出されなかった。耕作地として利用されたのではないかと考えられる。

以上、時代ごとに湾東岸部の遺跡の概要を簡単に記述したが、浦入遺跡の特徴である製塩遺構と鍛冶遺構についてやや詳しく述べる。

(4) 製塩遺構と鍛冶遺構

① 製塩遺構

Q-1・Q-2地点の海浜部、約200mの範囲にわたって検出された。製塩遺構は製塩炉とその廃棄層から形成される。製塩炉の構造は、斜面地を削り平坦面を造成し作業面を作り出す構造である。形態は海側に開口する「コ」もしくは逆「L」字状の周溝をめぐらし、周溝によって区画された内側の平坦面は被熱している。被熱面上には敷石および石が据え付けられた痕跡は確認できない。その形状から「方形区画炉」(図中ではKRと略する)と呼ぶ。奈良時代後半の方形区画炉は、Q-1地点の海拔1m前後の海浜部にみられ、平安時代の製塩炉は、Q-1・Q-2地点の海浜部の海拔2m前後のほぼ全域で見られるようになる。平安時代に入ると方形区画炉は大型化し、海側に多量の廃棄層を伴うようになる。製塩炉は複数回の作り替えが行われ、数面にも重なる作業面とそれに伴う幾条もの周溝が検出されている。

隣接する若狭地方での製塩炉の形態は敷石炉であり、長年の研究によって製塩炉と土器がセットになることが証明されている^(注8)。しかし、今のところ浦入遺跡群で検出された方形区画炉は未検出である。浦入遺跡における初現の製塩炉形態は、方形区画炉という製塩炉形態が完成された形で導入されており、製塩技術の導入先が今後の課題として残された。奈良時代の製塩遺構が検出されたことより、丹後地方においても塩生産が行われていたことが確認された。今回の調査においては海浜部において採鹹過程に関連する遺構は確認できなかった。

② 鍛冶炉

古墳時代中期の鍛冶炉も海浜部での検出である。Q-1地点のテラス状の竪穴式住居跡内に鍛冶炉が3基存在する。日本海側における古墳時代中期の鍛冶炉の検出例として貴重な資料となる。飛鳥時代以降では、西岸部でテラス状遺構などにおいて鍛冶炉が多数検出された。東岸部では平安時代後期にQ-1地点の海浜部に柵で囲われた掘立柱建物跡内において3基検出した。また、Q-2地点では山腹につくられたテラス状遺構内において3基の鍛冶炉状遺構を検出した。

(松本達也)

第2章 検出遺構

第1節 M地点（嶋遺跡）の調査

1. 遺跡の位置

M地点(嶋遺跡)は、浦入湾口の西南端に形成された砂嘴上に位置する。砂嘴は、先端部が広く、取り付き部が狭い、杓文字のような形をしている。南東方向に約300mにわたっており、最大幅は約100mを測る。浦入湾は舞鶴市宇浦入に所在するが、この砂嘴のみが対岸の宇千歳の飛び地となっている。嶋という小字名があり、調査前は千歳の畑地となっていた。嶋の先端部は松ヶ崎と通称されている。かつては松が植えられていて、沿岸航行の標識として利用されていたらしい。松ヶ崎からの眺望は良く、大丹生・千歳はもとより対岸の白杉・青井・吉田、南は西舞鶴、北は宮津市栗田方面を見渡すことができる。この地点は、海上交通の要衝であり、沿岸漁労活動の足がかりとしても重要なところである。

2. 調査の方法

舞鶴市教育委員会による試掘調査で、砂嘴の全域に遺物が分布し、特に、砂嘴の中ほどに遺物が集中する傾向が認められた。ここでは多数の柱穴・小土坑のほか、弥生時代から平安時代にかけての生活遺物、製塩土器細片などが採取されており、人々の生活痕跡が良好な形で遺存していると予想された。また、砂嘴の中央で安定した泥炭質の堆積層を確認した。この層は安定した層準を持ち、砂嘴の形成以来、変遷の歴史と歩みをもとにしてきた可能性が考えられた。

そこで、砂嘴上での古代人の生活痕跡を明らかにすること、砂嘴の成立・変遷を考古学的手法で検討することを目的として、発掘調査を実施する計画を立てた。調査は、砂嘴中央付近で面的な調査を行うため、図版第2のようなトレンチを設定した。その後、泥炭層の堆積状況と砂嘴の堆積環境を検討するために、東辺と南辺に沿って十文字にトレンチを設定した。

調査は、まず、重機を用いて調査地区全面の表土を除去し、その後、人力で掘削・精査を行い、遺構の検出を行った。試掘調査では、表土下30cm前後までのところで柱穴・小土坑などが検出されたので、第1段階としてこの面で精査を実施した。精査の過程でトレンチ北側に向かって遺構面が傾斜することが確認されたので、第2段階として、この面を追求する目的で重機を再投入し、地形の様子と遺構の有無を確認するなどの調査を行った。この結果、弥生時代前期以前の汀線を追求するため、第3段階として、泥炭層の性格や堆積状況の調査を行った。

3. 検出遺構

表土層を除去して精査した結果、黄灰色～暗茶褐色砂層が遺構のベース面となることがわかっ

た。この面で柱穴・土坑・集石遺構などの遺構と、縄文時代中期から近世にわたる遺物が多数出土した。遺構は、SK08に弥生時代前期の土器片が少量伴うのみであり、これ以外の遺構は遺物を伴うものがなく、遺物の上から形成時期を明らかにし得るものはなかった。DXII-n15区からDXII-i14区にかけてベース面上に弥生時代前期から中期後半にかけての土器を含む黒色粘質土が局所的に堆積しており、この付近に形成された遺構は、弥生時代中期以前に形成された可能性を指摘できる。

(1)土坑(図版第3)

土坑は円形のもの、長楕円形のものがある。弥生時代以前に形成されたと推定した黒色粘質土を埋土とするもの(SK01・07・09)と、これ以降に堆積した暗黄灰色砂層を埋土とするもの(SK02・05・06)とがある。

SK01 長軸約0.8m・短軸約0.6m・深さ約0.1mの楕円形を呈する土坑である。

SK02 直径約1.3m・深さ約0.5mを測る円形の土坑である。

SK05 直径約1.2m・深さ約0.3mを測る円形の土坑である。

SK06 直径約1.1m・深さ約0.2mを測る円形の土坑である。

SK07 隅丸方形の土坑である。長軸・短軸とも約0.75m・深さ約0.4mを測る。

SK09 長軸約1.1m・短軸0.8m・深さ約0.5mの長楕円形土坑である。

(2)集石(図版第3)

トレンチの南西隅で検出した礫群である。上部は攪乱を受けていたが、下部は遺存状況が良好であった。攪乱により遊離した礫と埋土を除去したところ、礫群が2つあることがわかった。礫群は、縄文時代の海岸堆積物と推定される青灰色砂を基盤として形成されていた。礫群はこれより上位に堆積した暗灰色の土壌化した砂層に埋没していた。帰属時期は、遺物を伴わないので、青灰色砂層堆積以降という以上のことは分らない。

集石を構成する礫は、数cm大のものから人頭大のものまで大小ある。いずれも輝縁岩の円礫である。松ヶ崎の南岸にこれと同様の円礫が自然分布しており、砂嘴の表層にも散発的に認めることができる。こうした礫を採取し、配石した遺構と考えられる。

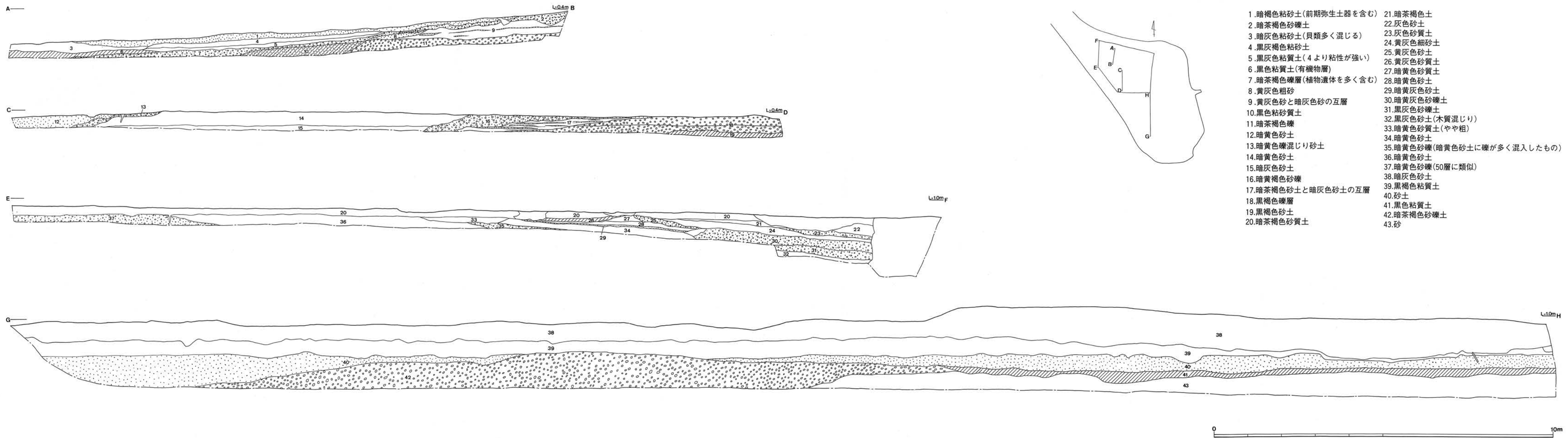
集石1 長軸長1.2m・短軸長0.6m・高さ0.2mを測る。

集石2 長軸長1.1m・短軸長0.8m・高さ0.1mを測る。

4. 砂嘴の形成と土層堆積状況

(1)砂嘴北側における弥生時代以前の海岸線の検出

上記の調査を終了した後、断ち割りをして土層の観察を行った。その結果、遺構のベースである黄灰色～暗茶褐色砂層が、北側に向かって傾斜していることがわかった(第7図A-B、C-D、E-F)。この土層は安定した面をなし、傾斜は海水面下に及んでいた。海水面下約2mまで掘り進んだところ、ゆるやかな弧状を呈する海岸地形の一部を検出した。この土層の上層に堆積する明黄白色砂は湾内の現在の汀線を形成する海岸砂層と一連のものであることから、検出面



第7図 嶋遺跡土層図

がかつての海岸であった可能性が高まった。黄灰色～暗茶褐色砂層上に黒色粘質土が部分的にみられ、ここに弥生時代前期から中期初頭にかけての遺物が包含されることから、検出面の形成時期はこれ以前と推測された。

そこで、海岸地形の形状と遺構・遺物の有無を確かめるために、面的な調査を実施することとした。埋土である明黄白色砂を除去したのち、黄灰色～暗茶褐色砂層上面で精査を行った。その結果、調査区の北端に沿う形で、東西60m分の海岸とみられる傾斜面を検出した。海岸堆積物で構成された脆弱な地盤であること、海水の浸入が著しいことなどの安全上の問題から、掘削に限界があり、傾斜面末端を確認するには至らなかった。しかし、傾斜面は平均して海水面下1m前後の地点まで検出することができ、一定の成果を得ることができた。傾斜面はさらに下方へと続いていたが、遺物を包含する黄灰色～暗茶褐色砂層は海水面下1m前後のところでみられなくなり、堆積環境をほぼ把握することができた。海水面下では、漂着物とみられる木片や貝殻などの自然遺物とともに、少量ながら遺物を検出した。遺物は、縄文時代晩期末頃を上限とし、弥生時代中期頃までのものが認められた。明黄白色砂層は弥生時代後期から古墳時代前期の土器片がみられ、この時期の堆積層と推定された。

以上のことから、この傾斜面は、弥生時代中期以前に形成された海岸汀線であり、この海岸を埋没させている明黄白色砂層は、弥生時代後期以降の堆積物と推定するに至った。このことから、これらの堆積物は、縄文時代晩期以降の海水面変動(上昇)によるものと考えられる。

(2) 縄文海進と砂嘴の形成

以上の成果を受けて、その後の調査の方針について舞鶴市教育委員会と協議を行った結果、砂嘴の南側の状況とともに、縄文時代の海水面変動の痕跡の有無についても調査することになった。調査区の東端に沿って南北のトレンチ、南端に沿って東西のトレンチを設定した。

掘削後に、土層観察を行い、断面図を作成した(第7図G-H)。土層の検討の結果、砂嘴の基盤は礫層であり、この礫層を核として砂礫が交互に堆積し、幾度かの水没と陸化を経ながら現在の地形に至ったことが判明した。以上の所見は、自然科学的分野に属するものであるが、その結果から以下のような問題点が浮かび上がった。

①砂嘴の基盤となる礫層は縄文海進によると推定されるところであるが、その当否を明らかにし、それ以前の砂嘴の形成過程を地質学的に明らかにする必要があること、

②縄文海進以降に砂嘴の陸化や水没など大きな変化がみられる。砂嘴の変化は海岸での人々の生活に可能な限り変化の過程を明らかにすべきであること、

③砂嘴上で縄文時代中期以降の人々の生活跡が発見されているので、未確認の縄文時代遺跡を浦入湾岸で追求する必要があること、などである。

このうち③については、次年度以降の調査予定地内で認識を新たにしてとりくむこととした。

①・②については専門家に検討を依頼することにした。

①は、株式会社ニュージェックに依頼した。調査区の断面観察、土層の年代測定や花粉分析などを、松ヶ崎の形成過程について専門的立場から検討してもらった。②は古環境株式会社に委託

し、松ヶ崎形成後に堆積した泥炭層の年代と分析などを主に検討してもらった。検討結果の詳細については、紙幅の関係上、記載することができなかったが、松ヶ崎の形成と変遷については、巻末の付載を参照されたい。ここでは、これらの成果をふまえつつ、考古学的立場から簡単にまとめておく。

a. 松ヶ崎の形成以前

旧石器時代後期に該当する約2万年前のウルム氷期最盛期には気候が寒冷化し、海水準は現在と比べて100m以上低かった。その後、気候が温暖化し、海水準は次第に上昇した。松ヶ崎は9000年前頃までは形成されでならず、この場所には沖積粘土が堆積していた。この時期は気候が温暖であり海水準は-20m付近まで上昇した。

約9000年前は縄文時代早期前半の押型文文化期に相当する。浦入湾岸でこの時期の人々の活動跡は確認されていない。

b. 縄文海進と松ヶ崎の形成

9000年前～6000年前に海水準が急激に上昇した。いわゆる縄文海進である。海水準上昇により浦入湾外から土砂が供給されて粘土層上に砂礫が厚く堆積し、松ヶ崎砂礫層が形成された。海水準は最大でT.P. 5m付近まで上昇し、このとき松ヶ崎礫層は+1m以上の高まりとなった。松ヶ崎礫層の堆積時期は約6000年前である。

浦入湾岸で人々の生活痕跡が明確になるのは、海水準が上昇して松ヶ崎が形成されつつあるこの段階である。約7000年前頃の縄文時代早期後半に属する資料が最も早いもので、舞鶴市教育委員会が調査した浦入遺跡P-2地点で茅山式・粕畑式など、この時期に相当する土器型式が発見されている。入海式・石山式などの土器型式を経て、早期末の表裏縄文土器に至る土器型式も確認されている。表裏縄文土器は6300年前の鬼界アカホヤ火山灰の良好な堆積層中で検出されており、土器型式に年代の一点を与える資料として重要である。

c. 海進後の松ヶ崎の変遷

①海水準上昇は6000年～4600年前までで終了した。この間は安定した海水準を保ち、松ヶ崎砂礫層の南側付近を中心として砂礫が堆積し、2列の砂群堆が形成された。砂群堆間に砂層が堆積するとともに、浦入湾側にも砂層が堆積した。

この段階の資料として、松ヶ崎の付け根にあたるR地点付近で5260±90B.P.の年代を有する縄文時代前期の丸木舟がある。海水面がなお高水準にあった時期に製作・使用されたものである。松ヶ崎では対応する時期の土器類は検出されていない。松ヶ崎はまだ出現していないか、活動の場として利用しうるほどの環境に至っていなかったのであろう。この丸木舟は、湾奥のP-2地点に居住した縄文時代前期の人々が利用したものであろう。

②4600年前頃には海水準がT.P. -0.4mまで低下し、松ヶ崎が陸化した。砂群層もこの水準まで削平され、アシやヨシなどが繁茂し、腐植層が形成された。周辺は漁撈・採取の適所となったであろう。縄文時代中期の船元IV式前後の型式が該当する時期である。松ヶ崎ではこの時期の土器はみつからないが、P-2地点に居住する人々はこの場所を生業の重要な場として、丸木

舟に乗って幾度も往来したと想像される。

③4600年前以降に海水準が再び急上昇し、T. P. 5 m以上に達した。浦入湾外からの砂礫の供給が行われ、新たな砂礫がT. P. 2 m以上まで堆積した。海水準は次第に低下し、2600年前頃にはT. P. -0.4m付近にあった。松ヶ崎では4000年前頃に位置づけられる縄文時代中期末から後期初頭にかけての土器が少量検出されている。この頃に松ヶ崎は陸化し、生活の場として利用されることがあったのであろう。

④2600年前頃には海水準がT. P. -0.4m付近にあり、松ヶ崎は陸化した。アシやヨシなどが繁茂し、上部腐植層が形成された。下部腐植層が形成された4600年前と類似した景観が浦入湾に出現したとみられる。今回の調査で検出した海岸汀線はこの陸化に対応するものである。検出面上でみられた腐植土層は、上部腐植層に相当する土層であり、縄文時代晩期末から弥生時代中期中葉にかけての土器を包含している(図版第58~60)。この土層を埋土とする土坑やピットがわずかながら認められ、この場が生活の一部として利用されていたことが確実視される。上部腐植層の¹⁴C年代測定値のうち最も古いものが2670±80 B. P.、最も新しいものが2120±80 B. P.であり、出土資料と矛盾しない。

⑤海岸汀線として認識した陸化時の土層は、安定した面を成している。これ以降、松ヶ崎の北縁を中心に、黄灰白色の細粒砂が厚く堆積する。この層はゆるく、表土をなす攪乱土層直下まで厚く堆積している。弥生時代後期から古墳時代の土器片の包含がみられた(図版第61)。2600年前以降、現在に至る間の堆積層であろう。

(田代 弘)

第2節 N地点の調査

N地点は、浦入湾の最も奥まった西側の丘陵斜面に立地する。斜面はおおむね南東に向って傾斜しており、標高は3~26mを測る。調査地のほぼ全域から、竪穴式住居跡・テラス状遺構・流路跡・製塩炉跡などが検出された。なお、テラス状遺構とは丘陵斜面に造られた不定形な段状の造成面をさす。テラスと呼ぶ平坦面には、整然とした柱穴や鍛冶遺構を伴うものなどがあり、一様ではない。これらは、大きく弥生時代後期・飛鳥時代・奈良時代の3時期に分けられる。また、調査区のほぼ中央を、北西から南東に向かって開析する埋没谷地形があり、ここで縄文時代の遺物包含層を確認した。

以下、時代順に報告する。

1. 縄文時代

縄文時代の遺構・遺物が検出されたのは、D VII-g 10・h 10・h 11・i 11・i 12の各地区を中心に広がる埋没谷地形においてである。調査は埋没谷地形の南西部を層位的に調査したにとどまり、その全容を把握するには至らなかった。ただ、西側については、谷地形の肩をほぼ確認できた。その検出状況から谷地形を復原すると、推定最大幅25m・検出長20m以上、最大の深さ4 m前後を測り、扇状に広がると予想される(図版第5)。

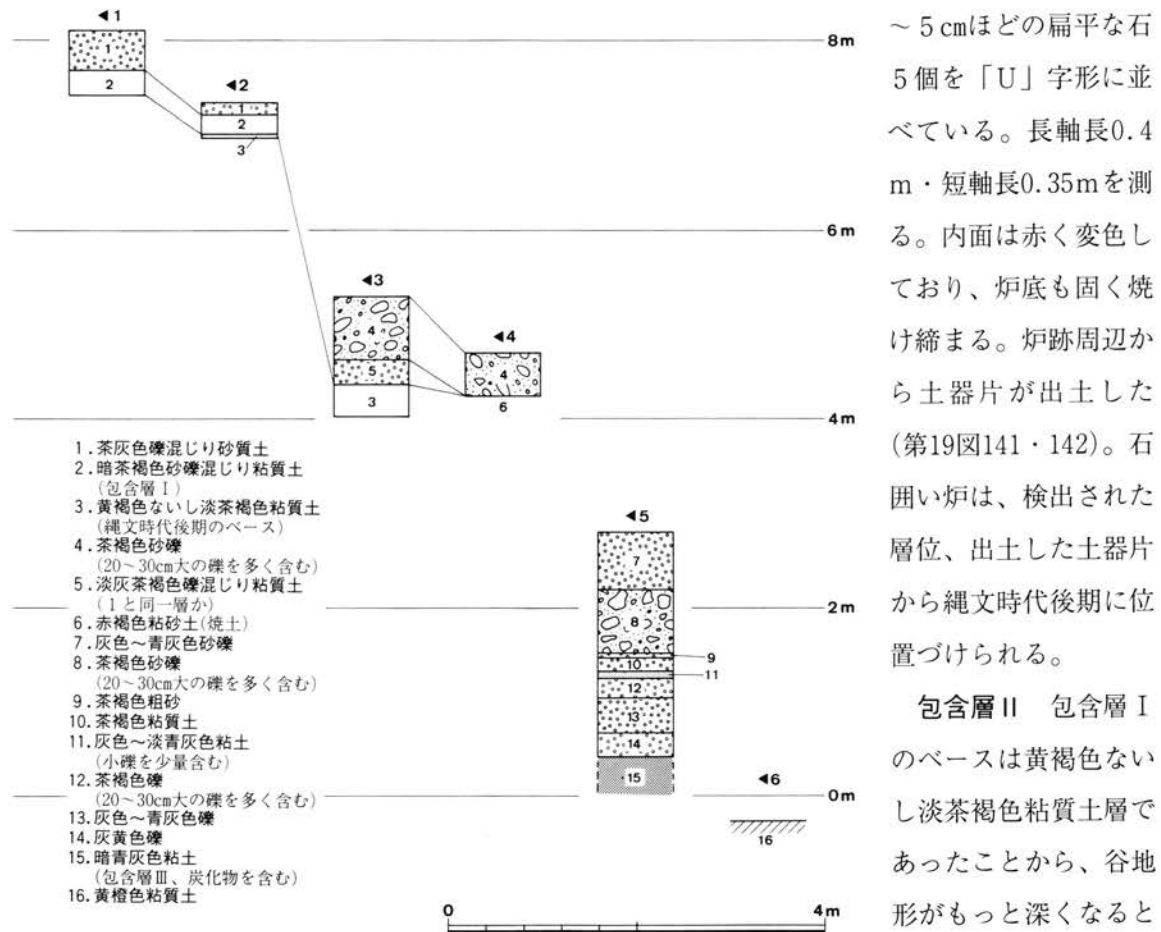
遺構は、後期に属すると思われる焼土・石囲い炉を除くと、顕著なものは検出されなかった。また、遺物は主として遺物包含層から出土した。

谷地形および遺物包含層の堆積状況を第8図に示した。谷地形の最上層には、弥生時代の流路跡S D01や竪穴式住居跡S H16などが形成されており、その下層に縄文時代の遺物包含層が、比較的厚めの無遺物層にはさまれながら3層確認された(以下、上層から包含層Ⅰ・Ⅱ・Ⅲと呼称)。

なお、包含層Ⅰの調査では、埋没谷地形の南西側の遺物包含層を除去して、おおむね旧地形を検出した。包含層Ⅱ・Ⅲについては、調査トレンチ内での断面観察と小規模な面的調査を実施したにとどまる。

包含層Ⅰ 谷地形の南西部を、包含層Ⅰの上面まで重機で掘削し、精査を行った。その結果、石囲い炉1基・焼土2か所を検出し、遺物包含層から多数の遺物が出土した。包含層Ⅰは、流路跡S D01のベースである茶灰色礫混じり砂質土層などの下層に位置する暗茶褐色砂礫混じり粘質土層である。包含層Ⅰでは、DⅦ-h 10区を中心に縄文土器が出土した(図版第65・66-62~140・第19図)。包含層Ⅰは出土した遺物から縄文時代後期前葉の遺物包含層と考えられる。

石囲い炉は、DⅦ-i 10区で検出した(第9図)。炉跡の遺存状況は良好であるが、還元された砂礫混じり粘質土層から検出されたため、原位置を保っていない可能性もある。炉跡は、厚さ4



第8図 N地点縄文時代調査区土層柱状図

形のほぼ中央部で、重機による断ち割りを実施した。その結果、さらに下層にも遺物包含層の存在が確認できた。そこで、谷地形の南西部に長辺22m・短辺13mの、矩形の調査区を新たに設定して、重機掘削を行った。包含層Ⅰから約1.1m掘り下げると、遺物包含層が確認できた(暗灰色粘土層：包含層Ⅱ)。包含層Ⅱの標高は、海拔3m前後を測る。薄い包含層のため、細片化した少量の土器片(図版第64-42~44・49・51~53・59)と石鏃2点(第28図2・5)が出土したにとどまる。包含層Ⅱは、出土した遺物から縄文時代中期の遺物包含層と考えられる。

包含層Ⅲ 包含層Ⅱの下ベースも黄褐色粘質土ないし灰色砂礫層であったことから、調査区の南東部をさらに重機で掘り下げた。その結果、包含層Ⅱから約1.5~3.2m下層で基盤層(黄橙色粘質土層)を確認した。また、調査区の東端で遺物包含層を確認した(暗青灰色粘土層：包含層Ⅲ)。包含層Ⅲの標高は、海拔0~1mを測る。出土遺物は細片化した縄文土器(図版第63・64-1~40)や石鏃(第28図3・8)などがある。出土した遺物から縄文時代早期末~前期初頭の遺物包含層と考えられる。また、調査範囲内での最低標高は-0.308mを測る。

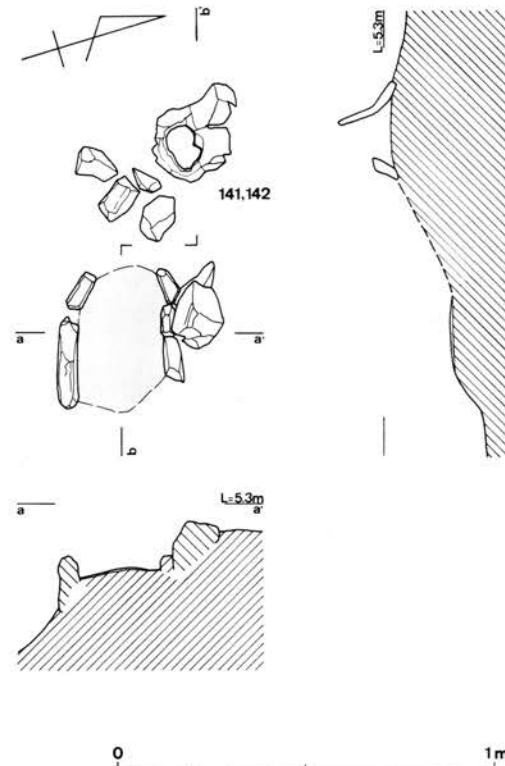
包含層Ⅲを中心に花粉分析および炭素14年代測定を行った。炭素14年代測定の結果、包含層Ⅲについては6450±70B.P.という年代を得ることができた。

2. 弥生時代後期~古墳時代前期

弥生時代後期~古墳時代前期の遺構は、調査地の中央付近で検出されたが、遺存状況は良好といえない。検出された遺構には、流路跡・竪穴式住居跡があり、特に流路跡SD01からは大量の遺物が出土した。

(1) 流路跡SD01(図版第6・7・67~80)

遺構の概要 DⅦ-f4・g5・h6・i7区などで検出された。SD01は、検出長28.2m・幅3.6~6.0m以上、深さは、後世の削平のため場所によって異なるが、0.4~1.2mを測る。SD01の上方は、DⅦ-f4区よりも北西側では、飛鳥時代ないし奈良時代の溝跡と重複していた。下方は、削平のためDⅦ-j7区付近で消失する。また、SD01の南西部分は、現代の水路が敷設されていたため、攪乱が著しく、調査を行うことができなかった。なお、この攪乱部分からもSD01と同時期の土器が多く出土した。



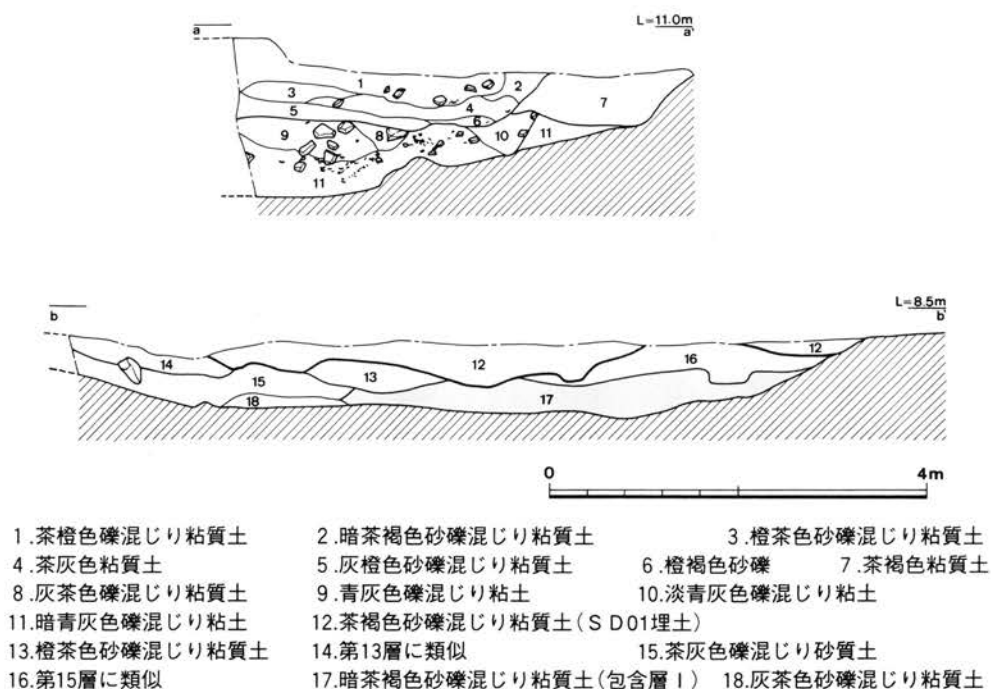
第9図 N地点縄文時代調査区
検出石囲い炉跡実測図

埋土の堆積状況 S D01に2か所の土層観察用のセクションを設けて堆積状況の観察を行った(断面a-a'・断面b-b')。断面a-a'では、大きく2層に分けることができる。上層(1～6層)は、耕作等に伴う整地土のようであり、遺物は含むが、流路埋土とは考えにくい。下層(7～11層)はさらに5層に分けることができ、各層から弥生土器が出土した。特に最下層の暗青灰色礫混じり粘土層からは多量の弥生土器が出土した。また、断面a-a'の上方では、比高差約1mの段差を確認したが、詳細は不明である。

断面b-b'では、S D01の埋土として茶褐色砂礫混じり粘質土層(12層)を確認したが、遺物の出土量はそれほど多くない。断面b-b'付近で、縄文土器と思われる土器片が出土したため、この断面に沿ってさらに下層まで断ち割りをを行った。その結果、先に報告したように縄文時代の遺物包含層(包含層I)を確認した。

遺物の出土状況 S D01から出土した遺物は、大半が弥生土器であり、同時期の銅鏃1点がある。このほか最上層では、古墳時代に位置づけられる土師器のほか、須恵器や製塩土器支脚なども出土した。弥生土器は、S D01底面に比較的まとまって検出された土器群が4群ある(図版第7)。また、流路の埋土からも大量の弥生土器が出土した。このほかにも、縄文土器の破片が少量ながら出土している。最終的な出土総量は、整理箱にして約50箱である。

埋土から出土した弥生土器については、調査区の地区割りにもとづいて取り上げた(第11図)。弥生土器はおもにDⅦ-g 5・h 6区を中心に出土した。これらは2次的に移動している可能性が高いが、出土状況から、DⅦ-g 5地区に分布の中心があると判断された。



第10図 N地点流路S D01土層断面図

S D01底面から出土した弥生土器については、大きく4群に分けることができる(A～D群)。

A群は、DⅦ-f 4区に位置する。長軸長2.2m・短軸長1.0mの範囲に、S D01の底面にほぼ接して検出された。A群からは、甕(32・36・41・43・52・63・68・75・83・95・96・98・100・103・106・114・135)・鉢(153・181・182)・脚部(242・243・247)などが出土した。

B群は、DⅦ-g 5区の北より、断面a-a'付近に特に集中して出土した。多量の弥生土器をこの付近に集中して投棄したと考えられる。B群からは壺(8)・甕(38・77・85・111・118・132・136)・鉢(151・157・164・168・192・193)・高杯(195・214)・底部(297)などが出土した。また、土層断面a-a'のセクションから銅鏃1点(第30図)が出土した。これはB群の土器群とともに投棄されたものと考えられる。

C群は、DⅦ-h 6区の北東隅、S D01の肩に若干のまとまりを持って検出された。C群からは、壺・甕などが出土しているが、量的には少なく、図示していない。

D群は、DⅦ-i 6区とi 7区の境界付近で、S D01の埋土中からややまとまって検出された。D群からは、壺(22)・甕(120)・器台(240・241)などが出土しているが、C群同様、量的には少ない。部分的に近現代の畑の耕作に伴う攪乱がある。

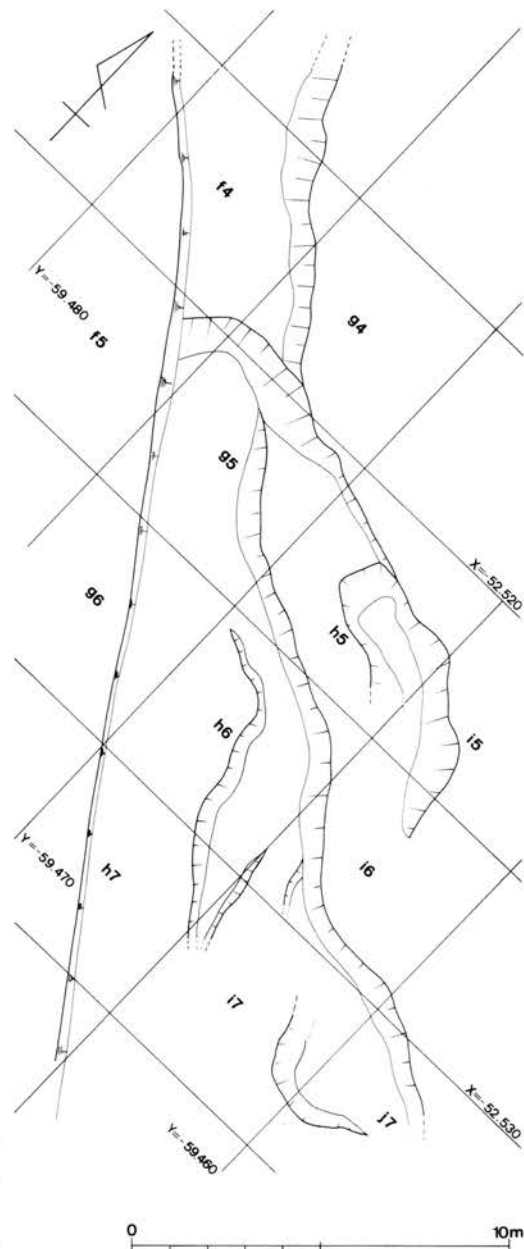
上記の4群のうち、A・Bの2群については比較的原位置をとどめていると判断されるが、C・D群については不明である。

出土した遺物から弥生時代後期後半に位置づけられる。

(2) 竪穴式住居跡

竪穴式住居跡を4基検出したが、丘陵斜面に立地することや飛鳥時代の遺構群に削平されているため、その全容は明らかでない。出土遺物としては、弥生土器・古式土師器などがある。

竪穴式住居跡S H05(図版第8・80) DⅦ-e 10区で検出した。丘陵上位側の西半部のみが遺存していた。削平されていたため、正確な規模は不明であるが、方形を呈する竪穴式住居跡と思われる。周壁溝や支柱穴は検出されなかった。床面上で焼土を確認した。遺物は、床面上で甕の



第11図 N地点流路跡S D01地区割り図

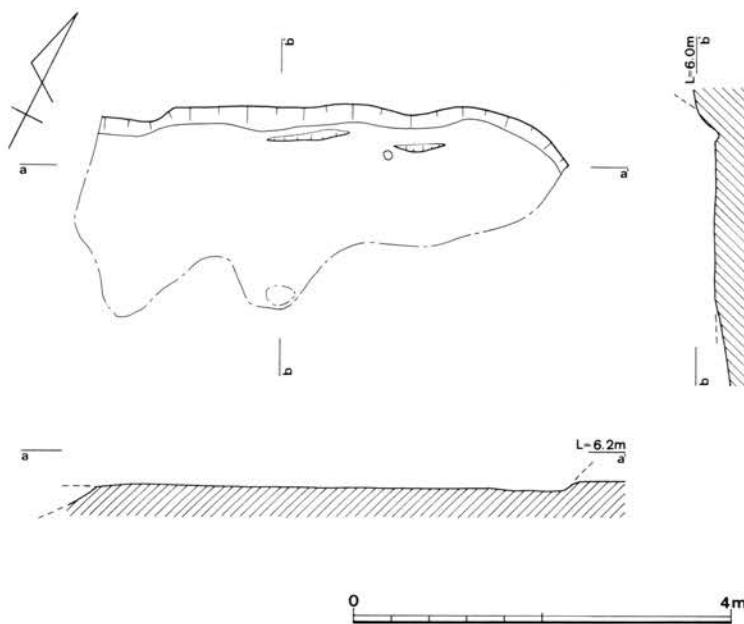
底部や高杯(333~335)などが出土したが、いずれも細片である。出土した遺物から弥生時代後期ないし古墳時代前期に位置づけられる。

竪穴式住居跡SH16(図版第8・80) DⅦ-f7・f8・g8区で検出した。丘陵下位側を失うほか、住居跡の北東側約1/3が後世の土石流によって削平されていた。また、住居跡の大半が、埋没谷地形を埋める土石流上に造られていたため非常に検出しにくかった。住居跡は、内側に約0.4mの段差をもって2段に掘り込まれていた。住居跡の規模は、外側がほぼ円形を呈し、復原直径12.5mを測る。内側の掘り込みは隅丸方形に近い形状を呈するが、土石流で削平されているため正確な規模は不明である。内側の掘り込みに周壁溝が認められた。外側のテラス部分の機能については不明である。柱穴は上段の床面上で1基確認した。

遺物は、いずれも埋土中から出土した。また、鏡形土製品と思われるもの(332)も出土している。出土した遺物にはやや時間幅が認められるが、下段から出土した土器群から弥生時代後期末ないし古墳時代前期に位置づけられる。

竪穴式住居跡SH17(図版第8・80) DⅦ-f9区で検出した。竪穴式住居跡SH16の南に位置する小規模なテラス状の遺構である。丘陵下位側を失う。平面形は方形と思われるが、全体の規模は不明である。竪穴式住居跡でない可能性もある。遺物は、床面上から甕(336・337)・高杯(338・339)・器台(340)などが出土した。出土した遺物から弥生時代後期に位置づけられる。

竪穴式住居跡SH28(第12図) DⅦ-h10区で検出した。古墳時代以前の遺物包含層の調査中に検出したものである。削平が著しいため、正確な規模は不明であるが、周壁溝・焼土が検出された。遺物は、周壁溝から弥生土器細片が出土したのみである。検出された層位などから弥生時代後期の可能性を考えた。



第12図 N地点竪穴式住居跡SH28実測図

3. 古墳時代

古墳時代の遺構として、竪穴式住居跡1基を確認した。

竪穴式住居跡SH31(図版第11・81) DⅦ-f11区ほかで検出した。「L」字形にめぐる周壁溝と、残存幅0.6~0.8m程度の床面を検出した。住居跡の北東半は、土石流の上面に造られており、遺構の検出が困難であった。床面上で柱穴を6基検出したが、全てS

H31に伴うものかどうかは不明である。

遺物は、周壁溝から土師器高杯(4)、柱穴P3・4から甕(3)・高杯(1・2)などが出土した。出土した遺物から、古墳時代中期後半頃に位置づけられよう。

4. 飛鳥時代

飛鳥時代の遺構は、調査地内のおもに南半で検出された。遺構には、竪穴式住居跡・テラス状遺構のほか、鍛冶炉跡と思われる焼土などがある。

(1) テラス状遺構

テラス状遺構SH10(図版第9・81) DⅦ-e10・f10区ほかで検出した。調査の結果、少なくとも2基のテラス状遺構が切り合っていると判断された。すなわち、SH10の床面の大半はSH11と重複しており、その一部と周壁溝を検出したにとどまる。遺構の北東半が土石流の堆積土上に造られていた。柱穴はSH11床面上で検出されたものの中にSH10に伴うものがあると考えられる。SH10とSH11の先後関係については不明であるが、さほど時間差はないと思われる。

出土遺物のうち、明らかにSH10に伴う遺物は、周溝内から出土した移動式竈(第20図299)に限られる。また、埋土から出土した遺物は、SH10、SH11と区別することが困難であったため、一括して取り上げた。埋土出土遺物としては、須恵器蓋A・B・C、杯A・B・C、椀C、土師器杯・甕(5・8・10・12~16・19~38)、製塩土器・製塩土器支脚(図版第96-1~8)などがある。出土遺物は複数の時期にまたがる。

テラス状遺構SH11(図版第9・81) DⅦ-e10・f10区で検出した。SH11は、北東隅を欠く。丘陵上位側の周壁は、約3.7m分が約0.3~0.8m突出する。周壁溝は、北西部分のみ確認できた。テラス面上では柱穴を10基ほど検出したが、建物跡などを復原することはできない。

また、SH11のテラス面において鍛冶炉と思われる焼土面を少なくとも2基確認した(鍛冶炉1・2)。どちらの焼土も炉底などはすでに削平されていたが、床面直上の埋土を採集して洗浄した結果、ごく少量の鍛造剥片が検出されたことから、鍛冶炉跡と判断した。

明らかにSH11に伴う遺物として、柱穴から出土したものがある。柱穴P2からは須恵器杯A(9・11)・高杯A(17)が、柱穴P1から須恵器高杯A(18)が、柱穴P4からは土師器壺(32)が、それぞれ出土した。また、鉄滓(図版第146-18)は、埋土出土であるが、鍛冶炉1に近接して出土した。

SH10・11は、柱穴出土遺物を上限として、埋土出土遺物を下限とする。各柱穴から出土した遺物は浦入Ⅰ期に、埋土から出土した遺物は浦入Ⅱ~Ⅳ・Ⅵ期に位置づけられる。なお、浦入遺跡における時期区分は、第3節(3)のb項を参照されたい。

テラス状遺構SH24(図版第15) DⅥ-k20区で検出した。テラス面上で焼土を検出したが、周壁溝や柱穴などは検出されなかった。テラス面上に段差が見られるため、時期を違えて造成された複数のテラス状遺構、あるいは竪穴式住居跡が重複している可能性がある。遺物には、須恵器蓋Bの破片などがあるが、図示していない。出土した遺物から浦入Ⅱ期と考えられる。

以上のほか、DⅦ-d5・d6・e6区でテラス状遺構SH29・30を検出した。どちらも埋没した谷地形の斜面部に造成されており、削平が著しいが、テラス状遺構と考えられる。遺物は、須恵器・土師器が、谷状地形の埋土と合わせて多数出土したが、明らかに遺構に伴う遺物は出土しなかった。出土した遺物から浦入I期ないしII期に位置づけられる。

(2) 竪穴式住居跡

竪穴式住居跡SH01(図版第10・83) DⅦ-c7区ほかで検出した。N地点でもっとも高所に位置する。東側にSH04が重複しており、全体の規模は不明であるが、平面形は方形と考えられる。周壁溝はない。柱穴は1基確認した。住居跡の北壁の隅寄りには造り付けの竈をもつ。

竈は、住居の内部に煙道を有するもので、煙出しを住居跡の外部に設ける。全長約2.2mを測る。焼成部・煙道部ともに天井部は崩落しており、上部構造は不明である。焼成部は堅く焼け締まっている。煙道はほぼ真北に延びる。竈が周壁の隅によっている点や周壁と竈の間が床面よりも高くなっている点などが、京都府綾部市青野・綾中遺跡群などで検出されている、いわゆる「青野型竪穴式住居跡」に類似する^(注9)。ただし、「青野型竪穴式住居跡」のように竈を造る部分を掘り残すのではなく、いったん掘削した後、改めて竈を造り付けている点が異なる。

出土遺物として、杯B(89)が竈上から、甕A(90)・甕B(91・92)が竈の東側で出土した。このほかに土師器壺の破片などがある。出土した遺物には須恵器が含まれず、詳しい時期は不明であるが、浦入I期ないしII期に位置づけられる。

竪穴式住居跡SH04(図版第10) DⅦ-c7区で検出した。竪穴式住居跡SH01の東側に位置する。丘陵下位側を失うが、平面形は方形を呈すると考えられる。柱穴は2基検出した。周壁溝・竈などはみられない。

出土遺物がないため時期は不明である。また、SH01との先後関係も不明である。

竪穴式住居跡SH08(図版第10・82) DⅦ-e12区で検出した。丘陵下位側を失うが、平面形は隅丸方形と考えられる。SH08は、後述する竪穴式住居跡SH09と重複しているが、検出状況からSH08の方が新しい。SH08の先端部に見られる焼土は、SH09に竈を伴うことからSH08の炉跡と考えられる。北東辺の中央に土坑がある。周壁溝・支柱穴などは確認されなかった。

出土遺物としては、床面上から土師器甕A(49・51)・壺(52)がある。また、埋土から須恵器蓋A(39・41・42)・杯A(43・46)などが出土した。出土した遺物から、おおむね浦入I期に位置づけられる。

竪穴式住居跡SH09(図版第10・82) DⅦ-e11・e12区で検出した。先述のように竪穴式住居跡SH08と重複する。SH08より一回り大きく、北東辺に竈を伴う。竈の構築材の芯として角礫を使用している。竈の煙道は、ほぼ真北に延びる。周壁溝は確認されなかった。柱穴は床面上では確認されなかったが、周壁と重複、あるいは近接して、柱穴が認められた(P1～4)。これらの柱穴がSH09とSH08のどちらに伴うものかは不明である。

出土遺物としては、須恵器蓋A(40)・杯A(44・45)、土師器杯B(47)・甕A(48)・甕B(50)、移動式竈(53)などがある。50は、竈周辺から出土した。53は、埋土から出土したが、造り付け竈

がみられることから、SH09に伴うものかどうかは不明である。出土した遺物から浦入I期に位置づけられる。

竪穴式住居跡SH12(図版第11・83) DⅦ-i2・i3区ほかで検出した。丘陵下位側を失うため、全体の規模は不明であるが、平面形は隅丸方形を呈すると考えられる。床面上で小規模な柱穴を1基検出した。周壁溝は有さない。住居跡の東寄りで、竈の残欠と思われる焼土を検出した。北東隅から住居の外に向かって溝状のくぼみがあることから煙道の可能性がある。

出土遺物として、須恵器蓋B・C、杯B・C、土師器杯B・甕A・鍋Aなどがある。このうち、須恵器杯C(81)、土師器皿Ab(85)・甕A(87)などが竈の周辺から出土した。他のものは埋土から出土した。また、埋土から製塩土器の破片が出土した(図版第95-1~4)。出土した遺物から浦入II期ないしIII期に位置づけられる。

竪穴式住居跡SH15(図版第11・82) DⅦ-g11・g12区で検出した。丘陵下位側を失うが、平面形は隅丸方形を呈すると考えられる。住居跡北隅を含む北東半については、土石流の上面に造られており、遺構の検出がやや困難であった。周壁溝・支柱穴などは確認されなかったが、床面上で焼土を確認した。

出土遺物として、床面上から須恵器蓋A(54)・杯A(55・56)、土師器杯A(59)・甕A(60)・甕A(61~63)、石錘(第33図5)などが比較的まとまって出土した。土師器杯A(57・58)は埋土出土である。出土した遺物から浦入I期に位置づけられる。

(3)土坑

土坑SH21(図版第83) DⅦ-n2区ほかで検出した。当初、竪穴式住居跡と考えていたが、平面形が直径3.5mほどの半円形を呈することから土坑と判断した。また、床面が水平とならない。出土遺物としては、埋土から須恵器蓋B(64・65)・杯B(66~69)・甕(70・71)、土師器杯B(72・73)・甕B(75・76)・甌(74)などがある。出土した遺物から浦入II期に位置づけられる。

5. 奈良時代

調査地の北東側を中心に、テラス状遺構5基・竪穴式住居跡1基などを検出した。テラス状遺構は居住用の掘立柱建物のほか、製塩作業に関連する作業場として利用されたと考えられる。

(1)テラス状遺構

テラス状遺構SH13(図版第12・84) DⅦ-j4・j5区ほかで検出した。テラス状遺構SH14と近接しており、重複関係にあると考えられるが、前後関係は明らかでない。遺構の攪乱が著しく、幅0.8~1mのテラス面がかるうじて遺存していたにすぎない。周壁溝・柱穴・焼土などは認められなかった。

出土遺物としては、須恵器蓋B(97~99)・蓋C(100)・杯B(101~107)・杯C(108~111)・甕(112・113)、土師器杯A(116~118)・杯B(121・122)・椀A(119・120)・皿A(123・124)・皿B(125)・甕B(126~128)、移動式竈(129)などがある。これらの遺物の大半は、埋土から出土したもので、テラス面直上から出土したものはほとんどない。SH13出土土器には、若干

の時間幅が認められる。出土した遺物からSH13は浦入Ⅱ期ないしⅢ期に位置づけられる。

テラス状遺構SH14(図版第12・86・87) DⅦ-k5区ほかで検出した。竪穴式住居跡SH22と重複関係にある。当初、SH22と同一の大規模なテラス状遺構と考えたが、テラス面に段差が認められたことや遺構の掘形が屈曲することなどから、2つの遺構が切り合っていると考え、南西側をSH14、北東側をSH22とした。SH14は、SH22との切り合い関係や攪乱などによって、その全容は明らかでない。周壁溝・柱穴・焼土などは確認されなかった。しかし、堆積土のの厚さが1m近くあり、埋土から多量の遺物が出土した。

出土遺物として、須恵器蓋B(197)・蓋C(198~203)・杯B(209~215)・杯C(219~227)・皿A(217)・皿C(231~233)・高杯B(216)・椀C(234)・甕(235・236)、土師器杯B(237・242)・杯C(238・240・241)・杯D(249)・皿B(243~248)・甕A(251)・甕B(250・253~255)・甕C(252)・鍋A(257)・甑(256)・土馬・鞆の羽口などがある。これらの遺物はいずれも埋土出土であるが、椀C(234)のように明らかに時期の異なるものをのぞくと、比較的土器相としてはまとまっている。鞆の羽口の破片(図版第145-11)が出土したが、SH14では、明瞭な鍛冶関連遺構を確認することはできなかった。SH14の内部もしくは周辺部で、鍛冶関連作業が行われていたことを示唆すると考えられる。また、SH14からは土馬が出土している(第32図-2)。出土した遺物から浦入Ⅲ期に位置づけられる。

テラス状遺構SH19(図版第13・85) DⅦ-j3・k2・k3・l2区ほかで検出した。大規模なテラス状遺構である。テラス面で柱穴を多数検出しており、テラス面の南西半では掘立柱建物跡として復原できた(P1~P11)。建物跡は丘陵の下位側を失うが、桁行6間(10.8m)・梁間2間分(2.9m)を確認できた。この建物跡に重複して周壁溝が検出された。北東半では、建物跡などとして復原できるものはなかった。

遺物の大半は埋土から出土した。出土遺物としては、須恵器蓋A(140)・蓋B(141・142)・蓋C(143~145)・蓋G(146)・杯B(147)・杯C(148~150)・高杯(152)・壺(151)・練り鉢(153・154)、土師器杯A(155~157)・杯B(158~160)・皿B(161)・甕A(162)・甕B(163~166)・鍋A(167・168)、製塩土器・製塩土器支脚(図版第95-5~10)などある。製塩土器は、完形の製塩土器支脚(8)が埋土から出土した。また、細片化した製塩土器が、周壁溝やテラス面よりも若干浮いた状態ではあるが、ややまとまって出土した。出土した遺物から浦入Ⅲ期に位置づけられる。

テラス状遺構SH20(図版第14・88) DⅦ-m3区で検出した。複数のテラス状遺構あるいは竪穴式住居跡が重複関係にあると考えられる。テラス面の中央付近に段差がみられ、この段差に沿って直径0.3~0.5mの柱穴が4基並ぶ(P1~4)。また、テラス状遺構SH23で検出された柱穴1基(P5)とで、「L」字状に屈曲する柱列が復原できる。これが柵なのか、掘立柱建物跡なのかについては不明である。長辺3間分(4.4m)、短辺1間分(1.7m)を確認した。SH20では、周壁溝や焼土などは確認されなかった。なお、西隅付近で人頭大程度の礫が、長さ4.1m・幅0.7~1.1mの範囲にまとまって検出された。テラス面からは浮いており、SH20よりも新しい時期の暗渠などと考えられる。

遺物の大半は、埋土から出土した。出土遺物としては、須恵器蓋C(258・259)・杯B(267・268)・杯C(260～265)・杯(275・276)・椀A(269・270)・椀B(274)・長頸壺(271～273)・甕(277・278)、土師器杯A(284)・杯B(283)・皿B(279～282)・甕B(285)・鍋B(286)・甑(287)、製塩土器・製塩土器支脚(図版第95-16～18)などがある。出土した遺物から浦入Ⅳ期に位置づけられる。

テラス状遺構SH23(図版第14・88) DⅦ-n 3区ほかで検出した。テラス状遺構SH20と重複関係にあるが、前後関係は不明である。また、北辺の周壁が大きく屈曲することから、SH23も複数の遺構が切り合っている可能性がある。遺構の南西側がすでに大きく削平されており、規模なども不明である。周壁溝・焼土はみられなかった。テラス面上や周壁と重複して柱穴が確認された。ただし、建物跡として復原することはできなかった。

出土した遺物としては、須恵器蓋C(288・289)・杯B(293・294)・杯C(291・292)・皿A(290)・椀B(295)、土師器杯B(296)・鍋A(298)・壺(297)などがあり、いずれも埋土から出土した。出土した遺物から浦入Ⅳ期に位置づけられる。

(2) 竪穴式住居跡

竪穴式住居跡SH22(図版第15・86) DⅦ-1 4区ほかで検出した。テラス状遺構SH14と重複関係にある。周壁溝は検出されなかったが、柱穴や焼土を確認できた。主柱穴は、直径0.5～0.7mを測る柱穴が3基ずつ、2か所にまとまって検出された。これらの柱穴から、SH22は3回程度の建て替えがあったと考えられる。

出土遺物としては、須恵器蓋C(174・175)・蓋F(176)・杯B(177～181)・杯C(182～184)・椀B(185)・壺(186・187)、土師器杯A(191～193)・杯C(188～190)・甕A(196)・甕B(194・195)、製塩土器・製塩土器支脚(図版第95-11～15)などがある。遺物は、埋土中から出土したものに限られる。出土した遺物から浦入ⅢないしⅣ期に位置づけられるが、遺物の大半が埋土出土であることから、この時期まで竪穴式住居跡が存在したことを示すとは考えられない。

(3) 土坑

土坑SK02(図版第12・84) DⅦ-j 5区で検出した。テラス状遺構SH02の北西に位置する。形状的には土坑SH21に類似した円形状を呈するが、丘陵下位側を失うため正確な規模等は不明である。残存する最大径は1.6mを測り、規模の点ではSH21を一回り小さくしたようなものである。

出土遺物としては、須恵器蓋C(130～132)・杯B(133)、土師器杯B(138)・杯C(134・135)・椀A(136)・甕B(138・139)などがある。出土した遺物から浦入Ⅲ期に位置づけられる。

(筒井崇史)

第3節 B地点の調査

B地点は、N地点の北側に接する丘陵の斜面に立地する。斜面は、N地点とB地点の境でやや傾斜する方向を変えており、おおむね東南東に向いている。標高は8～18mを測る。検出された遺構は、テラス状遺構3基・土坑状遺構1基のほか、鍛冶炉と思われる焼土4基を確認した(以

下、鍛冶炉1～4とする)。遺物は、遺構からごく少量が出土したにとどまる。また遺構周辺からも遺物が出土した。これらは遺物包含層出土遺物として報告したが、中世須恵器や瓦質土器などが含まれている点において他の調査地点と異なる。なお、これら新しい時期に相当する遺構は、検出されなかった。

B地点では、当調査研究センターの調査に先立って、平成7年度に舞鶴市教育委員会による試掘調査が行われている。この試掘調査では、鍛冶炉や、テラス状遺構SH01・02などが確認された。これらの試掘調査の成果も合わせて、B地点として一括して報告する。遺物も同様に、舞鶴市教育委員会の調査で出土した遺物も含めて報告する。

1. テラス状遺構

テラス状遺構SH01(図版第17・97) DVI-o15・o16区で検出した。テラス状遺構SH01は、遺構の遺存状況が良好とはいえず、テラス面のほか、周辺で多数の柱穴が確認されたことから、複数の遺構が重複している可能性が高い。テラス面の外側(北側)で確認された鍛冶炉跡も含めて、SH01として記述する。なお、遺構の北半は、舞鶴市教育委員会の試掘調査で確認されていたものである。

テラス面は、幅0.6～1mほどしか残存していなかったが、テラス面を中心に多数の柱穴が検出されたことから、複数の掘立柱建物跡ないし柵が重複していると考えられる。また、SH01の北側に「L」字状に屈曲する別の落ち込みが認められ、複数のテラス面があったと考えられる。

鍛冶炉4基は、いずれもテラス状遺構SH01のテラス面の北側でまとまって検出された。現地表から鍛冶炉の検出面までわずか10数cmの深さしかなかったことから、鍛冶炉本体や鍛冶炉を営んだテラス面などはすでに、削平されていたようである。

遺物は、埋土中から出土したものが大半である。出土した遺物としては、須恵器杯A(1)・杯B(2・3)・椀(4)、土師器甕B(5)・甕C(6)などがある。また、鍛冶炉2からは須恵器杯Bcの小片が出土した。出土した遺物の時期が複数の時期にまたがることからSH01の時期は特定できないが、鍛冶炉2については浦入ⅢないしⅣ期に位置づけられる可能性がある。この点はB地点検出の他の遺構とも矛盾しない。

テラス状遺構SH02(図版第18・97) DVI-s9・t8区ほかで検出した。北東側は舞鶴市教育委員会の試掘調査で確認されていたものである。テラス状遺構の北東半では周壁溝・柱穴などが検出されたが、南西半では、テラス面を検出したのみである。なお、南西半では周壁に沿って人頭大の礫が検出されたが、この礫がSH02に伴うものであるかどうかは不明である。柱穴は、列状に並ぶものがあるものの、建物跡として復原できるものはなかった。テラス状遺構の南東側に長径1.9m・短径1.2m・深さ0.3mの浅い土坑状の落ち込みを検出した。

遺物は、埋土から出土した。出土遺物としては、須恵器蓋Ca(7)・杯C(8)、土師器杯A(10)・杯B(9)・杯C(11・12)・皿B(13)・甕(14)などがある。出土した遺物から浦入Ⅲ期に位置づけられる。また、テラス面の南東側で確認された遺物包含層からはSH02出土遺物よりも新

しく位置づけられる瓦質土器鍋(第21図71~73)などが出土した。これらは、浦入遺跡では最も新しく位置づけられる遺物である。

テラス状遺構SH03(図版第19・96・97) DVI-q8・r7・r8・s7区で検出した。テラス面の検出長が18mに達する大型のテラス状遺構である。テラス面の幅は0.6~1.5mしか残存していなかった。テラス面上に複数の段差が認められることから、複数のテラス状遺構が重複していると考えられる。周壁溝は認められなかった。直径0.3m程度の小規模な柱穴を多数検出したが、柱穴群を建物跡として復原することはできなかった。また、比較的多数の焼土や炭溜まりなどが検出された。これらの多くはテラス面から丘陵斜面下方に向かって崩落したような状況で検出された。

遺物は、埋土・床面上のほか、遺構の南東側の包含層から出土した。出土した遺物としては、須恵器蓋(15)・杯B(16・18)・杯C(20~22)、土師器杯A(25)・杯B(24)・杯C(23)・甕B(26・27)・鍋A(28)などがある。また、遺構の南東側の包含層からは、製塩土器・製塩土器支脚が出土した(26~28)。26・28は、接合しないものの、製塩土器のほぼ全形をうかがいうる資料である。27は全高の非常に低い支脚である。両者はともに2次堆積層出土資料であるが、浦入遺跡における最古段階の製塩土器と製塩土器支脚のセット関係を知る上で重要な資料である。出土した遺物から、SH03は浦入Ⅲ期に位置づけられる。製塩土器・製塩土器支脚もほぼ同時期と考えられる。

2. 土坑

土坑SH04(図版第16・97・98) DVI-t11・t12区で検出した。当初、竪穴式住居跡もしくはテラス状遺構が著しく削平されたものと考えていたが、床面が水平にならず、やや傾斜していることから大型の土坑状の遺構と判断した。また、柱穴状の遺構1基を検出した。

遺物は、埋土から多量に出土した。出土した遺物としては、須恵器蓋(30)・杯A(29)・杯C(32~34)・壺(35~37)、土師器杯A(42)・杯B(40・41)・甕A(44)・甕B(45)、中世須恵器(47)、瓦質土器(48)などがある。47・48などのように明らかに後世のものが混入するが、出土した遺物から浦入Ⅲ期前後の遺構と考えられる。

(筒井崇史)

第4節 A地点の調査

A地点は、N地点の南約100mに位置し、ほぼ東向きの丘陵斜面に立地する。標高は3~35mを測る。第1章第3節で述べたように、A-1・A-2・A-3の各地点に区分した上で調査を行った。調査の結果、A-1地点では、竪穴式住居跡1基・テラス状遺構6基・掘立柱建物跡2棟・柵2列・土坑3基・溝2条・柱穴150基余りなどを検出した。A-2地点では、テラス状遺構をはじめ、柱穴や土坑、焼土などを検出したが、遺構の密度は希薄であった。A-3地点では、後述するように、地滑りによって遺構面が崩落していたが、遺物を包含する土坑状の遺構や柱穴を約60基検出した。

なお、A地点でも、平成7年度に舞鶴市教育委員会によって試掘調査が行われた。この試掘調査では、鍛冶炉と思われる焼土面や、テラス状遺構SH05・08の一部などが確認された。ここでも、個々の試掘調査の成果を、A地点として一括して報告する。遺物も同様に、舞鶴市教育委員会で出土した遺物を含めた報告を行う。

1. A-1 地点

(1) 掘立柱建物跡

A-1地点で検出した柱穴群は200基近くに達するが、このうち建物跡として2棟を復原することができた。出土遺物は多くないが、各柱穴から少量の須恵器・土師器などが出土した。

掘立柱建物跡SB01(図版第22・99) CⅧ-16・m6区ほかで検出した。桁行4間(7.8m)・梁間2間(5.3m)の掘立柱建物跡である。検出した柱列は北西・北東の2辺、7柱穴分である。主軸はN35°Eを測る。桁行の柱穴(P1~5)は、一辺が55~95cmを測る隅丸方形または隅丸長方形を呈し、深さは70cm前後を測る。確認できた柱痕跡は直径20cmないし30cmを測る。梁間の柱穴(P6・7)は一辺が50~60cmを測り、桁行の柱穴よりもやや小さい。これは大きく削平されているためと思われる。なお、梁間は、P7よりもさらに南西にのびる可能性もあるが、SB02が梁間2間であることから、SB01も2間と考えられる。

時期の判断できる遺物がほとんどないが、後述するSB02とほぼ同一主軸であることから、浦入Ⅱ期に位置づけられるものと考えられる。

掘立柱建物跡SB02(図版第23・99・105) CⅧ-k7・k8・18区ほかで検出した。桁行3間(7.3m)・梁間2間(5.0m)の掘立柱建物跡で、SB01の南東に位置する。柱穴は、南西辺と南東辺の交差する柱穴が検出できなかったほかはすべての柱穴を検出した。ただし、P1がやや小さいので、その北西側に位置する柱穴である可能性もある。主軸はN36°Eを測り、SB01とほぼ同一の主軸である。丘陵上位側の柱穴は径0.8~1.1mを測り、平面形が円形もしくは楕円形を呈する、やや大型の柱穴を主体とする。しかし、丘陵下位側では、削平が及んだためか直径0.4~0.7mの円形を呈するものが多い。SB02で柱痕が確認できた柱穴はない。

出土遺物としては須恵器蓋B(12・13)、土師器杯B(17・19)・杯C(18)・皿A(15)・甕A(16)・鍋A(14)などがある。遺物はいずれも柱穴内から出土した。12・15はP2、13・16~18はP3、14はP8から出土した。出土遺物から浦入Ⅱ期に位置づけられる。

(2) 柵列

掘立柱建物跡2棟に重複するように、2列の柵跡を検出した。

柵跡SA01(図版第22・99) CⅧ-16・m5区で検出した。掘立柱建物跡SB01の北西側桁行の柱列にほぼ重複するように検出された(P8~12)。主軸はN36°Wを測り、SB01とほぼ同一の主軸である。柱穴は平面形が円形ないし楕円形を呈し、径0.5~0.8mを測る。P10~12では径20~25cmの柱痕を確認した。SB01との前後関係は不明であるが、それほど時間差はないであろう。

出土遺物としては須恵器蓋(4)・杯C(5・6)・甕(9)などがある。4・5・9は柱穴P8、6は柱穴P9、8は柱穴P8もしくはP2から出土した。出土遺物から浦入Ⅲ期ないしⅣ期に位置づけられる。

柵跡SA02(図版第23) CⅧ-k7・k8区で検出した。掘立柱建物跡SB02の北西側桁行の柱列と重複して検出された(P10~14)。主軸はN37°Wを測り、SB02とほぼ同一の主軸である。柱穴は平面形が円形を呈し、径0.3~0.5mを測る。柱痕は検出されなかった。出土遺物は須恵器・土師器・製塩土器の細片が出土したが、図示するには至っていない。SA01同様、SB02との前後関係は不明であるが、それほど時間差はないと考えられる。

(3) テラス状遺構

テラス状遺構SH02(図版第22・101) CⅧ-13区ほかで検出した。床面上で直径0.6m・深さ0.3mのやや大型の柱穴もしくは土坑と思われる遺構を1基検出した。遺構の遺存状況が悪く、埋土・柱穴からの遺物の出土はなかった。ただし、SH02の周辺から土師器甕B(112)が出土した。遺構の時期は明らかでないが、A-1地点で出土した遺物の大半は、浦入Ⅲ・Ⅳ期に位置づけられることから、おおむねこの時期に該当すると考えられる。

テラス状遺構SH03(図版第22・99) CⅧ-15・16区で検出した。掘立柱建物跡SB01・柵SA01と重複する。テラス面の遺存する幅は非常に狭く、調査以前に大きく削平されたと考えられる。SH03は、SB01あるいはSA01の建築に伴って、テラス面として造成されたものと考えられる。

出土遺物としては、須恵器蓋B(1)・蓋(3)・杯C(7)・甕(10)・土師器鍋A(11)などが出土した。出土した遺物から浦入Ⅲ期に位置づけられる。

テラス状遺構SH04(図版第24・100) CⅧ-m5区ほかで検出した。テラス状遺構SH05と重複する、やや小規模なテラス状遺構であるが、SH04の丘陵上位側の掘形ラインは直線とならないため、土坑である可能性もある。また、SH04の南半には、床面に段差がみられ、別の遺構が重複すると考えられる。周壁溝は検出されなかった。柱穴は直径20cm程度のもの3基が検出されたが、建物跡などとしてのまとまりは認められなかった。

遺物は、埋土から出土したものが大半を占める。また、埋土から細片化した製塩土器がまとまって出土した。製塩土器は、SH04が埋没していく過程で、一括投棄されたと考えられる。出土した遺物としては、須恵器蓋C(41~44)・蓋D(45・46)・杯B(51)・杯C(47~50)・高杯B(53)、土師器杯C(54~56)・甕A(60)・甕B(57~59)、製塩土器(図版第105-12~20)などがある。出土した遺物から浦入Ⅲ期に位置づけられる。

テラス状遺構SH05(図版第24・100) CⅧ-n5区ほかで検出した。SH05の北西半は、舞鶴市教育委員会の試掘調査で確認されていたが、溝SD01と重複していたため、形状等についてやや不明瞭な点がある。床面上やその周辺で、多数の柱穴を検出したが、建物跡としてまとまるものは認められなかった。なお、SH05は、竪穴式住居跡の可能性もある。

遺物は、埋土から出土したものが大半を占める。出土した遺物としては、須恵器蓋C(61・62)、

土師器杯A(63)・甕A(64)・鍋B(65・66)などがある。出土した遺物から浦入Ⅲ期に位置づけられる。

テラス状遺構SH06(図版第24・101) CⅧ-n 4区で検出した。小規模なテラス状遺構である。床面が平坦であるものの、周壁が直線的でないことや、小規模であることなどから、土坑の可能性もある。遺物は、埋土中から出土したものが少量あり、須恵器杯C(105)を図示した。出土した遺物が少ないため詳細は明らかでないが、浦入Ⅲ・Ⅳ期に該当すると考えられる。

テラス状遺構SH08(図版第25・101) CⅧ-h 8・i 7・i 8区ほかで検出した。比較的大型のテラス状遺構である。遺構の北東隅部分は、舞鶴市教育委員会の試掘調査で確認されていた。遺構が土石流によって破壊されていたため、正確な規模は不明である。北隅部分のみを確認することができた。北隅部分を一部を掘り残して周壁を形成する。テラス面上には、周壁溝は認められなかった。柱穴は多数検出し、2棟の建物跡を復原することができた(建物跡1・2)。また、鍛冶炉跡と考えられる焼土を2基検出した(鍛冶炉1・2)。

建物跡1(P 1～5)は、桁行3間分(長さ9.5m)・梁間1間分(2.8m)を検出した。建物跡の主軸は、N24°Eを測り、一部が遺存していた周壁の主軸に一致する。なお、母屋と考えられる建物跡の北側に直径20～35cm程度の小規模な柱穴が3基(P 6～8)が、建物跡1の北辺に平行して並んでおり、庇などの支柱と考えられる。鍛冶炉1はこの部分で検出された。

建物跡2は、建物跡1とは主軸を異にし、桁行き3間分(P 9～12、長さ6.7m)を検出したが、梁間に相当する柱穴は確認できなかった。しかし、柱穴の規模が建物跡1とあまり変わらないことから建物跡と考えられる。以上のほかにも多数の柱穴・小土坑などが検出された。

鍛冶炉と思われる焼土は、内部に炉底の一部と思われる暗青灰色を呈する硬化面が認められることや、埋土や柱穴から鉄滓や鞆の羽口片、鍛造剥片などが出土していることなどから、鍛冶炉と判断した。焼土は、このほかにももう1基検出しているが、崩壊が激しいため鍛冶炉であるかどうかは認定できなかった。

遺物は、大半が埋土から出土したが、一部は柱穴から出土した。出土遺物としては、須恵器蓋C(78～85)・蓋G(86)・杯B(88～90)・杯C(91～93)、土師器杯A(102)・杯C(97～99)・杯D(95・96)・皿B(100)・甕A(101)・鍋A(103・104)、製塩土器・製塩土器支脚(図版第105-21～27)、鞆羽口(図版第145-3)、鉄滓(図版第146-11・16)、鍛造剥片などがある。SH08の西辺付近で、床面から若干浮いた状態ではあるが、81・83・84・104などがややまとまって出土した。79は柱穴P 3、80・87は柱穴P 10から出土した。出土遺物から、浦入Ⅲ期に位置づけられる。

(4) 竪穴式住居跡

竪穴式住居跡SH01(図版第26・第102) CⅧ-j 4・j 5・k 4・k 5区で検出した。SH01は、長辺8.7m・短辺5.3m・最大の深さ0.9mを測り、丘陵下位側をすでに失う。床面上で柱穴や土坑、周壁溝などを確認した。住居跡の内部に設けた土層観察用セクションによれば、丘陵上位側の周壁に沿って黒い腐植土がまっすぐ立ち上がっているのが確認できた。竪穴式住居跡の周壁がほぼ垂直であることと合わせて、住居跡の内側に板などを当てて壁としていたと考えられ

る。柱穴は、桁行2間(5.8m)・梁間1間(1.8ないし2.2m)の建物跡に復原できるもののほか、小規模な柱穴が10基以上ある。前者は、おおむね2基ずつが近接して営まれていることから建て替えがあったと考えられる。これらの柱穴は、SH01の上部構造、たとえばSH01全体を覆う屋根状の構造物を支えていた柱穴と考えられる。周壁溝は、住居内を全周する。おおむね幅0.2～0.3m・深さ0.1～0.2mを測る。ただし北東辺では非常に浅く、周壁溝の深さなどが不明瞭であった。

SH01の中央には、長辺3.5m・短辺2.4mを測る方形の掘り込みがある。周辺部に比べ、0.1mほど深くなっている。この掘り込みの北東半には、長辺1.9m・短辺1.4m・深さ0.2mを測る土坑がある。土坑の底面には炭・灰層が薄く堆積していた。埋土から鉄釜の破片が出土した。

住居跡の北隅に竈が造り付けられている。竈は全長4.35mを測り、周壁から2.5mの所に焼土塊が認められ、竈の本体(燃烧部・烧成部)と考えられる。竈本体はほぼ完全に崩壊していたが、竈本体の除去後に床面上で燃烧部の痕跡を確認することができた。煙道部は、黄褐色砂質土で構築される。煙道内は焼土や煙道の上部構造の崩落土などが堆積していた。SH01で検出された竈は、住居跡の内部に煙道部を有するものであり、類似した構造の竈にN地点で検出された竪穴式住居跡SH01がある。

SH01からは須恵器・土師器・製塩土器・製塩土器支脚・鉄釜などが出土した。遺物の大半は埋土中から出土したもので、床面上や柱穴からの出土はごくわずかである。出土した遺物としては、須恵器蓋C(114～120・123)・蓋D(121・126)・蓋F(124・125)・杯C(129～143)・椀A(144～148)・椀B(149)・甕(150・152)・長頸壺(151)、土師器杯A(153・154)・杯B(155・156)・皿B(157)・甕A(158～160)・鍋A(161)、製塩土器支脚(図版第105-9～11)・鉄釜(第35図)などがある。出土遺物から浦入Ⅳ期に位置づけられる。

(5)溝

溝SD01(図版第24・100) CⅧ-n4・n5区ほかで検出した。SD01は、舞鶴市教育委員会の試掘調査で検出され、検出長6.6m・幅0.6～1.4m・深さ0.1mを測る。SD01は、ほぼ南北に主軸を持つが、北端部は大きく屈曲して東に向きを変える。先端部に焼土塊が認められた。SD01の南端は、SH05と重複するため明らかでないが、SH05よりもさらに南へのびることはない。なお、両者の前後関係は不明である。

出土遺物として、須恵器蓋C(67・68)・蓋F(70)・杯C(72～74)、土師器甕A(77)などがある。いずれも埋土からの出土である。出土遺物から、浦入Ⅲ期ないしⅣ期に位置づけられる。

溝SD02(図版第23・104) CⅧ-k7区で検出した。掘立柱建物跡SB02の丘陵上位側に位置する。北端は、近現代の用水路などによって攪乱されている。検出長4.0m・幅0.7～1.0m・深さ0.2m前後を測る。溝の主軸がSB02にほぼ一致することから、雨水をさけるためにSB02の背後に設けられた排水溝と考えられる。

出土遺物としては、蓋(194～197)・杯(198)・高杯(199)などがある。いずれも埋土からの出土である。出土遺物から、浦入Ⅲ期に位置づけられる。

(6)土坑

土坑S H09(図版第27・103) CⅧ-j 9区で検出した。当初は竪穴式住居跡もしくはテラス状遺構と考えていたが、底面が水平でないことや平面形がいびつな形状を呈することなどから、土坑と判断した。長軸長4.2m・短軸長2.0mを測る。遺構の東半は、すでに流失していた。土坑の南端で柱穴2基を検出したが、この土坑にともなうものかどうか不明である。

出土遺物としては、蓋C(162・163)・蓋D(164)・杯B(165~167)・杯C(168~175)・椀A(177)、土師器杯A(180)・杯C(178・179)・甕A(181)・甕B(182)・甌(183)などがある。いずれも土坑埋土から出土したが、大半は底面よりも若干浮いたような状況であった。183は、上方から流れ込んだような状況で出土した。出土遺物から浦入Ⅲ期に位置づけられる。

土坑S K02(図版第27) CⅧ-k 7区で検出した。長軸1.5m以上・短軸1.2m・深さ5cmを測る。すでに著しく削平されたため非常に浅い。底面には焼土が認められ、埋土に多くの炭化物を含んでいた。西側をS B02の柱穴P 2に切られている。

出土遺物としては、須恵器・土師器のほか、製塩土器などがある。

(7)柱穴

柱穴は200基近く検出したが、上記に述べた掘立柱建物跡や柵を除いて、まとまりのあるものとはならない。柱穴からも少量であるが遺物が出土しており(図版第99-20~40)、おおむね浦入Ⅲ・Ⅳ期に該当するものである。

2. A-2 地点

A-2 地点は、A-1 地点の北側に隣接する谷部である。試掘を行ったところ、遺物包含層が認められたため、重機による表土掘削後に人力による精査を行い、遺構の検出につとめた。その結果、テラス状遺構と思われる平坦面1基をはじめ、柱穴・小土坑などが検出された。

テラス状遺構S H10は、非常に小規模なテラス状遺構である。柱穴は確認されたが焼土・周壁溝などは確認されなかった。テラス面が南東に向かって傾斜することから、別の遺構である可能性もある。埋土から出土した遺物のうち、須恵器蓋(図版第101-113)を図示した。

柱穴は建物跡や柵列として復原することはできなかった。

包含層出土遺物も、少量であり、図示できたのはわずか3点である(図版第104)。いずれも須恵器で、蓋(217)・杯B(218)・椀A(219)がある。S H10出土遺物を含めて、おおむね浦入Ⅲ・Ⅳ期に該当すると考えられる。

3. A-3 地点

(1)検出遺構

A-3 地点は、A-1 地点の下方、A 地点からO 地点への傾斜変換点付近に位置する。重機による表土掘削を行ったところ、遺物を包含した遺構が多数検出されたことから、A-3 地点として調査を行った。

A-3地点で検出された遺構の大半は、掘形がきわめていびつで、形状が明らかではなかった。これは、後述するように、遺構ベース(黄褐色土)の崩落もしくは崩壊を直接的な原因として、そのような状況に至ったと考えられる。しかし、調査時に柱穴や土坑、あるいは竪穴式住居跡と理解していたために、遺構番号にSP(柱穴)・SK(土坑)・SH(竪穴式住居跡)などの記号を付与して調査を行った。しかし、遺構の性格については、一部を除いて不明遺構として扱うのが適当と判断した。ここでは遺物の出土した遺構を中心に報告する。

土坑SK05(図版第27・103) CⅧ-m15区で検出した。長軸0.9m・短軸0.75m・深さ0.2m前後を測る、やや不整形な楕円形を呈する。土坑底面に接するように須恵器椀D(190)・皿D(191)各1点が出土した。以下に述べる不明遺構とは異なり、安定した地山上に掘削されている。出土した遺物は、A-1地点で検出されたものにくらべて新しく、浦入V期に位置づけられる。

不明遺構SK06・09・11、SH11・12(図版第28・101・103・104) いずれの遺構も不整形な形状を呈し、規模もさまざまである。これらは、本来、柱穴や竪穴式住居跡であったと考えられるが、地滑りによって遺構自体が原形をとどめていないと判断された。埋土から多数の遺物が出土した(106~109・184~189・192・193)。また、包含層からも遺物が出土した(220~231)。出土した遺物は、A-1・A-2地点で出土した遺物群と大きな時間差は認められない。したがって、A-3地点で検出された遺構は、A-1地点などと同時期に営まれた遺構と考えられる。

(筒井崇史)

(2)土層断面(第13図)

A-3地点では、はじめにも述べたように形状の明らかな遺構がほとんどみられなかった。各遺構の平面形は南北方向に主軸をもつ不整形な遺構として認識され、断面形は全て西から東へと著しく傾いていた。東西の掘り形が圧着した状況も認められた。このような遺構のありかたは、ベース面の崩壊等、自然的要因により東西方向への二次的圧力が加わった結果と推測された。

遺構がこのような形状をなすに至った原因を究明するため、調査区の中央部、丘陵中腹から裾にかけて土層観察用の断ち割りを行って検討した。(株)ニュージェックのスタッフとともに断面観察をした。この結果、基盤である輝緑岩とその直上に堆積する風化土壌との間に、地滑りによる不整合面があることがわかった。不整合面は厚さ約5~10cmの青灰色粘土として認識され、約6mにわたって検出した(第13図第2層)。矢印①は、基盤側に残された不整合面の末端である。ここから約11mの場所に、東側にずり落ちた土層側の末端が認められた(矢印②)。曲線を描いて上方に立ち上がる様子が観察された。多数の各礫を含む下層の土層(4層)と衝突して乗り上げた結果、このような形状を呈したものと推測される。

これらのことから、遺構が形成された上層堆積物は、青灰色粘土層を境界として、丘陵上部から下方に向かって少なくとも10m以上ずり落ちたと判断することができる。A-3地点に形成された遺構群は、地盤が地滑りを起こしたために下方へずり落ち、崩壊してこのような形状を呈するに至ったと考えられる。

(田代 弘)

第5節 O-1 地点の調査

1. 調査成果

O-1 地点では、広範囲にわたって奈良時代から平安時代末期にかけての浜辺を検出した。この浜は浦入湾ではみられないゆるやかな浜で、多くの生活遺物も出土した。製塩土群片も数多く認められた。浜の背後には小段丘があり、小規模な石敷製塩炉跡や、製塩炉とみられる規模の大きな地床炉等が認められた。製塩炉は奈良時代のもので平安時代のものである。製塩土器は平安時代に属すると思われる薄手小形のものが主体であるが、厚手大形のものも若干認められた。

また、調査地南半では製塩炉とともに20基をこえる鍛冶炉跡を検出した。覆屋などを示す遺構は検出できなかったが、炉跡が狭小な地点に集積した状況で検出されており、工房跡である可能性が高い。鍛冶炉は伴出したわずかな遺物から10世紀代のものと推定される。遺存状態の良好な炉跡には鍛冶滓とみられる椀形滓が認められた。また、各炉内からサンプリングした土壌を洗浄した結果、鍛冶に伴うと考えられる鍛造剥片・粒状滓を多数検出している。

(田代 弘)

2. 基本層序と遺物の出土状況

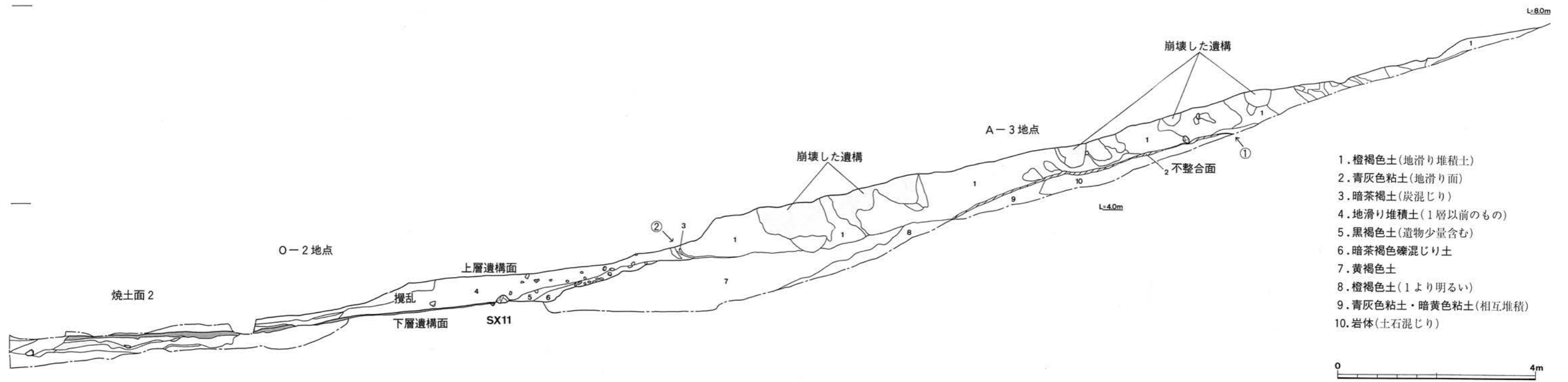
(1) 基本層序

O-1 地点の基本層序について、調査区北壁の土層図(第14図)を参照して簡単に説明する。O-1 地点は、調査以前に大規模な盛り土が行われており、畑地として利用されていた(第Ⅰ層)。また、この盛り土以前も畑地として利用されていたことが土層観察によって確認できた(第Ⅱ層)。第Ⅰ層は近・現代の盛り土、第Ⅱ層は中・近世の畑地と考えられる。この第Ⅱ層の直下に、海浜部とそれを覆うように礫面が広がる(第Ⅳ層)。礫面の海側には厚さ10~20cmほどの平安時代の包含層が認められた(第Ⅲ層)。礫面は礫が意図的に配されて形成された可能性が高い。礫面はO-1 地点の標高1m未満の海浜部のほぼ全面にわたって検出することができた。礫面の検出中および第Ⅲ層に出土した遺物によって、礫面は平安時代末頃を下限とする。これらは製塩作業を行うための足場として利用されたと考えられる。これらに重複してDⅧ-a 1・b 1区では製塩炉5などが検出された。礫面の下層は礫をまじえた海成砂が厚く堆積している(第Ⅴ層)。礫面の直下では、製塩土器を含む遺物が少量ながら認められた。なお、調査の最終段階において、O-1 地点の中央部を重機で断ち割り、後述するR地点同様、厚い海成砂層と基盤層を確認したが、縄文時代などの遺構・遺物を確認することはできなかった。

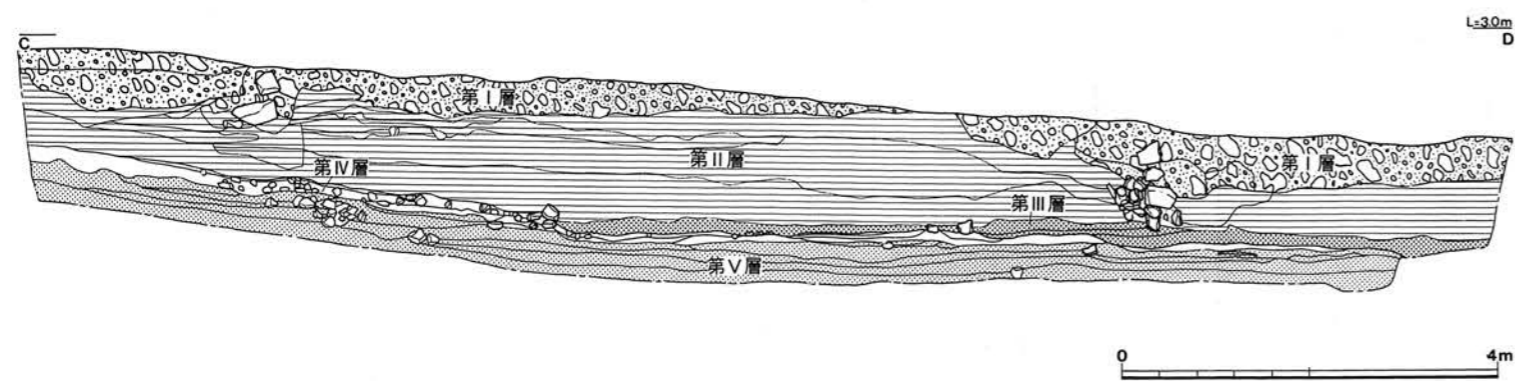
(2) 遺物の出土状況

O-1 地点出土遺物の大半は海浜部から出土したものである。これは、遺構そのものが露出しているものが多かったためであろう。遺構から出土した遺物については個別に述べることとし、海浜部における遺物の出土状況について述べる。

O-1 地点では、海浜部から出土した遺物として、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・黒色土器・白磁などの土器類、製塩土器・製塩土器支脚、木製品、土錘などがある。また、ごくわずかであるが、石器や鍛冶関連遺物などもある。



第13図 A-3 地点・O-2 地点土層断面図



第14図 O-1 地点北壁土層断面図

これらの多くは、第Ⅲ層ないし礫面検出中に出土した。遺構がある程度集中する北端部や南半の鍛冶炉周辺からの出土量が多いが、おおむね調査区のあらゆる地点で出土した。これらは2次堆積、あるいは製塩や鍛冶に伴う廃棄物として、浜に廃棄されたものと考えられる。O-1地点で検出された遺構群に並行する時期の遺物が圧倒的に多いが、弥生時代中期や古墳時代前・中期と考えられる遺物もあり、顕著な遺構は確認されていないものの、浦入湾周辺において人々が生活を行っていたことを示す。

なお、最も新しい遺物はおおむね12世紀代(浦入Ⅷ期)のものであり、その後、明治期に至るまで、浦入湾周辺における人々の活動は認められない。

3. 北半部の調査

(1) 製塩炉

O-1地点北半部で検出された製塩炉跡と思われる遺構は、大きく3つのグループに分けられる(製塩炉群1~3)。このうち、製塩炉群1では、3基の石敷き炉がまとまって検出された(製塩炉1~3)ほか、厚手大型製塩土器をとまなう製塩炉4を検出した。製塩炉群2では、あまりまとまりのある石敷き炉などは検出されなかったが、焼土の広がりを確認した。製塩炉群3ではややまとまりのある石敷き炉(製塩炉5)を検出した。

① 製塩炉群1 (図版第30)

O-1地点の北端で、角礫を利用した製塩炉跡や大きく造成されたテラス状遺構からなる製塩の作業空間的な遺構群である。製塩炉跡は、舌状にせり出した丘陵の先端部を大きく掘削してテラス面を造成し、その上方に、角礫を利用して構築される。検出された製塩炉跡は、南から製塩炉1・製塩炉2・製塩炉3と呼称した。また、製塩炉跡1の下層で厚手大型の製塩土器を伴う地床炉を検出した。これを製塩炉4とする。

製塩炉跡1~4の南東側(海浜側)に、比高差1.3~1.6mを測る段差があり、平坦面を形成している。この平坦面上には、さらに掘り窪められたテラス状遺構SX04がある。

このテラス状の平坦面上層には、厚さ40cmに達する堆積土があり、多数の遺物が包含されていた。この遺物包含層は、製塩炉1付近から北東に位置するN地点竪穴式住居跡SH15付近まで広がっており、古墳時代中期から平安時代までの遺物を包含していた。これらの遺物はN地点包含層出土遺物として報告した(図版第89~94)。

製塩炉1(図版第31・106) DVII-13d区で検出した。製塩炉1は、長軸長1.4m・短軸長0.9mのやや楕円形を呈する範囲に、拳大から人頭大の礫を使用して炉を構築する。炉の構築は、径2.2m程の掘り込みを穿って礫を据えるようである。ただし、後述するように製塩炉1の下層には製塩炉跡4があり、その埋土と重複する部分は、第5層を底面としていたと考えられる。

炉跡の南東側にはテラス状遺構SX04をはじめとする平坦面が認められた。この平坦面は、製塩炉1からの廃棄層と思われる堆積層によって完全に埋没していた。この堆積層からは被熱した礫を含む多量の礫が出土しており、製塩炉がもっと多くあった可能性もある。

平坦面上の堆積層から多数の遺物が出土した。これらのすべてが、製塩炉1や2から廃棄されたものとは考えられないものの、製塩炉1の時期を考える上で参考になる遺物を図示した(12～29)。なお、製塩炉1に直接伴う遺物は、微細な製塩土器片を除いて出土しなかった。

製塩炉2(図版第31・106) DⅦ-13f区で検出した。製塩炉跡1の東北東約7.5mに位置する。径1.2mほどの範囲に、製塩炉1と同様、拳大から人頭大の礫を使用して炉を構築する。製塩炉2の構築にも製塩炉1にみられた掘り込みがあるかどうか確認するため断ち割りを行ったが、掘り付けのための掘り込みは確認できなかった。製塩炉2の東南側には、製塩炉1から続く平坦面があるが、廃棄などに伴う堆積層によって完全に埋没していた。製塩炉2の東南側に位置する堆積層からの出土遺物は少ない。

出土遺物としては、須恵器蓋(30)・杯A(31)・甕B(32)、土師器甕B(33)、製塩土器支脚などがある。30・31は製塩炉2の断ち割りより出土、32・33は製塩炉2周辺より出土した。



第15図 O-1地点製塩炉3実測図

製塩炉3(第15図・図版第106) DⅦ-13f区ほかで検出した。製塩炉2の北東2.5mに位置する。削平を受けているようであるが、長さ1.7m・残存幅0.7mのやや長方形に近い形状を呈する。一辺20～30cm・厚さ10cm前後を測る角礫の広い面をそろえて配石する。製塩炉1・2の南東側に見られた平坦面は、製塩炉3付近までのびるが、必ずしも製塩炉3に伴う堆積層とは判断できなかった。

製塩炉3に関わる遺物としては、須恵器蓋(34)・杯C(35・36)・土師器杯A(38)などがある。36は、炉跡からやや離れて出土したが、他のものは炉跡検出中に出土

したものである。

製塩炉 4 (図版第32・106・107) D VII-13e 区ほかで検出した。製塩炉 1 の下層で検出した。長辺3.2m・短辺2.2m・深さ0.6~0.7mを測る掘り込みで、底面には焼土が認められる。当初は、製塩炉 1 に対応する製塩土器などの廃棄土坑と考えたが、土層断面の観察から製塩炉 1 の下層に位置する製塩炉跡であることが明らかになった。土層断面の観察によれば、焼土面の形成に先立って深さ10~15cmほどの掘り込みを行った上で、埋め戻して焼土面を形成する。この焼土面が炉の作業面と考えられる。焼土は、底面の中央部付近では認められなかったものの周囲に環状になった状態で検出された。底面の先端で、一辺が10~20cmほどの角礫を複数認めたが、製塩炉 4 に伴うものかどうか不明である。以上のことから、製塩炉 4 は礫を使用しない、いわゆる地床炉と考えられる。

この焼土面上から、厚手平底製塩土器や須恵器・土師器などが出土した。その上に製塩炉 4 を埋める堆積があり、さらに製塩炉 1 から掻き出された炭・灰が堆積していた。

出土遺物としては、厚手大型平底の製塩土器容器 I 類(図版第107-1~12)のほか、須恵器杯 B(図版第106-1~3)・杯 C(5・6)、土師器杯 D(7)・甕 A(9~11)などがある。厚手平底製塩土器(図版第107-1~12)は、環状にめぐる焼土面の内側に積み重なるように出土した。その堆積の厚さは5~10cmを測る。また、土器類(1~11)はこれらの製塩土器とともに出土した。

テラス状遺構 S X 04 D VII-14e・14f 区で検出した。製塩炉 1~4 の南東側に造成された平坦面上に設けられており、ほぼ製塩炉 1 ないし製塩炉 4 の正面に位置する。平坦面は各製塩炉から廃棄されたと思われる製塩土器片をはじめ、各時期の須恵器・土師器を包含する堆積層によって埋没していた。

平面形は、隅丸の「コ」字状を呈し、長辺6m・短辺3m・深さ20~30cmを測る。テラス面で焼土を検出したが、周壁溝や柱穴は認められなかった。検出状況・堆積状況などから、製塩炉 1~4 とともに製塩に伴うテラス状遺構と判断した。S X 04 と製塩炉 1 あるいは製塩炉 4 の関係は、後述する O-2 地点の下層で検出された。焼土面 2 と石敷き炉 S X 11 の関係と同様に、製塩における分業形態を示すものと考えられる。

出土遺物としては、須恵器・土師器などがあるが、細片のため図示していない。また、S X 04 の下層には弥生時代後期から古墳時代前期の遺物包含層が確認された。これらは斜面の上方に立地する遺構からの流れ込みと考えられる。

②**製塩炉群 2** (図版第33) C VII-t 17・t 18、D VII-a 17・b 16・b 17 区ほかで検出した。製塩炉群 2 は、A-2 地点から下りてくる谷部の斜面が、その傾斜をゆるやかにして、やや広い平坦面を形成した先端部に営まれる。標高はおおむね2.2~2.6mを測り、ここを境に斜面の傾斜角度が変わって O-1 地点の海浜部へとつながる。ここには多数の礫群が認められ、その多くは被熱した面を持つ。ただし、ここで検出された礫は、製塩炉群 1 のように明瞭なまとまりを見いだすことはできなかった。また、これらの礫群に重複するように厚さ10cm前後の焼土が南北13m・東西3.0~3.2mにわたって確認された。

出土遺物としては、須恵器・土師器・黒色土器・製塩土器支脚などがある。これらの遺物は、おもに製塩炉群2の検出中に出土したものであるが、時間幅があり、この礫群や焼土がいつ製塩に用いられたか明らかでない。以下に述べる製塩炉群3とともに、O-1地点海浜部出土土器としてまとめて報告する(図版第114~122)。なお、製塩炉群2の存続期間は出土した製塩土器・製塩土器支脚から平安時代(浦入VI期~VIII期)と考えられる。

③製塩炉群3(図版第34) DⅧ-a1・b1区で検出した。第3群は、第2群の南約18mに位置するが、検出状況からは単独の1基の炉跡であるのか、複数の炉跡が重複するのか判然とはしない。南北2.7m・東西3.2mの範囲に20~30cm大の礫が比較的まとまって認められた。礫の表面が赤く変色するものが多いこと、周辺の砂浜に比べて礫の検出された地点が高いこと、礫の間や周辺から製塩土器や製塩土器支脚が多数出土したことなどから、製塩炉と判断した(製塩炉5)。

出土遺物としては、須恵器・土師器、製塩土器・製塩土器支脚などがある。これらの遺物は、礫群の上面、あるいは周辺から出土しているが、第2群同様やや時間幅がある。製塩炉群3の存続時期は出土した製塩土器・製塩土器支脚から平安時代(浦入VI期~VIII期)と考えられる。

(筒井崇史)

4. 南半部の調査

南半部では、製塩・鍛冶関連の遺構・遺物を検出した。これらの遺構は、海浜部に向かったのびる丘陵の先端の平坦面で検出された。検出された遺構は鍛冶炉16基、焼土16か所、不明遺構4基、溝5条、柱穴3基、製塩土器集積3か所、製塩土器支脚集積2か所、砂鉄の集積2か所のほか、金床石1点を原位置で確認した。遺物は、鍛冶関連として鞆の羽口・鉄滓・鍛造剥片、製塩関連として製塩土器・製塩土器支脚などがあり、そのほかに須恵器・土師器・黒色土器などの土器類が出土した。

(1) 層位

O-1地点南半部も遺構面まで厚く埋め立てられていた。これらを重機で除去した後に遺構の検出を行った。調査地周辺の堆積状況は、無遺物層の黄褐色土(図版第35断面b-b'第9層)が丘陵側からゆるやかに北東方向へ傾斜していき、飛鳥~奈良時代の遺物を含む青灰色土(図版第35断面a-a'第2層・b-b'第8層)がその上に堆積する。部分的に青灰色土の上に褐色土・黄灰色土・茶褐色土が薄く堆積していた(断面b-b')。

遺構は、西側では黄褐色土の上面で検出されたが、東側では飛鳥~奈良時代の遺物を含む青灰色土の上に堆積する褐色土層などの上面で検出された。したがって、これらの遺構は青灰色土が形成された後に造られたものと考えられる。

なお、青灰色土は完掘できなかったため、断ち割りによる部分的調査にとどまった。

(2) 鍛冶関連遺構

① 鍛冶炉(図版第36~39)

鍛冶炉は16基検出された。このうち鍛冶炉12では5回以上、鍛冶炉13では2回の造り替えが確認され、これを1基と数えるとO-1地点の鍛冶炉は21基以上となる。なお、断面観察を行った

鍛冶炉1・2・4・6・7・11・13(1回目)～16の10基については、いずれも浅い掘り込みを行った後、粘土を貼り付けて炉を構築していることがわかった。また、鍛冶炉5・8～10はいずれも遺構が保存されることになったため、断面観察は行っていない。

鍛冶炉1 長径27cm・短径20cmを測り、中央部が若干窪む。

鍛冶炉2 長径20cm・短径15cmを測る。

鍛冶炉3 炉は攪乱により半壊しており、一部が残存するのみである。

鍛冶炉4 長径20cm・短径13cmを測り、浅い窪みをもつ。

鍛冶炉5 長径25cm・短径17cmを測り、浅い窪みをもつ。赤色土は炉の周囲を半周するように確認された。炉の直上から鞆の羽口が出土したが、原位置をとどめたものではない。

鍛冶炉6 長径26cm・短径24cmを測り、浅い窪みをもつ。遺存状況は良好で、平面形は不整形円形を呈する。赤色土は2か所できれる。

鍛冶炉7 長径12cm・短径10cmを測り、大部分は削平・流失したと考えられる。

鍛冶炉8 長径32cm・短径30cmを測り、浅い窪みをもつ。遺存状況は比較的良好で、平面形は不整形円形を呈する。赤色土は部分的にしか検出できなかった。

鍛冶炉9 長径31cm・短径24cmを測り、浅い窪みをもつ。遺存状況は比較的良好で、平面形は不整形円形を呈する。赤色土は2か所できれている。

鍛冶炉10 炉本体は流失し、操業時の被熱による赤色土のみ確認した。赤色土は浅く窪む。

鍛冶炉11 長径35cm・短径31cmを測り、浅い窪みをもつ。遺存状況は良好で、平面形は不整形円形を呈する。赤色土は1か所できれている。

鍛冶炉12 炉は5基以上が重複して検出された。各炉の大きさは正確にはわからない。検出時に平面形態が明確でなく、炉の残骸である可能性も考えられたため断ち割りを先行して行った。断面観察によって鍛冶炉がほぼ同一場所で少なくとも5回造り替えられていることが判明した。炉の構築方法は、1回目の炉は他のものと同じく浅い掘り込みを行い、粘土を貼って構築する。2回目の炉は1回目の炉の浅い窪みに沿わせて薄く整地を行って炉を構築する。3回目も2回目の窪みを利用して炉を構築する。4回目・5回目の炉は、若干場所を変えて構築している。少なくとも1回目から3回目の炉は連続して構築されており、3回目の炉底には鉄滓が炉底に貼り付いたままの状態で見出された。

鍛冶炉13 炉は2基が重複する。1回目の炉は長径23cm・短径20cmを測る。2回目の炉は1回目の炉の上に薄い整地を行って炉を構築しており、浅い窪みもつ。

鍛冶炉14 長径31cm・短径28cmを測り、浅い窪みをもつ。遺存状況は良好で、平面形は不整形円形を呈する。赤色土は2か所できれる。炉底に鉄滓が貼り付いた状態で検出された。

鍛冶炉15 長径25cm・短径20cmを測り、浅い窪みをもつ。赤色土は部分的にしか検出されなかった。

鍛冶炉16 長径25cm・短径25cmを測り、浅い窪みをもつ。炉の直上には赤色土が一部残存しており、この上に削平された炉本体があったと考えられる。

②金床石(図版第39)

金床石は原位置で検出された。現状で、地表からの高さが8cm・長径19cm・短径13cmを測る。おそらく扁平な円礫を立てて据え付けたと考えられるが、掘形は検出できなかった。石材は花崗岩と考えられ、表面は河原石のように平滑である。頂部は欠損しており、鍛打を行った面の形状は確認できなかった。ただ、現状の頂部から1cm程度が帯状に赤く変色しており、鍛打作業に伴う被熱によると考えられる。なお、遺構は保存されることになった。

③その他

その他の鍛冶関連遺構として柱穴1・柱穴2・砂鉄集積1・砂鉄集積2が検出された。

柱穴1 直径16cm・深さ6cmを測る。底からは鉄滓1点が出土した。

柱穴2 直径20cm・深さ10cmを測る。柱穴埋土から、洗浄により鍛造剥片・砂鉄が多量に検出された。

砂鉄集積1 長径55cm・短径30cmの範囲で検出された。掘形を持たず、薄く堆積していた。洗浄により多量の砂鉄とともに鍛造剥片も多数検出された。

砂鉄集積2 長径45cm・短径18cmの範囲で検出され、砂鉄集積1と同じく、掘形を持たず薄く堆積していた。やはり、洗浄により多量の砂鉄とともに鍛造剥片も多数検出された。

④鍛冶関連遺物の出土状況

鍛冶関連遺物としては鞆の羽口・鉄滓・鍛造剥片などが出土した。鞆の羽口はきわめて少なかった。鉄滓は小型のものが多数出土しており、特に鍛冶炉5・8～10で多かった。また、鍛冶炉の埋土・青灰色硬化層(炉の構築土)・赤色土、砂鉄集積、柱穴の埋土、金床石周辺の土などの洗浄により、鍛造剥片・粒状滓・鉄滓を確認した。すべて鍛冶炉の埋土において鍛造剥片が確認できた。

(3)製塩関連遺構(図版第35)

〇-1地点南半部で検出された製塩関連遺構としては、製塩炉と思われる焼土や製塩土器集積・製塩土器支脚集積などがあり、先述する鍛冶炉群と重複して検出された。これらの製塩関連遺構群を北半部の製塩炉群1～3に続けて、製塩炉群4と呼ぶ。

①焼土

焼土は16か所確認された。焼土は、青灰色硬化層が見られない、掘り込みが見られない、被熱による赤色土が堅く焼き締まっている、などの点で鍛冶炉と異なる。鍛冶炉のように鍛造剥片や炉底に残された鉄滓などといった直接的な証拠を欠くが、多量に出土した製塩土器や製塩土器支脚などから製塩作業に伴うものである可能性が高い。

焼土の平面形は不整形であり、特に円形・方形などを意識して造られたものではない。大きさも焼土10の長軸長82cm・短軸長47cmのものから焼土15の直径12cmのものまで、さまざまである。そのうち比較的大きい焼土4・5・11で断面観察を行い、4cm程度の厚さまで堅く焼き締まっていることを確認した。なお、焼土10については遺構が保存されることになった。

②製塩土器集積

製塩土器集積は3か所確認された。製塩土器集積1は長軸長0.7m・短軸長0.6m、製塩土器集積2は長軸長1.5m・短軸長0.72m、製塩土器集積3は長軸長0.98m・短軸長0.7mを測る。いずれも厚さ約5cm程の細片化した製塩土器の堆積層が検出された。

③製塩土器支脚集積

製塩土器支脚集積は2か所確認された。ここから出土した製塩土器支脚を図版第109-9~26に図示した。また、製塩土器集積1~3の上層からは多数の製塩土器支脚が出土したが、他の部分でも散発的に出土した。

④不明遺構

不明遺構S X01は段状の遺構である。掘削時に埋土中より焼け石が多数検出された(図版第35断面c-c'第2層・d-d'第2層)。焼け石は段上方から崩れ込んだと考えられ、上方に石を用いた炉があった可能性が高い。S X01は南北に延びると考えられるが、鍛冶遺構が保存されるため完掘していない。

不明遺構S X02~04は不整形の浅い掘り込みで、その性格は不明である。S X02は長軸長0.76m・短軸長0.52m・深さ約5cm、S X03は長軸長0.92m・短軸長0.54m・深さ約5cm、S X04は長軸長1.2m・短軸長0.68m・深さ約5cmを測る。

⑤溝

溝は5条検出した。溝S D01・03・04は切り合い関係にあり、S D04→S D03→S D01の順に掘削されている。S D01は長さ8.3m・幅0.5m・深さ約8cmで南北方向から南東方向に屈曲する。S D02は長さ3.7m・幅0.28m・深さ約10cmで南北方向に延びる。S D03は長さ4.1m・幅0.32m・深さ約10cmで南北方向に延びる。S D04は長さ2.9m・幅0.44m・深さ約10cmで南北方向に延びる。S D01~04は鍛冶炉や焼土が検出された平坦面と山の斜面の傾斜変換点付近に繰り返し掘削されており、山側からの水を防ぐための排水溝と考えられる。ただし、鍛冶・製塩のいずれに関連する遺構であるかは明らかにできなかった。

溝S D05は断ち割りによって確認したもので、平面的には検出できなかった。幅0.74m・深さ0.3mで南東方向に延びると考えられる。

(水野聡哉)

第6節 O-2地点の調査

1. 調査成果

O-2地点は、汀に接する丘陵前面に位置し、丘陵からそのまま海へ至る。平安時代後期の地滑りを挟む上下の面で、遺構を多数検出した。地滑り面上では、平安時代末期の製塩炉S K02ほかを検出した。S K02には製塩土器・製塩土器支脚が一括投棄されており、共伴した土器から12世紀中頃のものとして推定された。若狭湾岸における土器製塩の終末時期を示唆する資料として重要である。

地滑り面下では、奈良時代前半のものと思われる大規模な造成面を検出した。造成面は広い範囲で被熱して赤褐色化しており、地床炉と考えられる。酸化面と還元面がブロック状に集積して

いる様子が観察されることから、いくつかの作業単位で焼成作業を繰り返した結果、造成面全面が被熱したものと考えられる。製塩土器を伴うことから、製塩に関する施設と推定される。舞鶴市教育委員会が調査されたQ-1・Q-2地点でも同様の遺構が多数検出されており、製塩の主要施設と推定される。

なお、丘陵斜面には小規模な配石があった。石が被熱して製塩土器を伴うことから製塩炉と考えられる。斜面の遺構は地滑りによってほぼ崩壊しているため全容は明らかでないが、地床炉と同時期のものと考え、製塩における分業の痕跡として注目される。

(田代 弘)

2. O-2地点の地区割について(第16図)

O-2地点では、調査当初に設定されていた地区割では、旧地形に対して著しく斜行することから、遺物の取り上げなどについて不適当と判断された。そこで地形に沿って地区割を改めて設定することにした。地区割は、A-3地点とO-2地点の境に任意に設定された座標点(X=-52,680・Y=-59,540)を原点とし、O-2地点の旧地形の等高線に平行するように、第VI座標系における北に対して東へ39°振った軸線を基準線とした。

地区割は、当初の地区割とは異なり、4mグリッドを基本として設定した。まず、基準軸線をAライン、原点においてAラインに直交するラインをVラインとし、南東に向かって、4mごとにBライン、Cライン、Dラインとした。また、Vラインから北東へ向かってIVライン、IIIライン、南西に向かってVIライン、VIIラインとし、およそ南北30m・東西20mの範囲を区画した。地区名は、基準線に沿って北東方向を向いてグリッドの右下となる交点の名称を地区名とした。

その後、調査の進行にともなって、当初予想したよりも北東側に遺構が広がっていることが明らかになったため、地区割の拡大を行う必要が生じた。O-2地点の地区割では、4mグリッド以上の大地区割りを想定していなかったため、基準となるラインの名称に不足することになったが、Iラインの北東側のラインを25ラインとし、以下、北東に向かって24ライン、23ラインとした。25としたのは、当初の地区割の大区画が100mグリッドであることから、 $100\text{m} \div 4\text{m}$ で25という値が得られるからである。したがって、最終的なO-2地点の調査範囲は、およそ南北44m・東西20mの範囲となった。

3. 土層堆積状況と遺物の出土状況

(1)土層堆積状況(第13図、図版第46・47)

O-2地点は、調査以前に大規模な埋め立てが行われていた。O-2地点の調査は、この埋め立て土を重機で除去し、以下に述べる遺物包含層を検出した。なお、O-2地点は、調査以前に開墾などによって、上層遺構面・下層遺構面、ともに若干の攪乱を受けていた。

O-2地点の堆積状況は、おおよそIIラインを境に北東側と南西側では大きく異なる。

南西側は、埋め立て土を除去すると、遺物を包含した暗茶褐色土(第1層)ないし黒褐色土(第2層)が検出された。暗茶褐色土は、VB・VC・VIC・VII C区の範囲に認められた。暗茶褐色

土を除去すると、土坑S K02をはじめとする製塩炉・土坑などを有するテラス状遺構を検出した(図版第42)。これらは後述する黄褐色土(第3層)上面で検出されており、この付近では黒褐色土(第2層)は確認されなかった。また、攪乱のため層位的な連続性は確認できないが、ⅢE・ⅥEでも暗茶褐色土が確認された。ここでは、製塩土器支脚廃棄層S X01が検出された。

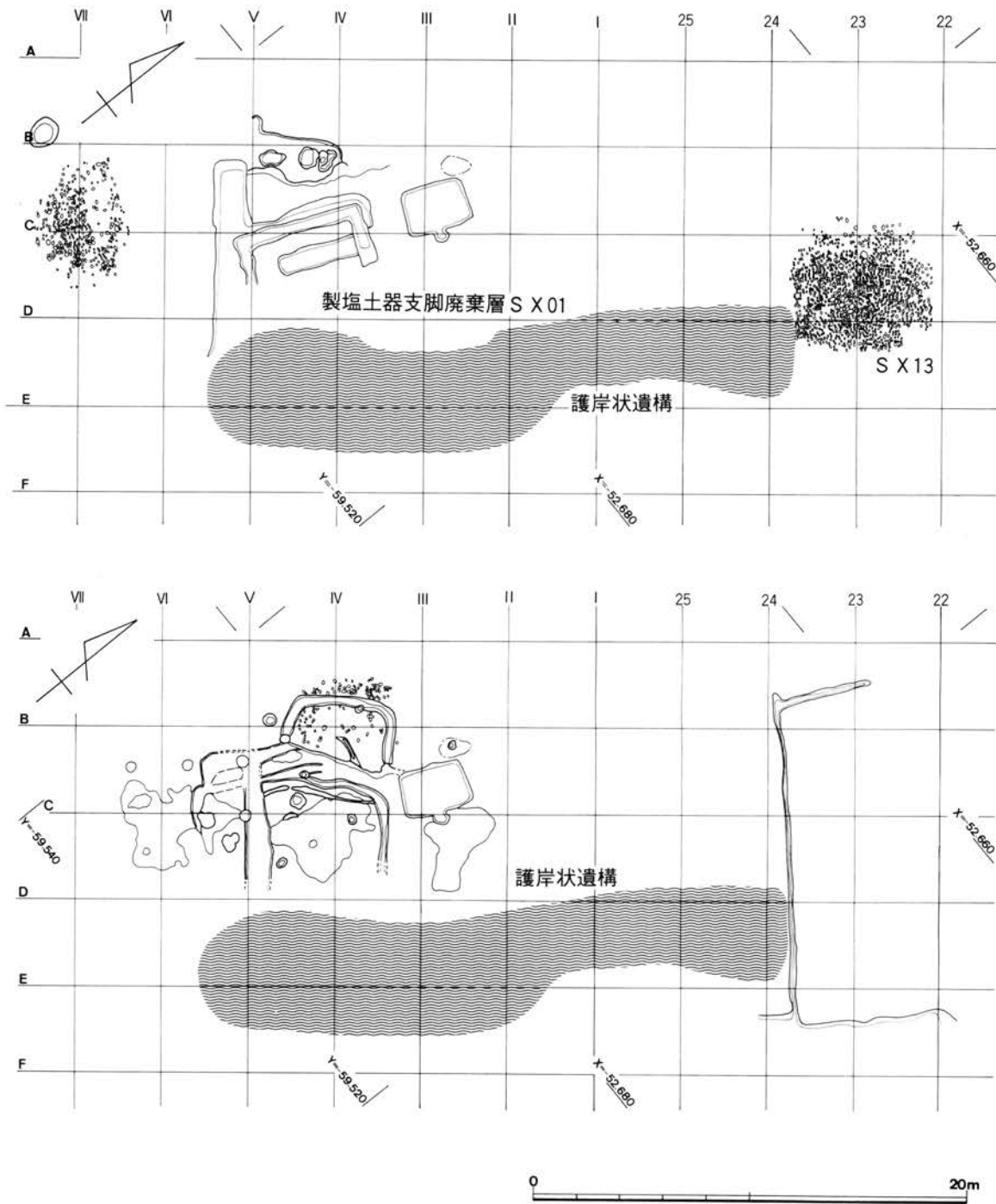
黒褐色土は、暗茶褐色土よりも南側のⅥD・ⅦC・ⅦD・ⅧC・ⅧD区の範囲に認められた。部分的に暗茶褐色土の下層から黒褐色土が検出されたことから、層位的には暗茶褐色土が黒褐色土の上層にあると判断された。黒褐色土を除去すると、黄褐色土(第3層)上で遺構と思われる土坑・石敷き炉・柱穴・溝などが検出された(図版第44)。当初は黄褐色土を地山と考えていたが、重機による断ち割りを行ったところ、黄褐色土の下層で黒色炭層(第4層)と細片化した製塩土器土層が存在することを確認した。黄褐色土は、先述のA-3地点において地滑りによってずれ落ちた土層から連続し、A-3地点で発生した地滑りがO-2地点までおよんだものと考えられる。その範囲はA-3地点の前面に限られ、O-2地点北半部には広がらない。なお、黄褐色土層そのものは無遺物層である。

黄褐色土層を除去すると、Ⅳ～Ⅶライン・A～Dラインに囲まれた範囲に黒色炭層(第4層)が広がっていることを確認した。黒色炭層は、南北16m・東西12mのほぼ矩形の広がりを持ち、炭・灰の廃棄層と製塩土器片の薄い堆積層が互層をなしており、部分的には焼土の広がりも確認できた。厚さは地区によって異なるが、10～20cmを測る。この黒色炭層を除去すると、ほぼ水平な焼土面(最終焼土面、第5層)と、その上方に角礫を配した製塩炉S X11が検出された。また、焼土面上では土坑・溝などとともに鍛冶炉が検出された。面的に広がる焼土面は製塩に伴うものと考えられるが、鍛冶炉は焼土面の中に埋没していたため、焼土面と鍛冶炉の先後関係は明らかでない。

最終焼土面(第5層)を断ち割って下層の状況を確認すると、焼土面が黄褐色ないし茶褐色の整地土(第6層)上に形成されていることが明らかになった。この整地は、ほぼ焼土面1～3と同範囲にわたって行われているようである。この整地は、整地以前の製塩に伴う焼土面が比較的小規模であることから、製塩の規模拡大、あるいは新たに鍛冶を行うために、O-2地点(とくに南半部)に対して大規模な造成を実施して行われたものと考えられる。

整地土層の下層の状況は、地区ごとに異なる。ⅥC・ⅥD・ⅦC・ⅦD区では、整地土層を除去すると礫混じり暗青灰色ないし青灰色粘質土(第7層)が広がる。この上面で掘立柱建物跡S B01を検出した。ⅢD区付近では、最も最下層に礫層があり、焼土面以下礫層までの焼土面と整地土層の互層状況を確認した。これによって、焼土面の形成と整地が繰り返された状況を確認できた。最下層の礫層は南側で確認された礫混じり青灰色粘質土などに対応すると考えられる。

以上から、O-2地点における土層の堆積状況としては、黄褐色土(第3層)を境に、黄褐色土上面の遺構群を上層遺構、黄褐色土の下層の最終焼土面とそれに伴う遺構を下層遺構とする。また、礫混じり青灰色粘質土上面など整地土の下層で検出された掘立柱建物跡や焼土面などを最下層遺構とする。黄褐色土層(第3層)は、A-3地点の項で触れた地滑りによって、下層の遺構



第16図 O-2地点地区割り図 (上:上層検出遺構 下:下層検出遺構)

群・廃棄層(黒色炭層)を一気に埋めてしまったと考えられる。

以上のような複雑な状況を呈する南西側に比べ、北東側では、明茶褐色土の堆積が認められた。これは南西側の暗茶褐色土ないし黒褐色土に対応すると考えられる。明茶褐色土を除去すると、おおむね地山面が露出するような状況で、製塩炉 S X 13などが検出された。

(2) 遺物出土状況

上記の各層からは多量の遺物が出土した。以下、その出土状況について述べる。

暗茶褐色土層(第1層、図版第125・126・128・129) 暗茶褐色土層からは、須恵器蓋 F(1)・

蓋(2～4)・杯C(5～8)・椀B(10)・皿A(11)・皿D(12)・短頸壺(13)、土師器杯B(17)・杯C(15・16・18・19)・杯(20)・甕A(32～34・36・37)・鍋(35・39)、黒色土器椀A(21～24・28・30・31)、瓦器椀、製塩土器(図版第126-1～28)・製塩土器支脚(図版第128-1～図版第129-117)などが出土した。出土した遺物は量的に多くないが、製塩土器・製塩土器支脚にまとまった出土がみられた。製塩土器支脚は、ⅢE・ⅥE区で検出された製塩土器支脚廃棄層SX01から大量に出土した。製塩土器は、ⅢD・ⅣD区でまとまって出土した。周辺部の攪乱のため、SX01に対応するものとは即断できなかったが、厚さが最大で10cmに達する製塩土器片の廃棄層であった。出土した遺物から浦入Ⅷ期に位置づけられる。

黒褐色土層(第2層、図版第130～133) 黒褐色土層からは、須恵器蓋D(4・5)・蓋E(1)・蓋(2・3・6)・杯B(7～9)・杯C(10～19)・椀C(26)・皿D(21・22)・壺(23～25・27)、土師器杯B(33)・杯C(34)・杯D(36～38)・杯(35)、緑釉陶器(29・30・48)、黒色土器椀A(46・47)、瓦器椀(44)、白磁(49・50)、製塩土器(図版第131-1～43)・製塩土器支脚(図版第132-1～図版第132-73)などが出土した。製塩土器は、石敷き炉の周辺に細片化した破片が集中して出土したほかは、顕著なまとまりはみられなかった。また、第2層の下層は地滑りに伴う黄褐色土であるが、ここに地滑り以前に形成されていた遺構群が部分的に残存しており、それらに伴う遺物が、第2層中に混入していた。出土した遺物から、浦入Ⅵ・Ⅶ期に位置づけられる。

黒色炭層(第4層、図版第134～139) 黒色炭層からは、須恵器蓋C(8)・蓋D(14)・蓋E(6・13)蓋(1～5・7・9～11)・杯B(15・16)・杯C(18～36)・椀B(17)・椀(37・38)・皿A(40～42)・高杯(43)・長頸壺(44・45)、土師器杯B(47～49)・杯E(50～52)・甕A(54～56・59)・甕B(57・58)・鍋A(61)・鍋B(60・62・63)、製塩土器(図版第136-1～第137-68)・製塩土器支脚(図版第137-69～72・第138-1～第139-70)などが出土した。黒色炭層には、堆積状況の項でも述べたように、焼土面や製塩土器の廃棄層が確認された。製塩土器の廃棄層は、厚さ数cmほどで、面的な広がりをもったものが複数検出された。土器類や製塩土器支脚は、先の製塩土器片の堆積層や、黒色炭層中からやや散発的に出土した。

出土した土器には、黒色土器や須恵器椀Cなどが含まれないこと、須恵器蓋E・土師器杯Dが認められることからなどから、浦入Ⅴ期に位置づけられよう。

黄褐色整地土層(第6層、図版第141・142) 黄褐色土整地土およびその下層から出土した土器には、須恵器蓋C(4)・蓋(1～3・5・6)・杯C(7～23)・皿A(24)・高杯(25)・長頸壺(27)、土師器杯B(28～30)・杯(31～33)・甕A(34～38)・甕B(39)、製塩土器(図版第142-2～22)などがあるが、量的には非常に少ない。細片が多く時期を決定する要因に乏しいが、N地点やA地点の遺構群に対応する浦入Ⅲ期ないしⅣ期に位置づけられるものとした。

(筒井崇史)

4. 上層検出遺構

(1) 地滑り後に形成された遺構

O-2地点の海浜部に形成された大規模な造成面とこれに伴う遺構群(下層検出遺構)は、丘陵

上部から崩落した地山の黄褐色土によって埋没したため放棄されたと考えられる。この地山崩落は、既述したように不整合面を伴う地滑りによるもので、短時間に大量の土砂を供給している。以下、この崩落土壌を基盤として形成された遺構(上層検出遺構)について述べる。

地滑りによる土砂は、地山と同様の緩傾斜を形成し、そこを造成して土器製塩に関わる製塩炉・土坑などを伴うテラス状遺構が設けられた。緩傾斜面の裾部は、湾岸道路とその後の土地利用などによって大きく破壊されていたが、部分的に大量の製塩土器片・製塩土器支脚が集積していた。テラス状遺構とこれに付随する遺構に対応する遺物群であろう。

これらの埋土は、微細な製塩土器体部破片と炭とが多量に混入する暗茶褐色土(第1層)である。

①テラス状遺構(図版第42) 1基のみ確認した。

V B・V C区で検出した。傾斜地に直交して造成された平坦面で、丘陵前端面と西端が失われている。造成当初の規模は明らかでないが、残存規模は全長約4.5m・幅約2mを測る。

②製塩炉 2基検出した。

製塩炉1(図版第50) V B区で検出した。テラス状遺構の北西辺の一部に重複して形成されている。半円形のくぼみを作り、30cm大の角礫を径0.6mほどの範囲に円形に配置する。礫の一部は被熱による赤変がみられた。

製塩炉2(図版第50) V C・V C区で検出した。製塩炉1の南東に位置する。テラスの中央から末端におよぶ。長軸長約1.5m・短軸長約0.5mを測る。10cm大から人頭大の輝緑岩の角礫で構成される。礫には二次的な被熱を受けたものが多くみられる。

③土坑 3基を検出した。土坑はいずれも素掘りの楕円形土坑である。テラス主軸に直交するもの(土坑S K01・02)と、平行するもの(土坑S K03)とがある。これらの土坑は規模や埋土の状況からみて、一連のものと考えられる。

土坑S K01(図版第43) V C区で検出した。素掘りの不整形な長楕円形土坑である。主軸長1.21m・幅0.65m・深さ0.31mを測り、断面形は「U」字形である。埋土は暗茶褐色土層の一層である。埋土には炭と微細な製塩土器破片が均質に含まれていた。底部には特に被熱したような痕跡は認められない。

土坑S K02(図版第43・127) V C区で検出した。土坑S K01に並列して作られた長楕円形土坑である。主軸長1.02m・幅0.75m・深さ0.47mを測る。断面形は「U」字形である。底部には、角礫が認められた。礫は平坦な面をもつ箱形のもので、平坦面を上にして土坑底面中央を囲むように配置されていた。土坑底面から礫上面にかけて製塩土器の集積がみられた。また、土坑底部と礫の一部に被熱して赤変した部分が認められた。埋土は土坑S K01と同じく、炭と微細な製塩土器破片を均質に含む暗茶褐色土層のほぼ一層で埋没していた。この層からは、多数の製塩土器支脚(19~60)が黒色土器などの土器類(16~18)とともに一括出土した。

土坑S K03(図版第42) V C区で検出した。長軸長1.0m・短軸長0.7m・深さ14cmを測る。断面形は、浅い皿状である。埋土は、土坑S K01・02と同じく微細な製塩土器を含む暗茶褐色土層である。

④製塩土器支脚廃棄層 S X 01 (図版第128・129)

Ⅲ E・Ⅵ E区で検出された。丘陵裾部に位置する製塩土器支脚の廃棄層である。製塩土器支脚の廃棄層については、舞鶴市教育委員会が調査されたQ-1・Q-2地点で多数検出されているが、当調査研究センターの調査区では唯一の検出例である。土坑S K 02から出土した長大な製塩土器支脚と同一形式のものが、大量に集積していた(1~117)。完形に復するものは1点のみで、全て破損して出土した。埋土の中には、微細な製塩土器体部破片が多量に認められ、支脚とともに廃棄された状況をうかがうことができる。また製塩土器支脚などに混じって黒色土器なども出土した(図版第125-23・28・31・35・39)。

(2)石敷き炉(図版第44)

検出状況 O-2地点南西端のⅦ C・Ⅶ D・Ⅷ C・Ⅷ D区で検出した。製塩土器片を多数包含する暗茶褐色土層(第1層)・黒褐色土(第2層)の除去中に検出された。石敷き炉を構成する礫群は、長軸長4.3m・短軸長2.8mの範囲にややまとまりをもつ。また、その周辺部にも小規模なまとまりが認められる。これらの集石を構成する岩石は輝緑岩を主体とし、風化の著しい花崗岩が散在するという状況がみられた。集石のあり方は、雨水などによる土砂の流出や崩壊などの影響がみられ、全体に不安定な様子うかがわれた。したがって、検出当初は、地山に包含された礫が偶発的に集積したものと考えていた。

しかし、精査を進めるにつれて、礫の多くに被熱による赤変が認められたことから、人為的な所産として検討する必要に迫られた。こうした礫がいくつかのブロックを構成しており、原位置を保つ集石が少ないとしても、ある程度、礫群が構成された当時の状況を反映している可能性を考えるに至った。

このような観点で、遊離した礫を除去しながら精査を進めた。礫を包含する土層には、土器類とともに多量の製塩土器・製塩土器支脚が含まれ、それらが礫を覆っていた。遺物は、礫の間に落ち込んでいるもの以外はすべて取り上げた。

礫群と製塩土器支脚の分布状況 礫群は、地山に普遍的にみられる輝緑岩と花崗岩で構成される。礫群中、花崗岩と製塩土器支脚に注目して、色分けして図示した。黒塗りが製塩土器支脚、網目が花崗岩である。本来は、被熱した石材を取り上げるべきであろうが、検出した礫の大半に被熱痕跡を示す赤変が認められ、煩雑になるので省略した。

花崗岩と製塩土器支脚に注目した理由は、礫群内に存在する花崗岩を中心としてブロックが構成されている状況が看取されること、礫群の被熱の原因として土器製塩に伴う焼成、つまりこの礫群が土器製塩炉の一部を構成したものである可能性を考え、支脚と礫群との関連を明らかにする必要があったこと、などである。

まず、花崗岩の特徴についてみる。輝緑岩が大きさ・形状がまばらであるのに対し、花崗岩は板状の大形品が選ばれている。赤みがあり、結晶粒度が大きく、風化の進んだものである。岩盤中に脈状に産出するもので、古期花崗岩といわれるものらしい。松ヶ崎の浜辺や湾内に標石として認められる白色系で、硬質の花崗岩とは一見して識別し得る特徴的な花崗岩である。同種の花

崗岩が湾内に標石として認められるとしても、このように大形ではない。湾外のものであれ、湾内のものであれ、いずれにせよ選択的にこの場所に搬入された石材であることは疑いない。花崗岩は2次的な被熱により、いずれも著しく劣化していた。

石敷き炉を構成する礫群の検出状況を俯瞰すると、いくつかの礫群がブロックをなして分布していることがわかる。このブロックと花崗岩の位置を分布をみると、全くの一致はみないながらも、分布状況に一定の関連をうかがうことができる。花崗岩が搬入石材であることを重視すれば、その分布状況に計画性をみてとることができるであろう。礫群が製塩炉である可能性を示すひとつの状況証拠と言えるのではないだろうか。

次に、製塩土器支脚と礫群の関連である。礫群は多量の製塩土器を含む土層で埋没しており、礫群検出時に多量の製塩土器が出土した。これらの多くは、礫群の埋没過程、あるいは埋没後に集積したものと考えられる。これに対して礫間に圧着、あるいは礫群中に埋没している製塩土器・製塩土器支脚は礫群形成以前、あるいは礫群に直接関連するものと考えることができよう。

(3) 製塩炉 S X 13 (図版第41)

O-2 地点の北東端の23D・23E・24D・24E区で検出した。ここには東西に延びる丘陵があり、その南東裾部で広範囲にわたって石敷き炉を構成すると思われる礫群を検出した。

この付近は畑地の造成に伴う土砂によって埋め立てられていた。土砂を除去すると、旧表土層である腐植土があり、その下層に明茶褐色土が堆積していた。その直下で炭・灰層を伴う上記の礫群を検出した。明茶褐色土層は、上述の製塩炉跡と推定されるS K 01・02の埋土と同一のものと判断される。S K 01・02に伴う遺物の年代は平安時代後期末頃と推定されるので、明茶褐色土層はこれ以降に堆積したものと考えられる。礫群は、S K 01・02で使用したと考えられる大量の製塩土器と明茶褐色土層に覆われているので、平安時代後期末頃を下限として形成されたと考えられる。礫群の形成時期は決定的な資料がないので不明である。

礫群は、丘陵裾部から海岸まで及んでいた。礫群には、炭・灰・製塩土器片が伴い、2次的な被熱によるとみられる赤変が認められた。礫は、輝緑岩の角礫を主体とし、花崗岩が散発的に認められた。輝緑岩は、地山に包含されたものが洗い出されて自然分布したものが大半である。この中に、人頭大の大形の礫が集中し、被熱の著しい場所があった。この礫群をS X 13と名付け、慎重に精査した。

図版第41は、S X 13を中心に周辺の礫群をやや広めに図示したものである。この図にもとづいて、遺構の状況を説明する。

断面図をみると、礫群は北西から南東へむかう緩傾斜地に、地形に沿って分布していることがわかる。拳大の角礫を主体とし、大形の角礫が部分的に分布している。S X 13は、この礫群の上に設けられていた。人頭大の板状ないし角柱状の輝緑岩角礫が長軸長1.4m・短軸長1.0mの範囲に密集し、約15cmの高まりをなしていた。一見乱雑に配置されているが、上面が水平をなし、詳細にみると礫の主軸が求心的に配置されていることが観察される。自然分布する礫の主軸は、傾斜面の主軸に対して直交する傾向がみられるが、この礫群は主軸が求心的であり、人為的に配置

されたものである可能性を強く示している。

礫の上面には被熱による赤変がみられ、礫の間に、炭や微細な製塩土器が多数みられたことから、土器製塩作業工程で用いられた石敷き炉跡と判断した。

S X13に伴う遺物は微細な製塩土器のみであり(図版第126-29~46)、形成時期は不明である。周辺から製塩土器支脚をはじめ須恵器・土師器などが出土しているが年代を決定づけるに至らない(図版第123・124)。注目すべき遺物としては、吉見浜式製塩土器がある(図版第126-43~46)。S X13付近で口縁部・体部破片が散発的に出土しており、遺構との関連が注目される。

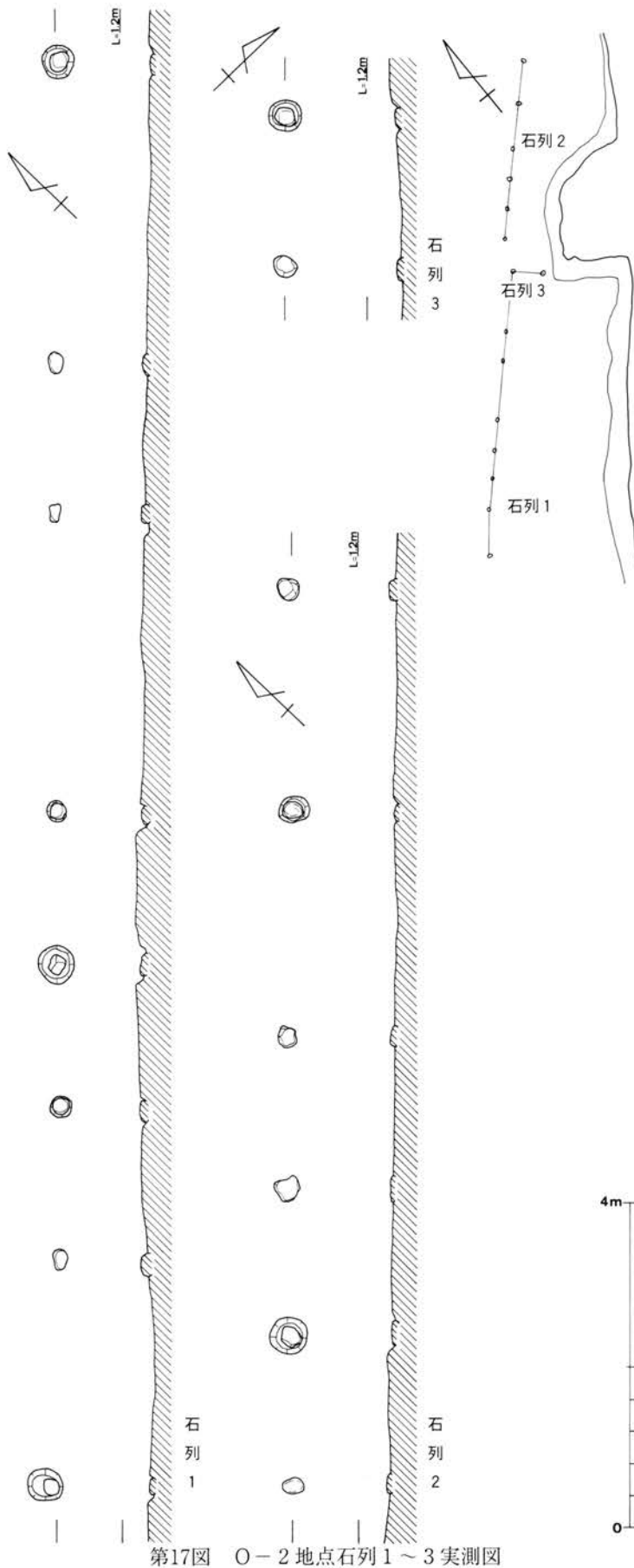
(4) 護岸状遺構

製塩土器支脚廃棄層S X01の南東側は、ゆるやかに傾斜している。この傾斜面とその付近には拳大の礫が多数分布している。この場所は、丘陵が海へと没入する地点、かつての汀線にあたるところである。礫は、丘陵から落下あるいは漂着による自然分布とも考えられるが、II E・III E・VI E・V E区では拳大の礫が地面に整然と圧着する様子が観察され、人工的に配置された可能性が考えられた。平坦面造成の際に生じた礫や、その後に流出した砂礫で海岸を埋め立てた結果、こうした礫面が生じたと考えられるのである。礫面を良好な状態で検出し得たのはこの部分だけであったが、海岸に沿って広い範囲に分布するものと予想される。対岸のQ地点では海岸部で類似遺構とともに護岸施設ともいべき礫の集積が見つかっており、湾岸の開発、埋め立てがいかに大規模なものであったかを示唆している。浦入湾岸は局所的にみられる湾入を除くとおおむねリアス式の海岸であり、着岸しにくい場所が多い。礫面や護岸状の集積は、こうした海岸線に新たな着岸地点を増設する結果をもたらしている。仮に意図せずに構築されたものであったとしても、船着き場や荷おろしの場などの重要な空間として機能したと推察される。

(5) 石列(第17図)

標高1 m前後の所で石列を検出した。上記の護岸状遺構に重複して検出され、海岸汀線から数mの所にある。等高線・汀線にはほぼ平行して分布し、一部がこれに直交して配置されている。礫は、板状を呈し、水平に設置されていた。設置状況からみて柱を持つ構造物の根石あるいは礎石として設置されたと考えられる。

石列を構成する石は、白色系の花崗岩である。厚みや形状が良く似た人頭大の円礫で、いずれも良く水磨されている。暗緑色系の輝緑岩の各礫面上に設置されているので、際だった存在である。浦入湾岸は輝緑岩の分布地域であり、このような花崗岩の円礫をみることはできない。浦入遺跡の北に峠を越えた瀬崎地区の海岸-白石浜-には、同様の花崗岩で海岸が構成されており、この方面から搬入されたと考えられる。石列は、汀線に平行して直線的に配置されているが、南側と北側では少しずれていて一直線とはならず、2つの石列から構成されていると考えられる。南側を石列1、北側を石列2と呼ぶ。ともに主軸はN46°Eで、一致する。石と石の間は若干のばらつきはみられるが、約0.9mの等間、もしくはその倍数で分布している。ただし、石列2の北端3石の間隔は約1.4mとやや広い。両者が結節する地点に、石列1・2に直交する石列(これを石列3と呼ぶ)が配置されていた。石列3は2石からなり、南東端は汀から2 m前後、標高9



mとやや低い位置にある。調査区との関係でこれ以上調査することはできなかったが、さらに汀へのびる可能性はある。

石列が同一の構造物に伴うものなのか、それぞれ時期を異にするものなのかについては、検出状況からは明らかでない。しかし、利用石材の共通性や配置状況は、相互に深く関連するものであり、同時性の高いことを示唆している。これらが同時期に存在したものと仮定すると、石列1・2は連続する柵・塀であり、石列3は海側からの出入り口に該当する施設が存在した可能性を考えることができるだろう。出口は海に面し、前項で説明した礫面がある。この場所が荷揚げや荷おろし船着き場として利用されたことは十分に考えられるので、海岸施設と連続した柵・塀であったと判断される。石列がそれぞれ個別に存在したとは考えにくく、ここでは同時存在した一連の遺構と推定しておきたい。

石列の形成時期は、時期を決定づける資料がなく不明である。遺構は12世紀半ばから後半にかけての土器類を共伴する製塩土器廃棄層S X01によって埋没している。この土層は上述するように、時期が限定できる良好な遺物包含層であるから、石

列はこれ以前の遺構であると判断することができる。O-2地点は土器製塩・鍛冶など、奈良・平安時代の生産関連遺構が集中するところであり、当該遺構はこうした生産関連施設の一部を構成する施設と推測される。

(田代 弘)

5. 下層検出遺構

(1) 製塩関連遺構

焼土面1 (図版第46) VIC・VID・VIC・VID区で検出した。焼土は、不整形な広がりを示し、長軸長5.4m・短軸長4.1mを測る。焼土は数cmの厚さを測る。焼土面1は整地土層(黄褐色土、第6層)の上面に形成される。焼土面1をめぐる溝は認められなかったが、焼土面の北辺に接して検出されたSD06が焼土面1の区画溝である可能性がある。また、焼土面1に重複して溝SD03が検出されたが、これは北側に位置する焼土面2からのびてきており、検出状況から焼土面1よりも後出すると考えられる。また、焼土面1の北東辺には、土坑SK08・09がある。

溝SD06 (図版第46・140・144) VC・VD区で検出した。焼土面1と焼土面2の間を区画するように丘陵の上方から海岸に向かって掘削された溝である。検出長5.6m・幅0.8~1.2m・深さ0.1mを測る。SD06の北西半は、SD03・05と重複関係が認められるが、重機断ち割り部分と重複したため、両者の切り合い関係はを明らかにできなかった。

出土した遺物は、溝SD05に属するものが含まれるかもしれないが、須恵器蓋(5・6)・杯B(11)・杯C(7~10)、土師器杯A(14)・杯C(13)・皿(12)・鍋A(15)・甕A(16~18)、製塩土器(30~34)などがある。また、SD06の検出中に製塩土器支脚(図版第137-72)が出土した。出土した遺物から浦入IV期ないしV期に位置づけられよう。

土坑SK08 (図版第50・第140・143) VID区で検出した。焼土面1と重複して検出された。長軸長0.85m・短軸長0.6m・深さ15cmを測る不整形な土坑である。土坑内からは10~20cm大の礫が多数出土した。いずれも熱を受けて赤く変色していた。出土遺物はなかったが、遺構の状況から製塩炉と考えられる。

土坑SK09 (図版第50・第140・143) VID区で検出した。焼土面1に接して検出された。長軸長0.85m・短軸0.8m・深さ6~10cmを測るが、検出状況から2基の土坑が切り合っている可能性が高い。土坑SK08と同様、熱を受けて赤く変色した10cm大の礫が多数出土した。出土遺物として、土師器杯B(3)・甕A(4)、製塩土器・製塩土器支脚(1~3)などがある。遺構の状況や遺物の出土状況から製塩炉と考えられる。

焼土面2 (図版第47) VIC・IVD・VC・VD区で検出した。焼土面1と同様に焼土面の遺存状況は良好とは言えず、不整形な広がりを示し、長軸長4.8m・短軸長4.2mを測る。焼土面は数cmの厚さを測る。焼土面2の区画溝としてSD03があるが、南辺については、SD03とも、SD06とも解釈できる。焼土面2の上には、柱穴や土坑SK07などが検出されたほか、焼土面の下層からも溝SD07などが検出された。

焼土面2の丘陵上位側には、製塩炉SX11・区画溝SD01などがある。SX11・SD01および

S D01によって区画された平坦面と焼土面2との間には約0.3mの段差がある。また、この段差とS D03の間でも、小規模な焼土の広がりを検出した(S X12・S X14・S X15)。いずれも細片化した製塩土器や製塩土器支脚が焼土周辺から出土した(図版第144-40~44・47~51・53・54)。

区画溝S D03(図版第47・140・143) VII C・IV D・V C・VI C区で検出した。総延長12.2m・幅0.4~0.6m・深さ10cm前後を測る。焼土面2を「コ」字形にめぐり、区画溝と考えられる。

出土した遺物として、須恵器杯(19)・土師器杯(20)・甕(21)・鍋B(22)・製塩土器(12~24)・製塩土器支脚(25~29)などがある。製塩土器には厚手平底のものの底部片(20~24)が含まれる。

溝S D05(図版第47・140・143) V C・VI C区で検出したS X11・S D01の南端に接し、南西方向にのびた後「L」字形に屈曲する。重機断ち割りとは重複するため不明瞭な点が多い。区画溝S D03や溝S D06と重複する付近を中心に、製塩土器・製塩土器支脚などが出土した(4~11)。溝の南西端は、S D03につながる。

製塩炉S X11・区画溝S D01(図版第49・140・144) IV B・VII C・V C・VI C区で検出した。10~20cm大の角礫を長辺2.5m・短辺0.6~0.7mの範囲にやや無造作に配したものである。多くの礫は熱を受けて赤く変色しており、礫と礫の間からは多量の製塩土器片が出土したことから、製塩炉と判断した。

S X11の前面には「コ」字形にめぐる溝S D01があり、その内部に平坦面がみられる。平坦面上には小規模な柱穴状の遺構や溝などが検出されたが、この平坦面には焼土面1~3のような焼土は全く認められなかった。S D01内と平坦面の上面には、S X11から廃棄された製塩土器片と炭の堆積層が交互に堆積していた。S X11の出土遺物としては、多量の製塩土器片があるが、微細な破片のため図示していない。

S D01は、総延長8.3m・幅0.5m・深さ0.1m前後を測る。S D01の出土遺物としては、土師器杯(23)、製塩土器・製塩土器支脚(36~39)。これらは、おもにS D01の北東半で出土した。S D01およびS X11の南西半はやや削平されていた。

焼土面3(図版第48・141) II D区で検出した。焼土面の遺存状況は焼土面1・2よりも悪く、長軸長3.7m・短軸長3.2mが遺存していたに過ぎない。区画溝なども認められない。焼土面2を区画するS D03の北側に位置することから、焼土面2と区別される。明らかに焼土面3に伴うと思われる遺物はない。

焼土面3の下層を断ち割って、下層に3面前後の焼土面を確認した。これらの詳細な調査は行えなかったが、調査を実施した焼土面1~3に先行して営まれた、製塩に伴う焼土面と考えられる。

なお、焼土面3下層断ち割り出土遺物として、須恵器蓋(6)・杯C(13・14)・高杯(25)・土師器甕(34)などがある。

(筒井崇史)

(2) 鍛冶関連遺構(図版第51・52・145・146)

鍛冶関連遺構として鍛冶炉を14基検出した。層位的には上述の焼土面1~3とはほぼ同一面である。検出された鍛冶炉の遺存状況は良好ではない。14基のうち7基(鍛冶炉1・3・5~7・

13・14)については炉底を構成する青灰色硬化層が確認できたが、他のものは青灰色硬化層が削平・流失しており、円形の赤色土のみが残存していた。14基のうち10基については埋土、あるいは周辺の土を洗浄して鍛造剥片を検出しており、鍛冶炉と認定できた。他の4基については、周辺から鉄滓・鞆の羽口の破片が出土したことや、円形焼土という形態から、鍛冶炉と推定した。

鍛冶関連遺物としては、鞆の羽口・鉄滓・鍛造剥片などが出土した。鉄滓については、調査時や製塩土器片を土ごと取り上げて洗浄したものの中に多数含まれていたが、大きなものはなく、小片ばかりであった。鍛造剥片等の微細遺物の取り上げ方法などについては、第3章第10節で述べる。

また、鍛冶炉に関連する建物跡などは明確にできなかった。

鍛冶炉1 長径24cm・短径15cmを測り、浅い窪みをもつ。赤色土は部分的にしか見られない。断面観察から浅い掘り込みを行い、粘土を貼り付けて構築されていることがわかる。

鍛冶炉3 長径30cm・短径23cmを測り、浅い窪みをもつ。遺存状況は良好で、平面形は不整円形を呈する。炉外周には一部土手状に盛り上がった部分が確認でき、残存した炉壁の可能性がある。赤色土は2か所でとぎれている。遺構が保存されるため断面観察は行わなかった。

鍛冶炉5 長径29cm・短径18cmを測り、浅い窪みをもつ。遺存状況は良好で、平面形は不整円形を呈する。炉底には鉄滓が遺存していたが、非常にもろく取り上げの際に崩壊してしまった。赤色土は1か所でとぎれ、炉に連結する溝状のものであることが確認できた。鞆の羽口の設置に伴うものと推定される。断面の観察は行わなかった。

鍛冶炉6 長径23cm・短径14cmを測り、浅い窪みをもつ。図示した礫は炉に関わるものではないと考えられる。

鍛冶炉7 長径13cm・短径6cmを測る。大部分が削平・流失したと考えられる。

鍛冶炉14 長径20cm・短径11cmを測る。土層確認のための断ち割りによって、半分ほどが破壊されている。断面観察から浅い掘り込みを行った後、粘土を貼り付けて構築されたことがわかる。

(水野聡哉)

6. 最下層検出遺構

下層遺構群の大部分は、整地されていた後に形成されていた。黄褐色土の整地土(第6層)を除去すると青灰色礫混じり粘土などが確認され、その上面で掘立柱建物跡SB01を検出した。青灰色礫混じり粘土の上面で検出できた遺構はSB01のみである。また、焼土面3で確認した下層焼土面については、面的な広がりなどを調査するには至らなかったが、検出した層位などからSB01はこれら焼土面に関連する施設と考えられる。

掘立柱建物跡SB01(図版第53・140・142) VIC・VID・VIC区で検出した。焼土面下層の整地土層(第6層)を除去し、第7層とした暗青灰色粘土ないし青灰色粘質土層の上面で検出された。検出した柱穴は4基(P1～4)で、そのうち3基に柱材が遺存していた。建物跡は、ほぼ地形に対して平行しており、桁行き2間分(5.2m)・梁間1間分(2.4m)を検出した。柱穴は一辺40～50cmを測る隅丸方形で、深さは60cm前後を測る。柱間寸法は、2.4～2.6mを測る。

出土遺物としては、遺存していた柱材のほか(図版第150)、柱穴からは少量ながら土師器甕A(図版第140-1・2)、製塩土器支脚(図版第142-1)などがある。遺物は細片のため時期を決定するほどのものではないが、整地土層を除去して検出できた点から、浦入Ⅲ～Ⅳ期に位置づけられる。

(筒井崇史)

第7節 R地点の調査

1. 調査経過

R地点は、M地点(嶋遺跡)の立地する砂嘴の付け根部分に位置し、南は外海、東は内海に面する。調査時には宅地に改変されていたが、かつては小さな入江があった。嶋遺跡(M地点)の形成と砂嘴の成り立ちを検討する上でも重要な地点である。

R地点は、舞鶴市教育委員会によって平成9年度に試掘調査が実施された。試掘調査の結果、製塩遺構あるいは弥生時代の遺構は検出されなかったが、表土下約20cmという浅い場所で縄文時代中期の遺物包含層を検出した。舞鶴市教育委員会はこの試掘成果を踏まえて、当調査研究センターにR地点の発掘調査を依頼された。

発掘調査は、試掘調査の結果を踏まえて、遺物包含層の広がりや遺構の検出に努めた。また、砂嘴の形成を明らかにするため、一部遺物包含層の下層まで掘削して調査を行った。試掘調査で検出した遺物包含層は、ある程度認められたが、その範囲を確定することはできなかった。縄文時代中期の遺物包含層の検出の後、部分的にその下層の海成砂層を掘り下げたところ、砂嘴を形成する基盤層(黄褐色礫層)の直上で丸木舟を検出した。この砂層は厚さ約1.5mにわたって堆積した海成砂で、ここから縄文時代前期後半の土器が少量出土した。

以上のような考古学的検討を行いつつ、写真撮影・実測などの記録作業を行った。丸木舟については、年代と埋没要因を検討する目的で、放射性炭素年代測定法による年代測定を行った。丸木舟の検出状況に主眼をおいて報告する。

2. 土層の堆積状況(図版第56)

トレンチ上面の標高は1.3mを測り、最終の重機掘削では標高-4mまで掘削して基盤層を追いかけた。その結果、トレンチ西端から13m東の地点まで洪積層再堆積物からなる基盤層を検出した。

試掘調査で検出した縄文時代の遺物包含層は、発掘調査の結果、縄文時代中期の土器を主体とするものであった(暗茶褐色粘質土)。標高0～0.8mにかけて、厚さ10～30cmで堆積しており、トレンチ西半分では陸化した土壌であるが、トレンチ東半分では波打ち際の湿地化した状況を呈する。この層は下層の海成の青灰色砂層が土壌化したもので、含まれていた炭化物の放射性炭素年代測定結果は約4000年前を示している。

遺物包含層の下層には、青灰色の海成砂が1m以上堆積しており、一部ラミナ化した砂層や生息した貝が吹き出した痕跡も認められた。青灰色砂層は幾層にも分かれて、無遺物層である洪積

層再堆積物に至るまで続いていた。洪積層再堆積物は、丘陵を構成する洪積面に沿って急傾斜をなしており、海成砂層はこの傾斜面を埋めるようにして堆積していた。この海成砂層は約4000年前～約5000年前の年代を示し、少量であるが縄文時代前期の土器が出土した。無遺物層である洪積層再堆積物まで掘り下げる過程で、標高0.5m付近で、丸木舟を検出した。

29層に黒灰色砂土がみられる。この層はその上面の均質な海成砂とは異なって、植物質を多く含んでいた。陸地で形成された土壌を多く含む層で、陸地化していた時期に堆積した可能性が高い。このように、R地点の土層断面の観察によると、29層の堆積した時期には標高-0.5m以下まで陸地化していたが、縄文時代前期後半には海面が標高0.5m以上まで上昇し、さらに縄文時代中期には標高0m付近が海面であったと推測することができる。縄文時代の海進・海退の状況を示す土層として重要である。土層の堆積環境・年代などについては、付論を参照されたい。

3. 丸木舟の検出状況(図版第55)

丸木舟は、洪積層再堆積物のほぼ直上に位置し、青灰色砂層に埋もれた状態で出土した。検出高は標高0.5mである。砂層を除去し、丸木舟を露出させたところ、当時の海岸線が現われた。丸木舟が利用されていた当時の浜にはあまり砂の堆積がなく、陸上から供給された拳大から人頭大の角礫を主体とする。丸木舟の主軸は汀線の主軸に一致している。丸木舟より低い位置に杭跡とみられる腐蝕痕跡があったので精査したところ、端部を抉った杭を検出した。海中あるいは水際に杭を打ち込んで構造物を設けていたようである。礎石とみられる石も出土しており、この付近に栈橋状の施設があったとみられる。杭・礎石は丸木舟よりやや新しいものであるが、海成砂層である青灰色砂層中の遺物であり、縄文時代中期以前のものであることは確かである。丸木舟は一見すると不要となって廃棄されたものが海岸に漂着したような検出状況を示すが、後出するものとはいえ、このような杭や礎石が存在する点から、検出地点は船着き場としての機能を有する場所であったと考えることができよう。

4. 丸木舟の形状と年代(図版第57)

出土した丸木舟は、船体の半分ほどが遺存していた。全形は明らかでないが鯉節形とみられる。遺存部分は幅が広く、船首から船体の半ばにかけての部分であろう。船首とみられる船端部は、上端が厚く作られている。残存長は約5mである。船底の厚みは約7cmである。最大幅は現状で約1mである。丸木舟の幅は約60cm内外の例が多いが、本例は船幅が土圧による変形を受けた状態で計測しているために、やや大きめの値を示していると思われる。使用木材はスギである。表面はていねいな調整が行われ、所々に製作痕跡とみられる焦げ目のあるくぼみが認められた。丸木舟の製作にあたっては、磨製石斧などで成形する際に木材を柔らかくし、加工しやすいようにすることや、防水性を高めるため船体表面を綿密に整えることを目的として、松明などで木材を焦がしながら作業を進めたと推定されているが、焦げ目はその作業を示す痕跡であろう。

船体の一部を放射性炭素年代測定の試料とし、5260±90 B. P. 年の年代を得た。丸木舟の出土

層位に該当する青灰色砂層下層からは、北白川Ⅱ a式の粗製深鉢の出土をみており、縄文時代前期中頃に位置づけうるものである。^(註10)

5. 丸木舟下層検出の種実貯蔵土坑

(1) 種実貯蔵土坑の検出状況と層位

① 検出状況 丸木舟は、発掘調査後に科学的保存処理を施して恒久保存することになった。平成10年2月9日に舞鶴市教育委員会と当調査研究センターの立ち会いのもとに、保存処理の委託先である(財)元興寺文化財研究所が取り上げ作業を実施した。木組みをして発泡ウレタンによる固化処理を施し、固化した段階で重機を用いて切り取り・取り上げ作業を行った。取り上げの際には丸木舟の下層を大きく掘削した。種実貯蔵土坑は、この掘削の最中に検出したものである。重機でウレタン塊を釣り下げたときに、多数の種実が付着していることに気づき、掘削によって生じた掘り形の断面を精査した。その結果、黒色化した種実が集積した土坑を確認した。

土坑は、掘削により半分が壊れており、掘形で断面を検出するにとどまった。上面幅約60cm・深さ20cmを測り、断面は「U」字形の土坑である。土坑埋土は土砂を除くと、ほぼ種実で満たされており、一見して人為的な遺構であることが推察できた。まもなく壁面が崩壊し、遺構が埋没したため、土砂埋土の堆積状況など詳細な検討はできなかった。

② 検出層位 検出層位は、略断面図に示すように、丸木舟の検出層位である黄灰色砂層の下層に位置する黄色砂礫層である。土坑は、黄色砂礫層上面から掘り込まれ、黄灰色砂層に封じられていた。黄灰色砂は海水が現在より水面が高水準にあった時期に堆積したと推定される海成堆積物であり、黄色砂礫層はその基盤をなすものである。黄色砂礫層は洪積層の再堆積層であり、検出時点で海成堆積物が及ぶ以前に形成された土層とみてよい。

(2) 種実貯蔵土坑の種子構成と年代

遺構の年代や性格を明らかにする目的で、(株)古環境研究所に種実の種子同定と放射性炭素年代測定を依頼した。分析方法・結果についての詳細は巻末に付したので、以下に結論のみを記す。

① 種子構成 土坑断面から採取したサンプルのうち1kgについて洗浄した結果、159gのドングリが回収された。ドングリは、完形の個体を主体とし、成熟した種子に限られている。種類は、ブナ科コナラ属の一種類である。種の特定には至らなかったが、種子形状からアカガシ亜属の可能性がもっとも高いと推定された。これは灰汁抜き処理を施すことにより食料として利用可能な堅果類であり、選択的に採取された人為的集積物である可能性が高い。

② 年代 放射性炭素年代測定法による推定年代は、5380±70 B. P. 年、暦年代はB. C. 4240年であった。縄文時代前期に形成された遺構と考えることができる。丸木舟の放射性炭素年代測定値は、5260±90 B. P. 年、暦年代はB. C. 4055年である。本資料は、推定暦年代で丸木舟より約185年以前のものであることが明らかとなった。

(田代 弘)

第3章 出土遺物

第1節 M地点の遺物

M地点では、縄文時代中期から近世にかけての遺物が多数出土したが、すべて包含層から出土したもので、遺構に伴うなどの原位置を保つものはない。細片に限られるなど資料的制約はあるが、舞鶴湾口に形成された砂嘴における人々の活動時期を示す資料として重要である。

遺物には、土器類と石器類がある。土器類には、縄文土器・弥生土器・土師器・陶磁器などがある。石器類には打製石器として削器・石錐・楔形石器があり、剥片類が少量みられる。磨製石器として大型蛤刃石斧・扁平片刃石斧などがある。

(田代 弘)

1. 縄文土器(図版第58)

M地点では、縄文時代後期と晩期の土器を中心に26点を図示した。

1は中津式に相当する口縁部片である。2・4・5は3～4mmの沈線で文様が描かれる。2は内外面ともに細密な条痕のような調整が確認できる。5は沈線を多重に施す口縁部片である。3は一乗寺K式に比定される。

縄文時代晩期に属する土器は、突帯文土器を中心に20点ほどある。図示した土器は、いずれも口縁部片である。6・7は口縁部が外反する器形を呈し、口縁端部には6～7mmの間隔で刻みを施す。6の内面は工具による撫でが確認できる。篠原式に位置づけられるか。8は口縁に接して口縁端部に接するように上下から撫でられている突帯を貼り付けて、突帯状に「D」字形の刻みを施す。外面調整は、左斜め方向に行った様子が確認できる。内面調整は、粗く粘土継ぎの痕跡が顕著に確認できる。9は色調が他の突帯文土器とは、やや異なり煉瓦色を呈する。口縁端部には、8と同様に「D」字形の刻みを施す。なお、刻みの幅は8・9ともに6mmを測る。10は上端を強く撫でる突帯を貼り付け、突帯下端に「D」字形の刻みを施す。11は突帯下端に若干突帯下の器面にはみ出して「D」字形の刻みを施すが、施文方向が他の「D」字のものと異なり逆「D」字形となる。また、刻みと刻みの間隔が非常に狭く、押し引き施文に近い。12は胎土が非常に砂っぽい土器で、器壁は8mm前後と他の突帯文土器に比べると厚手である。突帯は非常に乱雑に貼り付けられており、わずか9cm程度の残存長の土器片であるが、左端と右端とで突帯の幅が7～8mm違う。その粗いつくりの突帯に円形の刺突を施文する。円形の刺突は径5mmを測り、上部に木口のような痕跡を残す。13は上端を撫でるタイプの突帯を口縁端部に接するように貼り付け、突帯の下端に一部器面にまではみ出すように円形の刺突を施す。14は1.5cmほどの幅広の突帯を貼り付ける。突帯は上端を強く撫でるもので、突帯上には円形の刺突を施すが、13のように刺突は器面にまではみ出さずに突帯上でおさまる。15は他の突帯文土器に比して白色がかかる。器厚も4～5mmと他と比べて薄い。口縁端部に接するようにきわめて薄い突帯を貼り付け、突帯のほぼ

中央部に円形の刺突を施す。また、突帯の下端と器面を同時に撫でている様子や内面の指押さへの痕跡が確認できる。16は突帯貼り付け時に口縁端部内面を摘んでおり、その際の指押さへの痕跡が明瞭に残る。突帯下端には「C」字形の刺突が施される。17は他の突帯文土器に比べて焼成が良く、しっかりとしている。半円形を呈する突帯に「D」字形の刻みを施す。18・19は半円形を呈する突帯を口縁端部に接するように貼り付けて、その上に「V」字形の刻みを施す。20～23は極めて薄い突帯を口縁端部に貼り付けるもので、突帯上に刻みなどの施文を行わない。22・23は器形が他と異なり、口縁部は外反しない。また、22は口縁端部に面をもつ。24～26は晩期の突帯文土器かどうか明言できない。24は非常に薄い突帯に径3mm程度の円形刺突を上下段でずれるように施文する。25は1.5cm前後の幅広突帯下半に二段にやや不規則に刺突を施す。工具が完全な円形でないため、逆「C」字形を呈する。26は、口縁端部に接する突帯に円形刺突を施し、その下方に波状に突帯を貼り付け、突帯上に円形の刺突を施す。

(和泉大樹)

2. 弥生土器

M地点出土の弥生土器はいずれも、包含層などの資料で遺構に伴う一括資料はない。以下各時期ごとに概観する。

a. 弥生時代前期の遺物(図版第59-27～35・図版第60-60～73)

前期に属する土器には、壺・鉢・甕・蓋がある。壺は口縁部が発達していない27・28や、やや長く外反する29がある。いずれも口縁端面は丸くおさめ、加飾を持たない。ヘラ描沈線文は残存している限りでは3条をこえるものはなく、未だ多条化していない段階のものである。また、口頸部に段や削出突帯を持つものはなく、頸体部の削出突帯も沈線の片端をケズリ落としたものとして30・61がある。体部に羽状文をもつ61もあるが、施文工具は貝殻腹縁ではなく、ハケ状の工具である。頸体部に突帯をめぐらせる62～66も出土しているが、これも多条化はしておらず、突帯上にきわめて細かい刻目を施すのが特徴である。

鉢は如意状口縁のものとして31・67・68があり、口縁部はゆるやかに外反し、端部は丸くおさめ、やはり刻目を持たないものである。口縁部がより直線的に広がる31には施文がない。

甕はいずれも如意状口縁のもので、口縁端部に刻目を施さないものが多い(69～72)。体部に施されたヘラ描沈線文は1～3条で、多条化していない。また、無文のものもこの調査区では出土していない。

蓋は壺用のもの(32)と甕用のもの(33)がある。32は磨滅が著しく、調整等から時期を決定することができないが、胎土などから前期に属するものと判断した。33は、口縁内面の口唇部に帯状の煤痕跡が認められる。

これらの資料は、ヘラ描沈線文が多条化しておらず、壺の口縁端面への加飾や、体部の無文化も認められないことなどから前期中段階併行の資料であると考えられる。特に突帯の存在や、特殊文様、赤彩などが認められないことから、中段階でもより新段階に近い時期の資料であると位置づけられる。

b. 弥生時代中期の遺物(図版第59-36~53・図版第60-74~82)

中期に属する土器は壺・鉢・高杯・甕がある。壺は口縁部が長く外方向にのびる36~40が主体で、口縁部もやや下方へ拡張する傾向が認められるが、未だ顕著ではない。口縁部が短く外反する41もあるが、当地域では決して多くない。端面にはハケ状工具による列点文(36)や斜格子文(37)、円形浮文(38)と羽状の刻みをもつもの(41)があるが、凹線文は採用されていない。40のように全く無文のものもあるが、この個体については色調や胎土から搬入品の可能性が高い。

口縁内面に2条の突帯をもつ36は突帯の間に2個一対の紐孔が穿孔されている。この壺は内側の突帯から口縁部にかけて煤の痕跡が認められ、壺でありながら煮沸にも用いられている。出土した壺の体部施文はいずれも櫛描文で、直線文・波状文(76・77)・斜格子文(74・75)がある。このうち櫛描原体の幅が狭く、条数が6条と少ない77は、特に施文が稚拙であり、当地域のものではない可能性がある。頸部には三角形の突帯をめぐらせる36・78・79と、指づくね突帯をめぐらせる80・81がある。前者には縦方向に棒状浮文がつく37・78も認められる。

無頸壺は、口縁端部を折り返して肥厚させる42と、口縁部を丸くおさめる43がある。44は口縁端部に三角形の突帯を貼り付ける無頸壺で、台付になる可能性がある。このうち外面部にハケ状工具で羽状の刻みを施す42の胎土については雲母が含まれず、チャートをわずかに含むことなどから、この遺跡で出土する多数派の胎土とも異なる。こうした口縁端部外面の施文方法はこの地域では少数派で、同様の文様構成をもつ41の壺とともに、搬入品の可能性が高い。こうした文様構成を持つ土器は金沢市二ツ屋町遺跡や加賀市猫橋遺跡など、北陸地方を中心に散見されることから、そうした土地との関連を考える必要があるだろう。

鉢は直口の45が1点出土しているのみである。甕にはバラエティがあるが、大きく分けて口頸部が如意状になる47~51と、「く」の字に屈曲する49・52・53、受口状になる82がある。如意状のものうち、49・50は器壁も厚く、口縁に面をもつが刻目は施さず、口縁の一部に人差し指の横腹を用いて大きくアクセントをつける。こうした技法の加飾をもつ甕は、当地域や周辺地域に広く分布しており、胎土には石英と長石の1~2mm程度の角礫~亜角礫を多く含み、雲母片も多く含むもので、今回の調査区では最も普遍的な胎土である。これに対して51aは、口縁端部に沈線を施し、その後上下から指頭によって押しつぶすことで、口縁端部を波状にするもので、北陸地方に類例がある甕である。体部外面は粗いタテ、ナナメハケで調整され、口縁内面には粗いヨコハケを残す。ハケの粗さはこの土器群の中では際だつものである。この土器については、胎土に含まれる鉱物も、いわゆる高温石英やチャート、赤色斑粒などが目立つ点が、今回のいずれの土器とも異なる特徴である。51bは同一個体の底部と考えられるが、接合しない。

「く」の字のものは53を除いて器壁も薄く、口縁内面はやや受口状になる傾向が認められるが、端部に面をもたず、跳ね上げも行われていない。口頸部が強く折り曲げられる52は、体部外面に極めて細密なタテハケをもち、肩部には2帯の列点文が施される。体部には煤(炭化物)がこびりついている。最終調整のていねいなハケによって、ケズリやタタキの痕跡は観察できないが、器壁はきわめて薄い。また、胎土も密で、鉱物も長石や雲母を含むが、いずれも0.5mm以下のもの

で、やや異なっている。小片のため、拓本で報告した受口状口縁の甕82は、器壁が灰白色から乳白色、内面が黒灰色のもので、いわゆる近江型の甕である。

底部片も図化可能なものは掲載した。54・55が壺の底部、51b・56・57は甕の底部である。

高杯と考えられるものは2点出土している。58は器壁の厚い脚柱部で、杯部の剥離痕が明瞭に観察できる。この土器には円盤充填技法が用いられているが、脚柱部の内面側から充填が行われている。59は高杯の脚裾部であるが、脚端部は上方に拡張し、内面もケズリが行われており、やや新しい傾向を示している。

以上、中期の遺物について概観したが、前期のものと比べて搬入品と考えられる土器が多いことが特徴である。出土土器の時期としては、壺の口縁端部の拡張が顕著ではなく、凹線文も出現していないことや、甕も跳ね上げ口縁になっていないことなどから、畿内第Ⅲ様式古段階に土器の中心時期があるものと考えられる。ただし、高杯の脚内面にケズリをもつ個体があることなどから、畿内第Ⅲ様式古段階から新段階までの幅をもたせる必要がある。

(藤井 整)

c. 弥生時代後期(図版第61-83~96)

壺・甕・高杯・鉢がある。これらは、二重口縁と擬凹線文に特徴づけられる丹後地域の弥生時代後期の土器である。89はラッパ状の口縁部を有する壺である。甕はいずれも二重口縁を有する。口縁端部に内傾する狭い面を持ち、擬凹線文を少条施す古相のもの(87・90・92・93)と、口縁端部を大きく拡張する新相のもの(86・94・95)に大別できる。91・96は口縁端部が短く直立するタイプであり、両者の中間に位置するものであろう。95・96は口縁外面に擬凹線を施さない。83は小形の鉢である。88は後期中頃に位置づけられる高杯の口縁部である。

3. 土師器(図版第61-97~105・113・114・122)

97~100は口縁部を「く」の字状に外反させる甕である。97・98はあまり外反しない。101・103・104は「く」の字状に口縁部を作り、端部を肥厚させる布留式系の甕である。102は頸部の外反が鋭角で端部をつまみ上げて面を作るなど庄内式甕の特徴を有する。105は二重口縁の壺で、101・103・104などに伴うものであろう。

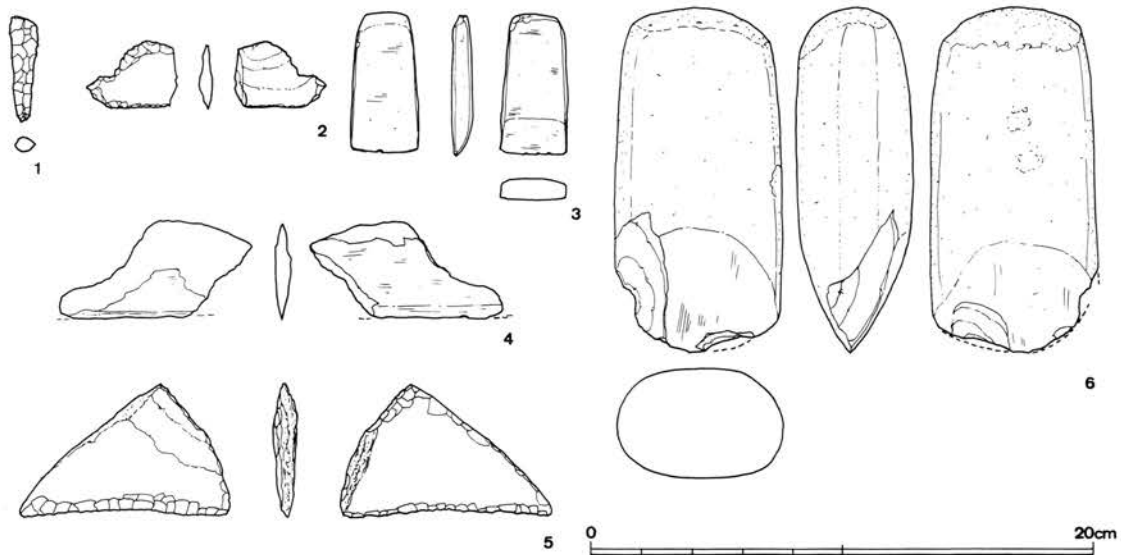
113・114は杯身である。113は精良な胎土を用いた赤褐色の土器で、内面に暗文が施される。他地域から搬入されたものとみられる。114はチャートや石英等が多量に混入された粗略なものである。122は灰白色の精良な胎土を有する。いわゆるロクロ土師器で、椀の高台である。

4. 須恵器(図版第61-106~112・115~121)

杯蓋・杯身・椀・壺類・甕などがある。

106~109は杯蓋である。106は古墳時代後期後半の杯身である。107・108は口縁部内面にかえりがある。奈良時代初期のものであろう。109は口縁端部が短く垂下する。

110・111は口径10cm前後の杯身である。110は器体が深い。111は口縁端部に傾く面を作る。



第18図 M地点出土石器実測図

116～121は壺類である。116・117・119・120は円筒状の頸部から口縁部がラッパ状に開くものである。116は端部に外傾する面を作る。117・118は同一個体であろう。長頸壺である。

115は甕である。大型の貯蔵容器である。口縁部外面に波状文がめぐる。

5. 陶磁器類(図版第61～123～126)

123は中国福建省龍泉窯系の青磁碗である。底部のみが遺存する。124～126は近世陶器である。124は唐津産の碗、125は美濃系の天目茶碗である。126は播鉢の口縁部である。

6. 石器類(第18図1～6)

1は流紋岩製の打製石錐である。頭部が欠損する。2は削器である。地元に産する輝緑凝灰岩製で作られたものである。三角形の剥片の長辺を刃部とし、側辺の一部に自然面が残る。3はチャート製の楔形石器である。4は良質の粘板岩で作られた石包丁である。刃部の一部が遺存している。5は扁平片刃石斧である。6は大型蛤刃石斧である。

(田代 弘)

第2節 R 地点の出土遺物

R地点では、縄文前期末から中期初頭の土器を中心に整理箱1箱分が出土した(図版第62)。

1は外反する口縁部形態を呈し、口縁端部内面を刻む。外面は、磨滅および鉄分の付着が著しいが、縄文が施文されているのが確認できる。北白川Ⅱ a式に相当する。3は口縁端部を丸く成形し、外面には、上下にはほぼ均一な深さの「C」字形爪形文を施す。爪形文の形状より北白川Ⅱ b式に相当する。4は体部片であるが半截竹管状の工具で「D」字形の刺突を施す。胎土に金雲母を多く含む。5は内外面ともに撫で調整の無文土器の口縁部片である。6は内面はていねいに撫で調整が施され、外面にRL縄文を施す。2は胴上部が張り、一旦くびれて口縁部へと続く器形を呈する。くびれ部には極めて低い突帯を貼り付け、その上部に1cm前後の「C」字形爪形文

を施文する。爪形文は中期初頭のものであるが、地文の縄文は大歳山式の撚りである。7・8は前期末の大歳山式に相当する。7は口縁端部内外面に粘土紐を貼り付け、外側に刻みを内側にRL縄文を施す。口縁内面の縄文帯は、段を成している。外面は、RL縄文地にΣ状工具による刻みを施した突帯を持つ。8はRL縄文地に極めて低い突帯を貼り付け、突帯上に1mm前後のC字形爪形文を施す。内面にRL縄文帯を確認できるが、7のように段は成していない。9は内面に段を有するLR縄文帯を持ち、外面にも地文にLR縄文を施す。口縁端部より約1.5cm下に刻みを有する突帯を持ち、その直下に爪形文を施す。10～12は中期初頭の鷹島式に相当する。10・11は節の中にシワの見られない特殊な縄文を施文する。12は上部が欠損しているが、波頂部になると推定できる部分に円孔が穿たれており、その円孔下に円形を呈する隆帯を持つ。また、1.8cm前後のC字形爪形文を施す。内面にはRL縄文を施した縄文帯を持つ。13は胎土がやや異質な土器である。文様等は、中部・関東地方の前期末の土器群に類似すると思われる。14は地文に撚糸文を施す里木Ⅱ式のくびれ部である。15は口縁部に突帯を貼り付けて、その上にも地文と同じ縄文を施す。山陰地方の中期の土器である波子式に相当する。16は口縁直下に刻みを施す。施文の要素は船元Ⅱ式に比定できるが、胎土の雰囲気は船元式のものやや異なる。17は器壁が厚く、底径約9cmを測る。やや凹形を呈する。船元式の底部と考えられる。18は円筒形を呈する胴下半部へと続くと考えられる平底の底部で、内外面および底面はていねいに撫でられている。外面には結節縄文で「S」字状の連続文が施文される。文様のみからみれば、石川県真脇遺跡出土第6群・第7群に類似するものがある。^(註11)

(和泉大樹)

第3節 N地点の出土遺物

1. 縄文時代の土器^(註12)

N地点出土の縄文土器は、早期後葉より後期前葉にかけての諸型式がみられ、1200点あまりを数えるが、接合関係にない小片が大半を占める。しかし、遺物の出土状況および遺存状況からすると、それらのすべてを二次的堆積の結果と想定することは難しく、その出土遺物の位置づけが、N地点における縄文時代の人間活動の通時的様相を表すと考えられる。

以下、出土層序と既往の型式学的研究成果を考慮しつつ、N地点出土の縄文土器について報告する。報告にあたって142点の資料を図化、掲載した。抽出条件は、土器の口縁部を主体に、小片を除く有文体部および底部としたが、包含層Ⅲについてはほぼ全点掲載した。なお、出土位置・法量・胎土等については観察表(第4表)を参照されたい。

a. 包含層Ⅲ出土土器(図版第63-1～第64-42)

早期終末より前期初頭に位置づけられる資料である。地文として表裏縄文および外面縄文が施されるものが主体で、若干の条痕文および無文土器がある。刺突や突帯等の施文の観察されるものもあるが、口縁部より胴部上半の限られた部分に施される傾向があり、体部破片が主体を占める本資料中には非常に少ない。以下の分類は、各種部位を含む破片にもとづく文様分類のため、それらを個体に還元して再構成する必要があり、便宜的な操作概念である点を断っておく。

L I群(1~6) 地文を除く装飾要素の認められる有文土器である。地文についてはL II群同様に各種あり、後述の分類に対応する。

1は砲弾形深鉢の胴部半ばにあたり、表裏縄文の外面上端付近に、逆「コ」字状を呈する刺突列をほぼ水平に配す。半截竹管状工具の内側を用い、上からみて逆時計廻りに施文したものであろう。水平な刺突列の上段にも若干右上に抜けるような刺突の存在がわずかにうかがえ、ここを下限とする文様帯が口縁部まで展開していた可能性もある。地文となる縄文の原体はLRで、外面は右下がり斜位、内面は縦位に回転施文されたものである。縄文施文後、一部がナデ消される。胎土には石英粒が目立ち、繊維を若干含む。2は外面縄文の体部小片で、やはり半截竹管状工具の内側を用いた短平行沈線が施される。縄文原体はLRか。内面にはナデによる器壁の凹凸が認められる。胎土中の石英・長石が目立つ。3も外面縄文に短平行沈線が施された体部小片であるが、文様は曲線を描いており、しばらく続きそうである。縄文原体はLR、内面はナデによるが、下地に条痕が施されていたような痕跡が認められる。4は外面縄文の胴部下半で、すぐに底部にいたるものであろう。下端の強く内屈する様子から、丸底ないし尖底と推定される。右下がり斜位の平行沈線が胴部より続くことが確認されるが、描線は弱く、有意な施文かどうかは分からない。ただし、描線断面の形状から判断すると、半截竹管状工具の内側が用いられたようである。縄文原体はLRが用いられ、多様多重に回転施文される。胎土は石英・長石・雲母のほかに繊維の混入が目立つ。5は比較的器体の屈曲の強い体部破片であるが、部位・方向ともに不明である。外面はLRによる縄文地に幅5mm弱の突帯が円弧状に多重に貼付され、さらにその上に刻みが施される。刻みにはヘラ状の工具が用いられるようであり、断面「V」字状を呈する。内面のナデは粗く、器体の屈曲とともに、単純な砲弾形深鉢でない器形を想定可能かもしれない。6は唯一の口縁部資料である。外傾してひらく器体に外側に被せるようにして粘土紐を接ぎ、その内面をナデつけ、外面を緩く断面山状に肥厚させる。肥厚して上面する口縁部には若干左下がり斜位になった縦位の短沈線を施し、口唇部を面取りする。頸部には左下より右上へ向かって、1と同様の逆「コ」字状刺突列が2列以上平行して斜位に配される。内外面とも下地の調整はナデで、胎土中には石英・長石が目立つ。

L II群 地文のみにて構成されるものを一括する。用いられる工具には撚紐と二枚貝があり、それぞれが構成する縄文および条痕文をもって二分する。さらに縄文地のL II aにおいて表裏に縄文の施されたもの(L II a 1)と外面のみのもの(L II a 2)とに細分され、これらをナデによる無文のものをあわせ、4分類する。

L II a 1(7~23) いわゆる表裏縄文土器である。特に際立った屈曲をもつ体部破片がないので、おおむね砲弾形を呈する深鉢であろう。胎土中には石英粒を目立って混入するものが多く、繊維の混和も顕著ではないが認められる。12などは破片下端が剥落するようにして接合時の積上げ部分が観察され、また、体部下半については、断面に観察される接合痕が、器体の屈曲に対応する場合が多い。内面に施される縄文の下地に二枚貝条痕の痕跡が認められる個体があるものの(13)、一般的ではなく、むしろ胴部屈曲以下において、内面に施文される縄文のナデ消しがしば

しば観察される(7・19など)。一方、外面は比較的顕著に縄文が残るものの、軽く磨り消されていることが多い。縄文原体は内外面とも同一のものと思われ、きつく撚りをかけた単節LRを主とするが、RLと思われるものが若干あるほか(20・22)、無節RIも認められる(21・23)。これらは器面の軟質時に施文されたようで、縄文の解読が困難であるものの、13などは直前段3本撚りであると判断され、さらに17は0段2本撚りの可能性がある。また、10の内面下半には斜行して撚紐の圧痕が認められる。なお、8・11については内面の炭化物付着が顕著である。

L II a 2 (24~39) 外面にのみ縄文の確認される土器である。小片が多いが、おおむね砲弾形深鉢であろう。ただし、L I群に分類した5についても、調整は本類と同様なため、すべての器形が単純ではないかもしれない。内面は指ないし板状工具をもって比較的ていねいなナデが施されるが、施文された縄文や条痕のナデ消されたように見られるものもある(30・36)。外面の縄文はL II a 1に比して細かく整ったものが多いが、原体は同様のLRが主体となり、28・35・38・39などはRLの可能性もある。25で直前段2本、0段3本撚りであることが確認されるほか、27・36で直前段2本撚り、28では0段3本撚りと判断される。また、35の内面には条痕がナデ消されたような痕跡が認められる。

L II b (41・42) 二枚貝を工具とした条痕文土器である。内外面に条痕が明瞭に観察され、内面は共通して横位から斜位、外面は同様に斜行する41と横位に近い42がある。内面走向の相違は部位の違いによるものか。後者は前者に比して径が大きく、上に位置するようであり、その破片内においても上半が安定した横位であるのに対し、下半は斜位となり、条痕長も短いようで、前者に類似する。42の外面は磨滅が顕著で不明であるが、41の外面には条痕施文後、縄文が施されるようである。ともに粒径5mm近くある石英・長石を混じる胎土であるが、41には繊維の混入が若干認められる。なお、42の内面には焦げと思われる炭化物付着がみられる。

L II c (40) 無文の体部破片と思われる。ただし、外面には縄文が施文されていたようにも見える。

b. 包含層II出土およびそれに相当する土器(図版第64-43~61)

中期全般におよぶ土器型式が確認されており、ここでは既存の型式に対照しつつ、中期初頭の鷹島式から後葉の里木II式までを6群別し、そのほか、異系統土器および対照困難なものを一括しておく。ここで掲示の資料は、上下に位置する包含層I・包含層III出土の土器に比して、いずれも器表面の磨滅が著しく、原位置を保つ可能性は低いものと思われる。

M I 群(43・44) 鷹島式に相当するもの。長大な硬めの原体を用いたと思われる縄文が特徴的である(44)。43は波状を呈する口縁部であり、キャリパー形に復原されるものであろう。外面には長さ約18mmを測るC字爪形文が3列以上にわたって密に連続施文される。口唇部にかけても少なくとも1列の爪形文を確認できるが、口唇面が磨滅しており詳細は観察できない。口縁内面にはほぼ水平に段が形成され、その上部にRL縄文が施文される。

M II 群(45・46・49) 船元I式に相当するもの。45はキャリパー形深鉢の口縁部である。口縁部外面上端に幅約20mmの突帯を貼付し、その上に小二枚貝背面圧痕を配列するが、突帯の一部が

剥落し、その接着面にも縄文施文がなされていたことが分かる。内面にも帯状に縄文施文が認められ、その下限をていねいに撫で消すことで、若干の段をなして区画する。縄文原体は縦長のRLで、節内のささくれ立ちの目立つものである。頸部屈曲部にあたる46にも同様の縄文の施文がみられる。49も同様の器形の口縁部であるが、上端は欠損する。全面に撚りの比較的細かいRL縄文を施し、逆「コ」字状を呈する押し刺突列で山形意匠を展開する。また、破片上端および下端にも同様の刺突列が水平にめぐる。

MIII群(47・48・50) 船元Ⅱ式に比定されると思われる。47の口縁部には突帯が貼付され、その上下に棒状工具で深く突いたと思われる刺突列が配される。キャリパー形を呈する深鉢であろう。50は口縁部が緩く外にひらく深鉢で、口縁は若干の波状を呈する。波頂部直下を欠損するものの、それに近い垂下文様から平行して下る上弦の弧文が、低平な突帯上の半截竹管状工具による押し刺突列によって描かれる。口縁上端部には小二枚貝背面圧痕が配列され、その内面には縄文が施文される。外面には全面縦長のRL縄文が地文として施されるものの、磨滅が顕著で不明瞭である。48は小破片のため本群に含めてよいものか判断が困難であるが、突帯上に刻みを施すことからここに分類した。

MIV群(51) 船元Ⅲ式に相当するものか。RL縄文地に半截竹管状工具による平行沈線が斜行する。

MV群(52～55) 縄文の条の深浅が特徴的な船元Ⅳ式に相当するもの。52は磨滅が顕著なため、施文等の観察が容易でないが、地にLrによる縄巻縄文、口縁部に半截竹管状工具による蛇行する平行沈線文を配するものであろうか。口縁内面にも縄文の施文が帯状に認められる。55は同一個体かもしれない。53・54は同様の縄巻縄文施文の頸胴部である。53は内面の指押え痕が明瞭に観察される。

MVI群(56・60) 撚糸文を地文とする里木Ⅱ式に相当するものであろう。ただし、60は原体の幅が比較的太目のLrを用いている。キャリパー形の口縁部上端には蛇行する平行沈線文を半截竹管状工具で描き、その下にも緩く下に弧を向ける意匠を配す。

MVII群(57～59) 地域的異系統の土器ないし不明のものを一括した。57はたく浅い縦位の沈線を並列したもので、船元Ⅲ式E類とされたものに比定すべきものであろうか。磨滅が著しい。58はRL縄文地の屈曲部に逆「コ」字状の押し刺突列を施したもの。59は本資料中でもっとも器壁が厚く、胎土も異なる。内面のていねいなナデに対し、外面にはRlによる木目状撚糸文を施す。北陸地域の新崎式に類するものであろうか。

底部(61) 底面は高台状に凹んでおり、円周に沿って多重に円を描く撫での外側は相対的によりていねいである。船元式ないし里木式に伴うものであろう。

c. 包含層Ⅰ出土土器(図版第65-62～図版第66-142)

中期末から後期前葉の諸型式が確認できるが、確実に中期末に相当するものはごくわずかで、後期初頭の中津式および福田KⅡ式が主体を占める。それに続く布勢式に比定されるべきものも見出せるが、その量は多くない。当該期の研究は、山陰地方に連なる兵庫県小森岡遺跡などで、

千葉 豊らによって積極的になされており、本資料についても、その成果に多くを負い、以下のように分類する。

U I 群(62~70) 描線幅が不安定で、その端部処理があまく、しばしば文様構成が定型化していない一群で、平CⅢ式ないし平KⅠ式とされた中期末に比定されるべきものである^(注15)。62は本群に分類される唯一の口縁部であるが、沈線内も含めた外面は比較的ていねいに撫でられており、沈線の稜は明瞭なものではない。後期初頭に下らせてもよいかもしれない。63~65は縦に振幅の大きい連弧文ないし鋸歯状文の描かれるもの。63はLR縄文が沈線間に施文される。64の沈線は70とともに太く、器面の軟質時に引かれたものようで、確実に平CⅢ式に比定されよう。一方、65の沈線はヘラ状の工具が軽く用いられるようである。66・67・69は沈線の接続すべき部分の処理が甘く、文様意匠もはっきりしない。66はLR縄文の施文がみられる。68は磨滅が顕著で本類に含めるべきものか判然としない。70は深鉢胴部に施された紡錘文を構成するものであろうか。中心に凹点が附されている。

U II 群(71~116) 描線幅・文様幅ともに比較的安定した2本の沈線で文様が描かれる一群で、定型化した磨消縄文が特徴的な中津式に比定される。文様(縄文帯)幅の広いもの(U II a)と狭いもの(U II b)とに分類されるほか、分類の困難な一群をU II cとする。

口縁部資料のうち71~79はU II a、83~91はU II bに分類でき、文様幅の計測できない80~82はU II cになる。71は波頂部が円筒状になる波状口縁深鉢で、頂部円孔のとりまきより撥形に下りる磨消縄文帯が以下にJ字文を構成する。72は山形の波頂部口縁に沿った沈線が収斂し、縄文帯を構成する。73は波底部の突起であろう。74~78の4点は口縁上端部を若干肥厚させ、内彎気味となる一方、77・79は口縁に肥厚する様子がなく、文様幅も相対的に狭い可能性がある。縄文原体はLRが主となるが、先に指摘した77・79のみRLであり、分別すべきかもしれない。なお、71や73は文様意匠から中津Ⅱ式に比定されるべきものである。口唇部を強く肥厚させる80は、破片下端に弧線がみられるが、口縁に平行するものではなく、全体の意匠構成は不明である。81は口縁に接して縄文帯が配され、窓枠状の区画文を構成するようなので中津Ⅰ式古段階に比定されるべきものであろうか(玉田1990)。82は内に屈折した波頂部で、外面から頂部、内面まで2本の沈線がめぐる。波頂部の両側縁には沈線状の凹みが配されるが、その他端は欠損して不明である。文様幅の狭い83は、波頂部にも口縁に平行して磨消縄文帯が配される。85は波頂下から垂下する沈線がJ字を描くものであろうか。ただし、その直線的な様子から渦巻文状になることはなかろう。86の意匠との類似を窺わせる。波頂部には、肥厚した口唇部に直交して刺突列が配されるほか、その両側にも口唇面に刺突列が若干施される。83~85・89・90は口縁上端部が若干肥厚気味で、90を除き、いずれもLR縄文である。口縁部を肥厚させないながらも、内屈気味にする87・91はともにLR、肥厚させない86・88・93はRL2点に対し、LR1点となり、U II 群の口縁部においては、肥厚させないものとRL縄文の相関関係が認められそうである。86は比較的遺存状況の良好な個体で、波頂部こそないものの、以下に垂下するJ字状沈線の末端が入組み文を構成する。また、口縁部に沿う縄文帯と頸部を水平にめぐるものとは、2本の沈線間中央に短

沈線を連続的に配しており、その文様意匠とともに福田KⅡ式の古段階に比定されよう。したがって、先述のUⅡaが中津Ⅱ式に対比されるならば、UⅡbは福田KⅡ式に対比される可能性が高い。

体部破片は92～98がUⅡaに、99～111がUⅡbに、そして112～116がUⅡcに分類される。前者に曲線的な意匠が多いのに対し、後者はJ字文を構成する105を除いて、その多くが直線的な意匠である点の特徴的である。また、前者は95を除いてLR縄文が用いられるのに対し、後者では比較的RLが目立つ点も注意される。112は口縁部付近の破片と考えられ、波頂部下にJ字状の渦巻文を構成するものであろう。116も破片上端で内屈するようで、北白川C式深鉢C類に比定できるかもしれない(泉1985)。

UⅢ群(117～119) 描線が深く、2本以上の沈線により直線的な文様を構成する一群で、福田KⅡ式ないし布勢式に比定されよう。特に117は明らかに3本の沈線末で文様が構成される。118は磨減が顕著である。119の沈線は2本か3本かは不明である。これらは全体的に直線的な意匠の多いのが特徴的である。

UⅣ群(120～123) 布勢式に比定されると考えられるものを一括した。120・121の口縁部は上向きに拡張した面をもち、そこに1本の沈線と外周して斜位の短沈線がめぐるもので、特に120の突起はコップ状に天に向かって開口しており、その外面に斜行沈線が施文される。さらに波頂下からは頸部に沈線が垂下するものであろうか。122は胴部上端、頸部屈折近接位と思われ、集合的弧線意匠に向かって水平に伸びる沈線末端が入組み状になる。123は深鉢頸部であろうか。地文に縦方向の細密条痕が明瞭に観察される個体は本例のみで、1cm幅に8本の条線を数え、千葉分類の「4類」に相当する(千葉・大下編1990)。沈線のタッチも軽い。これらはすべて千葉の布勢式の前半期にあたろう(千葉1990)。

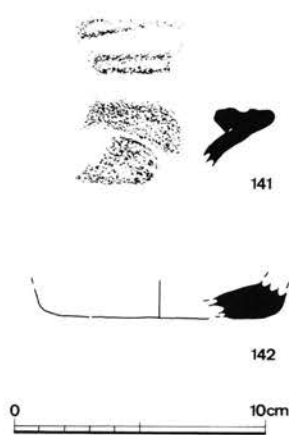
UⅤ群 沈線および縄文により構成される定型的な文様の認められない、いわゆる粗製土器を一括する。地文および調整、施文工具の差異により、以下のように4分する。

UⅤa(134) 縄文地のもので、本例の縄文原体はRLである。兵庫県見蔵岡遺跡における「無文深鉢E類」に対応し、中期末に比定されるべきものであろう(松井編1997)。UⅠ群に伴うものであろうか。

UⅤb(124～130) 沈線文。無文地である。124～129は沈線で格子目文が描かれる。先端の鋭い棒状工具が用いられるほか、半截竹管状工具を用いている例もある(129)。格子目も粗雑な126のほかは同一個体であろうか。130・133は底部近くの破片で、斜行沈線がみられる。後期前葉に比定されるものであろうか。沈線間隔は不規則で、条線ともいえるようなものである。

UⅤc(131・132) 櫛描条線文。131は口縁部で、その断面形態から福田KⅡ式以降に組成するものと思われる。小森岡遺跡においては「条線地深鉢」として布勢式の一器種と考えられているものであろう(千葉・大下編1990)。外反する132は、一般的に縦位に施文するところが水平に配されている点が異なる。

UⅤd(135～137) 条痕文。135の口縁部形態は中津式に比定されるべきものであろうか。136



第19図 N地点出土縄文
土器実測図

とともに条痕調整後、軽くナデが施されており判然としないが、後者においては1cm内に3本の条線を数え、千葉分類の「1類」に相当する(千葉・大下編1990)。一方、深鉢胴部の137は横位の細密条痕が内外ともに顕著で、1cm内の条線数は10本、同分類の「4類」にあたる。しかし、同類とした有文体部123の条痕とはかなり様相が異なる。なお、工具の痕跡幅は約6mmを測る。

底部(138~140) いずれも平底であるが、139は若干底面が浮いている。なお、本例は周壁が上方に直線的に立ち上がる見蔵岡遺跡における「底部A類」にあたる上、外面に縄文が認められるようで、中期末に比定されるものであろう(松井編1997)。

c. 石囲い炉周辺出土土器(第19図141・142)

包含層Iの調査中に確認された石囲い炉周辺出土の土器であるが、遺構の年代を直接類推することは難しい。141は磨滅が顕著であるが、外反する頸部上端から折り返すようにして、上を向いてひらく口縁部がとりつくもので、その面には1本の太い沈線が配される。千葉のいう「d1種」口縁部形態である(千葉1989)。頸部の径と口縁部の径にズレがあり、口縁外縁が破片右端で拡張することから、突起のようなものが付されていた可能性がある。UV群に対応しよう。142は底部に相当するであろう小破片であるが、第9図にもみられるように、検出時は石囲い炉に隣接するようにして体部下半がおおむね遺存していたものである。摩耗・破損が著しく、十分な接合・復原を行うことができなかつた。直径8cmほどの平底と考えられる。縄文時代後期の所産と考えてよかろう。

(岡田憲一)

2. 弥生時代後期～古墳時代前期の遺物

a. 流路跡S D01出土土器

S D01からは弥生土器・銅鍬のほか、最上層から土師器・須恵器が出土している。出土遺物の大半は弥生時代後期に位置づけられる土器であった。土器は埋土と流路底に分けて取り上げたが、区別せず一括して扱った。主要器種としては壺・甕・鉢・高杯・器台・蓋がある。器種ごとに分類を行い説明をする。なお、出土層位・法量・胎土などについては観察表(第5表)にまとめた。

① 弥生土器の分類

壺(1~24) さまざまな形態が認められるが、大きく5種に分けた。

壺A 上方に直線的に延びる口縁部を持つ壺。

壺B 口縁部がラッパ状に開く壺。広口壺である。口縁部を上方に拡張するものをB1、口縁部を下垂させるものをB2とした。

壺C 口縁が内傾・直立気味におわる壺。

壺D 口縁が短く屈曲し、端部を上方に拡張する壺。口縁形態は甕Aと類似する。

壺E 口縁が短く屈曲し、端部を拡張しない壺。口縁形態は甕Bに類似する。

甕(25～151) 2種に分類した。

甕A 「く」の字に屈曲する口縁部をもち、口縁端部を拡張する甕。口縁の拡張手法・体部形状等、細部に関しては多くのバリエーションがある。口縁端部に擬凹線文を施すものをA1、擬凹線文を施さないものA2とした。

甕B 「く」の字に屈曲する口縁を持ち、口縁端部に丸く小さな面をもつ甕。

鉢(153～193) 4種に分類した。

鉢A 口縁部が直線的に開く小型の鉢。

鉢B 口縁が屈曲し、端部を上方に拡張する。甕Aとの判別が困難なものもあるが、甕に比して口径に対する器高が低いものをこの形式に位置づけた。

鉢C 口縁部が屈曲し、口縁端部を拡張しない鉢。特に甕に比して口径に対する器高が低いものを鉢として分離した。中間形態を示すものも多く存在し、甕Bとの判別が困難なものもある。

鉢D 口縁部の屈曲をもたない鉢。口縁部は内湾気味におわるものが多い。

高杯(194～222) 3種に分類した。

高杯A ゆるやかに内湾気味に立ち上がる杯部から「く」の字に屈曲する口縁部をもつ高杯。

高杯B 椀状の杯部を持つ高杯である。

高杯C 直立気味でやや外反する口縁部と下ぶくれ状の体部をもつ高杯。杯部は明らかに壺の形状を持つため台付壺として壺形土器に分類すべきかもしれないが、供献形態であることから高杯に含めた。

器台(223～241) 2種に分類した。

器台A 筒部が中空で脚部と受け部がラッパ状に大きく開く器台。口縁端部は斜め上方に拡張する。

器台B 器台Aの受け部にさらに受け部を付加した器台。いわゆる装飾器台である。

蓋 直線的に開く裾部をもつもの。

②各個体について(図版第67-1～図版第79-306)

壺A 口縁が短いもの(1・2)、口縁の長いもの(3・4)がある。1は口縁端部をナデにより拡張する。2は口縁端部に幅の広い横ナデを施し、口唇部内面には段をもつ。3は精製された胎土をもち、擬凹線文を施す。口縁端部は拡張されない。4は不明瞭ながら、口縁端部をナデにより拡張する。

壺B 1(10～12・15～24) 口縁部の長さには、比較的長い15～18や比較的短い19～24などがある。12・15・18～20・23・24では擬凹線文が施されるが、10・11・16・17・21・22はナデにより仕上げられる。口縁端部の拡張は外傾する15～18・19～24、拡張が小さい10、内傾気味に拡張する11、端部に面を持たせて上方に拡張する12がある。9は肩部が張らず、やや異なった形態を示す可能性がある。

壺B 2(13・14) 13には円形、14にはドーナツ状の浮文を口縁拡張部に施す。B 1より器壁が厚い。

壺C(7~9) 7・9は口縁部にわずかな屈曲を持つ。8・9では不明瞭だが擬凹線文が確認できる。8は器表面に薄い化粧土を施した可能性がある。

壺D(5・25~27) 5は口縁拡張部の境に刻目文を施し、拡張部には半円形の沈線文が施される。25・26はやや大型である。27は口縁拡張部の境に拡張部成形時の指頭圧痕を残す。

甕A(28~30・33~35・38・39・42・44~53・55~64・66~98・122・125~128・131・132・146・147、うちA2は31・32・36・37・40・41・43・54・65・99~121・123・124・129・130・148~151) A1・A2をまとめて説明する。

甕Aの口縁端部の拡張手法には、①やや下垂した後、内傾・直立気味に仕上げるもの(28~32)、②内傾・直立気味に仕上げるもの(32~45)、③やや下垂した後、外傾気味に仕上げるもの(46~59)、④外傾気味に仕上げるもの(60~87・99~121)などがある。口縁部・拡張部が特徴的なものとしては、拡張部が若干長くなるもの(88~98)、拡張部がわずかに屈曲する程度で、一見すると拡張部を持たない甕Bに見えるもの(122~126)、口縁部が短くなるもの(127~129)、口縁部が長くなるもの(120・121・130~132)などが見られる。口唇部は丸くおさめるものが大半であるが、40~43・48・111のように少数ながら面をもつものが見られる。体部の形状としては38・77・79・87のように体部の最大径が上半から中程となるものが多いが、43のように最大径が体部の下半となり、下ぶくれ状の体部を持つものもあると考えられる。体部の張りは弱いものが多いが、118・119ではやや張った形状であり、壺Dに近い形状をもつ。146~151は小型の甕Aである。調整は完形に復原できるものが少ないため全体の調整が観察できるものは少ない。上半部のある程度残るものでは、体部外面はハケ、体部内面はケズリを施すものが大半である。外面のハケは縦方向のものが多いが、斜めや横に施すものも見られる。外面のハケは頸部に施される横ナデにより消されているものが多く、頸部にハケが及ぶものは少ない。内面のケズリは上半では横方向・斜め方向、下半では縦方向にケズリを施すものが多い。41・46・103では内面にハケを施すが量的には少ないものである。43では内面に粗いケズリが施され、接合痕の下に入っていく成形時のハケが観察できる。75・78・101・120では外面にタタキ、内面にケズリを施すが、量的には少ない。101ではタタキの後にハケを施している。94・96・97ではミガキが施される。94の内面はケズリの後にミガキを施す。97は口縁部の内面にミガキが施される。97のように口縁の内面にミガキを施すものは図化を行っていないものの中に少量確認できた。観察表には、甕A1の擬凹線文の確認できた最大の条数を示した。2条から12条のものがあるが、3条から6条のものが多い。97では極めて明瞭で凹凸が激しい。98では若干擬凹線文の幅が広く、68・75では極めて幅が狭い。他のものでは幅2mm程度で大きな違いは見られなかった。文様は58・65・67・69・70・74・76・87・106・131・150で見られた。いずれも肩部に施されている。74が1か所に米粒状の圧痕を2回押しつけた列点文であるが、他のものではハケ原体の角によると思われる列点文を施す。131では櫛条の工具による横方向の施文と列点文が見られる。

甕B(135~145) 133・141~143・145は口縁端部に面をもつ。140は口縁端部に指頭圧痕が残り、凹凸が見られる。体部は張りの弱いもの(133・135~138)、体部の張りの強いもの(144・

145)が見られる。137には焼成後の穿孔が見られる。139は体部外面と口縁部にタタキを施し、他のものでは外面はハケを施す。内面はケズリ後ハケを施す137、ハケを施す144、ケズリを施す134～137、139～144がある。134のケズリは器壁がえぐり取られたように深く施されている。

鉢A (152・153) 脚台のつく153と脚台のつかない152がある。

鉢B (154・168～172) 脚台のつく154と脚台のつかない169がある。擬凹線文は154・168・169では施されるが、170～172ではナデにより仕上げられる。

鉢C (155・156・158～167) 脚台をもつ156と脚台を持たない167がある。167は底部に穿孔が見られる。164・165のように、口縁の屈曲の弱いものと166・167のように屈曲が強いものが見られる。

鉢D (157・173～193) 158は片口を持つ。179・182～189のように底部に焼成前の穿孔をもつものと180・190～192のように穿孔を持たないものがある。口径に比して器高の低い189・190や口径に比して器高の高い188・191など形態に違いが見られる。185は底部から直線的に開き、内湾気味に立ち上がる他のものとは異なる。口縁の端部は177・178・185のように端部に明瞭な面をもつものもあるが、他のものでは成形時の指頭圧痕を残し、凹凸の残る口縁となる。調整は内面ではケズリを施すものが多いが、184ではハケ、189ではナデ、190ではミガキを施す。外面はハケ・ナデが多いが、190ではミガキを施す。

高杯A (194～215) 口縁端部の拡張手法には、①直立気味に拡張するもの(194・195)、②斜め外方に拡張するもの(196～208)、③やや下垂した後斜め外方に拡張するもの(209～213・215)が見られる。口縁端部の拡張部の長さには194～200のように短いものから、202～204のように長いものまで認められる。214は口縁端部の拡張部を欠くが、高杯Aであると考えられる。杯部の形状では194・195・207が口径に比して器高が若干深くなる。213は口径が小さくやや小型になると考えられる。脚部の形状は裾部まで遺存する208・214・215で細い筒部から大きく開く脚部をもつことがわかる。裾部には208で3方向のスカシ穴が確認できるが、214・215では部分的な残存であるためスカシの方向は不明である。また筒部が遺存するものでは199で中実の筒部となるが、他のものは中空の筒部となる。杯部と脚部の接合方法を剥離の状況からみると、199では中実の筒部に粘土を付加して杯部をつくっていることがわかる。195・207では中空の筒部に粘土を充填していること、筒部に粘土を付加して杯部をつくっていることはわかるが、このどちらを先に行ったかは不明である。調整がわかるものでは杯部内外面・脚部外面にミガキ、裾部内面にハケを施す。204の杯部内面ではハケを施したのちにミガキを施しているようである。杯部内外面のミガキは調整のわかるもので口縁部から上半部にかけて横方向に施され、下半では縦方向に施される。筒部には縦方向のミガキ、裾部では縦方向に施す208と横方向に施す215が見られる。215では杯部と筒部の接合部外面に横方向のミガキが見られる。なお、ミガキの前後関係が明確にわかるものはなかった。196・207・212では脚部内面の頂部に棒状工具による刺突痕が見られる。筒部の内面は215で絞り痕が確認できるが、208・214ではナデが施され平滑に仕上げている。擬凹線文は195～213で確認できる。194はナデが施されたものと考えられるが、215は磨滅により不明

であった。206・208は化粧土を施した可能性がある。

高杯B (216～218) 図化を行った3点のみの出土である。口縁端部を拡張するもの(216・217)と丸くおさめるもの(218)がある。調整は器表面の残りが悪く確認できない。216・218の筒部内面には絞り痕を残す。216の拡張部には不明瞭ながら2条の擬凹線文が確認できる。

高杯C (219～222) 全形がわかるものは存在しない。222は裾部が欠損しているが、脚部の形状は高杯A・Bと同様の形態であろう。219・220も高杯Cであろう。221では脚部が剥離した痕跡が確認できる。

器台A (223～230・234～241) 口縁端部の拡張手法は、①やや下垂した後斜め外方に拡張するもの(227～230・234～241)と②下垂せずに斜め上方に拡張するもの(223～226)が見られる。229では下垂した部分が剥離しており、②のように端部を拡張した後に下垂部を付加したことが観察できた。スカシは230では4方向である。高杯では3方向のものしか確認されておらず違いが見られる。226はスカシを施さない。調整は不明瞭なものが多いが225でハケが見られる他は、筒部から受部の外面・受部内面にミガキが施される。外面では筒部から受け部にかけて縦方向のミガキが施されるが、口縁部付近で横方向に施すもの(215・216)もみられる。受部内面では226・240・241が横方向にミガキを施し、230では不明瞭ながら縦方向のミガキが確認できる。230ではミガキの前にハケを施しており、ミガキが雑な裾部付近では明瞭に観察できる。脚部は遺存するものが少ないが、内面にハケを施すもの(230・242)とナデを施すもの(226)がある。242では細かいハケを施す前に粗いハケを施している。筒部の内面にはケズリが施される。擬凹線文は施すもの(223～230・237～241)とナデで仕上げるもの(235・236)がある。234は磨滅が激しく不明である。

器台B (231～233) 図化を行った3点のみの出土である。口縁端部の拡張手法は器台Aの①と同様である。付加された受け部は基部のみが残存しており全形は不明である。231ではこの基部にはスカシの痕跡が2か所確認できる。

高杯脚部 (243～250) 筒部上半を中実につくるもの(243・244)、筒部の内面をより絞るもの(245・246)、筒部を中空につくるもの(247～250)がある。裾部はゆるやかに開くもの(243～245・247・248)、若干屈曲して開くもの(246・249)が見られる。スカシはすべて確認できる243～247・250では3方向である。248・249ではスカシがない。外面には縦方向のミガキが施される。裾部内面はハケを施す。245・247・248・250では筒部内面に絞り痕が確認できるが、249はナデにより平滑に仕上げられる。243・247・249には脚部内面の頂部に棒状工具による刺突痕が見られる。

蓋 (251～262) つまみは端部を丸くおさめるもの(252～257)、端部に明瞭な面をもつもの(258・259)、端部に不明瞭ながら面が見られるもの(260～262)がある。外面の調整は255・262でハケ、261でミガキを施す。259ではハケ後ミガキ、さらにケズリとなる。内面は259でケズリ、262でハケが施される。

脚台 (263～271) 壺・甕・鉢の脚台であると考えられる。脚端部は端部を拡張するもの(272・273・275)、丸くおさめるもの(263～271・274)がある。274では脚部が短く、275では底径に比し

て脚部高が低くなり、他のものと異なる形状をとる。272には拡張部に擬凹線文が施される。

底部(276~306) 壺・甕・鉢の底部であると考えられる。底部はいずれも平底となる。底部穿孔が見られるもの(276~285)と底部に穿孔が見られないもの(286~306)がある。276・284・285が焼成後の穿孔であり、他は焼成前の穿孔である。282・283はやや尖り気味となり、185~187などの底部に類似することから鉢Dの底部であると考えられる。287・293には焼成後に穿孔を施す途中で中断した痕跡が見られる。穿孔を施さない底部にはハケを施すもの(294・301)、ケズリを施し上げ底状に仕上げるもの(286・288~290)などが見られる。284・285には焼成前に施された線刻が見られる。306には不定形なものを押しつけた圧痕が見られる。299にはタタキが施される。

③古墳時代の遺物(図版第80-307~314)

流路跡S D01出土土器のうち、最上層から出土した古墳時代初頭の土器と考えられるものを取り上げる。後述する竪穴式住居跡S H16にも古墳時代の土器が含まれており、混入した可能性が考えられる。307~309は中空の小型器台である。310は高杯の脚部、311~313は高杯の杯部である。314は二重口縁壺で口縁部に円形浮文・刻目文が見られる。

b. 竪穴式住居跡出土土器

弥生時代後期末から古墳時代初頭の遺物が出土した。流路跡S D01出土遺物の分類に当てはまるものはこれを使用して説明する。

竪穴式住居跡S H16出土遺物(図版第80-315~332) 出土遺物としては、壺B 1(316)・甕A 1(320~322)・甕A 2(319)・鉢A(328)・器台A(323)・蓋形土器(329)・高杯(324・325・326)・鼓形器台(330)・底脚杯(331)・壺(317)がある。また、鏡形土製品(332)が出土している。埋土中の出土であるため一括性の保証された遺物ではない。

319・320・322は口縁端部の拡張が長く、321では不明瞭となる。323では口縁端部の拡張部が下垂した後上方に拡張するが、この下垂部が剥離しており、付加されたものであることが確認できる。329はつまみに明瞭な面を持つ。327は器台の脚部であろう。324は時期的にはS D01出土遺物より新しいと考えられる。325は短いく大きく開く脚部を持つと考えられる。326は二段のスカシを持つもので、東海・北陸にこのようなものが見られることから、これらの地域の搬入品が影響を受けたものであろう。330・331は山陰系土器であるが、331は胎土に極めて細かい石英・長石・雲母を多量に含むことから山陰地方からの搬入品であると考えられる。317は壺であろう。315・318いずれの時期に属すかわからない。315は壺、318は甕であろう。鏡形土製品(332)は端部がすべて欠損しているが、凸面鏡の形態を取る。最大長5.2cm・厚さ3mmを測る。部分的に赤色顔料が残存する。胎土は1~2mmの石英・長石を含むもので、精製されたものではない。調整は磨滅により不明である。

以上の土器群は、おおむね弥生後期末から古墳時代初頭に位置づけられると考えられる。

竪穴式住居跡S H05出土遺物(図版第80-333~335) 出土遺物としては、高杯A(333)・高杯(334)・小型器台(335)である。335は流路跡S D01出土の309に類似する形態を持つ。333は弥生土器、334・335は古式土師器に分類できよう。

竪穴式住居跡 S H17出土遺物(図版第80-336~340) 出土遺物としては、甕 A 1 (337)・甕 A 2 (336)・高杯 A (339)・器台 A (340)がある。336は口縁と口縁端部の拡張部の境が不明瞭である。337は口縁端部を内傾気味に仕上げる。流路跡 S D01出土の28・29のように S D01で主体となる形態よりやや古い要素を残す。344は受部内面に段をもつ。338は高杯 A か、あるいは鉢の形態をとる可能性もある。

(水野聡哉)

竪穴式住居跡 S H31(図版第81-1~4) 出土遺物としては、土師器甕(3)・高杯(1・2・4)などがある。1・4は杯底部と口縁部の屈曲部に稜が認められる。2は口縁部の立ち上がり部分に稜を持たないと考えられる。3は甕の口縁部の破片で、外上方に向かってまっすぐ伸びる。端部は、やや面を持ち、端部の内面はやや肥厚気味である。詳細は観察表(第6表)を参照されたい。

3. 飛鳥~平安時代の土器

浦入遺跡で出土した土器類の大半は、飛鳥時代から平安時代に位置づけられる須恵器・土師器・黒色土器・瓦器・陶器などである。これらの遺物は膨大な量に達し、同時に出土した製塩土器の年代を考える上でも、非常に重要である。

以下では、N地点のみならず、すべての調査地点から出土した飛鳥~平安時代の土器を対象として、器種分類・時期区分などについて述べる。ただし、各遺構から出土した製塩土器については、まとめて第8節で詳述する。

なお、浦入遺跡では、いずれの調査地点においても、良好な一括出土土器に乏しい。このため、床面直上・柱穴などから出土した遺物を優先的に図化した。また、遺構の時期を反映すると考えられる遺構埋土出土の土器も同様に図化した。その場合、土器の残存度の高いものや特徴的な部位を有する遺物を図化した。ただし、図化対象の土器を選び出す作業では個体数の確認などの作業は行っていない。

a. 器種分類

出土量の多い須恵器・土師器・黒色土器について、浦入遺跡の実状に合わせた分類を行う。^(注16)

①須恵器

蓋 A ドーム型の天井部を有するもの。天井部の調整により、A a(天井部ヘラケズリ調整)と A b(天井部ヘラ切り後不調整)に分けることができる。古墳時代に一般的な蓋の系譜をひくもの。

蓋 B 宝珠形つまみをもち、内面にかえりを有するもの。

蓋 C 宝珠形もしくはやや扁平な擬宝珠様つまみをもち、内面にかえりを有さないもの。口縁端部の形態により、C a(端部が屈曲せず、全体の形状が笠形もしくは笠形に近いもの)と C b(端部が屈曲するもの)に分けられる。

蓋 D 環状つまみをもつもの。口縁端部の形状が蓋 C と同様、屈曲しないもの(D a)と屈曲するもの(D b)に分けることができる。

蓋 E つまみをもたないもの。

蓋F 水平な天井部に、ほぼ直角に屈曲する口縁部を有するもの。短頸壺の蓋と考えられる。擬宝珠つまみを有する。

杯A 立ち上がりと受け部を有するもの。底部の調整により、A a (底部ヘラケズリ調整)とA b (底部ヘラ切り後不調整)に分けることができる。古墳時代に一般的な杯の系譜をひくもの。

杯B 平底に近い底部をもち、高台を有さないもの。器形上の特徴から、3形式に細分できる。B aは底部がやや丸味を帯び、口縁部が内湾気味を呈するもの。蓋Aを身に転じたような器形を呈する。B bは底部が平底で、やや内湾気味の口縁部を有するもの。底部から体部を経て口縁部へ至る立ち上がりの屈曲部が不明瞭なもの。B cは平底と外上方に直線的にのびる口縁部を有するもの。

杯C 口縁部がほぼ直線的に外上方にのび、平底に近い底部をもち、高台を有するもの。口縁部内面に沈線を施さないものをC a、施すものをC bとする。杯C bは量的にわずかである。

杯D 杯C同様、口縁部がほぼ直線的に外上方にのび、平底に近い底部をもち、高台を有するもの。杯Cに類似するが、口径が底径の1.8倍以上のものを指す。径高指数も45以上と高い値を示す。

椀A 内湾する体部に、輪高台を有するもの。口縁部の形状に多様性が認められる。

椀B 内湾する体部に、口縁部が大きく外反するもの。口縁部と体部の境目に稜をもち、輪高台を有する。口縁部内面に沈線を施すものが多い。いわゆる「稜椀」である。

椀C 底部を糸切りによって切り離し、体部がやや内湾気味を呈するもの。体部が直線的なものもある。

椀D 水引き成形の痕跡を明瞭に残し、口縁端部が玉縁状を呈するもの。亀岡市篠窯跡群において特徴的な器形である。底部は糸切りによる切り離しのものが主体である。

皿A 口縁部がほぼ直線的に外上方にのび、平底の底部を有するもの。

皿B 口縁部がほぼ直線的に外上方にのび、平底の底部を有し、高台がつくもの。口縁部内面に沈線を施さないものをB a、施すものをB bとする。皿B bは量的にわずかである。また皿B そのものも、杯Cとの区別の難しいものが多い。

皿C 口縁部の形状は不明であるが、底部から体部にかけて一部屈曲し、皿Bに比べてやや大型、かつ高めの高台を有するもの。高台はやや踏ん張り気味である。

皿D 平底の底部から明瞭な屈曲部を持たずに口縁部に至るもの。高台を有するが、その高さに高低がある。

高杯A 長脚二段スカシのもの。

高杯B 短脚でスカシをもたないもの。

長頸壺A 口縁部が外反し、端部を丸く収めるもの。

長頸壺B 口縁部が外反し、端部を上方へつまみ上げるもの。屈曲部に稜を持つ。

甕A 口縁部が長く、外反するもの。口縁端部の形状に多様性が認められる。

甕B 口縁部が短く、直口するもの。口縁端部は面を有するものが多い。

②土師器

杯A 底部が丸底を呈し、口縁部外面に比較的強いナデを施すもの。器高が高く、底部調整はヘラケズリ調整を施したのち不調整であるものが多い。

杯B 底部が丸底気味で、杯Aにくらべ器高が低いもの。口縁端部の形状によって細分することができる。小型品が多い。

杯C 底部が平底を呈し、底部と口縁部の屈曲が杯Bに比べて明瞭なもの。杯Bと同様、口縁端部の形状によって細分することができる。

杯D 高台を有するもの。高台の形状から細分できる。全体の形状のわかる資料はない。

杯E ロクロ成形によるもので、口縁部はほぼ外上方に直線的にのび、底部はほぼ平底である。底部の切り離しはヘラ切りによる。

椀A 口縁部が内傾し、底部は丸底を呈すると考えられるもの。

皿A 底部が丸底気味のもので、口径が大きい点で杯Bと区別できる。口縁部外面にヨコナデは施すが明瞭な稜を有さないA aと強いヨコナデを施して稜が生じるA bとに分けられる。

皿B 底部が平底を呈し、底部と口縁部の屈曲が明瞭なもの。屈曲の程度や口縁端部の形状によってさらに細分することができる。

高杯A 椀状の杯部を有するもの。

甕A 頸部の屈曲がゆるく「く」字状を呈するもの。端部を丸く納めるもの。法量による区別が可能である。

甕B 頸部の屈曲がゆるく「く」字状を呈するもの。甕Aと異なり、口縁部内面に数条のヨコナデの痕跡を残すもの。法量による区別が可能である。

甕C 頸部の屈曲が「く」字状を呈するもの。口縁端部をつまみ上げて面をもたす。

鍋A 頸部が鈍角の角度を持ち、丸底を呈するもの。口縁端部を丸くおさめる。

鍋B 頸部が鈍角の角度を持ち、丸底を呈するもの。甕B同様、口縁部内面に数条のヨコナデの痕跡を残すもの。

鍋C 頸部が鈍角の角度を持ち、丸底を呈するもの。口縁端部をつまみ上げて面をもたす。

鍋D 口縁部が短く屈曲し、やや平底気味の底部を有する。

③黒色土器

椀A 底部を糸切りによって切り離すもの。また、内面のみを黒色処理する。丹後地域において普遍的に認められる器種である。

椀B 底部に輪高台を張り付けるもの。輪高台の内面に糸切り痕を残すものがある。内外面とも黒色処理をするものが多い。

椀C 椀Bと同じく輪高台を張り付けるもの。椀A・Bに比べ薄手で断面三角形に近い高台を貼り付ける。底部の切り離し方法に糸切りを用いないもの。

皿A 底部を糸切りによって切り離すもので、内外面とも黒色処理された小型の皿。

b. 時期区分について

各調査地点の遺構出土土器を中心に浦入遺跡における時期区分について述べる。結論からいえば、7世紀から12世紀にかけての時期は、先に述べた器種分類にもとづく器種構成の点から8期に区分される。以下、各時期の特徴を述べることにする。

浦入Ⅰ期 須恵器蓋A・杯A、土師器杯Aを主体とする。蓋・杯は他の器種を含まない。土師器甕Bの初源的形態と思われるものも含まれる。おおむね古墳時代に一般的な器種構成を呈しており、N地点竪穴式住居跡SH08・09、SH15などが相当する。

浦入Ⅱ期 須恵器蓋B・杯Ba・杯Bb、土師器杯A・杯B・皿Aを主体とする。浦入Ⅰ期にみられた器種も法量を縮小させて残存する可能性が高い。また、須恵器杯Cがすでに出現している。土師器甕Bが一定量認められる。N地点竪穴式住居跡SH12、土坑SH21などが相当する。

浦入Ⅲ期 須恵器蓋C・杯Bc・杯C、土師器杯Cを主体とする。土師器甕Bも非常に多く存在する。また、少量であるが、浦入Ⅱ期にみられた器種が残存する。N地点テラス状遺構SH13・14・19、A地点テラス状遺構SH04・05・08などが相当する。

浦入Ⅳ期 浦入Ⅲ期の器種構成に、須恵器蓋D・椀A・椀Bを加えた段階である。口縁端部内面に沈線を施す須恵器杯Cbもこの段階のものである。N地点テラス状遺構SH20・23、A地点竪穴式住居跡SH01などが相当する。

浦入Ⅴ期 須恵器杯D、土師器杯Eをこの段階の指標とするが、調査地内におけるこれらの器種の出土例は少なく、器種構成などで不明な点が多い。A-3地点SK05、O-2地点黒色炭層などが相当する。

浦入Ⅵ期 須恵器椀Cをこの段階の指標とする。当調査研究センターの調査地内で、明らかにこの段階の資料と思われるものはほとんどないが、舞鶴市教育委員会の調査区(Q-2地点ほか)において、製塩土器廃棄層からまとまった出土例がある。

浦入Ⅶ・Ⅷ期 須恵器の食器類がみられなくなり、黒色土器椀Aが主体となる段階である。椀Aの径高指数が35前後のものをⅦ期、30以下のものをⅧ期の指標と考えたい。器種構成の上では、良好な資料が少なく、不明な点が多い。浦入Ⅶ期にはO-1地点鍛冶炉群SD01、浦入Ⅷ期はO-2地点上層土坑SK02がそれぞれ相当する。後者の場合、黒色土器椀Aのほか、土師器鍋Dが伴う。

以上の浦入Ⅰ期～Ⅳ期は、比較的出土遺構の数も多く、土器の量もまとまっているため、器種構成などを知ることができる。これに対して、浦入Ⅴ～Ⅷ期にかけては、包含層資料を主体とするため、器種構成などの点で不明な点が多い。また、各時期に実年代を与えることは、浦入Ⅷ期としたO-2地点上層検出の土坑SK02出土遺物の検討を通じて、これらの資料が12世紀代中頃であることが明らかにされていることを除けば、他の時期については実年代を知る手がかりは乏しい。しかし、器形上の特徴や器種構成の点から推定すると、かえりを有さない須恵器蓋Cが主体となる浦入Ⅲ期を奈良時代初頭、8世紀前半に位置づけることができ、底部に糸切り痕を有する椀類を主体とする浦入Ⅵ期を篠窯跡の編年を援用すれば、10世紀前半代に位置づけることがで

きるのではないだろうか。したがって他の時期はこれら基準となりうる時期との相対的な関係の中で推定せざるを得ない。すなわち、浦入Ⅰ期は7世紀前半から中頃、浦入Ⅱ期は7世紀後半～末、浦入Ⅳ期は8世紀中頃～後半、浦入Ⅴ期は9世紀代、浦入Ⅶ期は11世紀代ということになるうか。

ややあいまいながら、浦入遺跡における時期区分とその実年代について検討してきた。浦入遺跡の調査は、単一の遺跡の調査として、飛鳥～平安時代の大まかな土器組成や年代観、問題点を明らかにすることができたが、京都北部地域における飛鳥～奈良時代の土器編年については、なお検討の余地があり、今後の研究に期待したい。

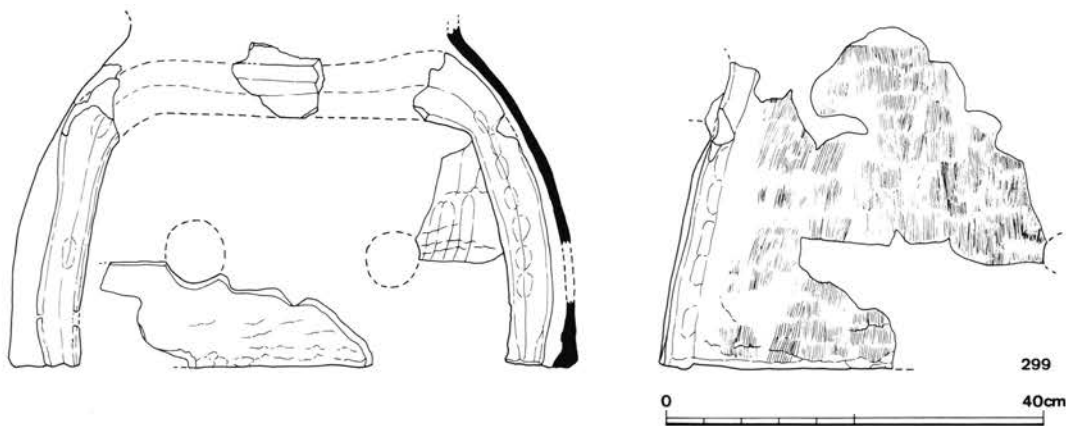
c. 観察表について

各調査地点から出土した飛鳥～平安時代の土器については、同一の基準による観察表を作成した(第6～10表)。以下に観察表の項目について記す。なお、包含層出土土器については観察表を省略した。

- ①番号 各図版に記載された土器番号である。
- ②種別 土器の種類である。土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・白磁などがある。
- ③器種 器種分類で示した器種を記した。ただし、それ以外のものについては一般的に使用されている名称を使用した。
- ④法量 おもに口径・器高を記した。なお、口径の欄の()は底径を、器高の欄の*は残存高を表す。
- ⑤残存率 24を分母とする値を記した。測定箇所は口縁部とし、口縁部が欠損する場合は底部で測定した。また、口縁部・底部ともに欠損する場合は測定していない。
- ⑥技法上の特徴 土器の成形方法、仕上げのための調整などについて記した。
- ⑦胎土 須恵器・土師器・黒色土器などを問わず同じ基準で分類し、1～4の番号で記した。その内容は以下のとおりである。
 - 1 砂粒を全く含まないもの。精良・密なものをさす。
 - 2 1mmないし2mm以下の砂粒を少量含むもの。精良・密なものをさす。
 - 3 1mmないし2mm以下の砂粒を多く含むもの。やや粗いものをさす。
 - 4 2mm以上の砂粒をふくむもの。全体的に粗いものをさす。
- ⑧焼成 須恵器・緑釉陶器・白磁は、堅緻と軟(あるいはやや軟)に分けた。土師器・黒色土器は、良好と軟とに分けた。
- ⑨色調 須恵器は、濃青灰色・青灰色・淡青灰色・灰褐色・灰色・灰白色の6色に分けた。土師器は、暗茶褐色・茶褐色・橙褐色・赤褐色・黄褐色・黄灰色の6色を基本とし、必要に応じて濃淡に分けた。他の土器について、個別に判断した。
- ⑩備考 そのほか、特徴的な事項について記した。

d. 各遺構出土遺物

テラス状遺構SH10・11(図版第81-5～38、第20図299) SH10・11から出土した遺物については、遺構埋土、SH10の周壁溝、SH11の柱穴群の3か所に分けて述べる。



第20図 N地点テラス状遺構SH10出土遺物実測図

遺構埋土からは、須恵器蓋A(5～7)・蓋B(8)・蓋C(19)・杯A(10)・杯B(12～16)・杯C(21～24)・椀C(25)・甕A(38)、土師器杯A(27・28・30)・杯B(26・29)・杯D(33・34)・高杯(31)・甕(35・36)・鉢(37)などが出土した。

これらの遺物は、複数の時期に属するもので、須恵器蓋A・杯A、土師器杯Aなど古墳時代一般的な器種がある一方で、須恵器蓋C・杯C、土師器杯Cなどの奈良時代的な土器、さらには底部糸切りの須恵器椀Cなどがあり、浦入遺跡に見られる代表的な古代の土器の大半を包含している。これらの土器群は浦入I～VI期までの幅を持つが、特に須恵器蓋C・杯C・椀CなどはSH10・11が埋没する過程で混入したものと考えられる。

明らかにSH10に伴う遺物は、周溝内から出土した移動式の竈(299)のみである。竈は、受け部を欠損するため全高は明らかでない。正面から向かって右側面と背面の一部が遺存するに過ぎない。復原最大幅は57cmを測る。299からは詳細な時期を知ることはできない。

SH11柱穴出土遺物としては、須恵器杯A(9・11)・高杯A(18)・高杯(17)、土師器壺(32)などがある。いずれも古墳時代に一般的な器種である。9は体部上半と口縁部の破片であるが、やや長めの立ち上がりを有する。11は9よりも器高の低い杯Aである。18は杯部を失うが、脚部は完存する。2方に縦長の透かし穴を2段ずつ有する、いわゆる長脚二段スカシの高杯脚部である。32は口縁部が欠損するが、上記の須恵器とは同時期と考えにくい。

以上の柱穴出土土器には、須恵器杯A・高杯Aなどがみられることから、浦入I期に位置づけられる。

竪穴式住居跡SH08・09(図版第82-39～53) SH08・09は、遺構の切り合い関係からSH08が新しいことが明らかである。SH08出土遺物としては、須恵器蓋A(39・41・42)・杯A(43・46)、土師器甕A(49・51)・壺(52)などがある。須恵器蓋Aは口径10.4～12.8cm、杯Aは口径9.9～13.1cmを測る。ともに口径が10cm前後のものと13cm前後のもの2種類が認められる。甕の法量は、大(口径23.4cm:51)・中(口径18.3cm:49)の2種類が認められる。52は、直立する口縁部を有する。浦入遺跡でも他に例を見ない。

SH09出土遺物としては、須恵器蓋A(40)・杯A(44・45)、土師器杯B(47)・甕A(48)・甕B

(50)、竈(53)などがある。40・44・50は、SH08出土のものに類似する。47は外面にユビオサエの痕が認められる。50は口縁部内面に強いヨコナデを施す。53は竈の破片である。掛け口・焚き口・鏝の一部がそれぞれ認められるものの、法量などは明らかでない。

SH08・SH09出土土器は、遺構が重複関係にあり、須恵器蓋A・杯Aの法量にも2種類が認められるが、ともに浦入I期に位置づけられる。

竪穴式住居跡SH15(図版第82-54~63) 出土遺物として、須恵器蓋A(54)・杯A(55・56)、土師器杯A(57~59)・甕A(60)・甕AまたB(61~63)、石錘(第33図5)などがある。須恵器杯Aは口径11.5cm前後、土師器杯Aは、57が口径10.9cm、57・58が12.5cm前後を測り、須恵器・土師器を問わず杯類の法量にまとまりが認められる。SH08・09出土の杯類に見られた2種類の法量の中間的な値を示す点が注意される。土師器甕は、大(口径18~21cm:62・63)・中(口径15cm:60・61)の2種類が認められる。60は、肩部のあまり張らないやや長胴気味の甕Aである。61~63は、口縁部内面に多条化したヨコナデは認められないが、1条程度の明瞭なヨコナデが認められ、出現期の甕Bに位置づけるべきかもしれない。

SH15出土土器は、須恵器杯Aを主体とすることから浦入I期に位置づけられる。

土坑SH21(図版第83-64~79) 出土遺物として、須恵器蓋B(64・65)・杯Ba(66~69)・甕(70・71)、土師器杯A(73)・杯B(72)・甕B(75・76)・甑(74)などがある。須恵器杯Baは、蓋Bよりも法量が大きいため、直接に組み合うとは考えられない。杯Baのうち68・69は、蓋Aの可能性もあるが、ここでは杯と考えておく。70は甕の口縁部、71は甕の体部上半の破片である。ともに小型品である。73は、口縁部のヨコナデがやや強めに施されており、外反気味に終わる。SH15などにみられた杯Aにくらべ、法量が縮小している。72は杯Bであるが、調整手法などは73に類似する。75・76は、口縁部内面に強いヨコナデを施す。

SH21出土土器は、須恵器蓋B・杯Bのみで構成され、矮小化した甕を伴うことや、土師器杯AがSH15出土例などにくらべ著しく縮小化していることから、浦入II期に位置づけられる。

竪穴式住居跡SH12(図版第83-77~88) 出土遺物としては、須恵器蓋B(77)・蓋(78)・杯Bb(79・80)・杯C(81)、土師器杯B(82~84)・皿Aa(86)・皿Ab(85)・甕A(87)・鍋A(88)などがある。77は蓋Bとも杯Aとも判断しにくい小片である。78は内面にかえりを有さない。79は器厚の非常に厚い土器で、底部は鋭くヘラ切りが行われる。内面に「+」字のヘラ書きの記号が認められる。81は体部が「S」字状を呈し、口縁端部が丸く納まる。高台は内端が接地する。82~84は10cm前後と11.8cmの2種類の大きさがある。85は口縁部に強いヨコナデを施して、口縁部を外反させる。底部外面は、ヘラケズリ調整の後、ナデ調整を施したと思われる、外面にヘラケズリ調整の際の単位がかすかに見て取れる。86は85にくらべやや深手の皿Aaである。口縁部外面にヨコナデを施し、口縁部をわずかに外反させる。

SH12出土土器は、須恵器に蓋A・杯Aがみられず、蓋B・C、杯B・Cで構成される。また、81は径高指数36と、やや大きい値を示すことから、杯Cの中でも古相の一群と考えられる。土師器にも皿Aが認められることから、SH12出土土器は、蓋Cを含むものの混入の可能性もあり、

浦入Ⅱ期に位置づけたい。

竪穴式住居跡 S H01(図版第83-89~92) 出土遺物としては、土師器杯B(89)・甕B(91・92)・壺(90)などがある。89は小片である。磨滅気味のため調整は不明瞭である。91・92は、口縁部内面に強いヨコナデが認められる。90は、壺または甕の口縁部の破片である。外面に1~2mmの砂粒が動いた痕が認められる。

S H01出土土器には、須恵器が含まれないため、ただちに時期を決定できないが、土師器杯B・甕Bが含まれることから、浦入Ⅱ期に位置づけられる。

竪穴式住居跡 S H07(図版第83-93~96)

出土遺物としては、須恵器高杯(93)、土師器杯A(94)・皿A(95)・甕B(96)などがある。93は脚部を欠損するが、やや深手の杯部を有する。94は体部外面にユビオサエの痕跡を残し、口縁部外面に強いヨコナデを施す。95は口縁端部を外方へつまみ出すようにおさめる。96は、甕もしくは甌と考えられる。口縁部内面に強いヨコナデを施す。

S H07出土土器は、時期の明らかな須恵器が出土していないが、土師器皿A・甕Bが含まれることから浦入Ⅱ期に位置づけられる。

テラス状遺構 S H13(図版第84-97~129) 出土遺物としては、須恵器蓋B(97~99)・蓋C(100)・杯B(101~107)・杯C(108~111)・甕(114)・壺(112・113)・小型壺(113)、土師器杯A(116~118)・杯B(121)・椀A(119・120)・皿A a(123)・皿B(122・124・125)・甕B(126~128)、竈(129)などがある。

杯Bは3形式とも認められる。101は底部から口縁部に至る器形がゆるやかなカーブを描く杯B aである。102・103は、平底気味の底部に外上方にのびる口縁部をもつが、底部と口縁部の境が不明瞭な杯B bである。104~107は平底の底部に外上方に向かって体部が直線的にのび、口縁端部がわずかに外反する杯B cである。108~111は、平底の底部に外上方にのびる口縁部を有するが、口縁部はあまり外反気味とならない。いずれも、高台内端面で接地する。112・113は、壺の口縁部の破片と考えられる。114は甕であるが、土坑S H21出土の71と同様、非常に小型化したものである。115は内傾する口縁部に直径3mmの小孔が穿孔されたものである。全形・用途などは不明である。

116・117は口縁部がヨコナデによってわずかに屈曲するもので、椀の可能性もある。118は丸底を呈し、口縁部にも明瞭なヨコナデは施されない。119・120は小片であるが、口縁部が内傾すると考えられる。121は口縁端部を外方につまみ出したような形状を呈する。122~125は、いずれも小片のため正確さを欠くが、123は皿A a、122・124・125は皿Bと思われる。125は口縁部外面にヨコナデを施し、口縁端部を内傾させる。126~128は口縁部内面にヨコナデが施されるが、口縁部の長さに違いがみられ、126・128はやや短い。口径は18~21cmにおさまり、法量差は認めにくい。129は竈の口縁部の破片の一部である。焼き口部などが残存しないため、全形は明らかでない。内面に、粘土紐の接合痕やユビオサエの痕などが明瞭に残る。掛け口部の内外面に強いヨコナデを施す。

S H13出土土器には、須恵器蓋B・蓋C・杯B・杯Cの各器種が認められるが、蓋Bや杯Bでも古相の杯B a・杯B bが少量しかなく、杯B c・杯Cが多い点から、浦入Ⅲ期に位置づけられる。ただし、土師器に小片とはいえ杯A・杯B・椀Aなどが多い点や、須恵器甕の破片が含まれる点などは、S H13出土土器が浦入Ⅱ期から連続していることを示すと考えられる。

土坑S K02(図版第84-130~139) 出土遺物としては、須恵器蓋C(130~132)・杯B(133)、土師器杯B(138)・杯C(134・135)・椀A(136)・甕B(138・139)などがある。131は口縁端部が内傾する面をなす。134・135は平底の底部に斜め上方に開く口縁部からなる。135は口縁部のない外面にヨコナデを施す。136は内湾気味の体部に、わずかに外反する口縁部からなる。椀Aとすべきか杯Aとすべきか判断に迷う。137は丸底気味の底部にヨコナデを施す口縁部からなる。138・139は小型の甕であるが、口縁部内面には強いヨコナデを施す。口縁部はあまり拡張されない。

S K02出土土器には、蓋Cが含まれるが、杯類は須恵器・土師器ともにやや古相のものが認められる。浦入Ⅱ期ないしⅢ期に位置づけられる。

テラス状遺構S H19(図版第85-140~168) 出土遺物として、須恵器蓋A(140)・蓋B(141・142)・蓋C(143~145)・蓋(146)・杯B(147)・杯C(148~150)・高杯(152)・壺(151)・練り鉢(153・154)、土師器杯A(155~157)・杯B(158~160)・皿B(161)・甕A(162)・甕B(163~166)・鍋C(167・168)などがある。

140は混入の可能性がある。141・142は内面にかえりを有するが、かなり退化しており、消失する直前の器形と思われる。蓋CはC a・C bともに認められる。146は扁平な天井部を持つことから、壺の蓋と考えられる。147はやや平底気味の底部に外上方に伸びる体部とほぼ垂直に立ち上がる口縁部を有する。器高がやや低めなのが特徴である。148・149は底部の小片である。150は平底の底部から斜め上方に直線的にのびる口縁部からなる。151は壺の口縁と考えられ、外面に沈線が1条めぐる。また、粘土の小塊が付着する。153・154は胎土・焼成などから同一個体と思われる。

155~157は杯Aである。いずれも口縁部外面にヨコナデを施すが、155の口縁部は内傾する。157の外面にケズリ調整が明瞭に認められる。158は内面に暗文が認められる。N地点出土土師器のうち、内面に暗文の認められた個体は158のみである。甕は162を除き甕Bである。甕の法量は大(口径23.6~26.3cm:162~164)・中(口径16.2cm:165)・小(口径13.8cm:166)の3種類がある。167・168は法量が若干異なるが、口縁端部をつまみ上げ、外面に明瞭な指押さえの痕跡を残す点で非常に類似した形態・技法を示す。

S H19出土土器には、古相・新相さまざまな時期の土器が混在した状況にある。最も新しく位置づけられる蓋C・杯Cなどから、浦入Ⅲ期に位置づけられる。

溝S D02(図版第85-169~172) 出土遺物としては須恵器蓋B(169)・杯B c(170)・小型壺(171)、土師器杯B(172)などがある。169は内面にかえりを持ち、擬宝珠状のつまみを有する。170はやや大型かつ厚手の器種である。体部中位に1条の沈線を施す。171は短い口縁部がわずかに外反し、球形の体部を呈する、小型の壺と考えられる。172は端部を丸くおさめる。

S D02出土土器は須恵器蓋B、土師器杯Bが含まれることから浦入Ⅱ期に位置づけられる。

テラス状遺構S H06(図版第85-173) 出土遺物としては、須恵器杯C、土師器片などがある。図示しえたのは、須恵器杯C(173)1点のみである。高台の低いものである。S H06出土の須恵器杯Cは小片であることから、正確な時期は不明であるが浦入Ⅲ期ないしⅣ期に位置づけられる。

テラス状遺構S H22(図版第86-174-196) 出土遺物としては、須恵器蓋C(174)・蓋(175)・蓋F(176)・杯B(177-181)・杯C(182-184)・椀B(185)・壺(186・187)、土師器杯A(191-193)・杯C(188-190)・甕A(195・196)・甕B(194)などがある。

174はやや厚手の蓋Cである。176は蓋Fと考えられるが、口縁部を欠損する。杯Bには3形式が認められる。177は口縁部は欠損するが残存する体部が内方へ屈曲することから、口縁部は内傾すると考えられる。あまり他に類例をみない。178は平底で、体部は外上方へ伸びるが、途中でいったん屈曲して口縁部に至る杯B bである。179-181は平底の底部に、外上方に直線的にのびる口縁部を有する杯B cである。185は端部を丸くおさめる。186は口縁部を欠損するが、短頸壺と考えられる。187は壺あるいは甕の口縁部の破片と考えられ、外面につたない波状文がある。

188-190は平底の底部に斜め上方に直線的にのびる口縁部を有する。法量から188と189・190に分けられる。191は口縁部外面に強いヨコナデを施し、明瞭な稜を持つ。192・193は口縁部がわずかに外反する。甕A・甕Bはともにほぼ同法量の中型の甕である。

S H22出土土器は須恵器杯B・杯Cのほか須恵器椀Bが認められることから浦入Ⅳ期に位置づけられる。やや古相を示す土師器杯Aなどは混入であろう。

テラス状遺構S H14(図版第86-197-図版第87-257) 出土遺物としては、須恵器蓋B(197)・蓋C(198-208)・杯B(209-215)・杯C(219-227)・皿A(218)・皿C(231-233)・高杯B(216)・椀C(234)・甕A(235・236)、土師器杯B(237・242)・杯C(238・240・241)・杯D(249)・皿B(243-248)・甕A(251)・甕B(250・253-255)・甕C(252)・鍋A(257)・甌(256)などがある。このほか、土馬(第32図2)、鞆の羽口(図版第145-1・11)などが出土した。

197は混入した可能性が高い。蓋CはいずれもC aであるが、208のように端部を屈曲させたものもある。なお、つまみを欠損する204-208は蓋Dの可能性もある。杯Bのうち、209-211は杯B b、212-215は杯B cである。また、底部の切り離し後の調整が若干異なり、209-211は切り離し後不調整、212-215はヘラ切り後ナデ調整を施す。216は高杯の脚部で、外面にヘラによる縦方向の直線を11条刻む。218は端部をやや内側に巻き込み、沈線状を呈する。219-227は器形から大きく2種類に分けることができる。1つは、220・227のように平底の底部に、ほぼ直立する口縁部を持つもの。もう1つは、斜め外上方に口縁部がのびるものである。後者の方が量的には多い。228-230はいずれも破片であるが、椀と考えられる。231-233は、非常に高い高台を有するが、全形をうかがえるような資料がない。234は底部に糸切り痕を残す。他の土器とは時期が異なり、S H14の最終的な埋没の時期を示すと考えられる。235は、短く直線的にのびる口縁部内面がわずかに肥厚する。口縁部外面に沈線が一条めぐる。236は長くほぼ直線的に口縁部がのびる。口縁部内面に突起状の稜を有するため、断面形が「y」字形を呈する。口縁部外面に

つたない波状文を施す。

237は底部と体部の境が不明瞭な小型の杯Bである。口縁部外面にヨコナデを施す。242は口縁部外面に強いヨコナデを施し、口縁端部を外方へつまみ出すような形状を呈する。238・240・241・243～248の杯C・皿Bは器高はほぼ2.3～3.0cmで揃い、調整手法も非常に類似するが、径高指数の差により杯Cと皿Bの区別をしている。249は杯Dの底部と考えられるが、体部の立ち上がりなどから碗の可能性もある。ただし、浦入遺跡では土師器の高台付き碗の確実な例は確認されていない。250は口縁部内面に強いヨコナデを施すが、肩部があまり張らず、法量的にも小型品である。251はやや薄手の甕Aである。252は口縁端部をやや上方につまみ上げる。253・254は口縁部内面に強いヨコナデを施す。255はあまり肩部が張らない。256は体部外面にユビオサエの痕跡がみられ、口縁部内外面にヨコナデを施す。257は鍋の破片である。小片のため口径の復原値を算出することができない。

S H14からは大量の土器が出土して、特に新しい碗C(234)を除けば、おおむね浦入Ⅲ期ないしⅣ期に位置づけられる。ただし、Ⅳ期に位置づけられる遺物が少ないことから、浦入Ⅲ期を主体とするのであろう。

テラス状遺構 S H20(図版第88-258～287) 出土遺物としては、須恵器蓋C(258)・蓋(259)・杯B b(275・276)・杯B c(267・268)・杯C(260～265)・碗A(269・270)・碗B(274)・長頸壺(271～273)・甕A(277)・甕B(278)、土師器杯A(284)・杯B(283)・皿B(279～282)・甕B(285)・鍋B(286)・甌(287)などがある。

258・259はともにやや扁平な蓋である。260～266はいずれも平底で、外上方にほぼ直線的のびる。263は、外面に火ダスキが認められる。267・268は、器高が低くやや皿に近い。269・270はともに口縁部が大きく外反しており、碗Aの口縁部と思われる。体部下半は丸味を帯びるようである。271～273は長頸壺の口縁部である。271は口縁部外面に稜を有し、中位に2条の沈線を施す。274は踏ん張り気味の、やや高めの高台を有する。275・276は底部が平底にならず、やや突出気味のものである。277は口縁端部内面が断面三角形を呈するような突起状に肥厚する。頸部外面に工具の当たった痕跡がある。278は、口縁部外面に1条の沈線状の段がある。

279～282は口縁部の形状にバリエーションがある。283はやや厚手、小型のものである。284はより古い時期のものが混入したと考えられる。285は口縁部内面に強いヨコナデを施す。286は口縁部内面に強いヨコナデを数条施すとともに、頸部外面に強くヨコナデを施す。頸部と体部の境に明瞭な稜を有する。287は、口縁端部をややつまみ上げ気味にする。図示した破片には把手はみられないが、本来は把手を有していたと考えられる。

S H20出土土器は、碗A・碗Bを含むことから浦入Ⅳ期に位置づけられる。

テラス状遺構 S H23(図版第88-288～298) 出土遺物としては、須恵器蓋C(288・289)・杯B(293・294)・杯C(291・292)・皿A(290)・碗B(295)、土師器杯B(296)・鍋A(298)・壺(297)などがある。

288は、口縁端部がやや屈曲するC bである。290は非常に器高の低い皿Bである。292～294は、

ほぼ同法量の杯B・杯Cである。295は、細片のため口径などは計測できない。端部内面に沈線状の段がある。296は口縁部にヨコナデ調整を施す。297は、短く口縁部をほぼ真上に立ち上がる。体部は球形を呈すると考えられる。

S H22出土土器は、椀Bが含まれることから浦入IV期に位置づけられる。

e. 包含層出土遺物(図版第89～94)

N地点の包含層から出土した遺物は相当量に上るが、弥生時代から平安時代にかけての遺物約200点を図示した。

①弥生土器・古式土師器(図版第89-1～図版第90-59)

弥生土器および古式土師器は、遺構を検出した弥生時代後期のものが非常に多く出土し、次いで顕著な遺構は検出されなかったものの、いわゆる古式土師器が多く出土した。図示にあたっては、両者を区別せず器種ごとに合わせて掲載した。

壺(1～13) 1・2は受け口状を呈する口縁部の破片である。3は二重口縁状を呈する口縁部の破片である。1～3はいずれも体部の形状は不明である。4はやや扁球形を呈する体部である。口縁部を欠損するが、直口壺と考えられる。5は口縁部がやや内湾気味を呈する長頸壺と考えられる。5・6は外上方に直線的にのびる口縁部を有する。8～11は、二重口縁状を呈する壺である。いずれも口縁端部に面を持ち、外面に明瞭な稜を持つ。いわゆる山陰系の壺と考えられる。12は突出する壺の底部である。外面にミガキ調整を施す。13は壺の肩部と考えられる破片である。刻み目を施した突帯が1条めぐる。

甕(14～36) 14は「く」字状に外反する口縁部と、体部外面にタタキ調整を施した甕である。15は口縁端部をつまみ上げた甕の口縁部の小片である。口径の復原値は算出できない。16～20は受け口状を呈する甕である。16は外面に列点を施す。17・18は壺の可能性はある。20は外面に擬凹線を施し、わずかに受け口状を呈する。21は単純「く」字形を呈する甕で、やや厚手である。22も口縁端部をややつまみ上げる。23・24は甕もしくは壺の底部と考えられる。25～29は口縁部が「く」字状を呈し、やや内湾気味に立ち上がるものである。口縁端部がわずかに肥厚し、頸部外面にヨコナデ調整を施す。26・27は体部内面にケズリ調整を施すようである。31～36は、口縁部が「く」字状を呈し、やや外反気味に口縁端部に至るものである。35は口縁部内外面にヨコナデ調整を施す。30は、やや突出気味の稜を有し、二重口縁状を呈する甕と考えられる。いわゆる山陰系の甕と考えられる。

高杯(37～46) 37・39は、流路跡S D01出土弥生土器の高杯Aに分類されるものである。39は口縁端部を欠損し、やや小型品である。38は同じく高杯Bに分類されるものである。40～43は、杯部口縁が斜め上方にのびる高杯である。杯底部と杯口縁部の境に明瞭な稜を有するもの(42・43)とそうでないもの(40・41)がある。端部の形状はさまざまで、42は口縁端部をつまみ上げる。44～46は高杯脚部と考えられる。

器台(47～50・55) 47は複合口縁状を呈する器台の口縁部である。外面には擬凹線を施さない。48は端部外面に面をもち擬凹線を施す。49・50は高杯あるいは器台の脚端部と考えられる。55は

鼓形器台の破片である。

鉢(51～54・59) 小型・ミニチュアと思われる鉢である。53・54は口縁端部が短く立ち上がり、体部が球形に近い形状を呈するものである。59は流路跡S D01出土弥生土器の鉢Dに分類されるものと考えられる。

蓋(57・58) つまみの調整手法が異なり、57はヨコナデ、58はユビオサエである。

脚台(56) 脚部をユビオサエで成形する。

②土師器(図版第90～60～図版第91～99)

ここでは飛鳥時代以降と判断される土師器について述べる。

杯(60～75) 60～65は杯Aである。60は底部外面にケズリ調整が施される。66～73は杯Bである。いずれも口縁端部にヨコナデを施すが、形状にバリエーションが認められる。66は、特に強いヨコナデが施され、端部が外方へ強くつまみ出されたような形状を呈する。74は杯E、75は杯Dである。

皿(76～79) 76～78は皿Bで、小片のため全体の形状が不明な点が多い。79は皿Aで、口縁部外面が強いヨコナデにより外反し、かつ底部との境に明瞭な稜を有する。

甕(80～93・99) 80は甕Cで、口縁端部をわずかにつまみ上げ、体部外面に斜め方向のハケ調整を施す。83・84・87は甕Aである。87は口縁端部外面がやや肥厚し、端部をつまみ上げたような形状を呈する。83・87は口縁部にヨコナデが施されるが、甕Bとくらべ、ナデの痕跡が明瞭ではないため甕Aに分類した。81・82・85・86・88～91は甕Bである。これらは口縁部の長さや肩部の張りなどから、口縁部が短くやや小型の81・82・86と、口縁部が「く」字状を呈し、肩部が張る85・88～91の2種類に分けられる。

甑(94・95) やや外反気味の、口縁部内外面に強いヨコナデを施す。95は内外面にハケ調整を施す。

鍋(92・93・96～98) 92・93は鍋Bである。口縁部内面に強いヨコナデを施し、肩部が張らない。96・97は、鍋と思われるが小片のため詳細は不明である。98は鍋Cで、口縁端部に面をもつ。99は体部が球形を呈する鍋で、把手を有する。

③須恵器(図版第92～100～図版第93～192・図版第94～195～198)

古墳時代にさかのぼるものも含めて一括して説明する。

蓋(100～107・119～133) 100～107は蓋Aである。図示した土器は法量の点から大きく4種類に分けられる。口径14cm以上のもの(101・102)、口径13cm前後のもの(100・103・104)、口径11.5cm前後のもの(105・106)、口径10cm前後のもの(107)である。このうち、口径13cm前後のものより小さいものについては、同法量のものが竪穴式住居跡S H08・09・15で出土している。119～121は蓋Bであるが小片で、つまみの形状などは不明である。また、かえりも退化しており、短い突起状を呈する。122～128はつまみを欠損するが蓋Cと考えられ、122～124はC aに、125～128はC bに相当する。128は129同様、蓋Eである可能性もある。129は蓋Eで、口縁端部が大きく屈曲する。130は蓋C b、131は蓋C aである。132・133は蓋Dのつまみである。

杯(108~118・134~169) 108~118は杯Aである。108は口径10.1cmを測り、しっかりした立ち上がりを有し、口縁端部に段をもつ。古墳時代中期末のものであろう。109は口径15.3cmを測り、底部に回転ヘラケズリ調整を施す。110~116はおおむね同形同大で、口径11.2~12.8cmを測る。短い立ち上がりを有する。117・118は、110~116よりも口径が小さく、9.2~9.7cmを測る。受け部の立ち上がりも110~116よりも短い。110~118と同法量のもは、蓋A同様、竪穴式住居跡SH08・09・15で出土している。134~148は杯Bで、135・136は杯B a、134・137~142は杯B b、143~148は杯B cに細分できる。杯Bにみられるさまざまな形態を図示することができたと思う。137~139はやや直立する口縁部を有する。140~142は平底から斜め上方に立ち上がった後、再び屈曲して口縁部に至るものである。145はやや厚手の杯B cである。149・151~169は杯Cである。図示した個体はいずれも杯C aである。152は碗の底部の可能性もある。150は杯Cよりも杯Dに分類すべき個体であろう。

皿(170~172) 170~172はいずれも口縁端部内面に沈線を有する。170は高台を有さない皿A bである。171・172は皿B bである。

碗(173~185) 178は碗Aであるが、焼け歪みが著しい。173~176は碗Bでいずれも口縁端部内面に沈線を有する。179は碗Cで、底部糸切り、口縁部はやや内湾気味に立ち上がる。180は口縁部が水引き成形により、明瞭なヨコナデの痕を有する碗Dである。177は碗AまたBの底部かもしれないが、杯Cの底部の可能性もある。181~185は碗Cもしくは碗Dの底部と考えられる。

甕(195~198) 甕を4点図示したが、口縁部の形状の明らかでない197を除くと、同一形態のものは認められない。195は頸部からやや外反気味立ち上がった後、口縁端部に向かって内湾する形状を呈する。口縁部外面には3条の沈線を施し、それぞれの間に波状文を施す。最も下位の沈線の下にはカキメ状の施文が行われる。196は、単純に外反する口縁部を有し、外面に縦方向のタタキ調整とカキメを前面に施す。内面には当て具痕跡が明瞭に残る。197は、体部外面に縦方向のタタキ調整を施すが、内面の当て具痕跡がやや不明瞭にみられる。198はやや外反気味の口縁部に口縁端部を垂下させて面を作る。口縁部は無文である。体部外面に格子目状のタタキ調整が施され、内面の当て具痕跡がやや不明瞭にみられる。

その他(186~192) 186は脚台付き碗の碗部と思われる。外面にカキメ・列点文・カキメを上から順に施す。187は高杯の脚部と思われる。長方形のスカシが四方に付くと考えられる。188・189は甕の体部である。188は脚台を有する。190~192は長頸壺である。190は口縁部から体部最大径付近にかけて残存する。口縁端部はつまみ上げる。頸部に沈線を2条施す。191・192は肩部ないし体部の破片であるが、ともに体部最大径付近に沈線2条を施して区画した内部に列点文を施す。

④その他

白磁(193) 口縁部付近の破片である。玉縁が大きく膨らむ型式である。

黒色土器(194) 底部を糸切りによって切り離す。口縁部はやや内湾気味に立ち上がる。

第4節 B 地点の出土遺物

B地点出土土器は、飛鳥時代から中世にかけてのものがあるが、出土量はそれほど多くない。

テラス状遺構SH01(図版第97-1~6) 出土遺物としては、須恵器杯A(1)・杯B(2・3)・椀(4)、土師器甕B(5)・甕C(6)などがある。1はほぼ平底化した底部をもち、受け部の上端と立ち上がりの上端がほぼ同じ高さになる。2・3はやや丸底気味の底部に、直立する口縁部を持つ。口縁部はわずかに外反する。3はわずかに平底状を呈する。4は底部に糸切り痕を残し、椀Cあるいは椀Dと考えられる。5は内面に強いヨコナデを施す。口縁部はやや短めである。6は口縁端部を内上方へつまみ上げ、端面は外傾する。

SH01出土土器は複数の時期に及ぶが、浦入Ⅱ期ないし浦入Ⅳ期のものが主体のようである。

テラス状遺構SH02(図版第97-7~14) 出土遺物としては、須恵器蓋Ca(7)・杯C(8)、土師器杯A(10)・杯B(9)・杯C(11・12)・皿B(13)・甕(14)などがある。7は完形品であるほかは細片である。SH02出土土器は、須恵器蓋Caや杯C、土師器杯Cなどが含まれることから、浦入Ⅲ期を前後する時期に位置づけられる。

テラス状遺構SH03(図版第97-15~28) 出土遺物としては、須恵器蓋(15)・杯B(16・18)・杯C(20~22)、土師器杯A(25)・杯B(24)・杯C(23)・甕B(26・27)・鍋A(28)などがある。15は口縁端部を欠損する。16・18は底部がやや丸味を帯びる平底状を呈する。17は底部を欠くが、高杯の杯部の可能性がある。19は口縁部が直線的にのびる杯である。20は底部が欠損するが、剝離状況から高台を有する杯Cの破片であることがわかる。23は斜め上方に口縁部がのびる小型の杯Cである。24はやや丸底気味の底部に、強いヨコナデによって大きく外反した口縁部を有する。26・27は口縁部内面に強いヨコナデを施す。口縁部が大きく拡張される。28は口縁端部をややつまみ上げ気味にし、口縁端面が外傾する。

SH03から出土した遺物については、須恵器杯Bb・杯C、土師器杯C・甕Bなどが認められることから浦入Ⅲ期を前後する時期に位置づけられる。

土坑SH04(図版第97-29~37・図版第98-38~48) 出土土器としては、須恵器蓋C(30)・杯A(29)・杯C(32~34)・壺(35~37)、土師器杯A(42)・杯B(38~41)・甕A(44)・甕B(43・45)、中世須恵器(47)、瓦質土器(48)などがある。

29は、受け部がわずかに立ち上がる。底部は、切り離した後、手持ちによる粗いヘラケズリもしくはヘラで掻き取ったような痕跡が認められる。30は非常に扁平な蓋Cで、つまみを欠損する。32・33はほぼ同形同大の杯Cである。34は杯Cの底部と考えられる。35は高台を有し、長頸壺もしくは短頸壺の底部と考えられる。37は高台を持たず、体部が球形を呈する。長頸壺の底部であろうか。36は直口気味の甕Bもしくは壺の口縁部である。

38~41はやや小型の杯Bで、小片のため口径の復原が困難である。42は外面にユビオサエ痕が認められる。44は口縁端部に面を有する。43・45は口縁部内外面に強いヨコナデが施される。45は口縁部があまり長くないが、43は長く拡張される。46は甕もしくは甑の把手と考えられる。

47は中世須恵器の鉢である。小片のため傾きの復原がやや難である。48は瓦質土器の鍋である

受け口状を呈し、端部は面をなす。頸部・体部外面にユビオサエ痕が認められる。

S H04から出土した土器は、古相の29や新しく位置づけられる47・48を除くと、浦入Ⅲ期を前後する時期に位置づけられる。

包含層(図版第98-49~70・第21図71~73)出土遺物としては、須恵器蓋C(53・54)・杯A(49)・杯B(50・51)・杯C(52・55・56)、土師器杯A(65)・杯B(61~64)・皿A(59・60)・甕B(66~68)・甌(69)・鍋B(70)、瓦質土器(71~73)、中世須恵器鉢(57・58)などがある。

49は非常に薄手で、立ち上がりも非常に低い。50・51も非常に薄手で、小片のため全形が明らかでないが、杯Bの底部と考えられる。52は非常に扁平な高台を貼り付けており、小型の壺の底部かもしれない。53・54は口縁端部が垂下する。

59・60は丸底気味の底部に、強いヨコナデによりやや外反気味を呈する口縁部を有するが法量が大きく異なる。61・62は口縁部外面のヨコナデが顕著に認められる。64は口縁端部を丸くおさめる。甕Bのうち、66・67は頸部が「く」字状に屈曲するのに対して、68はゆるやかに外反する。69は口縁部の一部しか残存しないが、口縁部がほとんど傾かないことから甌と考えられる。70は口縁部内面に強いヨコナデを施す。頸部外面には指頭圧痕が明瞭に残る。

57・58は、中世須恵器の鉢と思われる。58は片口である。

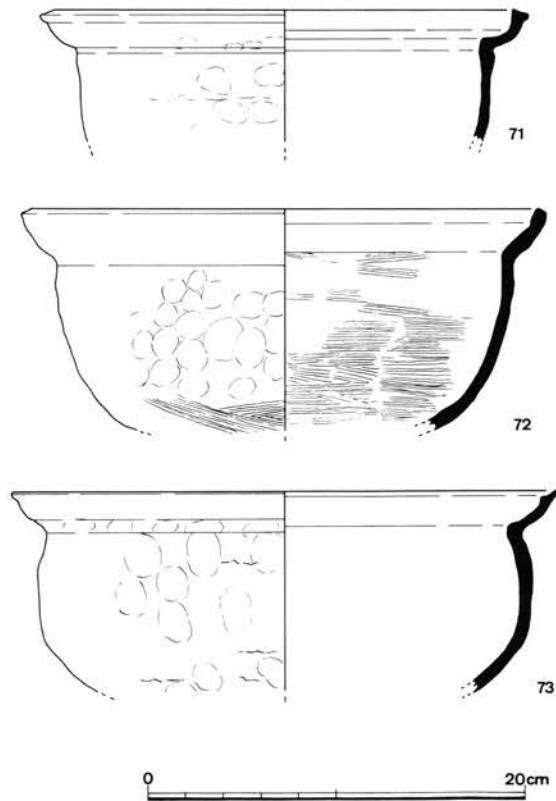
71~73は、瓦質土器鍋である。いずれも受け口状を呈するが、口縁部の形状により、71・72と73の2型式に分けられる。71・72は口縁部端部に面を有する。S H04から出土した48に類似する。73は口縁端部内面に突起を有し、断面形は「y」字形を呈する。71~73は外面にユビオサエ痕を明瞭に残し、71・73は内面にはナデ調整を施す。72は底部外面と体部内面に横方向のハケ調整を施す。

(筒井崇史)

第5節 A 地点出土土器

A地点から出土した土器は、奈良時代のものが大半である。

テラス状遺構S H03・掘立柱建物跡S B01(図版第99-1~11) 掘立柱建物跡S B01の柱穴出土遺物としては、須恵器蓋(2・4)・杯C(5・6)・甕(9)などがある。また、テラス状遺構S H03出土遺物としては、須恵器蓋B(1)・蓋(3)・杯C(7)・甕(10)、土師器鍋A(11)などがある。



第21図 B地点包含層出土遺物実測図

1は内面にかえりを有する。2は口縁端部が屈曲する。3・4はやや大型の蓋で、つまみを欠損するが、土坑SH09出土の蓋D(164)などと同法量であることから、蓋Dの可能性が高い。8は水瓶の一部と考えられる。9は口縁部のみの破片であるが、口縁端部を垂下させて面を作る。10は甕の底部である。外面に格子目状のタタキ調整を施す。内面はナデで消されているが、当て具痕が残る。11は口縁端部の面を持たせた鍋である。頸部外面には指頭圧痕が残る。

SB01出土土器は、浦入Ⅲ期に位置づけられる。ただし、土坑SH09出土例と同法量の蓋が存在することから、浦入Ⅳ期に下る可能性もある。また、SH03出土土器には蓋Bが含まれるが、遺構の項でも述べたように、SB01と同時期と考えられることから浦入Ⅲ期、あるいはⅣ期に位置づけられよう。

掘立柱建物跡SB02(図版第99-12~19) 出土遺物としては、須恵器蓋B(12・13)、土師器杯B(17・19)・杯C(18)・皿Ab(15)・甕A(16)などがある。いずれも柱穴から出土した遺物のため細片が多い。

12・13は内面にかえりを持つ。15は口縁部外面に強いヨコナデを施し、体部外面に明瞭な稜を持つ。口縁端部内面に凹線状にナデが施される。16は口縁部にわずかにヨコナデを施すが、甕Bに見られるような段状を呈さない。体部には指頭圧痕が残る。18は強いヨコナデによって大きく外反する。17・19の口縁端部はいずれも斜め上方につまみ出したように仕上げる。19は底部外面にケズリ調整の痕跡が明瞭に認められる。

SB02出土遺物には、須恵器蓋B、土師器皿A・杯Bなどが認められることから浦入Ⅱ期に位置づけられる。

各柱穴出土土器(図版第99-20~40) 柱穴から出土した遺物としては、須恵器蓋(20・24・30・31)・蓋D(26)・杯B(27・32・37)・杯C(25・28・29・34~36・38~40)、土師器杯C(21・22)・鍋B(33)などがある。柱穴から出土した遺物のため細片が多い。

26は口縁端部内面に強いヨコナデが施される。図示した杯Bには2種類ある。27・37は平底に外上方に直線的にのびる口縁部を有する。32はやや丸底気味の平底である。口縁部・体部の形状は不明である。杯Cは9点図示したが、細片が多く、詳細は不明である。平底と外上方にのびる口縁部からなる。高台の多くは踏ん張り、高台の内側に明瞭なヨコナデが施される。21・22は、口縁部外面に強いヨコナデを施す。33は口縁部内面に強いヨコナデを施す。小片のため口径の復原値の算出も不可能である。

テラス状遺構SH04(図版第100-41~60) 出土遺物としては、須恵器蓋(43・44)・蓋Ca(41・42)・蓋D(45・46)・杯Bb(51)・杯C(47~50)・高杯B(53)、土師器皿Ab(56)・皿B(54・55)・甕A(60)・甕B(57~59)などがある。

47~50はそれぞれ形状が異なる。47・50は平底の底部に斜め上方に向かって直線的にのびる口縁部を有する。47は径高指数38を測るやや深手なもの、50は径高指数25を測る浅手なものである。48は平底に外上方に向かってやや外反する口縁部を有する。49は平底気味の底部に外上方に向かってのびる口縁部を有する。体部・口縁部はゆるやかな「S」字状を呈する。底部と体部の屈曲

部付近には回転ヘラケズリが施される。小型ではあるが、椀Aに近い特徴が認められる。径高指数も40を測る。51は底部平底で体部が斜め上方にのび、やや外反気味の直立する口縁部からなる。52は壺の底部と考えられる。53は口縁端部を欠損する。

54・55は平底に外上方にほぼ直線的にのびる口縁部を有する。55は口縁端部をわずかに外反させる。56は平底気味の底部に、口縁部外面を強いヨコナデによって外反させた口縁部を有する。54～56はほぼ同法量である。57～59は口縁部内面のヨコナデがあまり強くない。60は口縁端部内面にのみ、やや強めのヨコナデを施す。類似した器種にSB02から出土した甕A(16)がある。

SH04出土土器は、やや古相の須恵器杯Bb(51)・杯C(49)を含むが、須恵器杯Cや土師器杯Cなどの存在から、浦入Ⅲ期に位置づけられる。

テラス状遺構SH05(図版第100-61-66) 出土遺物としては、須恵器蓋C(61・62)、土師器杯A(63)・甕A(64)・鍋B(65・66)などがある。

61・62は口縁部がやや弱く屈曲する。63は底部を欠損するが、杯Aと考えられる。外面にユビオサエ痕が認められる。64はやや長めの口縁部を有する。口縁端部内面にヨコナデを施しており、前述の16・60などと同形態の甕であろう。65・66は口縁部内面に強いヨコナデを施す。

SH05出土土器には土師器杯Aが含まれるが、須恵器の特徴から浦入Ⅲ期に位置づけられる。

溝SD01(図版第100-67-77) 出土遺物としては、須恵器蓋(69)・蓋Ca(67・68)・蓋F(70)・杯(75・76)・杯C(72-74)・椀(71)、土師器鍋(77)などがある。

67は笠形を呈し、68は扁平ながらも口縁部が顕著に屈曲しない。70は短頸壺の蓋と考えられる。71は底部を欠くが、椀と考えられる。大きく外反する口縁部を有する。75・76は底部を欠くが杯Bまたは杯Cと考えられる。72～76は、いずれも平底の底部と外上方に直線的にのびる口縁部を有する。77は磨滅が著しく調整は不明である。

SD01は竪穴式住居跡SH05と重複関係にあり、どちらが先行するか明らかではないが、遺物の点では類似点も多い。SD01出土土器は浦入Ⅲ期、あるいは須恵器椀の存在を重視して浦入Ⅳ期に位置づけられると考えられ、2時期にわたって機能した可能性もある。

テラス状遺構SH08(図版第101-78-104) 出土遺物としては、須恵器蓋(79-81・84・85)・蓋C(78・82・83)・蓋F(86)・杯B(88-90)・杯C(91-93)、土師器杯A(102)・杯C(97-99)・杯D(95・96)・皿B(100)・甕A(101)・鍋A(103・104)などがある。

79-81・84・85はつまみを欠損するが、いずれも蓋Cと考えられる。78-85は口縁端部の形状から細分することができる。口縁端部が明瞭に屈曲して下方へ垂下するもの(78・79・81・82・85)と、口縁端部が面を持つもの(80・83・84)である。また、天井部が笠形を呈するもの(80-85)と、やや扁平なもの(78・79)とがある。86は短頸壺の蓋と考えられるが、つまみを持たない可能性が高い。口縁端部に面を持つ。87は体部下半以下を欠損する短頸壺である。肩部に沈線が1条めぐる。88は、平底に近い底部と外上方にのびる体部からなる小片である。89・90は平底の底部と外上方にのびる口縁部からなる。89は口縁部にやや強めのヨコナデを施す。90は口縁部が大きく外に開く。91-93は平底の底部に外上方にのびる口縁部と、断面台形の高台を有する。94

は器種不明である。壺の口縁部の可能性も考えたが、内面がやや粗雑に仕上げられていることから、脚台と判断した。

95・96は高台を有する。体部・口縁部の形状が不明であるが、浦入遺跡では全体の形状をうかがえる資料はない。97～99は口縁部の形状がそれぞれ異なる。100は口縁端部が外方へ引き出されたような形状を呈する。101は口縁部内面に軽いヨコナデが1条施される。102はやや浅めの杯Aである。103・104は、どちらも口縁端部に面を持ち、内面に強いヨコナデを1条施す。103は口縁部内面にハケ調整が認められる。103の体部外面が横あるいは斜め方向のハケ調整が施されるのに対して、104は外面に縦方向のハケ調整が施される。

S H08出土遺物は、須恵器蓋C・杯C、土師器杯Cなどから浦入Ⅲ期に位置づけられる。土師器杯Aは混入の可能性が高い。

テラス状遺構 S H06(図版第101-105) 出土遺物は少ない。図示したのは須恵器杯C 1点(105)のみである。時期を判別するのは困難であるが、浦入ⅢないしⅣ期に位置づけられよう。

不明遺構 S H12(図版第101-106・107) 出土遺物としては、須恵器杯C(106)・椀(107)などがある。106は体部周縁からかなり内側に高台が貼り付けられる。107はしっかりした高台を有し、杯Cの高台に比べやや大型であることから椀の底部と考えられる。時期は不明であるが、107が椀の底部とすれば、浦入Ⅳ期に位置づけられるか。

不明遺構 S H11(図版第101-108・109) 出土遺物としては、須恵器杯B(108)・杯C(109)などがある。108は口縁部がやや外方に屈曲する。109はわずかに残る底部に高台の剝離した状況が確認できる。時期を判別するのは困難であるが、浦入ⅢないしⅣ期に位置づけられよう。

土坑 S K01(図版第101-110・111) 出土遺物は少なく、須恵器蓋(110)・杯C(111)を図示した。いずれも細片である。時期を判別するのは困難であるが、浦入ⅢないしⅣ期に位置づけられよう。

テラス状遺構 S H02(図版第101-112) 出土遺物は少ない。図示したのは土師器甕B 1点(112)のみである。時期は不明であるが、他の出土土器と大きく時期を隔てるものではないだろう。

テラス状遺構 S H10(図版第101-113) 出土遺物は少ない。図示したのは須恵器蓋C 1点(113)のみである。時期を判別するのは困難であるが、浦入ⅢないしⅣ期に位置づけられよう。

竪穴式住居跡 S H01(図版第102-114～160) 出土遺物としては、須恵器蓋C a(114～120・123)・蓋D(121・126)・蓋F(124・125)・杯C a(129～138・140～143)・杯C b(139)・椀A(144～148)・椀B(149)・甕(150・152)・長頸壺(151)、土師器杯A(153・154)・杯B(155・156)・皿B(157)・甕A(158～160)・鍋A(161)などがある。

114～119・123は口縁端部が明瞭に屈曲して下方に垂下するもので、天井部が笠形を呈するものが主体となる。120は口縁端部が下方に垂下しない。123は口縁部外面に強いヨコナデが施される。121は笠形を呈するのに対して、126は123同様、外面に強いヨコナデが施される。124は口縁部がやや内方へ屈曲する。128は形態・機能が全く不明のものである。ミニチュアの壺かと推定される。杯C b 1点を含む129～143は杯Cの特徴として、器高の高い143を除いて、ほぼ同じ様

な値を示す(平均値3.8cm・最大値4.2cm・最小値3.2cm)。これに対して口径から大きく3種類に分けられ、143を加えて、4種類の器種分化が認められる。浦入遺跡における他の遺構出土遺物の法量が2種前後であった点を考慮すると、法量による器種分化が進んだ段階といえる。143は器高が高いが同形同大のものはあまり浦入遺跡では見られない。144～148は同形のものはないが、ほぼ同法量である(平均値、口径17.5cm・器高5.8cm)。このうち147がやや大きい。148は底部を欠損するが、147とほぼ同大であろう。体部下半に回転ヘラケズリが施される。149は底部を欠損するが、口縁端部内面に沈線がめぐり、SH01では、149以外にも底部外面に墨書された椀Bが出土した(第25図2)ほか、口縁部の破片など多数を確認した。150は甕の口縁部である頸部の少し上に沈線が1条めぐり、152は甕の口縁部である。口縁端部は外傾する面を持つ。頸部付近に指頭圧痕が明瞭に見られる。

153・154はやや小型ながらも杯Aに分類できる。156は口縁部内面にヨコナデを施す。157は底部から口縁部への立ち上がりの屈曲が明瞭である点が特徴的である。158～160は法量の大きな個体は少なく、口縁部が短いものである。159は口縁端部内面にのみ、やや強めのヨコナデを施す。

SH01出土土器は、須恵器椀A・椀Bが多く含まれること、須恵器杯Cの法量分化が著しいことなどから、浦入IV期に位置づけられる。

土坑SH09(図版第103-162-183) 出土遺物としては、須恵器蓋Ca(162・163)・蓋D(164)・杯B(165-167)・杯C(168-175)・椀A(176・177)、土師器杯A(180)・皿B(178・179)・甕A(181)・甕B(182)・甌(183)などがある。

162はやや扁平、163は笠形の器形を呈する。どちらも扁平な宝珠つまみをもつ。164はつまみを欠損するが、環状のつまみが付くことが確認できる。口縁端部が屈曲する。167は165・166に比べて厚手の平底とやや外反気味の口縁部を有する。168～175は先の165～167と合わせて、先述したSH01出土の杯Cと同様に法量を見てみると、器高はSH01と同様の結果を示す(平均値3.8cm・最大値4.1cm・最小値3.3cm)。これに対して、口径から大きく2種類に分けられる。SH01と比較すれば、口径の小さいものが含まれる(168)一方、口径の大きいものは含まれない(SH01出土の141・142など)。176は体部下半を欠損するが、口縁部外面に強めのヨコナデを施して大きく外反する。177は口縁部が受け口状を呈する。体部外面には回転ナデの痕跡が明瞭に残る。高台は強く踏ん張り、内面に強いヨコナデが施される。法量はSH01出土のものとは比べると、器高はほぼ同じであるが、口径は3cm近く上回る。底部はヘラ切りのままである。

178の口縁端部がわずかに外反するのに対して、179はやや直線的な口縁部を呈する。180はSH01出土のものなどに比べて法量大きい。181は甕A、182は甕Bである。181は口縁部が直線的に外上方にのび、体部も肩部があまり張らない形状を呈する。182は口縁部が外反し、体部外面には整形時の指頭圧痕が明瞭に残る。183は甌であるが、残存率が低いため、図示した復原法量がもう少し小さくなる可能性がある。口縁部内外面に強いヨコナデを施す。本来は把手があったと考えられるが、実測した破片には把手部分が残存していなかったため図示していない。

SH09出土土器は、先のSH01と比較すると、法量の器種分化がSH01ほど顕著ではないが、

椀Aなどが含まれることから、浦入Ⅳ期に位置づけた上で、SH01よりも古く位置づけられるのではないだろうか。

土坑SK09(図版第103-184~188) 出土遺物としては、須恵器蓋(184)・杯B(185)・杯C(186)・長頸壺(187)・甕(188)、土師器甕A(189)などがある。図示した遺物はいずれも細片である。188の甕はもう少し口径が大きいかもしれない。

時期を判別するのは困難であるが、浦入Ⅲ期ないしⅣ期に位置づけられよう。

土坑SK05(図版第103-190・191) 出土遺物としては、須恵器杯D(190)・皿D(191)がある。190は高台を有する平底気味の底部から、外上方に向かって直線的にのびる口縁部からなる。杯Cあるいは椀Aとは、口径が底径の2倍以上である点や体部下半の丸味が見られない点などから区別される。191は非常に高い高台を持つ。190・191ともに、これまで述べてきた器種からの系譜的なつながりは明らかではない。

杯D・皿Dともに類例の多い器種ではないため、ただちに時期を決定することはできないが、底部に糸切り痕が認められないことや、浦入Ⅳ期とは異なる器形である点を考慮して、この2者の間に位置づけられると考え、浦入Ⅴ期を設定し、SK05出土資料をその標式と位置づけた。

不明遺構SK11(図版第103-192) 出土遺物は少ない。土師器鍋1点(192)のみ図示した。他の類例に比べ、非常に厚手の鍋である。

不明遺構SK06(図版第103-193) 出土遺物は少ない。須恵器杯B1点(193)のみ図示した。

溝SD02(図版第104-194~199) 出土遺物としては、須恵器蓋(194~197)・杯C(198)・高杯(199)などがある。いずれも細片で、全体の形状のうかがえる資料はない。197は口縁端部が屈曲する。198は高台内端面が接地する。199は杯部および脚部端部が欠損する。

SD02出土土器は、細片が多いため、時期の判別が困難であるが、浦入Ⅲないし浦入Ⅳ期に位置づけられよう。

包含層(図版第104-200~230) 包含層出土遺物は、N地点ほど多くない。出土遺物としては、須恵器蓋A(220)・蓋B(200・221)・蓋C(201・217)・杯B(203・218)・杯C(204~207・223・226)・杯D(227)・皿A(228)・皿B(230)・皿D(229)・椀(208)・短頸壺(209)・甕A(211)・甕B(210)、土師器杯C(212・213)・甕A(214~218)などがある。200~216はA-1地点、217~219はA-2地点、220~231はA-3地点出土である。

200は内面のかえりが非常に退化している。201・202は口縁端部が屈曲する。207は底部のみであるが、体部への立ち上がりやや丸味を帯びることや、高台が若干高めであることから、椀Aの底部の可能性もある。208は椀Aと考えられる個体の口縁部である。口縁端部をほぼ水平に外方へつまみ出す。209は短頸壺である。全体の形状をうかがえる資料で、肩部が大きく張り、直立する短い口縁部をもつ。体部外面下半に回転ヘラケズリ調整を施す。高台は内端面が接地する。210・211はともに口縁部の破片であるが、端部の形状に違いが認められる。210は口縁端部が水平となり、内方に断面三角形の突起状のふくらみがめぐる。211は口縁端部に外傾する面を持つ。212・213は底部にユビオサエ痕がみられる。214が短い口縁部を有するのに対して、215・216は

強いヨコナデにより拡張された口縁部を有する。

217は口縁端部がやや丸く終わる。219はS H01出土の椀Aに比べ器高がやや高めであるがほぼ同法量である。やや丸味のある体部と、ほぼ外上方へ直線的にのびる口縁部を有する。

220はA地点ではほとんど出土していない蓋Aである。221は内面にかえりを有する。やや高めの擬宝珠つまみを持つ。223は口縁端部外面に沈線状の段が見られ、端部を外方へわずかにつまみ出したような形状を呈する。227はやや高めの高台を底部が体部に屈曲する部分に貼り付けている。口径が底径の約1.9倍であることから杯Dに分類される。229は口縁端部が丸く肥厚する。底部外面にヘラケズリ調整が施され、小さな高台が貼り付けられる。230は高台端面に強いヨコナデを施すことにより、外端面が接地する。231は体部を欠損する長頸壺である。口縁部が外方へ屈曲して面をなす。

第6節 O - 1 地点出土遺物

1. 製塩炉第1群出土土器

出土した遺物は、製塩炉1あるいは2が使用されていた段階に、炉の前面の平坦面に流れ込んだと思われるものが大半である。また、製塩炉跡4からは、大型厚手の製塩土器容器I類とともに比較的まとまって須恵器・土師器などが出土した。

製塩炉4(図版第106-1~11) 出土遺物としては、須恵器杯B(1~3)・杯C(5・6)、土師器杯D(7)・甕A(9~10)などがある。

1~3はほぼ同形同大の杯Bである。外上方にまっすぐにのびる体部と底部からなる。4は杯または椀で、外上方にまっすぐにのびる体部と口縁部からなるが、体部下半以下を欠損する。外面に回転ナデ調整の痕跡が明瞭に残る。5は外上方に直線的にのびる口縁部を有する。6は径高指数がやや高い小型の杯Cである。体部はゆるやかな「S」字状を呈し、口縁部はわずかに外反する。高台は内端面が接地する。

7は高台が底部周縁よりもかなり内側に貼り付けられている。底部と体部へ立ち上がる屈曲部のみが遺存しており、全体の形状は不明である。8は平底に外上方に直線的にのびる体部を持ち、杯と考えられる。8~10は「く」字状に外反する口縁部をもち、法量は異なるが、同種の甕である。周辺でも同種の甕が多数出土したが、いずれも体部下半を欠損するため体部・底部の形状については不明である。長胴気味の丸底を呈するものと考えられる。調整は、基本的に体部外面にハケまたはナデ調整、内面にケズリ調整を施す。口縁部はヨコナデを施す。8・9は、体部外面に整形時のユビオサエ痕がみられる。口縁部が短いのが特徴である。

製塩炉4出土土器は、須恵器杯Bなどから浦入IV期に位置づけられる。

製塩炉1前面(図版第106-12~29) 製塩炉1の前面に形成された堆積層から出土したもので、須恵器蓋(12~15)・杯A(16・17)・杯B(18~20)・杯C(22・23)・皿A(21)・皿B(25)・鉢(24)、土師器杯A(26)・杯B(27)・甕A(28)・鍋A(29)などがある。

12~15は、いずれも口縁端部が強く屈曲し、端部が下方に垂下する。13はその形状からつまみ

を有さない蓋Eの可能性もある。16は口縁端部を丸く納め、底部外面は回転ヘラケズリを施す。器高がやや高く、古墳時代後期に位置づけられる。18～20はいずれも、外上方に直線的にのびる口縁部を有する。19は口径のわりに器高がやや低い点が特徴的である。21は体部中位に強い回転ナデ調整の痕跡が残る。22・23は、どちらも器高が高く、やや大型である。24は口縁部が内湾する鉢と考えられる。25は高台を有し、やや厚手の個体である。26は口縁部に強いヨコナデを施し、端部を外方につまみ出したような形状を呈する。27は丸底気味の底部から丸味を帯びて口縁部に至る。口縁部外面に強いヨコナデを施さない。28は口縁部が短く、口縁部内面に強めのヨコナデを施す。29は口縁部がやや厚手で、内面に強いヨコナデを施すが、段状にはならない。端部は丸くおさめる。

製塩炉1前面の出土土器は、古墳時代後期から浦入IVないしV期までおよぶ。また、製塩炉1は遺構に直接伴う遺物はないが、製塩炉4との関係などから、ほぼ同時期の浦入IV期もしくはやや後出するV期に位置づけられよう。

製塩炉2周辺(図版第106-30～33) 出土遺物として、須恵器蓋(30)・杯A(31)・甕B(32)、土師器甕B(33)などを図示した。

30は口縁端部が大きく屈曲する。31は立ち上がりを受け部がともにやや退化した形態を示す。32は口縁部がほぼ直立する。口縁端部はほぼ水平となる面をなす。頸部から肩部にかけてカキメが施される。33は口縁部が短く外反する。肩部があまり張らない器形を呈するようである。

製塩炉2周辺出土土器は、製塩炉1同様、各時期におよぶため、製塩炉2の時期は明らかでないが、製塩炉1とほぼ同じ浦入IV期ないしV期に位置づけられよう。

製塩炉3周辺(図版第106-34～38) 出土遺物としては、蓋(34)・皿B(35)・杯C(36)、土師器杯B(37)・杯A(38)などがある。

34は蓋Cと考えられる。35は口縁部が大きく開き、口縁端部内面に浅い沈線状のものがめぐる。36は厚手の高台が底部の周縁に対して大きくずれており、貼り付け方が粗雑である。37は口縁部外面に強いヨコナデを施し、口縁部全体が大きく外反する。38は口縁部にヨコナデを施すが、端部は丸くおさめる。

製塩炉3周辺出土土器も、製塩炉1同様、各時期におよぶため、製塩炉2の時期は明らかでないが、製塩炉1とほぼ同じ浦入IV期ないしV期のものと考えられる。

2. 鍛冶炉群・製塩炉第4群出土土器

遺構の項でも述べたように、製塩作業や鍛冶作業を行うたびに整地等が繰り返されたため、製塩炉跡第4群出土遺物は、大半が包含層出土である。出土遺物としては、須恵器・土師器・黒色土器のほか、灰釉陶器や白磁などがある。

S D01出土土器(図版第108-1～3・6～9) 出土遺物としては、須恵器壺(7)、黒色土器皿A(1)・椀A(2・3・6～9)などがある。

7は底部糸切りの小型の壺である。頸部から上を欠損する。黒色土器椀Aのうち、全体の形状

のうかがえる3をみると、底部からやや内湾気味に立ち上がる口縁部を有し、端部は丸く納める。6は口縁部内面にやや強いナデ調整を施す。1は両黒の皿である。

S D01出土土器は、ほぼ完形の黒色土器碗A(3)の径高指数が35と、深手なタイプであることから、浦入Ⅶ期に位置づけられる。

包含層(図版第108-10~36) 出土遺物としては、須恵器蓋B(11)・蓋C(12・13)・蓋(14)・杯B(29)・杯C(14~16・23・25)・碗B(21・22)・碗C(31~33)、灰釉陶器(24)、黒色土器皿(17)・碗A(5・10・18~20・26~28)、白磁(34)、緑釉(35)、土師器甕(36)などがある。

図示した須恵器のうち、11~16・21~23・25・29は、おおむね浦入Ⅲ期ないしⅣ期に位置づけられる。31~33は底部に糸切りによる切り離し痕を残す。上記の土器群よりも新しく、おおむね浦入Ⅵ期に位置づけられる。S D01出土土器群よりも古く位置づけられよう。

黒色土器碗Aは5・10を除いて細片が多く、全形をうかがえる資料はほとんどないが、おおむね、S D01出土のものにくらべ、口縁部の外反度が大きく、体部に明瞭な稜を有するという特徴がみられる。全形のうかがえる5・10のうち5はS D01出土の3に近いが、10は上記の細片に近い特徴を有する。さらに径高指数も37とやや大きい。以上のことから、これらの黒色土器碗AはS D01出土のものと同じ浦入Ⅶ期に位置づけられるが、型式学的にはより古相の一群と考えられる。

34は口縁端部外面の玉縁があまり発達しないものである。35は緑釉の底部である。36は口縁端部内面にやや強めのナデ調整を施す。

(筒井崇史)

3. 海浜部出土遺物(図版第114~120)

O-1地点では平安時代の浜辺が検出されており、ここから多量の遺物が出土した。出土遺物としては、縄文時代から平安時代にかけての石器・土器・製塩土器・木器等がある。ここでは海浜部出土の土器について、各時代ごとに説明する。なお、弥生時代後期・飛鳥~平安時代については、N地点における器種分類にしたがって説明を行う。

(1) 縄文時代(1・2)

1・2は突帯文土器である。1・2とも突帯は薄くて扁平である。1は突帯上に刻み目を施すが、2は竹管状の刺突を施す特異なものである。

(2) 弥生時代(3~8・10・11・14~16・20~33・35・58~60・64・65)

3・4は弥生時代前期のものである。3は壺で、頸部に沈線が確認できる。4は甕で、体部に一条の沈線、口縁端部に刻み目が確認できる。

5~8は弥生時代中期のもので、すべて壺である。5は頸部に櫛目文、口縁部端部に刻み目を施す。7は口縁端部に3条の凹線文、口縁部内面には扇形文を施す。8は口縁部内面に粘土粒の貼り付けがみられる。

14~16・20~35・64・65は弥生時代後期のものである。10・14は壺B1で、口縁端部の拡張部はナデで仕上げる。16は口縁部のみの残存であるが、壺であろう。20~27は甕A1である。口縁端部を内傾気味に拡張する20、口縁端部を外傾気味に拡張する21~27があり、24~27では口縁端

部が大きく拡張される。25・26には細くて浅い疑凹線文が施され、端部を薄く尖り気味に仕上げられる。30～33・64・65は甕A 2である。64・65は小型のもので、65では口縁端部の拡張は不明瞭である。28・29は甕Aであるが、磨滅が著しく疑凹線文の有無は不明である。34は甕Bで、外面はタタキを施す。35は34の底部であろう。34・35ともチャートの円礫を含む特徴的な胎土をもつ。58・59は蓋である。

(3)古墳時代(9・11～13・17～19・36～57・61～63・91～96・104・105)

9・13・17～19は壺である。9は二重口縁状の壺で口縁端部に面をもち、垂下部には刻み目を施す。13は山陰地方に類例が見られるもので、細かい石英・長石を多量に含む特徴的な胎土をもつ。17～19は直口壺で、17は口縁端部に肥厚がみられる。38・40・41・43はいわゆる布留式の甕の特徴をもつものである。38・40は口縁端部に面をもち、41では肥厚が見られる。43はやや大きなもので、口縁端部はわずかに肥厚する。36・37は山陰系の甕で、口縁端部はまるくおさめられる。39・42～53は単純口縁の甕である。口縁端部には面を持つ42・51、肥厚する44、外側につまみ出す45・50・53などがある。12・54～57は高杯である。12は口縁部が大きく外反し、口縁端部は上方につまみあげられる。61は小型の器台、62・63は杯である。時期は9・12・13・17・36・37・38・40・41・61が古墳時代初頭から前期、ほかのものは57・63などが後期となるかもしれないが、大半が古墳時代中期のものであろう。須恵器には杯蓋(91～96)・杯身(104・10)・高杯(208・209)・提瓶(211・212)がある。

(4)飛鳥～平安時代

土師器杯A(66)・杯B(67～69)・杯C(70～73)・杯D(76)・杯E(75)・椀(74)・甕A(77・78・80・82・83)・甕B(81)・甕C(79・84・85)・鍋A(87)・甌(86・88～90)、須恵器蓋A(97～99)・杯A(106～114)・杯B a(141・153・154)・杯B b(142)・杯B c(143～151・156)・杯C(161～184)・蓋B(100～103)・蓋C b(135・136)・蓋D b(140)・椀A(186・187)・椀B(190・191)・椀C(192～199・203～207)・椀D(200～202)・皿A(155・157～160)・皿B b(188・189)・高杯B(210)・長頸壺B(213・214)・甕A(235)・甕B(219)・椀(152)・壺(185・220～227・229)・すり鉢(228)・須恵器双耳壺(216～218)、黒色土器椀A(259～265)・椀B(255～258)・椀C(254)・皿(266・267)がある。137は須恵器蓋C、138・139は須恵器蓋D、123は須恵器蓋FかG、118・126は須恵器杯蓋C aかD a、115～117・119～125・127～134は須恵器杯蓋C bかD b、242～247・249～253は底部を欠損するが黒色土器椀Aであろう。このほか、灰釉陶器壺(215・230)、緑釉陶器椀(231・232)、灰釉陶器椀(233～238)、青磁(271)、白磁椀(272～277)、東播系須恵器甕(239)、東播系須恵器鉢(240)、瓦器椀(248)、瓦器鍋(270)がある。

67・68は内面に暗文が施され、ともに外面にヘラミガキが確認できる。79は外面にタタキが施され、82の口縁端部に一条の沈線が施される。

須恵器蓋A・杯Aはほとんどがヘラ切り後不調整であるが、114では回転ヘラケズリが施される。155・154では外面にカキ目が施される。178には底部外面付近にケズリが施される。158の口縁部内面には一条の沈線が施される。

緑釉陶器碗には底部に糸切り痕を残す231、ケズリ出し高台の232があり、231は軟質、232は硬質である。

灰釉陶器碗には糸切り後に高台を貼り付けており、内底面には釉が施されていない。234～238とケズリ出し高台の233がある。

254は底部に回転ヘラケズリを施した後に高台を貼り付ける。257は回転糸切り後に高台を貼り付ける。高台を貼り付けた部分の内側が溝状にケズリ取られている。黒色処理は黒色土器皿と黒色土器碗B(255～258)で内外面に施されているが、黒色土器碗A・碗Cは内面のみに黒色処理を行っている。

241は内外面にタタキを施した甕で、還元焰焼成はされず色調は褐色であるが、須恵器のように硬質の質感をもつ。

白磁碗は272がⅡ類、他のものはⅣ類である。247・276・277で内面にナデによる段、275の内面見込み部には沈線状の段が施される。時期は浦入Ⅰ～Ⅷ期のものがほぼ出土している。

(水野聡哉)

第7節 O-2 地点出土遺物

1. 遺構出土遺物

(1) 上層出土土器

土坑SK02(図版第127-16～18) 出土遺物としては、黒色土器碗A(16・17)・土師器鍋D(18)・須恵器甕など計5点あるが、須恵器甕は細片であり、図示しうるものは3点のみであった。黒色土器碗Aは3個体分ある。いずれも内面のみを黒色化し、ヘラミガキ調整する。外面は器表面の状態が良くないのではっきりしないが、口縁部付近をわずかにヘラミガキ調整するようである。16はほぼ完形に復原できるもので、口径16.2cm・器高4.4cm・底径6.4cmを測る。体部と底部境界に強くナデ調整がみられ、高台は明瞭に作り出されていない。17は底部のみが遺存したものであるが、底部の作りは16と同様に粗略である。底径は5.6cmを測る。土師器鍋Dは、口縁部の一部が残ったものである。口径33.2cmである。外面をユビオサエ後、ナデ調整するが、器面に凹凸を残す。一方、内面はていねいなハケ調整により平滑に仕上げられている。

SK02出土土器は、径高指数が27の黒色土器碗A(16)を含むことから、浦入Ⅷ期に位置づけられる。また、すでに検討したように、これらの土器群には12世紀中頃の実年代が与えられる。

(田代 弘)

(2) 下層出土土器

いずれも、最終焼土面上で検出した遺構から出土した土器を取り上げた。これらは、おおむね、遺構の層位的な関係や土器の特徴などから浦入Ⅲ期ないしⅣ期に位置づけられる。

土坑SK09(図版第140-3・4) 出土遺物のうち土師器杯B(3)・甕A(4)を図示した。3はやや平底状を呈する。4は1に類似した、「く」字状に屈曲する頸部をもち、直線的な口縁部を有する。端部が1よりも丸味をもっておさめられる。

溝SD05・06(図版第140-5～18) 出土遺物としては、須恵器蓋(5・6)・杯B(11)・杯C

(7～10)・皿A(12)、土師器杯A(14)・杯C(13)・甕A(16～18)・鍋A(15)などがある。

5・6はともに蓋の小片である。7は口縁端部を欠損する。やや器高が高めの個体である。高台端部内面が接地する。8～10は、平底を呈する底部に、外上方に直線的にのびる口縁部からなる。11は平底を呈する底部に外上方に直線的にのびる口縁部を有する。12はやや浅い皿Aである。

13は口縁部外面に強いヨコナデを施して、体部外面にわずかに稜を有する。14は体部下半を欠損する。おそらく混入であろう。15は口縁端部が外傾する面をもつ。小片のため復原値を得ることはできない。16～18はいずれも頸部が「く」字状に屈曲するものである。16は短めの口縁部を有し、内外面とも指頭圧痕が認められる。18は口縁端部内面をわずかにヨコナデを施す。

溝S D03(図版第140-19～22) 須恵器杯(19)、土師器杯(20)・甕(21)・鍋B(22)などがある。

19は底部を欠損するが、杯Bまたは杯Cと考えられる。20は口縁部内外面に強いナデ調整を施しており、体部にくらべ器壁の厚みが薄くなる。21は「く」字状に屈曲して、口縁端部を上方につまみ上げる。端部は丸くおさめる。22は口縁端部内外面に強いヨコナデを施す。

溝S D01(図版第140-23) 須恵器・土師器などが出土したが、須恵器杯1点(23)のみ図示した。

溝S D08(図版第140-24) 須恵器・土師器などが出土したが、土師器甕B 1点(24)のみ図示した。口縁部が長く、外反する。

製塩炉跡S X14(図版第140-25) 須恵器・土師器などが出土したが、土師器甕A 1点(25)のみ図示した。口縁部が長く、外反する。

土坑S K06(図版第140-26) 須恵器・土師器などが出土したが、土師器甕A 1点(26)のみ図示した。頸部が「く」字状に屈曲するもので、やや短い口縁部がつく。

(3)最下層出土遺物

掘立柱建物跡S B01(図版第140-1・2) 出土遺物のうち、土師器甕A 2点(1・2)を図示した。1は「く」字状に屈曲する頸部をもち、直線的な口縁部を有する。口縁端部にやや内傾する面をもつ。2はゆるやかに外反する口縁部をもち、端部をわずかにつまみ上げる。

出土遺物から時期は明らかにできないが、遺構の層位的な関係から浦入Ⅲ期～Ⅳ期に位置づけられる。

2. 包含層出土遺物

各包含層からも多量の遺物が出土した。包含層出土遺物のうち、O-2地点の地区割りのⅡライン以北については、包含層があまり厚くないので一括して示し、Ⅱライン以南については各出土層位ごとに示す。

O-2地点北半出土遺物(図版第123-1～39) 出土遺物としては、須恵器蓋(1・2)・杯B(3)・杯C(4・5・7～10・12～18)・椀C(6・11)・甕(20・22・23)・壺(21)、土師器杯C(24)・杯D(25)・杯または椀(28～33)・甕(35～38)、黒色土器椀(26・27)、白磁椀(39)などがある。このうち、26・27・29・31・32・35は製塩炉S X13周辺で出土したもので、その他のものは包含層出土である。

1・2は口縁端部がわずかに屈曲する。3～19は杯B・杯C・椀Cなどであるが、大半が小片のため、不明な点が多い。杯Cは、高台が踏ん張り気味のものや、内方へ傾斜するものなどがみられる。6・11は類似した形状を呈するが、11は見込み部分にやや強くナデ調整が施される。18は小型の壺の底部の可能性もある。19はやや細めの高台を有し、高台の内側に糸切り痕が残る。21は長頸壺の底部と思われる。20・22はやや外反気味の口縁部に、端部がやや斜め下方もしくは下方に垂下させるものである。端部に明瞭な面を有する。23は甕の頸部の破片である。

24は平底の底部に、斜め上方に直線的にのびる口縁部を有する。外面にユビオサエ痕が認められる。25はやや高めの高台を有する。28～33はいずれも小片であるが、28・29は高台を、30～33は平高台を有する杯または椀である。35・36は口縁部が比較的短いもので、口縁端部も丸くおさめる。38は、頸部が「く」字状に屈曲し、やや長めの口縁部を有する。37は口縁端部をやや内方につまみ上げ、端部が外傾する面をなす。体部外面にタタキ調整が施される。

26・27・34は内面のみ黒化処理が施される。26は外面に回転ナデ調整の痕跡が明瞭に残る。

39は口縁端部外面の玉縁があまり発達しない。

O-2地点北半出土土器は、図示した遺物に限っても、浦入Ⅲ期ないしⅣ～Ⅷ期に及ぶ。

暗茶褐色土層(第1層、図版第125-1～39) 出土遺物としては、須恵器蓋C(2～4)・蓋F(1)・杯C(5～8)・椀B(10)・皿A(11)・皿D(12)・短頸壺(13)、土師器杯(15～20)・甕(32～34・36・37)・鍋(35・39)、黒色土器椀(21～24・28・30・31)、瓦器椀(26)などがある。

1は短頸壺の蓋と考えられる。2はやや扁平な器種形を、3・4は笠形を呈する。5～8は底部に高台を貼り付ける。小片が多い。9は杯と考えられるが底部を欠損する。10は体部中位に明瞭な稜を有する。12は底部からわずかに湾曲しながら口縁端部に至り、高台を有する。13は短頸壺の口縁部、14は壺の底部である。

15～20は杯である。口縁部が斜め上方に開き器高の高い15・16、器高がやや低く皿に近い17・18、口縁部が大きく開く19・20、の大きく3タイプがある。25は底部を欠損するが椀と考えられる。27は椀の底部と考えられる。29は杯の底部と考えられる。19・20のような杯の底部であろう。甕は、口頸部の形状から大きく、頸部がゆるやかに口縁部へと至るもの(32・36・37)と、「く」字状に屈曲して、口縁部も直線的なもの(33・34)、の2タイプが認められる。前者は法量的にも小さく、後者は大きい。35・39はほぼ同型の鍋と考えられ、頸部が「く」字状に屈曲することや外面にユビオサエの痕跡が認められるなど形態の特徴が類似する。

21～24は黒色土器椀であるが、いずれも底部を欠損する。内面にわずかにミガキの痕跡がみられる。28・30・31は黒色土器椀の底部である。底部には糸切り痕が残る。26は瓦器椀である。口縁部に強めのヨコナデを施す。

暗茶褐色土層出土土器には、浦入Ⅲ・Ⅳ期とした須恵器・土師器が多く含まれるが、明らかに後出する黒色土器や瓦器が認められる。特に黒色土器椀Aは、上層遺構の土坑SK02出土の黒色土器椀Aと類似した特徴を有しており、黒色土器や瓦器は、SK02などと同時期の浦入Ⅷ期に位置づけられる。

黒褐色土層(第2層、図版第130-1~49) 出土遺物としては、須恵器蓋(2・3・6)・蓋D(4・5)・蓋E(1)・杯B(7~9)・杯C(10~19)・椀C(26)・皿D(20~22)・壺(23~25・27)、土師器杯B(33)・杯C(34)・杯(35)・杯D(36~38)・皿B(31・32)・甕A(39~41)・甕C(42・43・51)、緑釉椀(30)・瓦器椀(44)・黒色土器椀(46・47)・白磁椀(29・48~50)などがある。このうち、黒色土器椀や瓦器椀・白磁椀などは上層の暗茶褐色土層からの混入の可能性が高い。

1はつまみを有さない。2~6は蓋の破片である。7~19は浦入Ⅲ・Ⅳ期に多くみられる杯B・杯Cである。10は椀の可能性もある。20~22は底部から口縁部がのびて浅い皿状を呈し、高台を有する。ただし、22は椀などの底部の可能性もある。23~25・27は短頸壺あるいは長頸壺などの底部と思われる。

33は内面に暗文が認められる。35は杯あるいは椀の底部と考えられる。36~38は高台を有する杯または椀の底部である。35~38はいずれも小片のため全形などは不明である。39~43・51は甕である。甕は口縁部の形状から、頸部が「く」字状に屈曲するもの(39~41)、頸部がゆるやかに外反し、口縁端部がやや直立気味を呈するもの(42)、頸部が「く」字状に屈曲し口縁端部を大きくつまみ上げて面を持たすもの(43・51)がある。41は口縁部が39・40に比べかなり長い。43は外面にタタキ調整を施す。

30は緑釉の椀もしくは皿の底部と考えられる。29・48~50は白磁である。50はほぼ全形をうかがいうる資料で、口縁部外面に非常に大きな玉縁を有する。他のものは小片のため詳細は不明である。44は瓦器椀、46・47は黒色土器椀である。

28は製塩土器と考えられる粗製の土器である。内外面の調整や口縁部の処理などが粗雑である。

黒褐色土層出土土器には、暗茶褐色土層からの混入と考えられるものが含まれる。また、暗茶褐色土層同様、浦入Ⅲ・Ⅳ期の須恵器・土師器が多く含まれる。これらを除いて、黒褐色土層の時期を示す遺物としては、1・20~22・26・51などと考えられ、浦入Ⅵ期に位置づけられる。

黒色炭層(第4層、図版第134-1~図版第135-63) 出土遺物としては、須恵器蓋C(8)・蓋D(14)・蓋E(6・13)・蓋(1~5・7・9~11)・杯B(15・16)・杯C(18~36)・椀B(17)・椀(37・38)・皿A(40~42)・長頸壺(43~45)、土師器杯B(47~49)・杯E(52)・杯(50・51)・甕A(54~56・59)・甕B(57・58)・鍋A(61)・鍋B(60・62・63)などがある。

蓋は全形のうかがえるものが少ないが、6・13のように蓋Eが含まれる点は注意される。端部の屈曲するものが多く、笠形の形態を呈するものは7・8ぐらいである。15・16はほぼ同法量の杯Bである。類似した法量の杯BとしてはO-1地点鍛冶炉4出土の1~3などがある。杯Cのうち、18~22・25~28・31・36は、いずれも底部付近の小片である。23はやや外傾度の大きい個体で杯Dに近い。33~35は器高が5.5cm前後を測るやや深手の杯Cである。ほぼ同法量の、やや外傾度の大きい一群である。17はもう少し法量の大きい個体になるかも知れない。37は底部を欠損するが、椀と考えられる。38は同じく椀の底部と考えられる。39は頸部以上を欠損するが、小型の壺であろう。41・42はほぼ同法量の皿Aである。40はこれらよりもやや口径が小さく器高がわずかに高い。43は高杯の脚部である。脚部の中位に2条の沈線がめぐる。44は長頸壺の頸部で

あろう。頸部の中位に2条の沈線がめぐり、45は長頸壺もしくは水瓶などの頸部であろう。44同様、頸部に沈線が2条めぐり、非常に細く、直径は2.8cmを測る。46は甕の頸部である。口縁端部と、肩部以下を欠損する。

47～49はやや形状が異なるものの杯Bと考えられる。50・51は杯の底部である。52は外傾度の非常に大きな個体で、ロクロの回転を利用して成形された、いわゆる回転台土師器である。底部はヘラ切りの痕跡を残す。54～56は口縁部がやや短いのに対して、59は口縁部が長い。56・59は口縁端部内面にやや強めのヨコナデを1条施す。57・58は口縁部内面に強いヨコナデを施す。60は頸部外面にやや強めのヨコナデが施される。62は口縁端部外面に明瞭な面を有する。

黒色炭層出土土器は浦入ⅢないしⅣ期の須恵器・土師器を多く含むが、須恵器蓋E(6・13)や杯Dに類似した杯C(23)、土師器杯E(52)などが含まれることから、浦入Ⅴ期に位置づけられる。

焼土面下層(黄褐色整地土層、第6層、図版第141-1～39) 出土遺物としては、須恵器蓋C(4)・蓋(2・3・5・6)・杯C(7～23)・皿A(24)・高杯(25)・長頸壺(27)、土師器杯B(28～30)・杯または椀(31～33)・甕A(34～38)・甕B(39)などがある。

2・3は口縁端部が明瞭に屈曲する。7～23は小片が多く、全形をうかがえるのは7～13に限られる。これらは、平底気味の底部に斜め上方に立ち上がる口縁部を有する。12は底部から口縁部への立ち上がりが丸く、明瞭な稜は有さない。これらの径高指数を見ると、7は39、8～13は24～30、平均値は27となる。25は高杯の脚部の破片である。26は壺の底部と考えられるやや厚手の破片である。27は長頸壺の口頸部の破片である。口頸部の中位に2条の沈線が施される。

28～30は杯B、31・32は杯または椀と考えられるが、いずれも小片のため詳しいことは不明である。33は杯底部と考えられる。34・37はゆるやかに外反する口縁部を有する。37は頸部にやや強めのヨコナデを施す。35・36・38は「く」字状に屈曲する口縁部を有し、口縁部内面にヨコナデを施すが、甕Bほど顕著でない。39は「く」字状に屈曲する口縁部を有し、口縁部内面に強めのヨコナデが数条施される。

焼土面下層出土土器は、出土した須恵器の特徴から浦入Ⅲ期～Ⅳ期に位置づけられよう。

(筒井崇史)

第8節 製塩土器

製塩土器は湾岸に位置する製塩炉跡周辺を中心に大量に出土した。丘陵部に設けられたテラス状遺構や丘陵斜面に形成された遺物包含層中にも散発的に認められる。出土量・分布は地区によって多寡があるが、湾岸全域に広く分布している。発掘調査で出土した遺物中、総量が最も多い遺物である。

製塩土器類は、大半が二次的な比熱を受けて変色し、著しく細片化したものが多い。完形個体は支脚に1例があるのみであり、煎熬容器には完存するものは認められない。口縁部・底部の形状から煎熬容器には複数の土器形式があることが分かるが、全体の形状を復原しうる遺存状況を示す事例は1・2を数えるにすぎず、詳細は明らかではない。時期を示す標式的な遺物を伴うものが少ないため、帰属時期についても不明なものが多い。このように、製塩土器は大量に出土し

ているもののほとんどが細片であり、時期の特定も難しいのが実状である。資料提示が難しい面があるが、以下の点に留意して、整理・報告作業を行うこととした。

出土資料の大半は、廃棄層と考えられる遺物包含層であるので、廃棄層の中で最も遺物が集中する地点の土層を一括採取して土層ごと水洗選別した。最小が一辺5mm以下の製塩土器をピックダウンして整理分類に当たった。廃棄層を構成する製塩土器の主体的な形式を認定し、伴出する土器資料から帰属時期を推定することにこころがけた。遺構出土資料については、遺構単位で資料提示した。丘陵部遺構と同包含層出土遺物は、その場所に製塩土器が存在すること自体に意味があると考え、できるだけ資料化するようにした。

1. 製塩土器の分類

製塩土器類には、煎熬容器・焼き塩に使用されたと考えられる容器類と、それを支持するのに用いたと考えられる支脚類とがある。前者を製塩土器容器、後者を製塩土器支脚と呼ぶことにしたい。

(1) 製塩土器容器 製塩土器容器類は、大型厚手で平底の容器(I類)と直立する口縁と砲弾形の体部をもつ丸底容器(II類)、口縁部が屈曲する甕形のもの(III類)に大別できる(第22図)。

I類 船岡式製塩土器に類似するものである。器形は、平底の底部から体部が直線的に立ち上がり、口縁部がやや外反する形式である。この形式は散発的に出土をみるのみであり、出土量はあまり多くない。O-1地点製塩炉4出土資料を標式とする。

II類 直立する口縁と砲弾形の体部をもつ丸底容器を一括したものである。浜欄II B式、傾式、塩浜式製塩土器上部容器に該当する複数の形式が認められる。これに準じてA~C群の3形式に細別することにした。中間形態をなすものなど多様性が認められ帰属形式を明らかにできないものが多いが、これらはD群として一括した。

A群：口縁部が内湾気味に立ち上がる丸平底の容器である。O-2地点黒色炭層~黒褐色土層で主体的に出土した製塩土器容器を指標とする。浜欄II B式の上部容器に類似するものである。

B群：直線的に立ち上がる口縁部を有する砲弾形の丸底容器。内湾する薄手のもの(a)、直線的に立ち上がる厚手のもの(b)がある。B地点SH03出土資料を標式とする。

C群：小形丸底の薄手容器である。塩浜式製塩土器容器に類似する。O-2地点上層SK02出土資料を標識とする。

D群：A~C群以外の形式のもの。

III類 口縁部が屈曲する甕形の容器で、吉見浜式製塩土器容器に類似するものである。ゆるやかに外反するもの(a)、「く」の字形に屈曲するもの(b)などがある。

(2) 製塩土器支脚 製塩土器容器をのせて支持する円筒形の土製品である。容器を受ける受け部・脚柱部・底部からなり、上下対称形をなす。各部の名称は第23図のように呼称することにした。

製塩土器支脚の大半は廃棄によって生じた製塩土器類を主体とする包含層から得られたもので

ある。使用状況を示すものや上部容器との共伴が明らかなものは1・2を数えるのみであり、上部容器との対応関係において分類することは難しい。そこで、製塩土器容器と同様に若狭地域での研究成果を参照しつつ分類することとした。

若狭地域では、製塩土器支脚は9世紀頃と推定される傾式に出現し、10世紀頃と推定される吉見浜式を経て、11世紀前半頃の塩浜式に至り終焉するとされ、支脚はこの3形式に大別されている。傾式は器高7～8cmの受け部が大きく脚柱部の短いものであるが、吉見浜式では15cm以上になり、塩浜式では20cm前後と長脚化し、脚柱部は細く脆弱なものになる。上部容器は長脚化に反比例して小形化するのである。^(注18) 当該遺跡においても傾式・吉見浜式・塩浜式に該当する資料群が認められ、上部容器・支脚ともに同様の変遷をたどると予測される。しかし、傾式

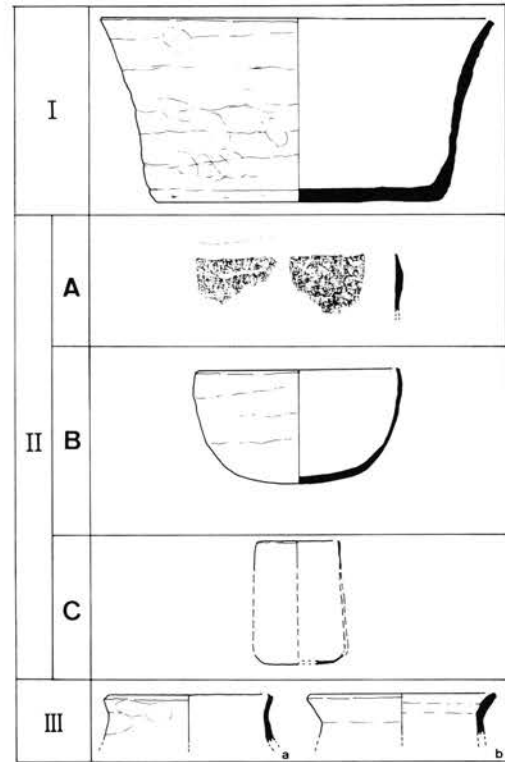
として提示されている標式資料より小形であり时期的にも明らかに先行する資料や、吉見浜式と塩浜式の間期的様相を示す資料群、塩浜式よりも長大化しさらに後出すると考えられる資料群などが確認され、若狭での3分類案をそのまま対応させて理解することは妥当ではないことが明らかとなった。そこで、同一形式の支脚を多量に含む良好な廃棄土層出土資料を基準とし、これに遺構出土製塩土器支脚のうち時期が明らかなものを加えて検討し、以下のように分類することにした(第24図)。

I類 器高が6cm前後の鼓形を呈する小型品である。受部上面が拡張されてややくぼみ、底部を平坦に作る。B地点SH03出土資料を指標とする。この遺構では製塩土器容器II類B群aタイプとの共伴を確認している。

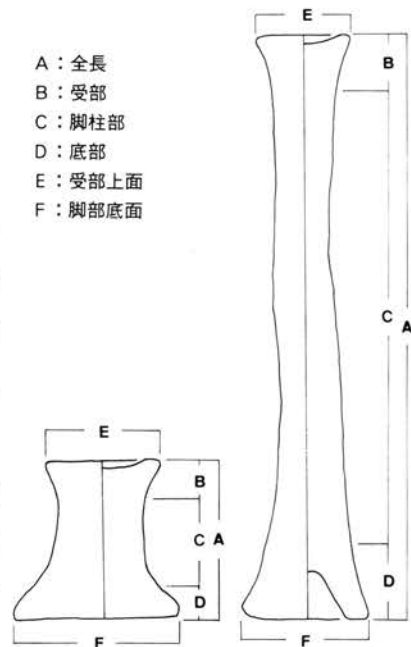
II類 受部径4～5cm・底径7～8cm・器高10cm前後のもの。平底である。O-2地点下層SD05出土資料を指標とする。傾式の標式資料に類似する。

III類 器高11cm・受部径3～4cm・底径6～7cm前後のもの。底部をわずかにくぼませるものが多い。II類より長く脚柱部が細くなる。A地点SH01、N地点SH19を指標とする。製塩土器容器II類B群bタイプと共存する可能性が高い。

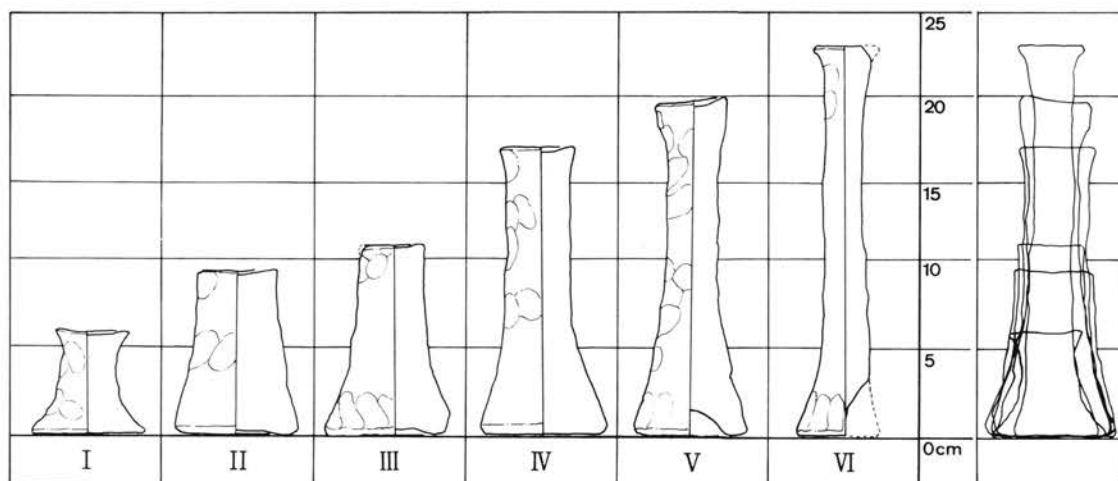
IV類 器高が17～18cm・受部径4cm・底径6～8cm前後のもの。O-2地点黒色炭層～黒褐



第22図 製塩土器容器分類図



第23図 製塩土器支脚の各部名称



第24図 製塩土器支脚分類図

色土層で、一括出土した資料群を指標とする。製塩炉跡とみられる礫の集積周辺で、一括出土した資料を指標とする。吉見浜式に類似するものである。製塩土器容器Ⅱ類A群と共存するものである。

V類 O-1地点鍛冶炉周辺出土資料を指標とする。器高20cm・受部径4cm・底部径7cm前後である。底部外面を顕著にくぼませる。塩浜式の標式資料に類似するが太くてしっかりとしているものである。

VI類 O-2地点SK02・SX01出土資料を指標とする。器高22~23cm・受部径3cm前後・底部径5cm前後の長くて細い支脚である。塩浜式より長脚化が著しい。製作上の粗略化が認められる。製塩土器容器Ⅱ類C群との共伴が明らかである。

2. 海浜部出土製塩土器

海浜部で製塩土器類が出土した主な遺構・層位は、O-1地点では、製塩炉4・製塩炉群4(鍛冶炉跡周辺)、海浜部包含層、O-2地点では、黒褐色土層・黒色炭層・焼土面など各土層、焼土面上検出遺構群、土坑SK02、製塩土器廃棄層SX01などである。

①O-1地点

製塩炉4(図版第107-1~12) この製塩炉は緩傾斜面を「コ」の字形に掘り込んだテラス状の地床炉である。炉底の焼土面上に製塩土器容器破片が圧着しており、使用に伴う状況を示す資料と考えられるものである。大型平底製塩土器容器(I類)である。破片が数多く認められたが、口縁部・底部の状況から3個体ほどの破片が集積したものと推測される。図版第107はこれらの破片群中から遺存状況の良いものを図示したものである。これらの土器は、外面に接合痕と指頭圧痕を著しくとどめる粗製品であるが、内面はていねいにナデ調整されているのが特徴である。

1~5は口縁部である。口縁部は、ゆるやかに外反するもの(1・4)と内湾気味に立ち上がるもの(2・3)、直線的に外方へ立ち上がるもの(5)の3種がある。6・7は体部、8~12は底部である。体部が底部から外方へ立ち上がるもの(8)、上方へ直線的に立ち上がるもの(9)とがあ

る。底部はいずれも平底である。1・4・9、2・3・8は同一個体とみられる。以上の資料から、口径32～33cm・底径22～23cm・器高13～15cm前後の法量をもつものであることがわかる。

成形手法上の特徴として、底部成形に注目したい。8～12を観察すると、底部は円板を作り、その周縁に粘土帯を積み上げて器体を成形するという手法が観察される。底部側縁—円盤の側縁に当たる場所—にヘラケズリ調整を行うことも著しい特徴といえる。底部外面には板状の圧痕が認められる。板の上ののせて成形したために、ついたと推定されるものである。当該資料は船岡式との形式的類似が認められるので、同一系統の製塩土器容器とみたいところであるが、底部成形の方法がまったく異なるので、系譜・時期を異にするものと判断したい。船岡式の標式資料にみる底部成形手法は、小嶋芳孝氏が指摘するように、浜瀬ⅡB式同様に内底面押圧を主とするものであり、円盤を作ることは^(注21)ない。小浜市釣姫遺跡で船岡式として報告されている資料に当該資料と酷似するものがあり、再検討を要する。石川県・富山県など北陸地域では多様な大型平底容器が知られているのであり、若狭湾およびその周辺地域においても大型平底容器が多様な展開を遂げたことが推測されるのである。当該資料はこうした可能性を示す事例と評価しておきたい。

製塩炉跡群4(鍛冶炉跡周辺)(図版第109-2～図版第113-123) O-1地点南端で出土した製塩土器支脚V類を主体とする土器群である。破片が非常に小さいので図示はしていないが、ここで出土した製塩土器容器は、Ⅱ類C群が主体的である。散発的にⅡ類・Ⅲ類(2～8)が認められた。9～123は製塩土器支脚である。9～26は焼土塊の近辺で一括出土した資料である。製塩土器支脚V類の指標とした資料である。27～43はこれらと同一の形式をもつものであろう。44～52は脚柱部上端を細く絞るタイプのもので、独立する形式として認識しうる可能性がある。全形が遺存するものがなく詳細が明らかでないので、ここではVに後続する可能性のある一群として指摘するにとどめたい。

溝S D01(図版第109-1) 1は鍛冶炉跡群を区画する溝底から出土した。製塩土器容器Ⅲ類である。器体外面に接合痕・指頭圧痕が著しい。内面はていねいなナデ調整が施されている。

海浜部包含層(図版第121-1～図版第122-58) O-1地点北半で検出した浜に堆積していた包含層中から出土した製塩土器類である。この包含層中からは、縄文時代から平安時代にかけての土器類が大量に出土しているが、こうした土器類は背後の丘陵部、海岸部から転落して再堆積したものである。製塩土器類は、海浜部での塩生産に使用された後に廃棄されたものが、浜辺に再堆積したものと考えられる。多数検出した資料の中から、主なもののみを図示した。製塩土器容器にはⅠ類(4・8)、Ⅱ類A群(1～3・5～7)、Ⅱ類B・C群、Ⅲ類(9～13・15・16)、14・17は甕であるが、胎土、焼成が類似するのでⅢ類に含めた。18～58は製塩土器支脚である。Ⅳ類(20～22・24・25・28・29・36～42)、Ⅴ類(19・23・26・27・30～35、43・44)、Ⅵ類(18・45・46・48～52)。40・41にはヘラ書きの×印がある。

②O-2地点

土坑S K02(図版第127-1～15・19～60) 製塩土器類は、図版第43に示したように、土坑埋土・土坑底において出土した。伴出する黒色土器椀A(16・17)と土師器鍋D(18)の形式から、年

代を12世紀半ばに求めることのできる土坑出土一括資料である。

製塩土器容器は微細な細片に碎けており、土壤洗浄を行って回収することのできたものが大半である。土坑底で検出した製塩土器容器の中から比較的大きな破片を実測したものが1～15である。1～12は口縁部である。口縁部には、直線的に立ち上がるもの(1・4・7・12)、内湾するもの(3・5・6・8～11)、外反するもの(2)などがある。13～15は底部である。底部は丸みを帯びた平底である。製塩土器容器は、精良な粘土を用いており、器体は内外面ともにていねいなナデ調整で仕上げられている。

19～60は、埋土中で検出した製塩土器支脚である。各部位で破損しており、完存例は認められない。39～60は各部位を復原的に配置したものである。これらによると、器高22～23cm前後の全長が推測される。各部位の特徴・法量は製塩土器廃棄層S X 01資料と酷似している。Ⅵ類に該当する資料である。

以上の資料から、製塩土器容器は、器高が15～16cm、口径が8～10cm前後・底径6～8cmの法量を有するもので、内傾しながら直立する器体と丸みを帯びた平底をもつものであったと推定される。Ⅵ類の支脚がこれに伴う。当該資料は、製塩土器容器と製塩土器支脚の組み合わせ、その帰属年代を知ることのできる重要な資料である。

製塩土器廃棄層S X 01(図版第128-1～図版第129-117) S K 01・02が検出された丘陵の下方約8mに位置する製塩土器廃棄層である。S K 01・02と同じく、黄褐色土上に形成され、暗茶褐色土を埋土としている。S K 01・02とS X 01の間には大きな攪乱があって、分断されているが、もともとは両者は一連のものであったと考えられる。

製塩土器廃棄層は、細片化した製塩土器容器Ⅱ類C群と製塩土器支脚Ⅵ類で構成され、黒色土器・須恵器が少量混在した。製塩土器容器は、S K 01と同様、数mmの細片となっていた。土壤と分離することが困難な状況であり、一部を土壤ごと採取しサンプルとするにとどめた。支脚は全て取り上げ、主なものを図示した。117は唯一の完存例である。全長約23cm・受部径約4cm・脚部底径約5cmを測る。これ以外は、折損資料である。受部・脚柱部・脚部の各部位で折損したものが多し。1～116は、折損資料の実測図を復原的に配置したものであるが、端部や脚柱部径などの細部に至るまで良く似ており、法量も画一的であることが理解される。胎土も画一的であり、橙褐色の精良な粘土を素地とし、長石と石英粒を混和したものに限られる。

黒褐色土層(図版第131～133)

製塩土器容器(図版第131-1～43) Ⅱ類が主体を占め、Ⅲ類が少量出土している。

Ⅱ類(13・15～43) Ⅱ類には、薄手のもの(23～40・43)と厚手のもの(13・15～22・34)がある。薄手のものはA群、厚手のものはB群に該当するものであろう。41・42はC群である。出土量はA群が多く、B群がこれに次ぐ。C群は上層で検出されており、微細片が多数みられた。

Ⅲ類(1～12・14) Ⅲ類には口縁部が屈曲するbタイプ(1・3・11・14)と、ゆるやかに外反するaタイプ(2・4～10・12)がある。1は土師器甕との区別が難しいが、胎土・焼成が3・11・14と同様であることから製塩土器と判断した。

製塩土器支脚(図版第132-1~図版第133-73) IV類とV類の中間的な形態をなすものが多く、帰属が明確でないものが多い。V類に近いものが多いが、大半はIV類に帰属するものと理解しておきたい。1~49は受部および脚柱部、50~56は脚柱部、57~73は脚部である。46~48はヘラ記号が施されたものである。46は「八」、47・48は「大」の文字が書かれている。49は受部に突起を持つものである。5・71・72はIV類の底面を削ってくぼませたものである。

黒色炭層(図版第136~139)

黒色炭層は、地滑りによる崩落土である黄褐色土直下で検出した、炭と灰からなる層である。炭と灰は厚さ10cm以上に及び、このなかに製塩土器類が数多く含まれていた。この土層と遺物は、地滑りで崩壊したA-3地点斜面に形成されていた製塩関連遺構に関連する遺物と考えられる。

製塩土器容器(図版第136-1~図版第137-68) II類(1~4・12~58・68)が主体を占め、I類(5~8・59~67)・III類(9~11)が少量出土している。

I類(5~8・59~67) 5~8はI類の口縁部と考えられるものである。59~67は、底部である。円盤を作って底面とし、器体を積み上げるものである。体部と底部境界に、ヘラケズリ調整による面がみられる。O-1地点製塩炉4で検出した資料と同一の特徴を有している。

II類(1~4・12~58・68) 大半が薄手のB群である。やや厚手でA群に属する可能性のあるものが少量認められる(1~4・16~17・27)。68は、底部である。端部に明瞭な面を作るものがある(18・42)。55~58は体部破片である。

III類(9~11) 口縁部がゆるやかに外反するものである。10・11は口縁端部に明瞭な面をもつものである。

製塩土器支脚(図版第137-69~72・図版第138-1~図版第139-70) I類~IV類が認められる。

I類(図版第137-69~71) 70は受部と底面を拡張している。70は底部中央に孔を穿っている。

II類(図版第137-72) 72は71と相似形である。

III類(図版第138-31) 31が該当資料と考えられる。細片資料が多く、III類の抽出は難しい。

IV類(図版第138-1~30・32~37・図版第139-38~70) 記号が書かれているもの(51~53)や脚柱部に孔が穿たれているもの(49・50)がある。記号は「八」と推定されるもの(51)、「十」と書かれているもの(52・53)がある。

焼土面および焼土面下層(図版第142)

黒色炭層を除去して精査した結果、土器製塩に関連すると推定される焼土面を調査地区一面で検出した。ここに提示する資料は、焼土面検出中、あるいは焼土面に伴う遺構から出土したものである。

掘立柱建物跡SB01(図版第142-1) II類B群の製塩土器容器の細片と、IV類(1)の製塩土器支脚が出土している。

焼土面下層・最終焼土面(図版第142-2~43) 最下層で検出した製塩土器である。I類に属する可能性のあるもの(27)、III類に属する可能性のあるもの(25・26)が少しみられるほかは、II類に属するものである。23はやや厚手である。23はA群である。それ以外はB群に属するものと

考えられる。2～8・10・11・13は、やや厚手である。

〇ー2 地点下層遺構(図版第143～144)

各遺構からは製塩土器容器Ⅱ類B群を中心に、Ⅰ・Ⅲ類の製塩土器容器、製塩土器支脚などが散発的に出土している。上記の各層に比べて、出土量は格段に少ない。

S D 03(図版第143-12～29) 12～19は、製塩土器容器Ⅱ類B群の口縁部である。口縁端部に面をもつもの(12・19)がある。20～24は製塩土器容器Ⅰ類の底部である。円盤を作って底面とし、器体を積み上げるものである。体部と底部境界に、ヘラケズリ調整による面がみられる。25～29は製塩土器支脚である。25・28・29はⅢ類、26・27はⅣ類に属するものであろう。

S D 04(図版第144-45・46) 45・46は、製塩土器容器Ⅱ類B群の口縁部である。

S D 05(図版第143-4～11) 4は製塩土器容器Ⅰ類の口縁部である。5～8は製塩土器容器Ⅱ類の口縁部である。9は製塩土器支脚Ⅲ類、10・11は製塩土器支脚Ⅱ類である。

S D 06(図版第144-30～34) 30・31・33・34は製塩土器容器Ⅱ類B群の口縁部である。32はⅢ類に属するものである。

S D 07(図版第144-52) 52は製塩土器容器Ⅱ類B群の口縁部である。

S K 09(図版第143-1～3) 1はⅠ類の製塩土器容器、2・3はⅢ類の製塩土器支脚である。

S K 10(図版第144-35) 35はⅢ類の製塩土器支脚である。

S X 11(図版第144-47) 47は製塩土器支脚Ⅳ類の受部である。

S X 12(図版第144-40～44) 40～44は製塩土器容器Ⅱ類B群の口縁部である。

S X 14(図版第144-48～51) 48・49は製塩土器容器Ⅱ類の口縁部である。A群(48)とB群(49)とがある。50・51は製塩土器支脚である。50はⅢ類かⅣ類の受部、51はⅠ類の脚部である。

S X 15(図版第144-53・54) 53・54は製塩土器容器Ⅱ類B群の口縁部である。

3. 丘陵部出土製塩土器

丘陵部で製塩土器類が出土した主な遺構は、N地点テラス状遺構S H 10・14・19・20・23、竪穴式住居跡S H 12・22、B地点テラス状遺構S H 03、A地点テラス状遺構S H 08、竪穴式住居跡S H 01・04、土坑S K 02、柱穴S P 140・189、掘立柱建物跡S B 02の柱穴P 3・8などである。

①N地点

竪穴式住居跡S H 12(図版第95-1～4) 口縁部が直立気味に立ち上がり、端部に面を作る製塩土器容器である。Ⅱ類B群bタイプに帰属させておきたい。

テラス状遺構S H 19(図版第95-5～10) 製塩土器容器Ⅱ類B群(5～7)と製塩土器支脚Ⅲ類(8～10)が出土している。8は完存する資料である。

竪穴式住居跡S H 22(図版第95-11～15) 製塩土器容器Ⅱ類A群(11)、製塩土器支脚Ⅲ類(12～15)などがある。

テラス状遺構S H 20(図版第95-16～18) 製塩土器容器Ⅱ類A群(17)、Ⅲ類(16)、製塩土器支脚(18)などが出土している。

テラス状遺構 S H23(図版第95-19) 製塩土器Ⅱ類A群を少量検出した。

テラス状遺構 S H14(図版第95-20~27) 製塩土器容器Ⅰ類(23・24)・Ⅱ類A群(20~22)、製塩土器支脚Ⅲ類(25~27)が出土している。

テラス状遺構 S H10(図版第96-1~8) 製塩土器容器Ⅰ類(4)・Ⅱ類A群(5)・Ⅲ類(1~3)、製塩土器支脚Ⅳ類(6~8)が出土している。

遺構周辺包含層(図版第96-9~25) 製塩土器容器Ⅰ類(18・20・21)・Ⅱ類(13~15・17)・Ⅲ類(9~12・16)、製塩土器支脚Ⅲ類(25)・Ⅳ類(23・24)・Ⅵ類(22)などがある。

②B地点

テラス状遺構 S H03(図版第96-26・27) 製塩土器容器Ⅱ類B群(26・28)、製塩土器支脚Ⅰ類(27)が出土した。26・28は同一個体であろう。当該資料は一括性を証明できる資料ではないが、遺存状況が良好であることと、舞鶴市教育委員会によって調査されたJ地点およびS H28で、当該資料と同じ組み合わせを持つ一括資料が得られていることから、標式資料とした。S H03およびJ地点S H28では、8世紀前半の須恵器が共伴しており、帰属時期を推定する手がかりになる。

③A地点

竪穴式住居跡 S H01(図版第105-9~11) 製塩土器支脚Ⅲ類(9~11)と製塩土器容器Ⅱ類A群が出土している。

竪穴式住居跡 S H04(図版第105-12~20) 製塩土器容器Ⅱ類A群(12~20)が出土している。20はⅡ類A群の底部である。当該形式の底部資料は数少なく、全形を推定するうえで貴重な資料である。

テラス状遺構 S H08(図版第105-21~27) 21は製塩土器容器Ⅲ類で、22はその底部と推定されるものである。24~27は製塩土器容器Ⅱ類A群である。23は製塩土器支脚Ⅲ類(23)である。

土坑 S K02(図版第105-1・5) 製塩土器容器ⅡAが少量出土した。

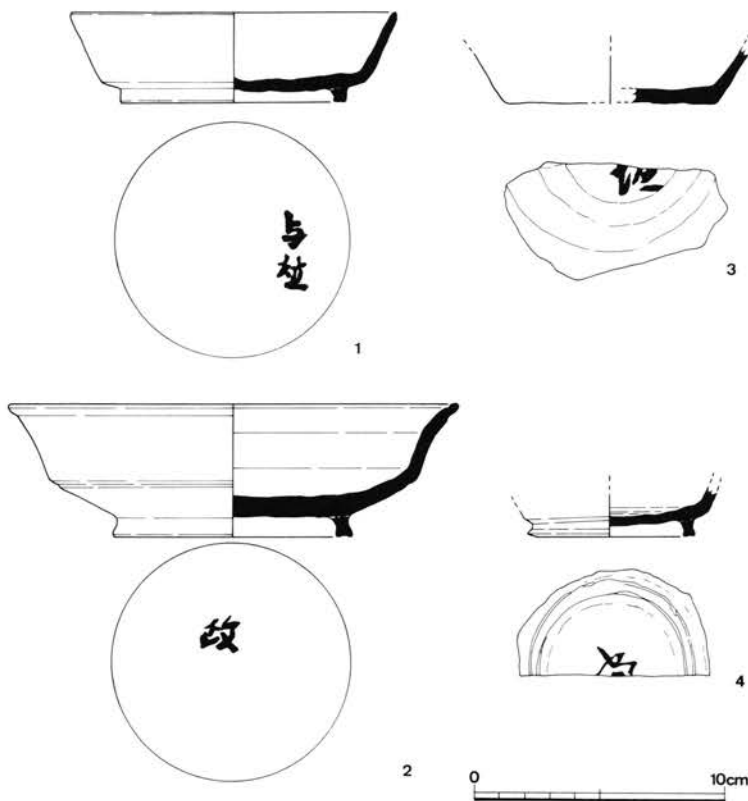
掘立柱建物跡 S B02の柱穴 P 3(図版第105-2・3)・柱穴 P 8(図版第105-7・8)・S P 140(図版第105-4)・S P 189(図版第105-6)など、各ピットから製塩土器容器Ⅱ類A群が少量ずつ出土している。

(田代 弘)

第9節 墨書土器

浦入遺跡で出土した墨書土器4点を図示した(第25図)。いずれも須恵器の杯または碗の底部に1文字ないし2文字が墨書されている。これらのほかにも墨書土器と思われる破片が若干出土している。

1はA地点S H04から出土した。2文字あり、上の文字は明らかに「与」と読むことができる。下の文字は偏が判読しづらいが、「示」偏もしくは「禾」偏と考えられる。旁は「土」もしくは「土」に点が入ったもの、あるいは「立」であろう。このように判読できるとすれば、下文字は「社」である可能性が高くなる。ちなみに奈良時代には、「社」の異体字として「示」偏のかわりに「禾」偏が用いられることが多い。同じく、「土」に点がある例も少なくない^(注23)。以上か



第25図 墨書土器実測図

ら、2文字つづけて「与社」と読むことができると判断した。

「与社」とは、浦入遺跡の所在する旧丹後国加佐郡に隣接し、丹後国府があったとされる与謝郡を指している可能性が高い。「与社」郡の用例は平城宮出土木簡(注24)にもあり、広く通用していた可能性がある。須恵器の器種は杯Cである。口径12.9cm・器高3.6cm・底径8.9cmを測る。

2はA地点S H01から出土した。やや読みづらいが、「政」であろう。須恵器の器種は椀Bである。口径17.7cm・器高5.4cm・底径9.5cmを測る。

3はO-1地点から出土した。半分欠損するため文字は不明であるが、偏は「土」偏と考えられる。傍の方は不明である。現時点では「塩」の可能性を考えておきたい。須恵器の器種は杯Bの底部である。残存高2.6cm・復原底径8.4cmを測る。

4はO-1地点から出土した。やや崩し字となっており、判読は困難である。浦入遺跡出土の1例として掲げた。須恵器の器種は杯Cの底部である。残存高1.6cm・底径5.9cmを測る。

以上の墨書土器は、須恵器の器種から、いずれも浦入Ⅲ期ないしⅣ期のものと判断される。これらは、浦入遺跡において製塩が開始された時期に当たり、「与社」「政」の文字に示されるような、律令的な体制のもとで、この地域の製塩が行われていた可能性を示している。

(筒井崇史)

第10節 鍛冶関連遺物

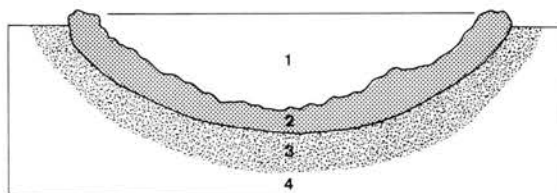
1. 鍛冶炉の認定と調査方法

鍛冶とは、原料である鍛鉄を加熱・鍛打して鉄製品を製作する、鉄器製作手法の一つである。鍛冶作業には、作業する親方と仕手、火をおこす炉、風を送る鞆と羽口、鍛打する際の台である金床、加熱した素材をつかむハシ、鎚、焼き入れ・焼き戻しに使う水碓・砥石(注25)などが必要である。したがって、鍛冶炉、設置された金床石、これらが配置された建物跡などの遺構が考古学的に鍛冶作業を直接裏付けるものである。鉄塊系遺物や鍛冶炉に固有の椀形滓、鉄器鍛造時に飛散する酸化皮膜である鍛造剥片・羽口・金床石・叩き石・砥石などは鍛冶作業の状況証拠と言える。

鍛冶炉は、地面を掘り込んで作られる簡単な施設であり、炉底に粘土や炭を用いて簡便な防湿

処理を施し、上部構造として炉壁と送風施設である羽口を設ける。発掘調査では、炉壁・送風施設などの上部構造が失われて炉底の一部あるいは炉掘形のみが検出される場合が大半であるので、検出した遺構を鍛冶炉であると証明することが困難である場合が多い。

今回の調査で検出した鍛冶炉も上部構造が遺存するものではなく、遺存状況のみから鍛冶炉であると認定するのは難しいものが多かった。そこで、鍛冶炉を認定する方法として、遺構埋土中に鍛造剥片の存在を確認することを必須の条件とした。加えて、粒状滓の検出にもつとめた。鍛造剥片・粒状滓は鍛打作業の実証と鍛冶の段階を押さえる上で重要な遺物と考えられるものだからである。^(注26)以下の手続きで土層を採取し、洗浄選別し、遺構の認定を行った。



第26図 鍛冶炉模式図

- 1.埋土(炭・灰など)
- 2.青灰色硬化層
- 3.赤色土(被熱)
- 4.黄色粘質土(3・4は遺構ベース)

①鍛冶炉断面と土層採取 第26図は検出した各鍛冶炉の断面を検討して模式化したものである。第1層は遺構崩壊の二次的な堆積物である。第2層は炭・灰層であり、鍛冶作業に伴う堆積物と考えられる。碗形滓が形成される層であり、鍛打作業で生じる鍛造剥片・粒状滓が含まれる最も重要な土層である。暗青灰色硬化面は炉底を構成する粘土で、鉄滓や砂鉄、炭などを顕著に混入するものもみられた。赤色土は地山が、鍛冶炉の操業に伴う被熱によって赤変したものである。遺構観察の結果、鍛冶炉跡と推定した遺構について、上記の観点で各土層を採取した。

②洗浄と分類の方法 採取した土層をプラスチック容器を用いて仕分けした後、水を加えて軟化させた。泥土を完全に除去するまで水換えを繰り返した。水換えの際に鍛造剥片や砂鉄が流失することを防ぐためにフィルターを用いた。フィルターとして用いたのは市販の紙製の茶濾しである。最後にフィルターで水を切り、乾燥させた。鍛冶関連の微細遺物の取り出しには国際標準化機構規格のふるいを用いることが推奨されているが、本資料群は直径が1mm以下のものがほとんどであるから、ふるいでは全て脱落してしまった。そこで、紙製フィルターにかかるものはすべて取り出すことにしたのである。乾燥後に、磁石を使って、磁力のある遺物と磁力を持たない遺物にわけた。前者を分類した結果、砂鉄・鍛造剥片・粒状滓が得られた。後者は大半が土壌であったが、滓の断片、粒状滓が少量みられた。

このようにして取り出した各遺構出土遺物を、(財)滋賀県文化財保護協会大道和人氏および、当調査研究センターの野島 永の教示を受けつつ検討し、遺構評価を行った。鍛造剥片・粒状滓の一部について九州テクノリサーチに分析を依頼した。分析の詳細については、付編に掲載した大澤論文を参照されたい。

(田代 弘)

2. 鍛冶関連遺物

①鞴の羽口(図版第145)

鞴の羽口はA・B・N・O-1・O-2の各地点から出土したが、細片が多く形状・部位が判

別できるものは少ない。ここでは各地点から形状・部位が判別できるものを取り上げる。なお、鍛冶炉に挿入されていたと考えられる側を先端部、鞆に連結していたと考えられる側を基部、先端部と基部が欠損しているものについては中間部とする。また、被熱部については、①溶融していたり、釉がかかったようにガラス質になる部分(溶融部)、②半溶融状態で器表面に気泡状の穴が多数認められる部分(半溶融部)、③器表面が還元により青灰色・暗青灰色に変色する部分(還元部)、の3つに分けてスクリーントーンによって図に示した。

1～4は先端部である。いずれも小片のため復原した大きさは若干異なるかもしれない。1の器壁の厚さは1.2cmを測る。先端部に半溶融部・還元部が認められる。2は先端部に半溶融部・還元部が認められる。3の器壁の厚さは2.4cmを測る。先端部に溶融部・半溶融部・還元部が認められる。4の器壁の厚さは2.2cmを測る。先端部に溶融部・半溶融部・還元部が認められる。5は中間部である。半溶融部と還元部が見られる。器壁の厚さは2.0cmである。

6～8は先端部である。いずれも先端部は完存している。6の器壁の厚さは2.2cmである。溶融部と還元部が見られるが、半溶融部は認められない。還元部は先端を上にしておいた時に斜めに被熱を受けていることが確認でき、使用時には若干の角度をもって斜めに挿入されていたことが考えられる。7の器壁の厚さは2.2cmを測る。器外面には縦方向の面をもち、断面は多角形状となる。溶融部・半溶融部・還元部が確認できる。還元部は先端を上にしておいた時にほぼ均等に被熱を受けていることが確認でき、使用時にはほぼ水平に挿入されていたと考えられる。8の器壁の厚さは2.2cmである。溶融部・半溶融部・還元部が確認できる。還元部は器表面の剥離により確認できない部分が多く、使用時の角度は推定できない。9は先端部である。先端は一部のみが残存する。器壁の厚さは2.0～2.7cmである。溶融部・半溶融部・還元部が確認できる。

10～12は中間部である。10は還元部が見られる。器壁の厚さは2.0cmを測る。11は溶融部と還元部が見られる。器壁の厚さは1.6cmを測る。溶融部は折損部に部分的にみられ、折損品を利用した可能性も考えられるが、溶融部の範囲が部分的であるために確実にはいえない。12は還元部が見られる。器壁の厚さは3.0cmを測る。

13・14は基部である。13の器壁の厚さは3.4cmである。器表面全体が被熱により還元を受けている。基部側には半溶解部も見られ、欠損品を利用したとも考えられる。14の器壁の厚さは3.0cmである。還元部は欠損部側と基部側の両方に帯状に見られる。基部側には半溶融部が見られ、欠損品を利用したことも考えられる。

鞆の羽口は完形に復原できるものではなく、長さについては不明である。形態についても破片資料が多く不明な点が多いが、8と14から推定すると丸みをおびた先端部から平らな基部にかけてゆるやかに太くなる棒状の形態をとると考えられる。また、1・11は他のものより器壁が1cmほど薄く、太さも若干細くなるようで、他のものと異なった形態を持つ可能性がある。

被熱部分については、先端部で先端から溶融部→半溶融部→還元部の順に見られる。原位置をとどめて出土したものがないたため、推定するしかないが、溶解部・半溶解部は直接火を受ける鍛冶炉内に突き出ており、還元部は鍛冶炉外の土中にあつたと考えられる。還元部とした部分が被

熱により酸化し赤変色しなかったのはこのためであろう。

②鉄滓(図版第146)

鉄滓はA・B・N・O-1・O-2の各地点で出土した。その大半は小片であるが、なかには炉底に貼り付いて出土した、かなり大きなものもあった。出土した鉄滓の小片の中には、このように炉底に形成されたものも含まれるが、その多くは1~2cm程度の円形や不整形の粒状のものであり、炉底に形成されたものとは生成のされ方が異なると考えられる。ここでは量的には少ないが、炉底に形成されたと考えられる鉄滓を取り上げる。なお、実測図は炉底に貼り付いていたと思われる側(下面、反対側を上面と呼ぶ)を下にして図示した。断面は炉底に貼り付いていたと思われる面が下になっている。向きが推定できないものについては任意に決めた。

1はO-1地点鍛冶炉12の炉底に貼り付いた状態で出土した。上面には銀灰色で粒状の盛り上がりが見られ、鉄滓成形過程の状況をよくとどめている。上面・下面の両面から細かい木炭が鉄滓内に入っていることが確認できた。遺物は分析を行った。2は半分程度が、3は半分以上が欠損すると思われる。ともに下面はゆるやかに湾曲し、上面より平滑である。4は一部が欠損する。下面はゆるやかに湾曲する。上面には銀灰色で粒状の盛り上がりが見られ、鉄滓成形過程の状況をよくとどめている。

5は一部が欠損する。下面は炉底を構成する青灰色硬化面が付着している。下面は上面より平滑で、ゆるやかに湾曲している。6は一部が欠損する。上面と下面の判断は困難であるが、上面とした方が凹凸少なく平坦である。7は半分程度が欠損すると思われる。上面と下面の判断は困難であるが、上面とした方に銀灰色で粒状の盛り上がりが見られ、1と類似する。8は一部が欠損する。7と同様に上面と下面を判断した。上面には銀灰色で粒状の盛り上がりが見られ、木炭が含まれていることが確認できる。9は半分程が欠損すると思われる。下面は炉底を構成する青灰色硬化面が付着している。10は完存する。下面はゆるやかに湾曲する。11は完存する。下面はゆるやかに湾曲する。下面・上面ともに木炭が多く含まれていることが確認できる。12は一部が欠損する。下面はゆるやかに湾曲している。上面は一度冷えて固まった滓の上に、もう一つの滓が形成されている。上面には銀灰色で粒状の盛り上がりが見られる。13はO-1地点鍛冶炉14の炉底に貼り付いた状態で出土した。上面には銀灰色で粒状の盛り上がりが見られる。遺物は分析を行った。14は一部が欠損する。下面は炉底が湾曲している。上面は一度冷えて固まった滓の上に、もう一つの滓が形成されている。15~17は完存し、下面はゆるやかに湾曲する。17の上面では木炭が含まれていることが確認できる。18・19は一部が欠損する。下面はゆるやかに湾曲し、上面よりも平滑である。

1や13のように同一地点の近接した鍛冶炉の炉底で出土した鉄滓でも、大きさに違いが見られ、他の地点でも大きさは一定しない。

(水野聡哉)

第11節 その他の遺物

1. 木器・杭(図版第147～149・第27図)

①木器

木器は、O-1地点の海浜部から大量の土器類や製塩土器とともに出土した。これらは、遺構の比較的集中していた標高1m以上ではほとんど出土せず、おおむね標高1m以下の砂浜や礫面上で出土した。出土木器のうち、遺存状況の良好な資料に限って図示した。

以下、出土木器について簡単に説明するが、法量については第13表を参照されたい。また、出土木器の樹種同定は行っていない。

1～3は馬形と考えられる。扁平な板材の側面を抉って、馬の側面全身像を表現する。1は鞍が無いようであるが、2・3は鞍を作り出す。表面に墨書等は確認できない。

4～10は人形と考えられる。人形も馬形同様、扁平な板材の側面を抉って全身像を表現する。4～9はいずれも正面像を表現した人形で、頭部・肩部などが確認できる。比較的残りの良好な6をみると、頭部・肩部のほか、腰部に小さな切れ込みがあり、両足が表現される。足の先端は、足の内側のラインがややカーブを描く。10は側面像を表現した人形と考えられる。

11・12は不明木製品であるが、11は両側に切れ込みがある。12は片側のみに切れ込みがあるが、両端を欠損するので詳細は不明である。あるいは10のような人形の可能性もある。

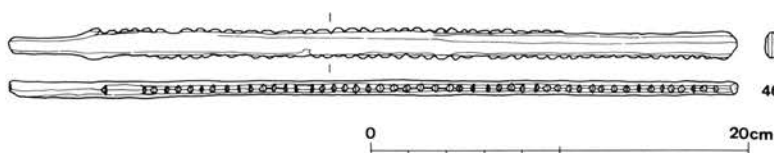
13・14・16は下駄である。13・14は直径1cmほどの鼻緒の穴が3か所確認できる。16はおおよそ1/2を欠損する。15は不明木製品であるが、直径0.6～0.8cmほどの穴が2か所認められる。両端とも欠損するため、全長や穴の総数などは不明である。17は杓の先端であろう。18・19は曲げ物の底板であろうか。ともにほぼ正円形を呈する。20・22・23は火鑽確である。20はやや大型品であるがほぼ中央に2か所の火鑽孔がある。22・23は一般的な火鑽確である。22は3か所、23は4か所ほど火鑽孔がある。

21は不明木製品である。ほかの部品と結合するための柄穴が2か所ある。中央部がややカーブを描いており、握りやすくしているように思われる。24～32は用途などは不明ながらも何らかの加工痕の認められる木器を集めたものである。側面に抉った痕跡などがあり、扁平な板ではないが、人形に近い形状のものが多い。

33～45は箸である。33・45がやや太めであるほかは、今日使われているものと大きな違いは認められない。全長や形状のわかる資料はないが、断面形が多角形になるように面取りをしている。

46は両側面に刻み目の施された木器である。刻み目のある付近では幅1.6cmを測るが、端部はやや細くなっており、幅0.8cmを測る。

②柱材(図版第150)



第27図 O-1地点出土木器実測図

O-2地点最下層で検出された掘立柱建物跡SB01では、確認された4基の柱穴のうち、3基に柱材が遺存して

いた(P 1～3)。いずれも残存長60cm前後・直径20～25cmを測る。表面は面取りがされており、断面形は六角形ないし八角形の多角形である。柱材の樹種は不明である。

③杭(図版第151)

R地点で出土した縄文時代前期の丸木舟を埋没させていた青灰色砂層で検出された。丸木舟から少し離れて検出され、その検出状況から丸木舟の係留用の杭や棧橋のようなものなどに用いられた杭ではないかと考えられる。

1は残存高33.6cm・直径19.4cmを測り、下端はほぼ水平に仕上げられている。また、長さ14.8cm・高さ8.8cm・奥行28cmの範囲が大きく抉られており、きれいに加工している。別の部材を結合させるために加工されたものであろう。2は残存長36.4cm・直径9.6cmを測る。先端は地面に打ち込みやすくするため、尖り気味に加工されている。3は残存長36.6cmを測り、直径5.2cmに復原される杭で、2に類似するが直径は2のおよそ半分である。

2. 石器(第28・29図)

石器は、A・M・N・O-1・Rの各地点から出土し、M・R地点についてはそれぞれの項で報告した。本項ではA・N・O-1地点出土石器のうち13点を図示した。石器はいずれも縄文時代に属すると考えられるが、各石器の時期的な限定は行えなかった。図示した石器の内訳は、石鏃8点・石匙1点・礫石錘1点・磨石1点・石核1点・剥片1点である。また、石材は安山岩5点・チャート4点・頁岩1点・凝灰岩1点・砂岩2点となる。

(1)石鏃

完形品は4点のみであり、5・8には先端部に衝撃剥離痕が認められる。石鏃の形態別には凹基無茎5点・平基無茎3点であるが、基部の抉りが浅いものは平基無茎とは区別が困難である(4・6・7)。石鏃の製作技術については、素材の用い方を中心に技術的特徴の記述を行う。石鏃の器面上に大きな剥離面および自然面、節理面を残す資料は6点認められる。そのうち2・3・6は両面に素材面および自然面が観察でき、6は剥離方向が180°、3は90°ずれており、2は表面側が自然面で構成されている。一方、2・3・6に共通することは、いずれも素材剥片の厚さが薄く、バルブも発達していないことから、素材剥片の製作には両極打法(バイポーラーテクニック)が使用されていた可能性も指摘できる。次に、個別ごとに石器の説明を行う。

1は基部が一部、折損しており、先端部に衝撃剥離痕が認められる。凹基無茎である。裏面の左側縁部に素材の主要剥離面が認められ、素材剥片を縦位に用いていたと考えられる。

2は完形品で、凹基無茎である。両面に素材面が認められ、薄手の剥片を素材に利用していたと考えられる。素材剥片を縦位に用いており、周辺加工の石鏃である。

3は完形品で、先端部はやや丸みをおびている。凹基無茎であり、他の同一の大きさを有する石鏃に比べ、器厚がやや厚い。全面がほぼ二次加工で被われているが、表面側の中央部に節理面が認められる。

4は完形品で、基部は丸みをおびて突出し、側辺部は体部において若干の屈曲を呈する。裏面

の左側縁部にわずかながら素材面と推定される剥離面が認められるが、明確には判別できない。

5は形態から一応、完形品で、平基無茎である。全面が二次加工痕で被われているため、素材面は確認できなかった。両面における剥離痕の切り合い関係の観察から、最終的な調整はほぼ表面側に施されていることが指摘できる。

6は先端部が折損しており、平基無茎である。裏面の右側縁部に素材の主要剥離面が認められ、素材剥片を斜位(素材剥片の剥離方向と石鏃の主軸が斜交)に用いていると考えられる。

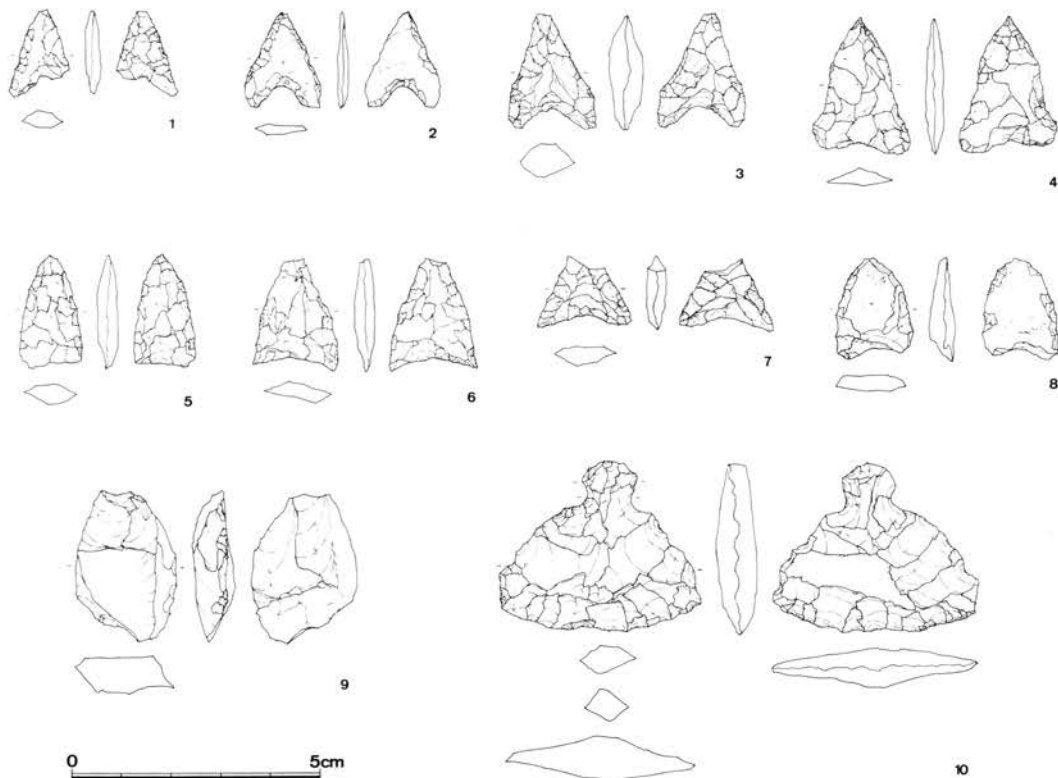
7は先端部が欠損しており、凹基無茎である。全面が二次加工痕で被われているため、素材面は確認できなかった。両面における剥離痕の切り合い関係の観察から、基部の最終的な調整は片面側に連続して施されていると考えられる。

8は基部が折損しており、意図的な折損かどうかは不明である。折損後、基部に二次加工が施されていないことから一応、凹基無茎として捉えておきたい。両面に素材面が認められ、素材剥片を斜位に用い、周辺加工の石鏃である。

ここで取り上げた石鏃については、資料数の限界があるものの、石材により、素材剥片の用い方が異なることが指摘できる。また、石鏃の素材として両極打法による剥片を想定したが、このことは、1点ではあるが本遺跡出土のチャート製の両極打法による剥片の存在からも裏付けられよう。また、周辺加工の石鏃が少なからず存在し、他の遺跡との比較資料として重要になってこよう。

(2)石匙(10)

完形品で、横形石匙である。形態は三角形状を呈し、左右でほぼ対称をなす。全面が二次加工



第28図 石器実測図(1)

痕で被われているため、素材面は認められず、入念に調整が施されている。刃部は両面からほぼ交互に調整がくわえられ、刃先の形状は両刃である。刃縁の平面形態、断面形態はそれぞれ直刃、平刃を呈し、刃部角は約40°である。

(3) 敲石

敲石はN地点より1点出土しており、石材は砂岩である。両面の中央部に敲打痕が認められ、やや窪み状を呈している。また、敲打痕周辺はなめらかな面をなし、磨石としても用いられていたと考えられる。

(4) 磨石(12)

磨石と考えられる石器はN地点より多数出土しているが、明確に磨面が認められるものは1点のみであり、石材は砂岩である。

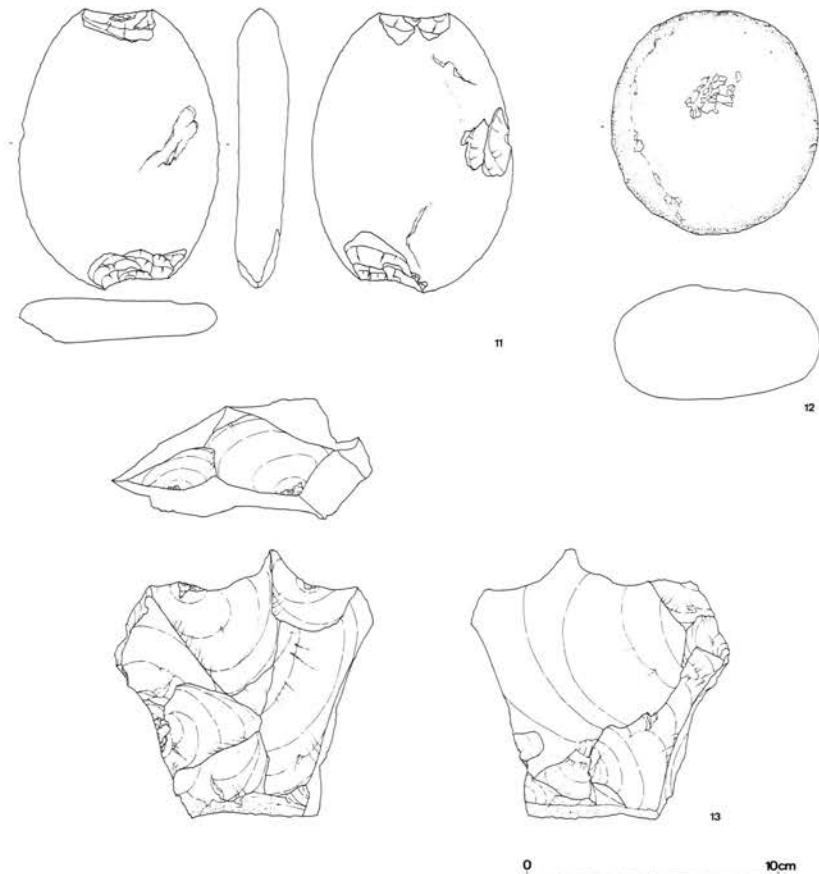
(5) 石錘(11)

扁平礫を素材とし、長軸の両端に打ち欠き部が認められる礫石錘である。打ち欠き部には使用による明らかな磨滅は認められない。

(6) 石核、剥片

石核(13)はN地点より1点出土しており、石材は凝灰岩である。大形の剥片を素材とし、右側面には自然面が認められる。作業面は腹面、背面側の順に設定され、剥離された剥片の形状は多様であったと考えられる。また、頻繁に打面転位が行われているが、総じて打面調整はなされず、最終的には背面側に求心的な剥離がなされたのち、石核は放棄されている。

剥片(9)はN地点より1点出土しており、石材は赤色チャートである。打面は二次加工により除去され、右側面には自然面が認められる。腹面・背面ともに平坦であり、両極打法により製作されたと考えられる。



第29図 石器実測図(2)

3. 土錘(図版第152～154)

土錘は、各調査地点

から出土したものを遺構ごとに図示した。包含層資料も加えることによってほぼ全ての形式を示すことができたと考えられる。出土地点・出土遺構・法量・分類などは第15表を参照されたい。

図示した土錘は165点を数えるが、これらは法量から以下の6類に分類できる(a類～f類)。

- a類 長さ5 cm未満、直径2 cm未満のもの。
- b類 長さ5 cm未満、直径2 cm以上のもの。
- c類 長さ5 cm以上、直径2 cm未満のもの。
- d類 長さ5 cm以上、直径2～4 cmのもの。
- e類 長さ5 cm以上、直径4 cm以上のもの。
- f類 長さ・直径とも類似した値を示すもの。a～e類が棒状を呈するのに対して球状を呈する。

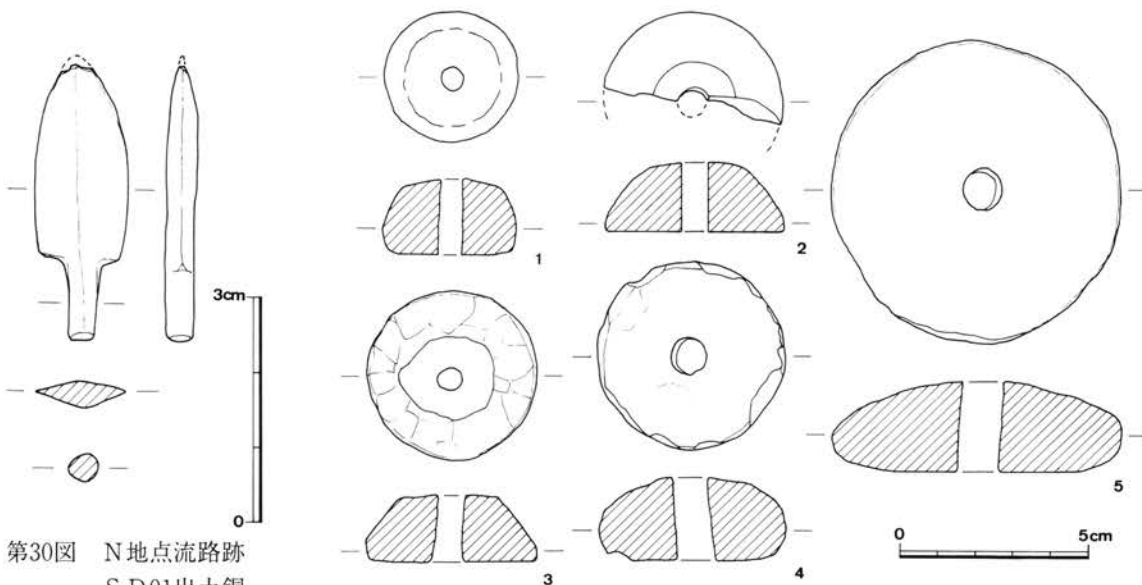
各類とも、遺構・包含層のいずれにおいても、混在して出土している。これは土錘の形状が単純であるため、時期ごとの変化が乏しいためと考えられる。以上の6類は、いずれも遺構出土の場合おおむね浦入Ⅲ・Ⅳ期のものであり、おもに0-2地点の各層から出土したものは浦入Ⅳ～Ⅷ期のものである。したがって、ここで取り上げた土錘はおおむね奈良・平安時代のものであると考えられ、同時期に複数の形態のものが用いられていたのであろう。これら形態の違いは使用方法の違いによるものだろうが、具体的なことについては明らかでない。

4. 銅鏃(第30図)

N地点流路跡S D01から出土した銅鏃である。S D01から出土した弥生土器とともに出土したことから、同時期のものと考えられる。残存長3.6cm・幅1.2cm・厚さ0.3cmを測る。

5. 紡錘車(第31図)

N・A・O-1の各地点から紡錘車が出土した。図示したものは5点である。



第30図 N地点流路跡
S D01出土銅
鏃

第31図 各調査地点出土紡錘車実測図

1はN地点包含層から出土したものである。側縁に面をもたない断面台形のものである。滑石製で、最大径3.6cm・高さ2.0cm・孔径0.6cmを測る。

2はA地点S K02から出土したもので、1同様、側縁に面をもたない断面台形のものである。須恵質のもので、最大径4.7cm・高さ1.8cm・孔径0.7cmを測る。

3はN地点S H10・11から出土したもので、側縁・頂部に明瞭な面をもち、断面台形のものである。須恵質のもので、最大径4.5cm・高さ1.8cm・孔径0.6cmを測る。

4はA-3地点不明遺構S H12から出土したもので、最大径が底径ではなく側縁中位にあり、頂部が丸いものである。土師質で、最大径4.9cm・高さ2.2cm・孔径0.9cmを測る。

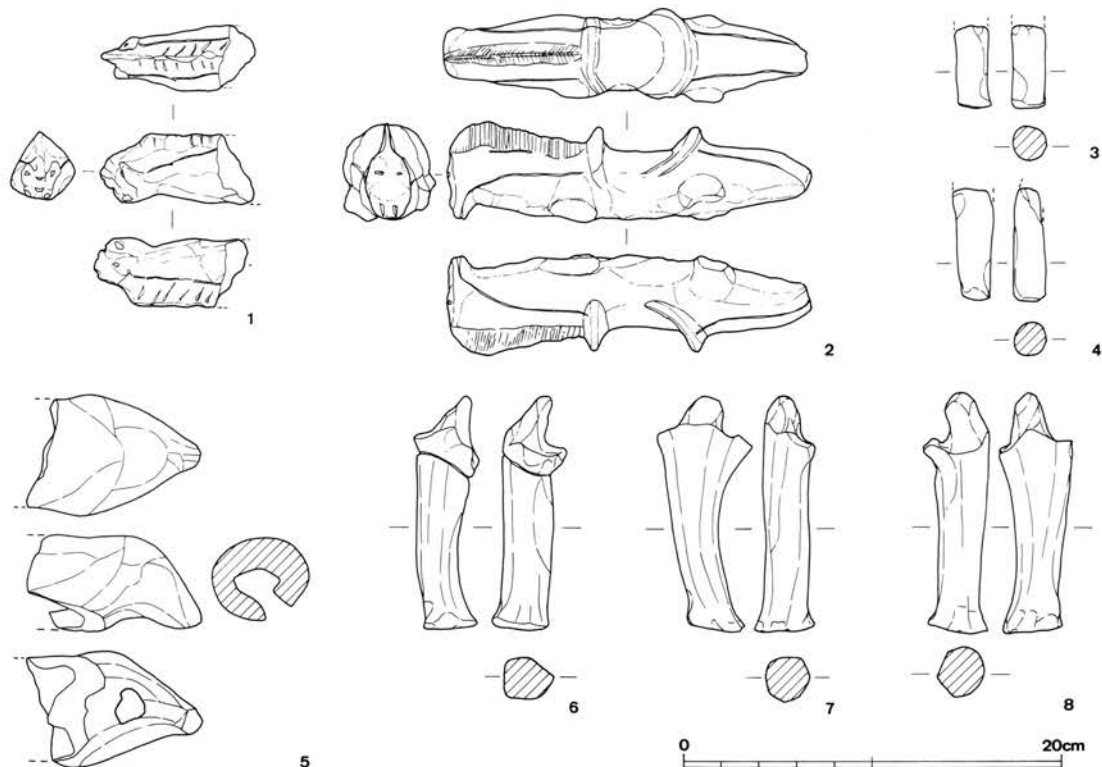
5はO-1地点海浜部から出土したもので、4同様、最大径が底径ではなく側縁中位にあり、頂部が丸いものである。凝灰岩製で、最大径7.7cm・高さ2.4cm・孔径1.0cmを測る。

6. 土馬(第32図)

1はN地点包含層から出土した土馬の頭部で、体部以下を欠損する。残存長8.2cmを測る。馬の顔やたてがみ・手綱などを表現する。顔は実物の馬のように長いものではなく、小さく表現される。色調は淡褐色で、胎土・焼成は良好である。

2はN地点テラス状遺構S H14埋土から出土した。脚を欠損するが、頭部から尾までよく残っている。全長19.3cmを測る。背に鞍を背負い、顔・たてがみ・手綱などを表現する。色調は橙褐色で、胎土・焼成は良好である。

3・4はN地点包含層から出土した土馬の脚と思われる円筒状の土製品である。3は全長



第32図 N地点出土土馬実測図

4.4cm、4は全長5.9cmを測る。直径はともに1.8cmを測り、色調は橙褐色で、胎土・焼成は良好である。

5は、N地点包含層から出土した土馬の尻と思われる破片である。脚部の接合部と思われる部分に柄穴が認められる。

6～8は、N地点テラス状遺構SH13付近で出土した土馬の脚部と思われる。ほぼ同形同大のもので、胎土や焼成も同じであることから、同一個体の脚部であろう。体部との接合部に＝があり、5のような個体に脚部を結合したのであろう。5～8は色調は灰白色で、胎土・焼成は良好である。

7. 石錘(第33図)

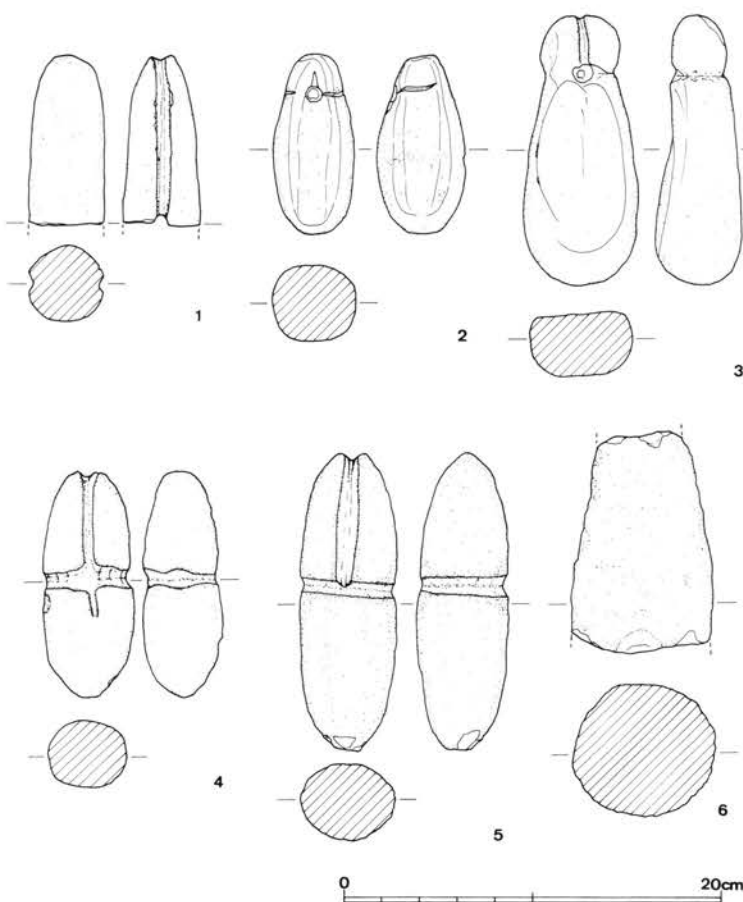
1はN地点包含層で出土した。後述する4・5と同形態のものと思われるが、中位付近で折損する。残存長8.95cm・最大径4.0cmを測る。長軸方向に1条の溝が少なくとも半周することがわかる。また、折損部にこの溝と重複して、紐を通すための孔が穿たれていたようである。折損部の状況から、両側から穿孔したことがわかる。

2はB地点包含層で出土した。全長9.5cm・最大径4.5cmを測る。最大径付近の断面形は円形に近い。端部の一方に端軸方向に1条の溝が1周する。

3はO-2地点第4層出土である。全長14.2cmを測る。最大径付近の断面形はやや隅丸四角形を呈し、長軸長5.5cm・短軸長3.2cmを測る。2と同じく端部の一方に短軸方向の溝が1周し、長軸方向に溝がめぐり。

4はA-2地点包含層で出土した。全長11.8cm・最大径4.1cmを測る。最大径付近の断面形はほぼ円形である。中位に短軸方向に溝が1条めぐり、それよりも上半にも長軸方向に溝が半周する。

5はN地点竪穴式住居跡SH15で出土した。全長15.7cm・最大径5.0cmを測り、両端がやや尖り気味に収束する。最大径付近の断面形はほぼ円形である。



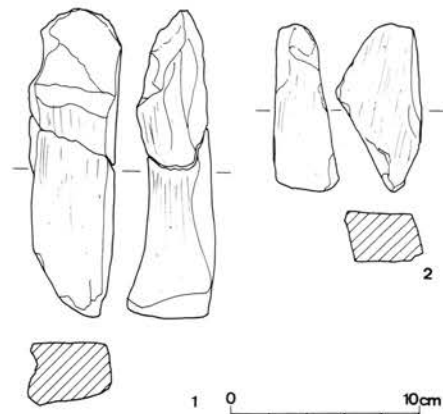
第33図 各調査地点出土石錘実測図

4と同様に、中位に短軸方向に溝が1条めぐり、それよりも上半にも長軸方向に溝が半周する。

6はN地点包含層で出土した。両端とも欠損するために全体の形状等は不明である。残存長11.7cm・最大径7.5cmを測る。

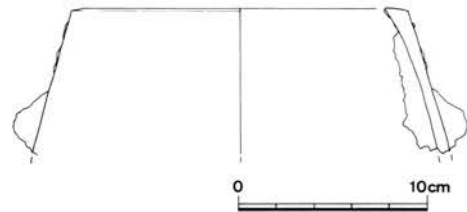
8. 砥石(第34図)

1・2はともにN地点包含層から出土した。1は残存長16.3cmを測る。2面に使用痕跡を認めることができる。2は残存長8.8cmを測り、3面の使用痕跡を確認できる。



第34図 N地点出土砥石実測図

9. 錢貨(図版第253右下) O-1地点礫面検出中に出土した。和同開珎である。直径2.48cm・厚さ0.14cmを測る。



第35図 A-1地点竪穴式住居跡
SH01土坑鉄釜実測図

(筒井崇史)

10. 鉄製容器(第35図) SH01床面に設けられた土坑の底面で検出した。方形の鉄塊の状態出土した。検出時には錆が著しく形状が明らかでなかったが、錆を落としたところ鉄製容器の一部であることがわかった。内傾して立ち上がり、端部に面をもつことから、羽釜の口縁部のような形状が推測される。鉄釜であろう。口径は18cm、遺存高は7.6cmである。

SH01の掘形および埋土から出土した多数の土器類は、8世紀代～9世紀代の年代を示していることから、当該資料はこの年代に使用されたものと考えられる。年代を知りうる律令期の鉄製容器としては希少な資料であるので、鍛冶関連遺物と共に、鉄の成分分析を九州テクノリサーチに依頼した。分析の結果、铸造品であることが判明した。分析成果は付編(付編Ⅱ、浦入遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査 3. 調査結果 URI-鉄釜)に掲載したので参照されたい。

当該資料は拳大の破片であるが、単なる廃棄物ではなく、鍛冶原料としてリサイクルするために搬入された铸造鉄器の破損品である可能性も考えられる。律令期における浦入湾岸は、今回の調査で土器製塩とあわせて、鍛冶による鉄器生産が盛んに行われていたことが確認されているからである。湾岸の開墾で使用された鋤や鍬などの、多量に開墾具を補修するために鍛冶遺構と考えることもできるが、鍛冶遺構の中には、規則的な配置がみられるなど組織的経営を推測させるものもあり、鉄原料を搬入して鍛冶生産を行っていたことを推測することも可能である。当該資料は、リサイクル品をインゴットとする鉄器生産の可能性の一端を示す遺物であり、浦入湾岸で鉄器生産のあり方を推測する手がかりの一つとして重要なものといえる。

(田代 弘)

第4章 ま と め

舞鶴火力発電所建設に伴い浦入湾岸のほぼ全域で発掘調査を実施した。東岸地域を舞鶴市教育委員会が、西岸地域を当調査研究センターが担当して調査を進めた。本報告書は当調査研究センターが実施した浦入湾西岸での発掘調査成果をまとめたものであるが、この間の浦入遺跡の調査で律令期の生産遺跡を中心とする重要な成果を多数得ることができた。ここでは、主な成果と問題点などについてまとめ、本報告の結びとしたい。

1. 縄文時代

浦入遺跡群の調査は、律令期の土器製塩の実態解明を主眼としたが、縄文時代に遡る遺構と遺物の有無確認することも重要な課題である。浦入湾口にある砂嘴の形成は縄文時代前期の海進の産物であること、砂嘴の中央に縄文時代のものでらしい泥炭層がみられ、生活痕跡を検出する可能性があったからである。嶋遺跡(M地点)の調査はこうした観点で計画されたものであった。嶋遺跡(M地点)では、わずかながら縄文時代中期から晩期の遺物を検出し、この場所が縄文人の生活領域の一部であることを確認することができた。遺構は明らかにできなかったものの、縄文時代晩期末頃～弥生時代前期頃の海岸を検出した。嶋遺跡(M地点)での発見は、浦入湾岸に縄文時代の遺構や遺物が良好な状況で遺存しているとの確信を得た。この調査は、R地点での縄文時代の丸木舟、ドングリ貯蔵穴の発見(第2章第7節5)、N地点・P地点での居住地区発見(第1章3節4・第2章第2節1)のきっかけとなった。

N地点・P地点の調査は、浦入遺跡の成立が縄文時代早期以前に遡ることを明らかにした(第1章3節4・第2章第2節1)。P地点では、早期以降、晩期にかけての遺物包含層が層序良く確認され、各時期の良好な土器資料が多数出土した。鍵層である火山灰との関連で実年代を推定する資料が得られるなど、重要な成果が数多く得られた(第1章第3節4)。この結果、浦入湾奥東斜面に位置するP地点周辺は、居住域として縄文期の浦入遺跡の中心的位置を占めていたことが明らかになったのである。

浦入湾口の砂嘴に位置するM地点・R地点は、P地点周辺を活動拠点とした縄文人の生活領域の一部を構成していた。砂嘴上のM地点では中期から晩期にかけての縄文土器が採取されている。気候がやや寒冷化した中期には、砂嘴が拡大した。草木が繁茂し、泥炭層が砂嘴中央に形成されたのである。

砂嘴の基部にあたるR地点では、人工的なドングリ集積と、丸木舟を検出した。丸木舟の製作年代は、5260±90B.P.年で、縄文時代前期に属するものであることがわかった。わが国で最古・最大級と評価するものである。海上で用いられた丸木舟として希少事例であり、縄文時代の交

易論に一石を投じるものとなった(第2章第7節3・4)。近接して杭、礎石とみられる石がみつかっており、この場所が船着き場としての機能を果たしていたことを類推させる。丸木舟直下で発見したドングリ集積は、食料用として利用するために貯蔵されたいわゆるドングリピットであることがわかった。丸木舟が包含されていた海成砂層直下の地山に穿たれており、C14年代は 5380 ± 70 年B.P.と、丸木舟の約100年前の年代を示している。海水面上昇により丸木舟が海成砂に埋もれる直前の浜の様子を示す資料である。

M地点・R地点では、以上のような考古学的な調査とあわせて、地質学など自然科学的方法を用いて検討を試みた。その結果、縄文時代前期から弥生時代にかけての海水面変動と気候の変化を明らかにすることができた。約5000年以前が海拔0mを越す高海面、約5000年～4000年前の低海面、約4000年～2600年前の高海面、約2600年前の海面低下の4つの大きな変化を確認したのである。金原正明氏は、日本海における縄文時代の海面変化に関する資料として、自然科学的にも貴重な資料と評価している(付編I)。砂嘴は、高海面の時期には水没して見えず、低海面の時期には面積を拡大して草木を繁茂させていたのだった。このことは、土壤に含まれる花粉分析の結果からも裏付けられている。P地点の斜面でも海水面変動を示す地形・土層堆積を確認している。このように、縄文時代の浦入遺跡の景観と生活環境を生々しく復原することができたことも、今回の調査成果の一つである。

2. 弥生時代

嶋遺跡(M地点)では、縄文時代晩期末頃から弥生時代中期にかけての海岸がみつかった。約2600年前におこった最後の海面低下に対応する地形と考えている。この海岸は、花崗岩起源の白砂により弥生時代後期後半までには埋没した。古墳時代以降、現在に至るまで海水面変動による海岸堆積物の大きな変化はみられないことも確かめられた。

M地点の土器は、弥生時代前期から後期にかけてのものが散発的にみられたにすぎないが、前期と中期の土器の中に注目すべきものがある。前期の土器は、少条の削出突帯を有する前期中段階相当のものである。丹後町竹野遺跡や網野町松ヶ崎遺跡、加悦町蔵ヶ崎遺跡出土資料などと並ぶ京都府北部地域で最も早い段階の弥生土器資料と位置付けることができる。

若狭湾岸の土器製塩遺跡から前期土器が散発的に出土することが知られている。これらは外海に近接するリアス式海岸に形成された狭小な海岸部に立地する小規模な遺跡であり、定住的な遺構が形成されたと考えにくいものが多い。

季節的な漁撈拠点など非定住的な性格が推測されるのであり、当該資料もこうした事例のひとつといえる。弥生文化は短期間のうちに日本海沿岸を北上し、東北地域にまで伝播するが、これには縄文時代以来発達した日本海沿岸部での海上交通網が背景にあるとする意見がある。外海に面して点在するこのような遺跡は漁撈拠点であると同時に、遠距離航行における一時寄港地として利用されたことも考えることができるのであり、海上交通を媒介とした弥生文化伝播の可能性を考える上で興味深い事例である。

中期の土器は第Ⅲ様式古段階に相当するものが主体である。北陸地域から搬入された小松式の無頸壺・甕型土器はこれらに伴うものであろう。中期段階の北陸からの搬入土器としては丹後・丹波地域の初例である。

後期の土器は湾岸一帯で散発的に出土したが、最も集中してみられたのがN地区の流路跡である。この流路から出土した土器群は、後期後半から終末期にかけての完形品を多数含む良好な資料である。検討の結果、丹後地域の後期土器様式と内容を一にしていることがわかり、大浦半島が丹後地域と深いつながりの中で地域文化を形成していたことが理解された。

丹波・丹後地域の後期弥生土器は、墳墓資料の充実ぶりに対して集落出土資料は乏しく、集落における器種構成や使用実態は必ずしも明らかではないのが実状である。このような中で本資料は屈指の存在であり、当該地域の後期土器研究の標識的資料として活用が期待される。

3. 古墳時代

当調査研究センターが調査対象とした西岸地域では、O-1地点の海岸部包含層や嶋遺跡で前期から後期にわたる土器器・須恵器が散発的にみられたが、全体に遺構・遺物は希薄であった。古墳時代の遺構・遺物は、舞鶴市の調査区である浦入湾東岸のQ1地点に集中して検出されている。舞鶴市の成果とあわせてみていくことにしたい。Q1-3地点SH04は、前期の竪穴式住居跡から、基準資料とし得る布留2式平行期の一括資料が得られた。TK23型式の須恵器を伴うQ1-5地点検出住居跡(第6図左上)は、古墳時代中期の鍛冶工房であることが確認された。鍛冶炉跡は3基の鍛冶炉とこれを囲う溝が検出されている。浦入湾に隣接する千歳下遺跡で海浜部における祭祀行為に伴う同時期の農具・工具形のミニチュア鉄器類が、完形土器群・青銅鏡・勾玉や滑石製模造品などとともに一括出土しているが、これらとの関連が注目される場所である。

浦入湾岸には複数地点に古墳が分布していることが、調査前の分布調査でわかっている。このうち2基の古墳を調査した。西岸に位置する浦入西2号墳と、東岸に位置する浦入2号墳である。浦入西2号墳は当調査研究センターが調査し、概要報告としてすでに報告した。舞鶴湾奥、宮津湾、外洋を遠望しうる丘陵頂部に立地する単独墳である。横穴式石室を内部主体とする後期前半(TK10型式)の古墳であり、舞鶴湾岸の横穴式石室としては早い時期のものであることがわかった。舞鶴湾岸には、白杉・佐波加など主要な港湾に後期古墳が分布することが知られており、こうした古墳は海上交通を掌握した海人集団の首長の奥津城とする意見がある。浦入西2号墳の被葬者も、同様の性格を有した人物であろう。浦入2号墳は舞鶴市教育委員会が調査した。崩壊が著しく、石室床面の一部だけが遺存していた。後期末の遺物の細片が出土したのみであり、築造時期や構造など詳細は明らかでない。

4. 奈良・平安時代

古墳時代までの浦入遺跡は、以上でみたように豊かな海の資源と海上交通上の利便性を背景として成立した海洋性の自然村落といえる。ところが、奈良・平安時代になると、遺跡の様相は一

変する。一般の村から、専門的な生産現場に姿を変えるのである。P地点やO地点の臨海部には大規模な造成がなされ、製塩炉や作業場と考えられる遺構群が形成された。N地点を中心とする西岸の丘陵部には掘立柱建物跡やテラス状遺構が設営された(第2章第2節4・5、第3節、第4節)。土器製塩関連遺構と重複して鉄器製作を行った鍛冶炉跡も多数検出され、土器製塩施設に近接して鍛冶工房が存在したことも確かめられた(第2章第5・6節)。このように、今回の調査では、浦入遺跡群は臨海性の自然村落を出発点とし、律令期には複合的な生産遺跡が形成されたことを明らかにすることができた。奈良・平安時代の主要な成果である土器製塩と鍛冶関連遺構について、まとめておく。

(1)土器製塩

土器製塩の展開 浦入遺跡群での土器製塩は、古墳時代後期頃から始まり、飛鳥時代頃まで自家消費的な小規模生産が行われていたと推定される。奈良時代初期頃から次第に生産が盛んになり、奈良時代後半には大規模な遺構の形成をみるにいたる(O地点・P地点)。浦入湾西岸丘陵部の造成された奈良時代のテラス状遺構と掘立柱建物跡群(A・N・B地点)は、奈良時代のこれら海浜部に形成された土器製塩関連遺構群に対応して形成された工房群と考え得るものである。平安時代には、土製支脚を伴う土器製塩が隆盛し、湾岸一帯に分布をひろげる。平安時代中・後期の遺構・遺物が最も多く、この時期に最も盛んに土器製塩が行われたことが判明した。

製塩は、平安時代末期まで盛んに行われた痕跡を示すが、鎌倉時代初期には生産が終息する。以上のことから、浦入湾岸では、律令期を中心に土器製塩が大規模に展開し、舞鶴湾沿岸地域における生産拠点として機能していたと推測されるのである。

小浜市域を中心とする若狭湾岸(内外海湾)での土器製塩は、製塩容器の最も大型化する段階(船岡式・奈良時代初頭～前半)に盛期をむかえ、製塩土器支脚が発達する平安時代には次第に衰退することが確かめられている。浦入遺跡では製塩土器支脚の出現以降に生産規模が著しく拡大する。内外海湾での国家的な土器製塩生産が衰退した後に、隣接する舞鶴湾岸で土器製塩が活性化することを確かめる事ができた。

生産活動の状況 浦入遺跡における土器製塩は、奈良時代末期～平安時代初頭、平安時代中頃、平安時代末期の三時期に生産のピークが認められた。律令期を通して、休止期間を設けながら、断続的に継続したと考えられる。炉跡や土器製塩廃棄層はO地点・P地点の海岸部に集中する。O-2地点下層では煎熬用燃料として用いられたとみられる炭・灰と廃棄された製塩土器容器の堆積を確認しており、煎熬工程は主にこれらの地区周辺で行われたと考えられる。A・N・B地点で検出したテラス状遺構は、生産従事者の居所あるいは生産物収納施設など、生産関連施設と考えられるものであるが、製塩土器の出土をみており、焼き塩など製塩工程の一部を担った可能性も考慮しておきたい。

煎熬に先立つ重要な工程として採鹹工程がある。煎熬作業場の近接地に採鹹をする場所を求めるとすると、O-1地点で検出した旧海岸線が有力である。この場所は、浦入湾奥に位置する最も広く安定した海岸であり、礫面に覆われた安定した緩傾斜面を有していて、作業に適した場所

である。この海岸からは奈良・平安時代の大量の生活雑器、人形など律令祭祀遺物などの多数の遺物が、人々の活発な活動の跡をうかがうことができる。採鹹工程を行う生産の場である一方、生産物集散所や港湾として機能した場であったと考えられる。

製塩土器 製塩土器の良好な資料群を得ることができ、若狭における土器製塩研究成果に新たな知見を加える事ができたことも重要な成果の一つである。最も重要な点が、若狭湾における土器製塩の終末時期に関する資料である。若狭では、製塩土器支脚が最も長大化する塩浜式の段階(11世紀代と推定)に生産規模が零細化し、土器製塩の終末を迎えたと考えられてきた。しかし、今回の調査で、O-2 地点上層 S K01・02で、塩浜式とほぼ同一形式の支脚が12世紀半ば以降に製作された黒色土器、鍋などを伴う事を確認したことにより、若狭湾岸の土器製塩の終末時期が12世紀代後半まで遅れる可能性が高まった。この年代観は、同一形式群が大量に廃棄された土層(O-2 地点 S X01など)の検討結果においても追認することができる。浦入湾岸では、この時期に土器製塩が活性化し、舞鶴湾岸の浦々にも分布を広げており、塩浜式の年代、位置付けについて再考をせまるものとなった。O-2 地点上層 S K01・02出土資料は、製塩土器に年代の定点を与える資料としてきわめて重要なものといえる。

浦入遺跡群と周辺の土器製塩遺跡 舞鶴市が行った舞鶴湾岸の分布調査で、三浜遺跡をはじめ佐波加遺跡・千歳下遺跡・大丹生遺跡・瀬崎白石浜遺跡など律令期の中・小規模な土器製塩遺跡が多数確認された。調査を行った舞鶴市教育委員会の吉岡博之氏によると、湾岸の入り江という入り江で土器製塩が行われていたと推定しうる状況がみられるという。浦入遺跡群における土器製塩は各時期にわたり生産規模も大きい事から、このような舞鶴湾岸に展開した他の土器製塩遺跡と補完しながら、広範な遺跡群を形成していた可能性を指摘しておきたい。

O-2 地点上層 S K01・02出土資料など、支脚を伴う製塩土器の良好な資料群を得ることができ、若狭における製塩土器研究成果に、新たな知見を加える事ができたことも成果の一つである。

(2)鉄器生産

多数の鍛冶炉跡 浦入の塩浜では、多数の鍛冶炉が営まれ、鉄器生産を行っていた事が明らかとなった。鍛冶炉跡は遺構の遺存状況はあまり良好ではなかったが、遺構周辺・埋土中から回収した鍛造剥片の自然科学的検討を行い、鍛冶遺構の認定を行った結果、古墳時代中期末には鍛冶が開始され、製塩が大規模化する奈良時代・平安時代に鍛冶炉が急増することを確認した(第2章第5・6節・付編Ⅱ)。律令期の浦入湾岸は土器製塩とともに鉄生産が盛んに行われていた事が判明したのである。

生産形態の変化 鍛冶遺構の分布状況・推測される経営時期から、本遺跡の鉄器生産形態は、次の2段階として理解できる。古墳時代中期から奈良時代前半にかけてみられる散発的な生産段階と、奈良時代後半から平安時代にかけての組織的な生産段階である。後者に該当する遺構群は、O-1 地点、O-2 地点で検出された鍛冶炉群であり、組織的に労働編成された鍛冶工房の存在を示す遺構として注目されるものである。本遺跡群における鉄器生産は、塩浜の開墾に使用された鉄製品の補修鍛冶などを目的とした自家消費的な鍛冶を端緒として、集中的な鉄器生産現場へ

と変質していったと考えられる。その背景には塩浜への律令権力による支配強化が推定されるところである。

鍛冶の原料 鉄生産の内容は、素材鉄が遺存していないので明らかでないが、鍛打作業に伴って生じる鍛造剥片の形状や色調などの特徴から、精製された素材鉄、つまりインゴット状に整えられた素材鉄(破損鉄器を含む)を原料とするような鍛冶の形態が想定される。A地点S H01に付設する土坑から出土した鑄造鉄製容器の破片は、鍛冶原料(浸炭材)となりうるものであり、本遺跡での鉄器生産形態を明らかにする上で重要な資料である。

以上、主な調査成果を時代別に列記した。遺跡の性格に関する多角的な考察などは果たせなかったが、律令期の製塩土器と鍛冶関連遺構の検討を行った際に遺跡の成立背景や生産形態などについて私見をのべたので参照されたい。^(注27)

重要な成果が多く、解決すべき問題が山積している。遺跡の全体的な評価は、舞鶴市教育委員会による浦入湾東岸地域の調査報告の結果をまっ、検討を進めていきたい。

(田代 弘)

注1 本項の執筆にあたっては以下の文献を参考にした。

日本の地質「近畿地方」編集委員会編『日本の地質6 近畿地方』 共立出版株式会社 1987
舞鶴市史編さん委員会編『舞鶴市史 通史編(上)』 舞鶴市 1993

注2 本項の執筆にあたっては多くの報告書・文献等を参考にしたが、すべてを割愛した。ご了承いただきたい。

注3 田代 弘「京都府北部地域の松菊里型住居」(『みずほ』第27号 大和弥生文化の会) 1998

注4 千歳下遺跡出土遺物については、現在舞鶴市教育委員会により整理中である。文献としては下記のものがある。

舞鶴市教育委員会『舞鶴市千歳下遺跡発掘調査現地説明会資料』 1999

注5 田代 弘「12世紀の土器製塩炉跡」(『京都府埋蔵文化財情報』第69号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1998

注6 これまでに当調査研究センターで刊行した概報等は以下の通りである。なお、既存の刊行物と本書の記述に異なる点があれば、本書をもって正式な報告としたい。

田代 弘「舞鶴発電所関係遺跡(嶋遺跡)平成7年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第73冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996

増田孝彦・筒井崇史「浦入遺跡群平成8年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第80冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1998

石井清司・田代 弘・筒井崇史・和泉大樹「浦入遺跡群平成9年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第85冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1998

また、検出遺構・出土遺物について、検討を試みたものとして以下の文献がある。

筒井崇史・橋本順子「竪穴式住居跡内に煙道を有するカマドについて」(『京都府埋蔵文化財情報』第65号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1997

田代 弘「12世紀の土器製塩炉跡」(『京都府埋蔵文化財情報』第69号 (財)京都府埋蔵文化財調査

- 研究センター) 1998
- 石井清司・田代 弘「海上で用いられた丸木舟」(『京都府埋蔵文化財情報』第70号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1998
- 田代 弘「出現期の製塩土器支脚」(『京都府埋蔵文化財情報』第71号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1999
- 田代 弘・水野聡哉「律令期の土器製塩遺跡における鍛冶遺構」(『京都府埋蔵文化財情報』第74号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1999
- 注7 浦入西2号墳については、注6増田・筒井文献に概要報告を載せているので、同書を参照されたい。
- 注8 若狭地域における製塩土器および製塩炉の報告・研究としては以下のような文献がある。
- 石部正志編『若狭大飯-福井県大飯郡大飯町考古学調査報告-』 福井県大飯町 1966
- 森 浩一・石部正志ほか「福井県田烏湾における古代漁業遺跡調査報告」(『若狭・近江・讃岐・阿波における古代生産遺跡の調査』 同志社大学文学部文化学科) 1971
- 若狭考古学研究会編『吉見浜遺跡-若狭における土器製塩遺跡の研究-』(大飯町教育委員会) 1974
- 注9 住居跡の四隅のうち1つを掘り残して、住居内部に張り出した部分を造り、そこに竈を造るものが「青野型竪穴式住居跡」と定義されている。「青野型(竪穴式)住居」が最初に提唱されたのは下記の文献においてである。
- 中村孝行「青野遺跡第5次発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第9集 綾部市教育委員会) 1982
- 注10 丸木舟は、京都府内では本例以外に、向日市森本遺跡(縄文時代後期)・長岡京市神足遺跡(弥生時代)で出土している。
- 注11 能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団編『石川県能都町 真脇遺跡』 1986
- 注12 本項の執筆にあたっては以下の文献を参照した。
- 池田征弘編『山宮遺跡』兵庫県文化財調査報告第172冊 兵庫県教育委員会 1998
- 伊藤今日子「宮ノ下遺跡出土の土器」(『京都考古』第35号 京都考古刊行会) 1984
- 泉 拓良「北白川追分町遺跡出土の縄文土器」(『京都大学埋蔵文化財調査報告 -北白川追分町縄文遺跡の調査-』 京都大学埋蔵文化財研究センター) 1985
- 堅田 直編『平遺跡調査概要』考古学シリーズ1 帝塚山大学考古学研究室 1966
- 玉田芳英「中津式土器」(『調査研究集録』第7冊 特集称名寺式土器に関する交流研究会の記録横浜市埋蔵文化財センター) 1990
- 千葉 豊「緑帯文系土器群の成立と展開-西日本縄文後期前半期の地域相-」(『史林』第72巻第6号史学研究会) 1989
- 千葉 豊「近畿北部・山陰の成立期緑帯文土器」 1990 千葉・大下編1990に収録
- 千葉 豊・大下 明編『小森岡遺跡』竹野町文化財調査報告書第8集 竹野町教育委員会 1990
- 松井敬代編『見蔵岡遺跡其の二』 竹野町文化財調査報告書第11集 竹野町教育委員会 1997
- 柳浦俊一「山陰地方の縄文土器研究に残された課題~とくに、早期末~前期初頭・西川津式土器群と後期初頭・福田KⅡ式古段階(中津Ⅲ式)土器群について~」(『中・四国縄文時代研究の現状と課題』中四国縄文研究会10周年記念大会資料 中四国縄文研究会) 1999
- 注13 表裏縄文施文の上、刺突列を配す土器に宮ノ下Ⅱ式があるが、その好例となるであろう伊藤今日子氏により紹介された積 龍雄氏の京都府宮ノ下遺跡採集資料(伊藤1984)は、その刺突に際し半截竹

管状工具の外側を用いているようであり、本遺跡に認められる内側使用例とは明らかに異なる。前期への連続が積極的には認められない兵庫県山宮遺跡出土資料には前者があり、後者が認められないので(池田編1998)、それらは年代差となる可能性があろう。設定の経緯からは外れるものの、表裏縄文という単一属性をもって宮ノ下Ⅱ式に比定し、比較的短い時間幅を考える論法には問題がある。

注14 山陰地域の西川津式土器群の口縁部形態に似る。近年の柳浦俊一氏による口縁部肥厚帯の形態分類に対比させれば、「5」とされたものに類似するものと思われ、「西川津A式(仮称A1類)3期」に比定されよう。縄文施文がなく、無文地に斜行する刺突列を配する点も類似する。

注15 堅田直氏が「平KⅠ式」として写真掲示した資料には、中津式に先行すべきものが含まれており、ときに同類のものが「平CⅢ式」として拡張して解されていることがある(千葉・大下編1990)。平遺跡の層位的成果を尊重するならば、いずれも中期末に比定された上での再編が要請されよう。

注16 分類にあたっては、機能・用途によって分類される段階(最上位の器種分類)、形態的・機能的特徴によって細分・分化される段階(上位の器種分類)、それらを調整手法その他の特徴によって細分される段階(下位の器種分類)の、大きく3段階にわけらる。

最上位の概念を、その土器が持つ機能面を表す名称で示し、その下位に位置づけられる2つの分類概念に対して、上位のものをアルファベットの大きく、下位のものを小さくで表現する。したがって、器種名称は杯A a・杯A bのように表示する。ただし、下位の分類がみられない場合には、示さない。

注17 注6田代「12世紀の土器製塩炉跡」に同じ。

注18 石部正志「製塩遺跡」(『考古資料の見方<遺跡編> 地方史マニュアル』 柏書房) 1983

注19 注6田代「出現期の製塩土器支脚」に同じ。

注20 注6田代「12世紀の土器製塩炉跡」に同じ。

注21 小嶋芳孝「平底土器の検討」(『考古学と技術』同志社大学考古学シリーズⅣ 同志社大学考古学研究室) 1988

注22 小嶋芳孝・宇野隆夫「北陸における塩生産」(『北陸の古代手工業生産』 北陸古代手工業生産史研究会) 1989

注23 本資料については、当調査研究センター理事井上満郎氏(京都産業大学教授)より、判読にあたってさまざまな教示を得た。

注24 「与社」の用例については、以下のような平城宮出土木簡に例がある。

〔表〕丹後国与社郡日置郷庸米六斗

〔裏〕 宇羅媛マ身万呂

〔平城宮発掘調査出土木簡概報〕19(奈良国立文化財研究所) 1987

注25 朝岡康二「野鍛冶」(『ものと人間の文化史』85 法政大学出版局) 1998 p14

注26 大澤正巳「古代交野と鉄～冶金学的見地からのアプローチ」(『平成9年度市民文化財講座講演会資料』) 1998.2.1 p6

注27 注6田代「12世紀の土器製塩炉跡」および、注6田代「出現期の製塩土器支脚」および、注6田代・水野「律令期の土器製塩遺跡における鍛冶遺構」

参考文献

石部正志「原始・古代の土器製塩」(『講座・日本技術の社会史』2 日本評論社) 1985

入江文敏「若狭における古墳時代土器製塩遺跡についての覚書—大島浜瀬・宮留遺跡の発掘調査から」

- (『わかさのうみ—紀要Ⅰ—』 福井県若狭歴史民俗資料館) 1986
- 宇野隆夫『律令期の考古学的研究—北陸を舞台として—』桂書房 1991
- 宇野隆夫『越における律令的生産構造の展開』(『越と古代の北陸』古代王権と交流3 名著出版) 1996
- 大沢正己『古代交野と鉄 冶金学的見地からのアプローチ』(『平成9年度市民文化財講座講演会資料』) 1998
- 大森 宏・森川昌和『若狭の土器製塩』(『考古学雑誌』第64巻第2号) 1978
- 岸本雅敏『古代の塩の意義』(『考古学による日本歴史』16 産業Ⅰ) 1996
- 古代の土器研究会編『古代の土器1 都城の土器集成』 1992
- 古代の土器研究会編『古代の土器2 都城の土器集成』 1993
- 古代の土器研究会編『古代の土器3 都城の土器集成』 1994
- 古代の土器研究会編『古代の土器5—2 7世紀の土器』 1997
- 近藤義郎編『日本土器製塩研究』青木書店 1994
- 白石太一郎『塩』(『日本歴史考古学を学ぶ』下 有斐閣) 1986
- 中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社 1995
- 奈良国立文化財研究所編『平城宮発掘調査報告Ⅵ』 1976
- 奈良国立文化財研究所編『平城宮発掘調査報告ⅩⅡ』 1985
- 奈良国立文化財研究所編『平城宮発掘調査報告ⅩⅢ』 1991
- 奈良国立文化財研究所編『平城宮発掘調査報告ⅩⅣ』 1993
- 奈良国立文化財研究所編『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』 1978
- 橋口尚武『渡海の考古学—東日本の丸木舟・準構造船と伊豆諸島』(『人類史研究』9) 1997
- 法隆寺編『法隆寺防災施設工事・発掘調査報告書』 1985
- 『若狭大飯 福井県大飯郡大飯町考古学調査報告』福井県大飯町 1966
- 『浜瀬遺跡—若狭大島半島土器製塩遺跡調査概報—』若狭考古学会・大飯町教育委員会 1971
- 『阿納塩浜遺跡』若狭考古学会・大飯町教育委員会 1972
- 『吉見浜遺跡—若狭における土器製塩遺跡の研究—』若狭考古学会・大飯町教育委員会 1974
- 『岡津製塩遺跡 第1次・第2次発掘調査報告—』福井県小浜市教育委員会 1980
- 『大島宮留遺跡調査概報』若狭考古学研究会報告6 若狭考古学研究会 1986
- 『塩—生産の歴史 三千年—』 福井県立若狭歴史民俗資料館 1988
- 『寺家遺跡Ⅱ』石川県埋蔵文化財センター 1988
- 『北陸の古代手工業生産』北陸古代手工業生産史研究会 1989
- 『シンポジウム製塩土器の諸問題 古代における塩の生産と流通』第9回 塩の会 1997
- 『共同研究 中世食文化の基礎的研究』 国立歴史民俗博物館研究報告第71集 国立歴史民俗博物館 1997

付編 自然化学的方法による分析結果

I. M・N・R地点における自然科学的分析

はじめに

浦入遺跡の発掘調査では、調査期間中に計4回の自然化学分析を実施した。すべて(株)古環境研究所に依頼した。分析を実施した調査地点・分析の内容は以下の通りである。

M地点(嶋遺跡) 花粉分析を行った。

N地点 放射性炭素年代測定・花粉分析・樹種同定を行った。

R地点 放射性炭素年代測定・花粉分析・種実同定・樹種同定・珪藻分析について行った。

R地点下層 平成10年度に委託、種実同定・放射性炭素年代測定を行った。

各分析成果については、本来ならばそのすべてを公表すべきであるが、紙幅の関係上、その一部を要約して報告する。なお、本報告に関しては、提出された報告書の記述をすべて筒井が要約した。(筒井崇史)

1. M地点(嶋遺跡)における花粉分析

M地点(嶋遺跡)は、舞鶴湾の入口東岸に形成された砂嘴上に立地しており、砂嘴を形成する堆積物の構造が良好に観察された。また、花粉分析可能な堆積物が採取された。M地点では、花粉分析と層序から植生と環境の変動について検討を行った結果、データの詳細は省略するが、以下のような成果を得ることができた。

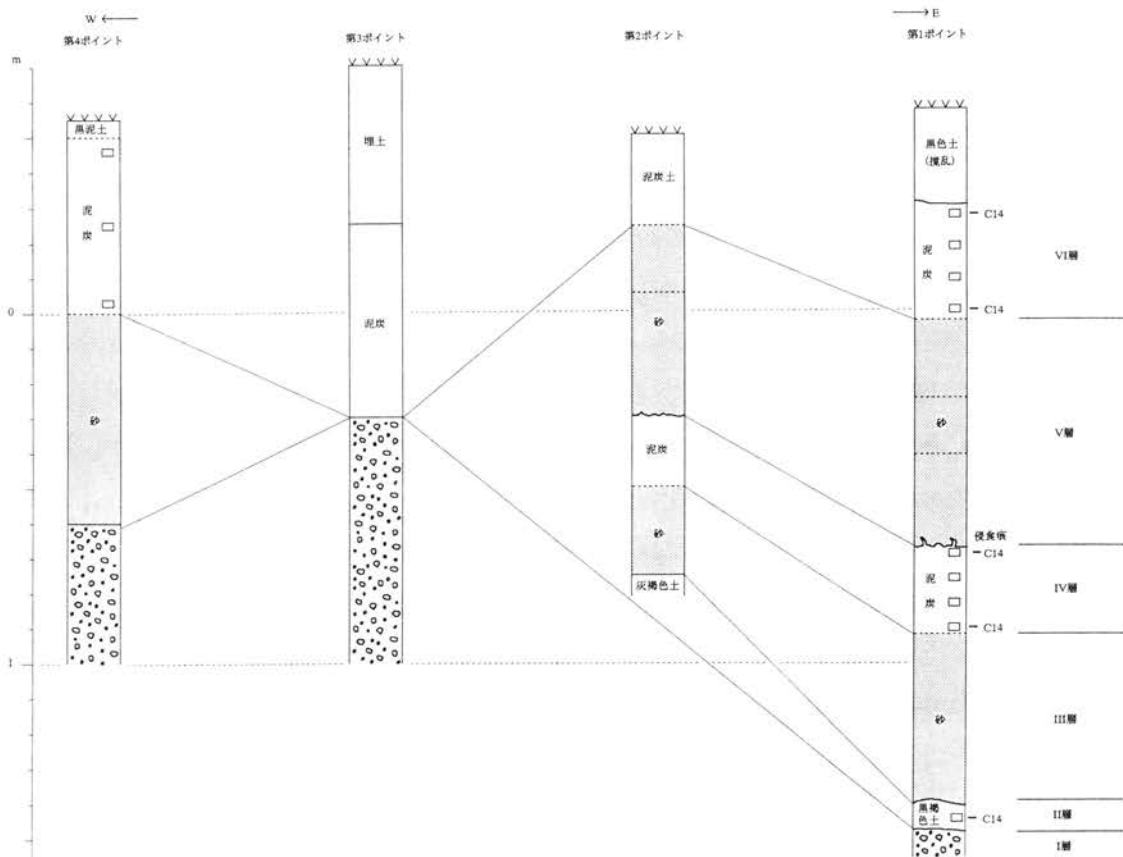
①嶋遺跡の砂嘴の堆積物は大きく6層に区分され、3層の礫ないし砂と3層の陸成の泥炭ないし土壌堆積物で形成される。IV層(泥炭層)の上面には浸食痕が認められ、堆積構造から3回の海水準の上昇と低下の変動が示唆される。

②嶋遺跡の花粉分析結果では、花粉群集の特徴から下位、中位、上位の3つに区分される。

③下位群集(II層、黒褐色土)の時期ではスギ林が優勢であり、カシ類(コナラ属アカガシ亜属)などの照葉樹林も分布する。堆積地はイネ科を主にアカザ科・ヒユ科などが生育し、やや乾燥し乾陸化していたと推定される。

④中位群集(IV層、泥炭)の時期では、カシ類を主とする照葉樹林がスギ林より優勢になり、他の広葉樹要素も増加する。堆積地はイネ科、カヤツリグサ科、ガマ属・ミクリ属、タデ属サナエタデ節が生育し、水湿地の環境を呈する。

⑤上位群集(VI層、泥炭)の時期では、マツ林(マツ属複維管束亜属、アカマツないしクロマツ)が多くなり、スギ林も拡大する。照葉樹林は減少する。堆積地はイネ科やハンノキ(ハンノキ属)



第1図 M地点(嶋遺跡)における土層柱状図

の生育する湿地であったとみなされる。

⑥弥生時代(第6ポイント)ではスギ林がやや優勢で、カシ類やシイ類の照葉樹林も分布し、二次林要素とみられるニヨウマツ類もやや多く分布する。草本ではイネ科が多い。現生の池堆積物(第5ポイント)の時期も、弥生時代(第6ポイント)と大きく変化はないが、上部でイネ属型を伴うイネ科花粉が増加し、周辺で樹木がやや減少し、人為干渉が大きくなる。

2. N地点における自然科学分析

(1)はじめに

N地点は浦入湾奥の傾斜地に立地する。N地点では、小さな谷地形に形成された堆積物から細粒の堆積物が観察され、放射性炭素年代測定・花粉分析・樹種同定の検討を行ったが、ここでは、放射性炭素年代測定の結果と、分析から得られた成果について報告する。

まず、試料を、調査トレンチの断面より採取した。上位より上部のやや淘汰の悪いシルト・粘土(試料1・2、L=約2m)、砂礫を挟み、中部のシルト・粘土(試料3・4、L=約2m)、砂礫を挟み、下部の縄文時代前期の土器を含む炭化物に富む粘土(試料6~10)、その直上の粘土(試料5)および下位に続く粘土(試料11~14)が分布する。また、樹種同定試料として、木材①~④がある。このうち、放射性炭素年代測定用試料は、試料6・10・14・木材③である

第1表 N地点放射性炭素年代測定の試料と方法

No	試料	試料の種類	前処理・調整	測定法
1	URANa 1 (試料6)	粘土	酸-アルカリ-酸洗浄 低濃度処理 ベンゼン処理	β 線-計数法
2	URANa 2 (試料10)	粘土	酸-アルカリ-酸洗浄 低濃度処理 ベンゼン処理	β 線-計数法
3	URANa 3 (試料14)	粘土	酸-アルカリ-酸洗浄 低濃度処理 ベンゼン処理	β 線-計数法
4	URANa 4 (木材③)	木材	酸-アルカリ-酸洗浄 ベンゼン処理	β 線-計数法

第2表 N地点放射性炭素年代測定の結果

試料名	^{14}C 年代 (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ^{14}C 年代 (年BP)	歴年代	測定No. (Beta-)
No 1	6090 ± 70	-26.7	6060 ± 70	交点 BC 4940	10247
				2 σ BC 5205 TO 5170	
				BC 5135 TO 5110 BC 5095 TO 4800	
No 2	6470 ± 70	-26.2	6450 ± 70	1 σ BC 5050 TO 4895	10248
				交点 BC 5405	
				2 σ BC 5470 TO 5255 1 σ BC 5440 TO 5295	
No 3	7170 ± 50	-28.3	7110 ± 50	交点 BC 5965	10249
				2 σ BC 6005 TO 5845	
				1 σ BC 5980 TO 5940	
No 4	5910 ± 70	-32.5	5790 ± 70	交点 BC 4680	10250
				2 σ BC 4805 TO 4475	
				1 σ BC 4750 TO 4540	

(2)放射性炭素年代測定

試料と方法ならびに測定結果は、第1・2表

(2 σ : 95% probability, 1 σ : 68% probability)

にまとめた。

(3)まとめ

上記の放射性年代測定および花粉分析・樹種同定から以下のような成果が得られた。

縄文時代前期の土器を含む粘土では、最上部の試料6で6060±70y.B.P.、試料10で6450±70y.B.P.の放射性炭素年代を示し、縄文時代前期前半の年代値を示す。最下位の粘土の試料14は7110±50y.B.P.の年代値を示し、縄文時代早期である。また、根張り株である木材③は5790±70y.B.P.を示す。

縄文時代前期の土器を含む粘土では、花粉がほとんど含まれず、シダ植物胞子がやや多く出現した。このことから、当時はシダ植物の生育する比較的乾燥した環境が推定される。花粉の傾向からみて、周辺地域にはスギ、マツ属複雑管束亜属(ニヨウマツ類)、コナラ属コナラ亜属(ナラ類)、ニレ属-ケヤキなどの樹木とカヤツリグサ科、アカザ科-ヒユ科の草本が分布していたと推定され、いずれも相対的乾燥した環境下の植生を示唆する。このことは遺跡が斜面に立地していることに起因すると考えられる。試料(堆積物)に花粉がほとんど含まれていないのは傾斜地のやや乾燥した堆積環境によって分解されたためと推定される。

木材はクスノキ科、ミズキ属、ケヤキ、ムクノキ?が同定され、放射性炭素年代と層位から、おおむね縄文時代前期に属するとみなされ、いずれも温帯の山野に普通に生育する種類であり、これらの温暖な気候下に生育する樹木が、前述の花粉分析で示唆される樹木に加えて、分布していたと推定される。

3. R地点における自然科学分析

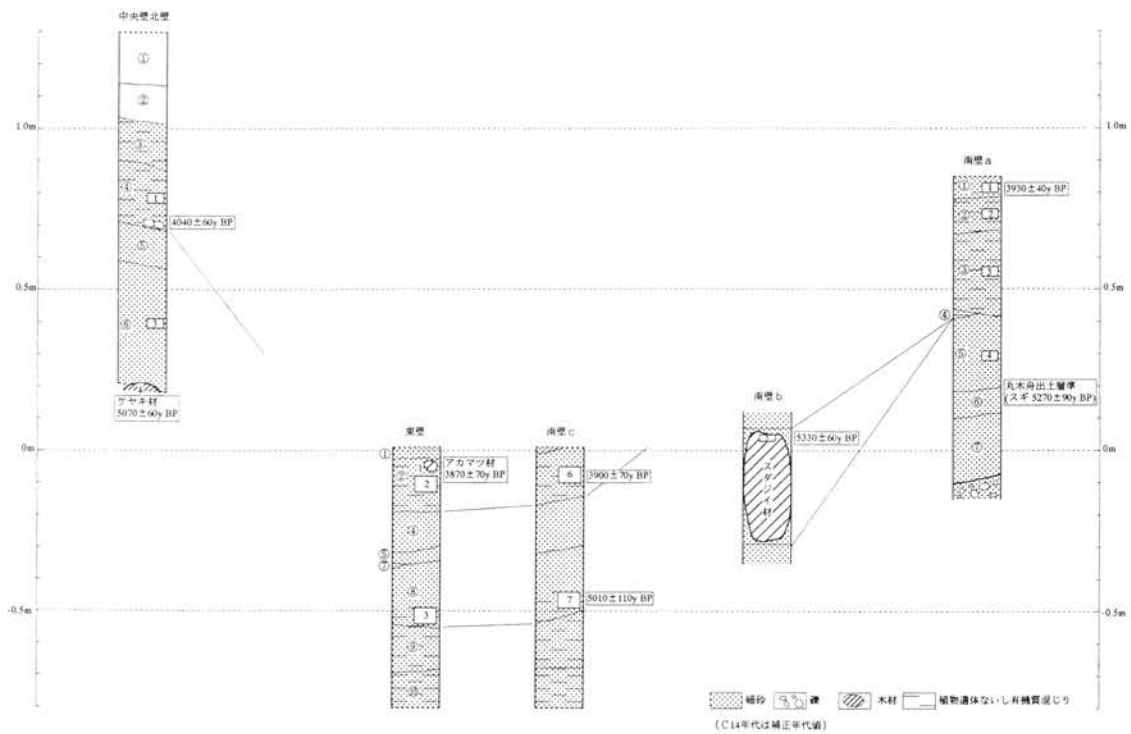
(1)はじめに

R地点は、M地点(嶋遺跡)の位置する砂嘴付け根にあたり、縄文時代前期から中期の海成堆積物によって形成される。縄文時代前期の丸木舟などが出土している。

本項では、放射性炭素年代測定・花粉分析・種実同定・樹種同定・珪藻分析について報告し、縄文時代の植生と環境の復原を検討する。

(2)層序と試料(第2図)

R地点は、南側に外海が隣接し、南東に砂嘴が発達して形成された小さな湾の最も奥の汀線付



第2図 R地点層序と試料採取位置

近に位置し、砂質の海成堆積物が発達する。堆積物は部分によっては礫や木材を含むが細砂を主とし、海岸の傾斜に沿って東に傾斜する。上部の細砂層では大歳山式や鷹鳥式の縄文時代前期末から中期初頭の土器が出土している。

試料は発掘区の中央畦北壁・南壁・東壁で採取を行った。自然科学分析は、放射性炭素年代測定8試料、花粉分析11試料、種実同定4試料、樹種同定4試料、珪藻分析5試料を対象とした。

(3)放射性炭素年代測定

試料と方法ならびに測定結果は、第3・4表にまとめた。^(補注)

(4)花粉分析

①試料 中央畦北壁1・2・3、南壁 a 1・2・3・4、南壁 c 6・7、東壁 2・3 の計11点である。各試料とも細砂であり、低部にあたる南壁 b 6・7、東壁 2・3 は大型植物遺体お

第4表 R地点放射性炭素年代測定の結果

試料名	¹⁴ C年代 (年 BP)	δ ¹³ C (‰)	補正 ¹⁴ C年代 (年 BP)	暦年代	測定 No. (Beta-)
1	4050 ± 60	-25.6	4040 ± 60	交点 BC 2570	116015
				2σ BC 2865 T0 2810 BC 2695 T0 2450	
2	5120 ± 60	-28.4	5070 ± 60	1σ BC 2605 T0 2475	116016
				交点 BC 3930, 3865, 3815 2σ BC 3975 T0 3760 1σ BC 3955 T0 3790	
3	3860 ± 40	-20.7	3930 ± 40	交点 BC 2455	116022
				2σ BC 2490 T0 2300 1σ BC 2470 T0 2350	
4	5380 ± 40	-28.5	5330 ± 60	交点 BC 4215, 4185, 4160	116017
				2σ BC 4330 T0 3990 1σ BC 4245 T0 4055	
5	3930 ± 70	-26.7	3900 ± 70	交点 BC 2400	116018
				2σ BC 2570 T0 2145 1σ BC 2470 T0 2280	
6	5070 ± 110	-28.8	5010 ± 110	交点 BC 3785	116019
				2σ BC 4000 T0 3630 1σ BC 3955 T0 3675	
7	3890 ± 70	-26.4	3870 ± 70	交点 BC 2325	116020
				2σ BC 2490 T0 2130 1σ BC 2460 T0 2205	
8	5260 ± 90	-24.04	5270 ± 90	交点 BC 4055	116021
				2σ BC 4330 T0 3940 1σ BC 4230 T0 3975	

第3表 R地点放射性年代測定の試料と方法

No.	試料	試料の種類	前処理・調整	測定法
1	中央畦2	堆積物	酸-フッ素-酸洗浄 石墨調整	AMS法
2	中央畦木材	ケヤキ材	酸-フッ素-酸洗浄 ベンゼン処理	β線-計数法
3	南壁 a 1	堆積物	酸-フッ素-酸洗浄 石墨調整	AMS法
4	南壁 b 木材	スダジイ材	酸-フッ素-酸洗浄 ベンゼン処理	β線-計数法
5	南壁 c 1	堆積物	酸-フッ素-酸洗浄 ベンゼン処理	β線-計数法
6	南壁 c 2	堆積物	酸-フッ素-酸洗浄 ベンゼン処理	β線-計数法
7	東壁木材	アカマツ材	酸-フッ素-酸洗浄 ベンゼン処理	β線-計数法
8	丸木舟	スギ材	酸-フッ素-酸洗浄 ベンゼン処理	β線-計数法

(2σ : 95% probability, 1σ : 68% probability)

よび有機物を含む。

②方法 花粉粒の分離抽出は、基本的には中村(1973)を参考にし、試料に以下の順で物理化学処理を施して行った。

- 1) 5%水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。
- 2) 水洗した後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。
- 4) 水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理(無水酢酸9:1濃硫酸のエルドマン氏液を加え1分間湯煎)を施す。
- 5) 再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。
- 6) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1500rpm、2分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300~1000倍で行った。花粉の同定は、島倉(1973)および中村(1980)をアトラスとし、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科・亜科・属・亜属・節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン(-)で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。

③結果 出現した分類群は、樹木花粉26、樹木花粉と草本花粉を含むもの2、草本花粉6、シダ植物孢子2形態の計36である。これらの学名と和名および粒数を第5・6表に示し、主要な分類群を写真に示す(図版第254)。

④花粉群集の特徴と推定される植生と環境 南壁c 6、東壁2・3からはやや少ないが花粉が検出された。ほぼ同一の花粉構成ないし組成を示し、樹木花粉の占める割合が極めて高い。クリーシ属、コナラ属アカガシ亜属が優占し、スギ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科の針葉樹やハンノキ属、クマシデ属-アサダ、ニレ属-ケヤキの落葉広葉樹などが伴われる。なお、クリシ属は小型のものは少なく、ほとんどがシイ属とみなされる。

南壁b 6、東壁2・3の時期には、シイ属、アカガシ亜属を主とする照葉樹林が分布していたとみなされる。スギ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科の針葉樹やハンノキ属、クマシデ属-アサダ、ニレ属-ケヤキの落葉広葉樹なども要素として照葉樹林内に分布していた。

(5)種実同定分析

①試料 南壁c 6・7、東壁2・3の計4点である。細砂を主とする海成層であるが、肉眼によっても植物遺体が観察される。

②方法 試料(堆積物)500ccを0.25mm目の篩を用いて水洗選別を行う。残渣を肉眼および実体顕微鏡で観察を行い、形態的特徴および現生標本との対比で同定を行い計数を行う。

③結果 同定された分類群は、樹木13、樹木と草本を含むもの1、草本花粉3の計17である。これらの学名と和名および粒数を第7表に示し、主要な分類群を写真に示す(図版第255)。

第6表 R地点花粉分析結果(2)

学名	和名	分類群						
		1	2	3	4	6	7	
Arboreal pollen	樹木花粉							
<i>Abies</i>	モミ属					11		2
<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>	マツ属短葉種系亜属					3		1
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ		1			42		4
<i>Sciadopitys verticillata</i>	コウヤマキ							1
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科					9		1
<i>Juglans</i>	クルミ属					10		1
<i>Pterocarya rhoifolia</i>	サワグルミ							1
<i>Alnus</i>	ハンノキ属					12		
<i>Betula</i>	カバノキ属					5		
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシデ属-アサダ					8		2
<i>Castanea crenata-Castanopsis</i>	クリ-シイ属		1	2	4	108		18
<i>Fagus</i>	ブナ属							4
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属					5		
<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属		1			123		2
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>	ニレ属-ケヤキ					22		3
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>	エノキ属-ムクノキ					4		2
<i>Malilus japonicus</i>	アカメガシワ							1
<i>Zanthoxylum</i>	サンシヨウ属						1	
<i>Aesculus turbinata</i>	トチノキ							1
<i>Elaeagnus</i>	グミ属							1
<i>Cornus</i>	ミズキ属							1
<i>Syrax</i>	エゴノキ属							1
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉							
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科							1
Araliaceae	ウコギ科							1
Nonarboreal pollen	草本花粉							
Gramineae	イネ科					1		4
Cyperaceae	カヤツリグサ科		1	1	2			1
Guaciferae	アブラナ科							1
Apiodeae	セリ亜科							1
Lactucoideae	タンポポ科					78		9
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属							1
Fern spore	シダ植物胞子							
Monolate type spore	単条溝胞子		10	12	1			1
Trilate type spore	三条溝胞子							1
Arboreal pollen	樹木花粉		3	2	6	0	371	37
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉		0	0	0	0	1	1
Nonarboreal pollen	草本花粉		80	1	13	0	7	2
Total pollen	花粉総数		83	3	19	0	379	40
Unknown pollen	未同定花粉		0	1	0	0	3	0
Fern spore	シダ植物胞子		10	12	1	0	2	1

第5表 R地点花粉分析結果(1)

学名	和名	中央駐北壁			東壁		
		1	2	3	2	3	
Arboreal pollen	樹木花粉						
<i>Abies</i>	モミ属				14		
<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>	マツ属短葉種系亜属		1		3	1	
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ		3		34	12	
<i>Sciadopitys verticillata</i>	コウヤマキ				1		
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科				16	6	
<i>Juglans</i>	クルミ属					2	
<i>Pterocarya rhoifolia</i>	サワグルミ				1		
<i>Alnus</i>	ハンノキ属				17	1	
<i>Betula</i>	カバノキ属				4	1	
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシデ属-アサダ				8		
<i>Castanea crenata-Castanopsis</i>	クリ-シイ属		4	5	107	108	
<i>Fagus</i>	ブナ属				1		
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属					1	
<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属		1	1	100	25	
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>	ニレ属-ケヤキ				5		
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>	エノキ属-ムクノキ				6	2	
<i>Zanthoxylum</i>	サンシヨウ属				2	3	
<i>Aesculus turbinata</i>	トチノキ				2		
<i>Vitis</i>	ブドウ属					1	
<i>Camellia</i>	ツバキ属		1				
<i>Elaeagnus</i>	グミ属						
<i>Cornus</i>	ミズキ属				1		
<i>Syrax</i>	エゴノキ属						
<i>Fraxinus</i>	トネリコ属				1		
<i>Sambucus-Viburnum</i>	ニワトコ属-ガマズミ属				2		
Nonarboreal pollen	草本花粉						
Gramineae	イネ科				4	1	
Cyperaceae	カヤツリグサ科					6	
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属					2	
Fern spore	シダ植物胞子						
Monolate type spore	単条溝胞子		1	1		1	
Trilate type spore	三条溝胞子						
Arboreal pollen	樹木花粉		8	8	0	325	
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉		0	0	0	4	
Total pollen	花粉総数		8	8	0	329	
Unknown pollen	未同定花粉		0	0	0	1	
Fern spore	シダ植物胞子		1	1	0	1	

④種実群集の特徴と植生 種

実は、南壁 c 6・7、東壁 2・3 からやや低密度に検出された。南壁 c 6・7、東壁 2・3 の種実群集は構成および組成はほぼ同じである。スダジイが最も多く、イヌシデ、ケヤキ、ヒサカキ属、カラスザンショウなどが伴われる。試料によってはスギなどの針葉樹も伴われる。草本はカヤツリグサ科、カナムグラ、イラクサ科が検出されるが極めて少ない。下位にあたる南壁 c 7・東壁 3 より上位の南壁 c 6・東壁 2 がヒサカキ属、イヌシデ属が増加する。

以上から、スダジイを主要高木とする照葉樹林が分布していたとみなされ、イヌシデ、ケヤ

キ、ヒサカキ属、カラスザンショウ、スギなども森林要素であった。草木が極めて少なく、森林状態であった可能性が高い。下位より上位のほうが、ヒサカキ属、イヌシデ属が多くなり、やや乾燥した気候が推定される。なお、検出された種実の中で、多産したスダジイとオニグルミは優良な食物になる。

(6)樹種同定

①試料 南壁・東壁・中央畦より出土の木材 3 点と、縄文時代の丸木舟の計 4 点である。

②方法 カミソリを用いて試料の新鮮な基本的三断面(木材の横断面、放射断面、接線断面)を作製し、生物顕微鏡によって60~600倍で観察した。樹種同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

③同定結果 以下に同定根拠となった特徴を記し、その断面を写真に示す(図版第256)。

1)アカマツ *Pinus densiflora* Sieb. et Zucc マツ科

仮道管、放射柔細胞、放射仮道管及び垂直、水平樹脂道を取り囲むエピセリウム細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は急である。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。放射仮道管の内壁には著しい鋸歯状肥厚が存在する。

第7表 種実同定結果

学名	和名	部位	(試料500cc中)			
			南壁		東壁	
			6	7	2	3
Arbor	樹木					
<i>Pinus thunbergii</i> Parl.	クロマツ	球果			1	
<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ	球果				3
		種子				1
<i>Juglans ailanthifolia</i> Carr.	オニグルミ	核				1
<i>Alnus</i>	ハンノキ属	果実	1			
<i>Carpinus tschonoskii</i> Maxim.	イヌシデ	果実	10	4	6	5
<i>Castanopsis sieboldii</i> Hatusima	スダジイ	堅果	11	16	15	15
<i>Quercus</i>	コナラ属	堅果				1
<i>Zelkova serrata</i> Makino	ケヤキ	果実	2	2	3	
<i>Zanthoxylum ailanthoides</i> Sieb. et Zucc.	カラスザンショウ	種子	3	2	2	4
<i>Ilex</i>	モチノキ属	種子		1		
<i>Cayratia japonica</i> Gagn.	ヤブガラシ	種子	1			
<i>Eurya</i>	ヒサカキ属	種子	7		6	3
<i>Cornus brachypoda</i> C.A. Mey.	クマノミズキ	核	3		1	1
Arbor・Herb	樹木・草本					
Araliaceae	ウコギ科	種子	1	1		1
Herb	草本					
Cyperaceae	カヤツリグサ科	果実	1			
<i>Humulus scandens</i> Merr.	カナムグラ	種子				1
Urticaceae	イラクサ科	種子				1
Total	合計		40	26	40	31
Unknown	不明					2

第8表 樹種同定結果

試料	樹種	(和名 / 学名)
中央畦北壁最下部	ケヤキ	<i>Zelkova serrata</i> Makino
南壁5	スダジイ	<i>Castanopsis sieboldii</i> Hatusima
東壁1	アカマツ	<i>Pinus densiflora</i> Sieb. et Zucc.
丸木舟	スギ	<i>Cryptomeria japonica</i> D. Don

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。

以上の形質よりアカマツに同定される。アカマツは、北海道南部・本州・四国・九州

に分布する。常緑高木で、高さ40m・径2mに達する。材は重硬な良材で水湿によく耐え、広く用いられる。

2) スギ *Cryptomeria japonica* D. Don スギ科

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅が比較的広い。樹脂細胞がみられる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、1分野に2個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、10細胞高以下のものが多い。樹脂細胞が存在する。

以上の形質よりスギに同定される。スギは本州・四国・九州・屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、高さ40m・径2mに達する。材は軽軟であるが強靱で、広く用いられる。

3) スダジイ *Castanopsis sieboldii* Hatusima ブナ科

横断面：年輪のはじめに中型から大型の道管がやや疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりスダジイに同定される。スダジイは本州(福島県・新潟県佐渡以南)・四国・九州に分布する。常緑高木で、高さ20m・径1.5mに達する。材は耐朽、保存性やや低い。

4) ケヤキ *Zelkova serrata* Makino ニレ科

横断面：年輪のはじめに大型の道管が1～2列配列する環孔材である。孔圏部外の小道管は多数複合して円形、接線状ないし斜線状に配列する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞であるが、上下の縁辺部のものは方形細胞でしばしば大きくふくらみ、なかには結晶を含むものがある。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で、上下の縁辺部の細胞のなかには大きくふくらんでいるものがある。幅は1～7細胞幅である。

以上の形質よりケヤキに同定される。ケヤキは本州・四国・九州に分布する。落葉高木で、通常高さ20～25m・径60～70cmぐらいであるが、大きいものは高さ50m・径3mに達する。

④考察 中央壁北壁最下部、南壁 5、丸木舟は放射性炭素年代からいずれも5000年以前を示す。樹種はケヤキ、スダジイ、スギでいずれも高木であり、近隣に分布していた樹木とみなされる。花粉分析および種実同定結果とも矛盾しない。

東壁 1 はアカマツで、年代測定から約3900年前を示す。種実でもクロマツ毬果が出土しており、比較的悪条件に強いこれらニヨウマツ類が海岸付近に生育していたと推定される。

(7)珪藻分析

①試料 中央壁北壁 2、南壁 c 6・7、東壁 2・3 の計 5 点である。細砂を主とする海成層であるが、南壁 c 6・7、東壁 2・3 は肉眼によっても植物遺体が観察され、やや有機質に富む。

②方法

- 1) 試料を乾燥重量を秤量する。
- 2) 10%過酸化水素水を加え、加温しながら、1 晩静置する。
- 3) 上澄みを捨て、水洗を行う。
- 4) 1.5時間静置後、上澄みを捨てる。この操作を 5、6 回繰り返す。

第 9 表 珪藻分析結果

分類群	中央壁北壁		南壁		東壁	
	2	6	7	2	3	
<i>Arachynodiscus sp.</i>		0.5				
<i>Dimerogramma dabium</i>		1				
<i>Diploneis splendida</i>						5
<i>Granmatophora macilenta</i>					6	1
<i>Melosira sulcata</i>		2			12	
<i>Cocconeis scutellum</i>		5			10	
<i>Thalassiothrix frauenfeldii</i>		2				
<i>Auliscus caelatus</i>		251		277.5		
<i>Diploneis spp.</i>		23		9		
<i>Glyphodesmis williamsonii</i>		29		25		
<i>Navicula formenterae</i>		2				
<i>Navicula marina</i>		8		11	1	
<i>Achnanthes brevipes</i>		8				2
<i>Caloneis permagna</i>		1				
<i>Caloneis spp.</i>		2				4
<i>Melosira spp.</i>		4				
<i>Nitzschia cocconeiformis</i>		2				
<i>Opephora martyi</i>		74		97	4	
<i>Synedra tabulata</i>		2				
<i>Fragilaria virescens</i>		4				6
<i>Gomphonema angustatum</i>		3				
<i>Nitzschia punctata</i>		2				
<i>Navicula pusilla</i>						2
<i>Pinnularia spp.</i>			13			3
合計	0.0	438.5	0.0	452.5	23.0	
同定不能破片		21	2	20	5	
試料1g中の殻数	0.0	4.5	0.3	4.6	2.3	
		$\times 10^4$	$\times 10^3$	$\times 10^4$	$\times 10^3$	
完形殻の割合		77.3%		81.0%		

- 5) マウントメディアによって封入する。
- 6) 生物顕微鏡で600~900倍で検鏡し、直線視野により計数を行う。

なお、通常統計上有効である200個計数するには、 $2.0 \times 10^5/g$ の出現密度が必要である。

③結果と考察 南壁 c 6、東壁 2 からは比較的多くの珪藻が検出された(図版第257)。中央壁北壁 2、南壁 c 7、東壁 3 からはほとんど珪藻が検出されなかった。南壁 c 6 と東壁 2 は同じ構成および組成を示し同一群集である。大部分は海水生ないし汽水生種で構成される。海水砂質干潟指標種の *Auliscus caelatus* が優占し、同じく海水砂質干潟指標種の *Opephora martyi* が伴われる。以上から南壁 c 6 と東壁 2 の時期は、海水砂質干潟の環境が示唆され、M地点(嶋遺跡)の立地する砂嘴によって小さな湾となり、干潟の環境が成立していたと考えられる。

(8)考察とまとめ

①縄文時代前期後半および後期前半の植生

放射性炭素年代から堆積物は 2 時期が認められ、下部の縄文時代前期後半にあたる約5000~

5500年前と上部の後期前半にあたる約3800～4000年前の植生が明らかになった。

これらの2時期において、花粉群集、種実群集はほぼ構成と組成が同じであり、両時期ともシイ属(スダジイ)、アカガシ亜属を主とする照葉樹林が分布し、スギ、イチイ科イヌガヤ科ヒノキ科の針葉樹やハンノキ属、クマシデ属アサダ、イヌシデ、ケヤキ、ヒサカキ属、カラスザンショウの落葉広葉樹なども森林要素として分布していた。温暖で湿潤な気候が推定されるが、上部の縄文時代後期前半の時期のほうが相対的に乾燥した気候であったと考えられる。

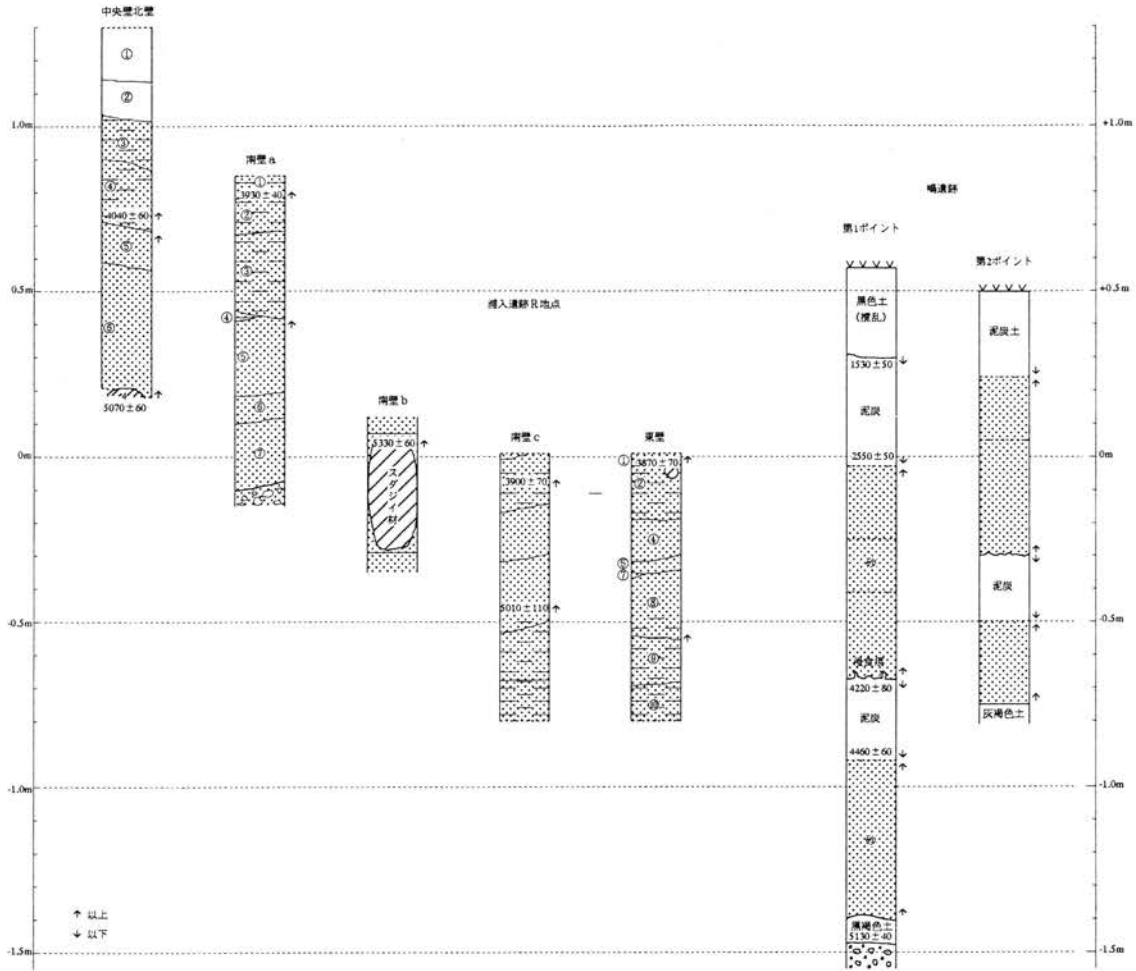
②層序における問題点と海面変化

堆積物は、放射性炭素年代から、下部の縄文時代前期後半にあたる約5000～5500年前と上部の後期前半にあたる約3800～4000年前の時期が明らかとなった。その間の約4000～5000年前間の堆積層は、近接する嶋遺跡では標高0 m以下で、泥炭が分布し、海面の低下が認められるため、R地点は陸化していたとみなされ、堆積間隙があると考えられる。上部の約3800～4000年前の年代を示す層準からは、縄文時代前期末から中期初頭の大歳山式や鷹島式の土器が検出され、時期が明らかに合わない。土器が再堆積の可能性も含めて今後検討する必要がある。

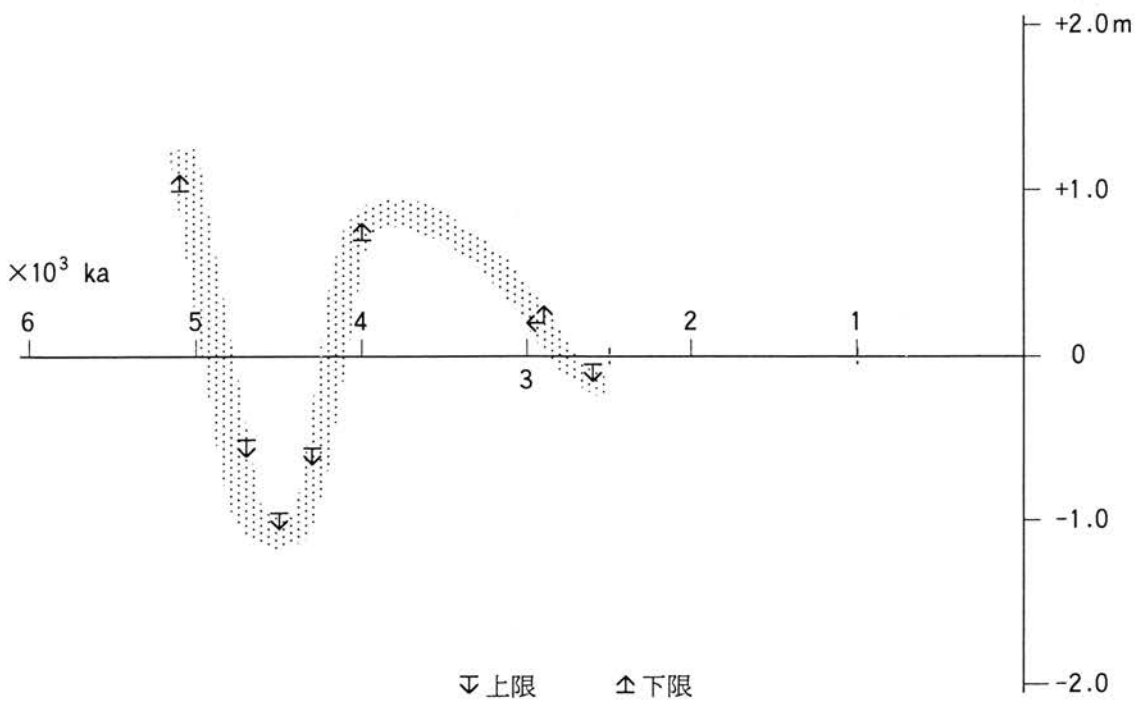
R地点は細砂層で構成されるが、低所にあたる南壁cと東壁以外は珪藻や花粉は含まれていない。海水の干満および波により淘汰が著しい環境であったために、微細遺体が欠如していると考えられる。この細砂層は淘汰もよいことから、汀線付近の細砂層である可能性が高い。いずれも細砂層は海成とみなすのが妥当と考えられる。ただし、海岸における後浜の砂層を見分けられるか、高潮位と低潮位の汀線や潮間帯などの問題もあり、厳密にこれらを堆積層から読み取るとはまだまだ困難である。

以下、R地点とM地点(嶋遺跡)で示唆される海面変化を推定するが、現状の海面変化は堆積に影響するとみなされる高潮位汀線の変化をとらえているものが多いと考えられる。ここにおいても読みとれる海面は高潮位汀線と考えられる。なお、年代は放射性炭素年代に従う。まず、下部の縄文時代前期後半にあたる約5000～5500年前はいずれの地点も海成の砂層が発達する。最も高位置で中央壁北壁で+0.5mないし+0.7mを示し、少なくともこれ以上の海面の高さが推定される。M地点(嶋遺跡)の第1ポイントでは約4500年前に-0.9m泥炭が形成され、陸化し、海面がこれより低下していたことが示唆される。泥炭層の最上部は約4200年前であり、浸食痕を伴って砂層へ変化する。約4200年以降に海面が上昇したことが示唆される。浦入遺跡R地点では+0.7～0.8mの高さに4000年前後の砂層が堆積し、4000年前後に高海面であったとみなされる。なお、この砂層は後浜の堆積である可能性もある。M地点(嶋遺跡)第1ポイントでは約2600年前に0 mに泥炭が形成されはじめ、海面の低下が示唆される。

以上のようにR地点およびM地点(嶋遺跡)からは、大きく約5000年前以前が高海面、約5000～4000年前の低海面、約4000～2600年前の高海面、約2600年前の海面の低下の4つの変化が示された。海面変化の資料の極めて少ない日本海側の貴重な資料であり、データの追加や討議が必要と考えられる。



第3図 各地点の海面高度と時期



第4図 浦入遺跡および鳴遺跡からみた相対的海面変化(案)

4. R地点下層における自然科学分析

(1) 浦入遺跡出土種実の同定

①試料 R地点で出土した丸木舟(縄文時代前期)の下層の土坑から検出された種実類である。試料は砂とともに取り上げられており、重量は砂混じりで2172gであった。分析にはこのうちの1000gを用いた。

②方法 試料1000gを水洗しながら0.25mm篩で選別し、取り出した種実類を肉眼および実体顕微鏡で観察を行った。同定は形態的特徴および現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、属、種の分類群で示した。

③結果 同定の結果、1種類の種実が認められた。結果を第10表に示し、以下に特徴を記載する(図版第258)。

黒褐色で楕円形を呈し、一端につき部が残る。表面は平滑である。この分類群は、一部種まで同定できるものがあるが、本試料は殻斗が欠落しているため属レベルの同定に留まる。ただし、先端がやや突出していることからアカガシやシラカシに類似する。

④所見 R地点の縄文時代前期下層より出土した種実類は、コナラ属の堅果であった。コナラ属には常緑のアカガシ亜属と落葉のコナラ亜属があり、コナラ亜属の堅果はアカガシ亜属のそれより洪が強い。アカガシ亜属の中で暖温帯の平野で森林を形成するイチイガシは、洪抜きをしなければ食用になる。本試料は細分はできなかったが、アカガシかシラカシに類似し、アカガシ亜属の堅果の可能性が高い。

(2) 浦入遺跡出土試料における放射性炭素年代測定

試料と方法ならびに測定結果は第11・12表にまとめた。^(補注)

第10表 R地点出土種実類の同定結果

試料	分類群(和名/学名)	部位	数量(1000cc中)
丸木船(縄文前期)下層土坑出土種実類	コナラ属 <i>Quercus</i>	堅果	159g

第11表 R地点下層土坑放射性炭素年代測定の方法

No.	試料	試料の種類	前処理・調製	測定法
1	丸木船(縄文前期)下層土坑	種実	酸/アルカリ/酸洗浄 ベンゼン処理	β -線計数法 (液体シンチレーション法)

第12表 R地点下層土坑放射性炭素年代測定の結果

試料名	^{14}C 年代 (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ^{14}C 年代 (年BP)	暦年代	測定No. Beta-
No. 1	5420±70	-27.6	5380±70	交点 BC 4240 2 σ BC 4350 TO 4035 1 σ BC 4330 TO 4155, BC 4120 TO 4070	127655

(2 σ : 95% probability, 1 σ : 68% probability)

参考文献

- Peter J. Warnock and Karl J. Reinhard(1992)Methods for Extraxting Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils. Journal of Archaeological Science, 19, p.231-245.
- 太田陽子・海津正倫・松島義章(1990)日本における完新世相対的海面変化とそれに関する問題—1980～1988における研究の展望, 第四紀研究, 29, p.31-48.
- 金子清俊・谷口博一(1987)線形動物・扁形動物. 医動物学, 新版臨床検査講座, 8, 医歯薬出版, p.9-55. a
- 金原正明・金原正子(1992)花粉分析および寄生虫. 藤原京跡の便所遺構—藤原 京7条1坊一, 奈良国立文化財研究所, p.14-15.
- 金原正明(1993)花粉分析法による古環境復原. 新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法, 角川書店, p.248-262.
- 小杉正人(1988)珪藻の環境指標群の設定と古環境復原への応用. 第四紀研究, 27, p.120.
- 粉川昭平(1983)縄文人の主な植物食糧. 縄文文化の研究第2巻, 雄山閣出版, p.42-49.
- 佐伯 浩・原田 浩(1985)広葉樹材の細胞. 木材の構造, 文永堂出版, P.49-100.
- 佐伯 浩・原田 浩(1985)針葉樹材の細胞. 木材の構造, 文永堂出版, p.20-48.
- 島倉巳三郎(1973)日本植物の花粉形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集, 60p.
- 中村 純(1973)花粉分析. 古今書院, p.82-110.
- 中村 純(1974)イネ科花粉について、とくにイネ(*Oryza sativa*)を中心として. 第四紀研究, 13, p.187-193.
- 中村 純(1977)稲作とイネ花粉. 考古学と自然科学, 第10号, p.21-30.
- 中村 純(1980)日本産花粉の標徴. 大阪自然史博物館収蔵目録第13集, 91p.
- 渡辺 誠(1982)縄文時代の植物質食料・ドングリ類. 月刊考古学ジャーナルNo279. ニューサイエンス社.

(補注)

N地点・R地点・R地点下層における放射性炭素年代測定についての凡例は以下の通りである。

- 1) ^{14}C 年代測定値 試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在(1950年AD)から何年前(BP)かを計算した値。 ^{14}C の半減期は5,568年を用いた。
 - 2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値 試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)で表す。
 - 3) 補正 ^{14}C 年代値 $\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正値を加えた上で算出した年代。
 - 4) 歴年代 過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動を補正することにより、歴年代を算出した。補正には年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値を使用した。この補正は10,000年BPより古い試料には適用できない。
 - 5) 測定No.
- 測定は、Beta Analytic Inc. (Florida, U. S. A)において行われた。Beta-は同社の測定No.を意味する。
(ドングリピットのみ)

Ⅱ．浦入遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査

大澤正己

1. いきさつ

浦入遺跡は京都府舞鶴市千歳池カナル・花ヶ口他に所在する。A-1地点の8世紀代に比定される竪穴住居跡SH01からは鑄造鉄釜片および椀形鍛冶滓が検出された。またO地点では10世紀代のものと推定される20基を越える鍛冶炉跡が狭小な地点で集積した状況で検出されている。当地域での鉄生産の実態を把握する目的から金属学的調査を行う運びとなった。

2. 調査方法

2-1 供試材

第1表に供試材8点の履歴を示す。

2-2 調査方法

(1) 肉眼観察

遺物の外観観察を行い、それをもとに試料採取位置を決定する。

(2) マクロ組織

本来は肉眼またはルーペで観察した組織であるが、本稿では顕微鏡埋込み試料の断面全体像を、投影機の10倍もしくは20倍で撮影したものを指す。当調査は、顕微鏡検査によるよりも広い範囲にわたって、組織の分布状態、形状、大きさなどの観察ができる利点がある。

(3) 顕微鏡組織

切り出した試料をベークライト樹脂に埋込み、エメリー研磨紙の#150、#240、#320、#600、#1000と順を追って研磨し、最後は被研磨面をダイヤモンドの 3μ と 1μ で仕上げて光学顕微鏡観察を行った。

(4) ビッカース断面硬度

鉄滓の鉍物組成と、金属鉄の組織同定を目的として、ビッカース断面硬度計(Vickers Hardness Tester)を用いて硬さの測定を行った。試験は鏡面研磨した試料に 136° の頂角をもったダイヤモンドを押し込み、その時に生じた窪みの面積をもって、その荷重を除した商を硬度値としている。試料は顕微鏡用を併用した。

(5) CMA(Computer Aided X-Ray Micro Analyzer)調査

EPMA(Electron Probe Micro Analyzer)にコンピューターを内蔵させた新鋭分析機器である。旧式装置は別名X線マイクロアナライザーとも呼ばれる。分析の原理は、真空中で試料面(顕微鏡試料併用)に電子線を照射し、発生する特性X線を分光後に画像化し、定性的な結果を得る。更に標準試料とX線強度との対比から元素定量値をコンピューター処理してデータ解析を行

う方法である。化学分析を行えない微量試料や鉱物組織の微小域の組織同定が可能である。

(6) 化学組成分析

供試材の分析は次の方法で実施した。

全鉄分(Total Fe)、金属鉄(Metallic Fe)、酸化第1鉄(FeO)：容量法。

炭素(C)、硫黄(S)：：燃烧容量法、燃烧赤外吸収法

二酸化珪素(SiO₂)、酸化アルミニウム(Al₂O₃)、酸化カルシウム(CaO)、酸化マグネシウム(MgO)、酸化カリウム(K₂O)、酸化ナトリウム(Na₂O)、酸化マンガン(MnO)、二酸化チタン(TiO₂)、酸化クロム(Cr₂O₃)、五酸化燐(P₂O₅)、バナジウム(V)、銅(Cu)、：ICP(Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer)法：誘導結合プラズマ発光分光分析。

3. 調査結果

URI-1 鉄釜

① 肉眼観察：鉄釜の口縁部破片である。全体的に黄褐色の酸化土砂の付着が著しい。表面錆化割れも顕著である。先端部に向かって特に内側に肥厚し、そのためやや内湾気味である。(口縁の形態については図版第269マクロ組織参照)口縁が内傾する羽釜状の器物の破片であろうか。

② マクロ組織：図版第269に示す。円形の気泡=鑄巣(引け巣)が多数認められる。また割れも顕著である。錆化により自然腐食を受けている。なお、X線透過像(図版第270参照)でも試料全体的で鑄巣及び罅割れが顕著であることが確認されている。

③ 顕微鏡組織：図版第259①～⑤に示す。白鑄鉄組織である。白色部はセメンタイト、蜂の巣状の部分はレデブライト、黒い部分はオーステナイトから変化したパーライト部分であるが、錆化のため層状組織は侵されて不明瞭になっている。

④ CMA調査：第3図のSE(2次電子像)の高速定性分析結果を第4図に示す。A-Rankで検出された元素は鉄(Fe)、銅(Cu)、燐(P)、硫黄(S)、酸素(O)であった。

この高速定性分析結果を視覚化した面分析の特性X線像と定量分析値が第3図である。SEに39の番号をつけた個所は銅(Cu)、燐(P)、硫黄(S)に白色輝点が集積し、定量分析値は37.5%FeO-15.4%S-1.1%P₂O₅が得られた。硫化鉄(FeS)およびFe-Fe₃C-Fe₃Pの三元系共晶ステダイト(Steadite)と考えられる。なお硫化鉄に銅(Cu)の固溶が認められる。含銅磁鉄鉱を始発原料とするものであろうか。また、SEに40の番号をつけた個所は酸化物定量のため134.6%FeOと100%を大きく上回る値となったが残存した金属鉄(Metallic Fe)部分である。SEに41の番号をつけた個所は93.6%FeOで錆化鉄(Geothite： α -FeO·OH)である。

⑤ 化学組成分析：第2表に示す。酸化物定量での結果である。炭素(C)量は3.34%と白鑄鉄組織に見合った値を示した。二酸化珪素(SiO₂)2.36%、酸化マンガン(MnO)0.04%で、五酸化燐(P₂O₅)0.37%、硫黄(S)0.08%であった。また、銅は(Cu)0.23%と高い値を示し注目される。CMAの項でも述べているが、含銅磁鉄鉱を始発原料とする鉄素材を用いて作成された可能性が高い。

URI-2 椀形鍛冶滓

① 肉眼観察：厚手ではほぼ完形の椀形鍛冶滓である。全体的に褐色の酸化土砂に覆われて地の観察は困難であるが、二段椀形滓気味で色調は黒灰色である。上面は平坦で、周縁部に長さ1cm程の木炭痕が散在する。下面も細かい木炭痕による凹凸が認められる。一部僅かに灰白色の鍛冶炉床粘土が付着する。

② 顕微鏡組織：図版第260①～③に示す。鉱物組成は白色粒状結晶ヴスタイト(Wüstite： FeO)、淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライト(Fayalite： $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$)が基地の暗黒色ガラス質スラグ中に晶出する。また、ヴスタイト粒内にわずかに微小析出物が認められる。ヘーシナイト(Hercynite： $\text{FeO}\cdot\text{Al}_2\text{O}_3$)であろう。高温作業が想定される。鉄素材の繰り返し折り曲げ鍛接の鍛錬鍛冶滓の晶癖である。

③ ビッカース断面硬度：図版第260①に白色粒状結晶の硬度測定^(注1)の圧痕を示す。硬度値は464Hvであった。ヴスタイトの文献硬度値450～500Hvの範囲内であり、ヴスタイトに同定される。

④ 化学組成分析：第2表に示す。鉄分高めで、ガラス質成分・脈石成分(TiO_2 、V、MnO、CaO+MgO)低めの成分系である。全鉄分(Total Fe)52.70%に対して、金属鉄(Metallic Fe)20.32%、酸化第1鉄(FeO)29.52%、酸化第2鉄(Fe_2O_3)42.08%の割合であった。ガラス質成分($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$)17.73%で、このうちに塩基性成分(CaO+MgO)1.72%を含む。砂鉄特有成分の二酸化チタン(TiO_2)0.38%、バナジウム(V)0.01%と低値であった。また、酸化マンガン(MnO)0.13%も低く、銅は(Cu)0.03%と高い値を示した。含銅磁鉄鉱系を始発原料とする鉄素材を鍛冶加工した際に派生した鍛錬鍛冶滓に分類される。鉄素材の搬入ルートを考える上での特徴として注目される。

また、鉄素材の始発原料という点ではURI-1鉄釜破片も同じく含銅磁鉄鉱系を始発原料とする鉄素材より作成されたと推定される。これら含銅磁鉄鉱系の鉄生産地の比定および当地域での鉄素材流通のあり方を考えるため、今後の当地域で関連遺物の分析資料の蓄積が望まれる。

URI-3 椀形鍛冶滓

① 肉眼観察：偏平な椀形鍛冶滓である。色調は暗灰色で表面は風化が認められる。上面はほぼ平坦で長さ1cm以下の木炭痕が薄く散在する。下面側は約半分程の範囲に灰白色の炉床粘土が分厚く付着している。炉壁胎土は緻密な粘土質で砂粒・長石粒・黒色粒が混入する。

② 顕微鏡組織：図版第260④～⑥に示す。鉱物組成は白色粒状結晶ヴスタイト(Wüstite： FeO)、淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライト(Fayalite： $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$)が基地の暗黒色ガラス質スラグ中に晶出する。鍛錬鍛冶滓の晶癖である。

③ ビッカース断面硬度：図版第260④に白色粒状結晶硬度測定^(注1)の圧痕を示す。硬度値は430Hvであった。ヴスタイトの文献硬度値の下限を僅かに下回るが、測定時の亀裂のためと考えられる。

④ 化学組成分析：第2表に示す。鉄分高く、ガラス質成分・脈石成分の少ない成分系である。全鉄分(Total Fe)61.35%に対して、金属鉄(Metallic Fe)0.11%、酸化第1鉄(FeO)59.84%、酸化

第2鉄(Fe_2O_3)21.06%の割合であった。ガラス質成分($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$)15.65%で、このうちに塩基性成分($\text{CaO} + \text{MgO}$)1.15%を含む。砂鉄特有成分の二酸化チタン(TiO_2)0.40%、バナジウム(V)0.02%であった。また、酸化マンガン(MnO)0.11%、銅は(Cu)0.007%とURI-2と比較すると明らかに低く、含銅磁鉄鉱を始発原料とする鉄素材を鍛冶加工した際の派生物ではないことが明らかになった。また、鍛錬鍛冶滓の成分系である。

URI-4 椀形鍛冶滓

① 肉眼観察：平面不整三角形を呈する小型で偏平な椀形鍛冶滓である。地の色調は光沢のある黒灰色で、上面は細かい流動状の凹凸がある。下面は褐色の酸化土砂の付着が顕著である。

② 顕微鏡組織：図版第260に示す。鉱物組成：白色粒状結晶ヴスタイト(Wüstite： FeO)が凝集して晶出し、その粒間にわずかに淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライト(Fayalite： $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$)の晶出が認められる。鍛錬鍛冶滓の晶癖である。

③ 化学組成分析：第2表に示す。鉄分高く、ガラス質成分・脈石成分の少ない成分系である。全鉄分(Total Fe)71.47%に対して、金属鉄(Metallic Fe)0.28%、酸化第1鉄(FeO)70.11%、酸化第2鉄(Fe_2O_3)23.87%の割合であった。ガラス質成分($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$)3.80%で、このうちに塩基性成分($\text{CaO} + \text{MgO}$)0.15%を含む。砂鉄特有成分の二酸化チタン(TiO_2)0.11%、バナジウム(V)0.01%であった。また、酸化マンガン(MnO)0.12%、銅(Cu)は0.005%とURI-3と同様にURI-2と比較すると低値であった。なお、鉱物相・成分系双方の特徴からURI-3より後発の鍛錬鍛冶滓といえる。

URI-5 ^(注2)粒状滓

URI-5-1 直径1.7mm 磁着弱

① 肉眼観察：色調は黒灰色できれいな球状を呈する。表面に小さな気孔をもつ。

② マクロ組織：図版第261①に示す。0.01~0.3mmの気孔が多数認められる。また表層部が風化気味である。

③ 顕微鏡組織：図版第261②~④に示す。白色微小樹枝状結晶ヴスタイト(Wüstite： FeO)、淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライト(Fayalite： $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$)が基地の暗黒色ガラス質スラグ中に晶出する。

URI-5-2 直径1.7mm 磁着強

① 肉眼観察：色調は黒灰色でやや歪な球状を呈する。表面には小さな突起が1個所にあり、僅かに気孔がみられる。また、風化が顕著である。

② マクロ組織：図版第261⑤に示す。風化が激しくわずかに中核部に鉱物相を残す。0.01~0.16mm径の気孔が散在する。

③ 顕微鏡組織：図版第261⑥~⑧に示す。白色粒状結晶ヴスタイト(Wüstite： FeO)、淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライト(Fayalite： $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$)が基地の暗黒色ガラス質スラグ中に晶出す

る。ヴスタイトの晶出は密である。

URI-5-3 直径1.4mm 磁着強

- ① 肉眼観察：色調は光沢のある黒灰色で、表面には僅かに細かい気孔が認められる。
- ② マクロ組織：図版第261⑨に示す。細かい気孔が重なって中央部は空洞となっている。
- ③ 顕微鏡組織：図版第261⑩に示す。白色粒状結晶ヴスタイト(Wüstite: FeO)、淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライト(Fayalite: 2FeO·SiO₂)が基地の暗黒色ガラス質スラグ中に晶出する。これもヴスタイトの晶出は密である。

URI-5-4 直径1.2mm 磁着強

- ① 肉眼観察：色調は黒灰色でやや歪な球状を呈する。表面には小さな突起が3個所に認められる。
- ② マクロ組織：図版第262①に示す。0.01~0.2mm径の気孔が僅かに散在する。表層部はやや風化気味である。
- ③ 顕微鏡組織：図版第262②~④に示す。白色粒状結晶ヴスタイト(Wüstite: FeO)が凝集して晶出し、その粒間に僅かに淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライト(Fayalite: 2FeO·SiO₂)が晶出する。

URI-5-5 直径1.2mm 磁着強

- ① 肉眼観察：色調は黒灰色できれいな球状を呈する。表面1個所に小さな突起を持つ。
- ② マクロ組織：図版第262⑤に示す。主に周縁部に0.01~0.3mm程の気孔が散在する。
- ③ 顕微鏡組織：図版第262⑥~⑧に示す。白色粒状結晶ヴスタイト(Wüstite: FeO)、淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライト(Fayalite: 2FeO·SiO₂)が基地の暗黒色ガラス質スラグ中に晶出する。微量であるがヘーシナイトらしき鉱物相も散在する。

URI-5-6 直径0.9mm 磁着強

- ① 肉眼観察：光沢の強い黒灰色で、きれいな球状を呈する。表面に小さな突起を1個所に持つ。
- ② マクロ組織：図版第262⑨に示す。0.01~0.1mm程の気孔がやや密に認められる。
- ③ 顕微鏡組織：図版第262⑩に示す。白色粒状結晶ヴスタイト(Wüstite: FeO)、淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライト(Fayalite: 2FeO·SiO₂)が基地の暗黒色ガラス質スラグ中に晶出する。

URI-6 ^(注3) 鍛造剥片

送付サンプル全体を見るとURI-8鍛造剥片より大型・厚手のものが含まれている。鉄滓皮・銹化鉄片の混入も認められる。また、サンプル採取時に磁石を多用して選別したのか、全体的に強い磁力を帯びていた。磁着の強いものに偏った選択となっている可能性もある。

分析試料はサンプル中より表面荒れ肌の厚手のものから、平坦薄手のものまでを含むように6点を選別した。

URI-6-1 4.5×4.0×0.85mm 磁着強

① 肉眼観察：色調は黒灰色。表面は僅かに光沢があり、細かい凹凸が認められる。裏面は光沢がなく凹凸が顕著である。

② マクロ組織：図版第263①に示す。厚手で表裏面共に凹凸が顕著な鍛造剥片である。

③ 顕微鏡組織：図版第263②～⑥に示す。酸化膜相は外層の微厚なヘマタイト(Hematite: Fe₂O₃)は不明瞭であったが、中間層マグネタイト(Magnetite: Fe₃O₄)、内層ヴスタイト(Wüstite: FeO)が確認された。内層ヴスタイトは結晶粒を明確に留めており、鍛打工程の前半段階の派生物である。なお、内層ヴスタイトは王水腐食で侵されている。

URI-6-2 3.5×3.0×0.5mm 磁着強

① 肉眼観察：ゆるく彎曲する鍛造剥片である。色調は黒灰色。表面は滑らかで光沢を持ち、裏面は多数の気孔が認められる。

② マクロ組織：図版第263⑦に示す。厚手で特に裏面の凹凸が顕著な鍛造剥片である。

③ 顕微鏡組織：図版第263⑧～⑩に示す。酸化膜相は外層の微厚なヘマタイト(Hematite: Fe₂O₃)、中間層マグネタイト(Magnetite: Fe₃O₄)、内層ヴスタイト(Wüstite: FeO)の3層が確認された。内層ヴスタイトは結晶粒を明確に留めている。URI-6-1と同様、鍛打工程の前半段階の派生物である。

URI-6-3 6.0×5.0×0.3mm 磁着強

① 肉眼観察：厚手ではほぼ平坦な試料である。表面は滑らかで光沢を持ち、裏面は気孔が顕著で光沢はない。

② マクロ組織：図版第264①に示す。厚手ではほぼ平坦な試料であるが、裏面側はやや凹凸が顕著である。わずかに気孔を散在させる。

③ 顕微鏡組織：図版第264②に示す。3層の酸化膜層が明瞭に確認された。内層ヴスタイトは非晶質で鍛打作業の後半段階の派生物である。

URI-6-4 3.5×2.0×0.2mm 磁着強

① 肉眼観察：ゆるく彎曲する鍛造剥片である。色調は黒灰色。表面は滑らかでやや光沢を持ち、裏面は酸化土砂が付着する。

② マクロ組織：図版第264③に示す。ほぼ一定の厚みで、ゆるく彎曲する。

③ 顕微鏡組織：図版第264④に示す。3層の酸化膜層が明瞭に確認された。内層ヴスタイトは非晶質で鍛打作業の後半段階の派生物である。

URI-6-5 2.5×2.0×0.15mm 磁着強

① 肉眼観察：ほぼ平坦で、色調は黒灰色。表面は滑らかでわずかに光沢を持ち、裏面は平坦で光沢はない。

② マクロ組織：図版第264⑤に示す。ほぼ平坦で、一定の厚みの鍛造剥片である。

③ 顕微鏡組織：図版第264⑥に示す。3層の酸化膜層が明瞭に確認された。内層ヴスタイトは非晶質で鍛打作業の後半段階の派生物である。

URI-6-6 2.5×1.5×0.1mm 磁着強

- ① 肉眼観察：ほぼ平坦で、色調は黒灰色。表面は僅かに光沢があり、裏面は光沢がない。
- ② マクロ組織：図版第264⑦に示す。ほぼ平坦で、一部厚みに変動がある。
- ③ 顕微鏡組織：図版第264⑧～⑩に示す。3層の酸化膜層が明瞭に確認された。内層ヴスタイトは凝集が進行しているが、王水腐食で僅かに結晶粒界が現れた。鍛打作業の中間～後半段階の派生物である。

URI-7 粒状滓 供試材はURI-5と比較するとやや径の小さい傾向がある。

URI-7-1 最大長1.6mm 磁着強

- ① 肉眼観察：粒状滓の破片である。色調は黒灰色で、表面はやや光沢がある。
- ② マクロ組織：図版第265①に示す。中央は空洞化し、周縁部にも0.1～0.6mm程の気孔が認められる。
- ③ 顕微鏡組織：図版第265②～④に示す。白色粒状結晶ヴスタイト(Wüstite:FeO)が凝集して晶出する。

URI-7-2 直径1.1mm 磁着強

- ① 肉眼観察：色調は黒灰色で歪な球状を呈する。表面に小さな突起あり。また、細かな気孔が僅かに認められる。
- ② マクロ組織：図版第265⑤に示す。0.01～0.2mm程の気孔が片寄り気味に点在する。
- ③ 顕微鏡組織：図版第265⑥に示す。白色粒状結晶ヴスタイト(Wüstite:FeO)が凝集して晶出する。

URI-7-3 直径1.1mm 磁着強

- ① 肉眼観察：色調は黒灰色でやや歪な球状を呈する。表面はやや光沢がある。
- ② マクロ組織：図版第265⑦に示す。0.2mm・0.4mm径の大きな気孔が中心部付近に存在し、周縁部にも0.01～0.03mm程の気孔が認められる。周辺部はやや風化気味である。
- ③ 顕微鏡組織：図版第265⑧～⑩に示す。未発達が多角形結晶はマグネタイト(Magnetite:Fe₃O₄)であろう。

URI-7-4 直径0.7～0.9mm 磁着強

- ① 肉眼観察：色調は黒灰色で歪な球状を呈する。1個所大きな突起が存在する。表面はやや光沢が認められる。
- ② マクロ組織：図版第266①に示す。0.05～0.1mm径の気孔が周辺部にわずかにみられる。また、表層側は風化が顕著で、中心部に鉍物相が残存する。
- ③ 顕微鏡組織：図版第266②～④に示す。全体的には白色粒状結晶ヴスタイト(Wüstite:FeO)が凝集気味に晶出する。一部表層の多角形結晶はマグネタイト(Magnetite:Fe₃O₄)である。

URI-7-5 直径0.6mm 磁着強

- ① 肉眼観察：光沢の強い銀灰色で、きれいな球状を呈する。
- ② マクロ組織：図版第266⑤に示す。0.05～0.15mm程の気孔が散在する。

③ 顕微鏡組織：図版第266⑥に示す。表層部は鍛造剥片と同様の3層の酸化膜層を呈している。内部は白色粒状結晶ヴスタイト(Wüstite:FeO)が凝集して晶出する。

URI-7-6 直径0.5mm 磁着強(計測時に破損)

① 肉眼観察：光沢のある黒灰色で、きれいな球状を呈する。

② マクロ組織：図版第266⑦に示す。破損のため、半円形の破片の調査となった。内部は大きく空洞となっている。

③ 顕微鏡組織：図版第266⑧に示す。多角形結晶はマグネタイト(Magnetite:Fe₃O₄)で最表層部は鍛造剥片と同様微厚のヘマタイト(Hematite:Fe₂O₃)がわずかに認められる。

URI-7-7 直径0.4mm 磁着強

① 肉眼観察：光沢のある黒灰色で、きれいな球状を呈する。

② マクロ組織：図版第266⑨に示す。大きなもので0.1mm程の気孔がやや密に認められる。

③ 顕微鏡組織：図版第266⑩に示す。多角形結晶はマグネタイト(Magnetite:Fe₃O₄)で最表層部は鍛造剥片と同様微厚のヘマタイト(Hematite:Fe₂O₃)が僅かに認められる。

URI-8 鍛造剥片

送付サンプル全体を見るとURI-6鍛造剥片より小型・薄手のものが多い。また、サンプル採取時に磁石を多用して選別したのか、全体的に強い磁力を帯びていた。磁着の強いものに偏った選択となっている可能性もある。

分析試料はサンプル中より表面荒れ肌の厚手のものから、平坦薄手のものまでを含むように6点を選別した。

URI-8-1 3.5×1.5×0.25mm 磁着強

① 肉眼観察：色調は黒灰色。表面はやや凹凸をもち、わずかに光沢がある。裏面はわずかに凹凸をもち、光沢はない。表裏面とも錆の付着がみられる。

② マクロ組織：図版第267①に示す。風化のためか、割れが顕著である。

③ 顕微鏡組織：図版第267②～④に示す。3層の酸化膜層が明瞭に確認された。内層ヴスタイトは結晶粒の痕跡がわずかにみられるものの非晶質化が進んでいる。鍛打作業の後半段階の派生物である。割れ目近傍にヘマタイトの発生がないため鍛冶作業時の割れではなく、2次的なものである。

URI-8-2 2.0×2.0×0.2mm 磁着強

① 肉眼観察：色調は黒灰色。表面はほぼ平坦で光沢はない。裏面はわずかに凹凸をもち無光沢である。

② マクロ組織：図版第267⑤に示す。ほぼ一定の厚みの鍛造剥片である。風化のための空隙が顕著である。

③ 顕微鏡組織：図版第267⑥に示す。酸化膜相は外層の微厚なヘマタイト(Hematite:Fe₂O₃)は不明瞭であったが、中間層マグネタイト(Magnetite:Fe₃O₄)、内層ヴスタイト(Wüstite:FeO)

が確認された。内層ヴスタイトは凝集するも結晶粒の痕跡が認められる。鍛打作業の中間段階の派生物である。

URI-8-3 2.5×2.0×0.15mm 磁着強

- ① 肉眼観察：わずかに彎曲する鍛造剥片である。表裏面共に黒灰色でわずかに光沢がある。
- ② マクロ組織：図版第267⑦に示す。わずかに凹凸を持ち気孔が点在する。
- ③ 顕微鏡組織：図版第267⑧～⑩に示す。3層の酸化膜層が明瞭に確認された。内層ヴスタイトは非晶質で鍛打作業の後半段階の派生物である。

URI-8-4 2.0×2.0×0.15mm 磁着強

- ① 肉眼観察：表面は強い光沢を持つ銀灰色で、やや凹凸がある。裏面は光沢のない黒灰色で、やや凹凸がある。
- ② マクロ組織：図版第268①に示す。ほぼ一定の厚みであるが、わずかに凹凸がある。
- ③ 顕微鏡組織：図版第268②に示す。3層の酸化膜層が明瞭に確認された。内層ヴスタイトは非晶質で鍛打作業の後半段階の派生物である。

URI-8-5 2.0×2.0×0.1mm 磁着強

- ① 肉眼観察：表面は光沢のある青灰色でやや凹凸がある。裏面は光沢のない黒灰色でやや凹凸がある。
- ② マクロ組織：図版第268③に示す。厚みに変動のある鍛造剥片である。鍛打の片打ちであろうか。
- ③ 顕微鏡組織：図版第268④～⑥に示す。3層の酸化膜層が明瞭に確認された。内層ヴスタイトは非晶質で鍛打作業の後半段階の派生物である。王水腐食の効果は認められない。風化の影響であろう。

URI-8-6 1.5×1.5×0.05mm 磁着強

- ① 肉眼観察：表面は光沢の強い銀灰色で凹凸がある。裏面は光沢のない黒灰色で凹凸がある。
- ② マクロ組織：図版第268⑦に示す。厚みはほぼ一定であるが、彎曲する。
- ③ 顕微鏡組織：図版第268⑧～⑩に示す。3層の酸化膜層が明瞭に確認された。内層ヴスタイトは非晶質で鍛打作業の後半段階の派生物である。

4. まとめ

〈1〉 8世紀代に比定されるA地点SH01より出土した鑄造鉄釜片(URI-1)は、全体に鑄巣や割れが多く認められた。成分的には銅(Cu)分を多く含んでいることが特徴である。含銅磁鉄鉱系を始発原料とする鉄素材から製作されたものと推定される。

鑄造器物の製作地は大きな問題であるが、列島内で鑄造遺構が一般的になるのは8世紀末で、この時期の鑄造遺構は東日本の製鉄遺跡群の中に出現してくる。製鉄炉で銑鉄系の鉄塊系遺物がある程度確保可能となった時期と連動するものと考えられ、豎形炉と鑄造生産の関連性は以前より指摘されるところである。この前段階の鑄造生産に関してはよく分かっておらず、特に今回含銅

磁鉄鉱系を始発原料とする鉄素材から製作されたとの結果を含め今後の検討課題といえる。

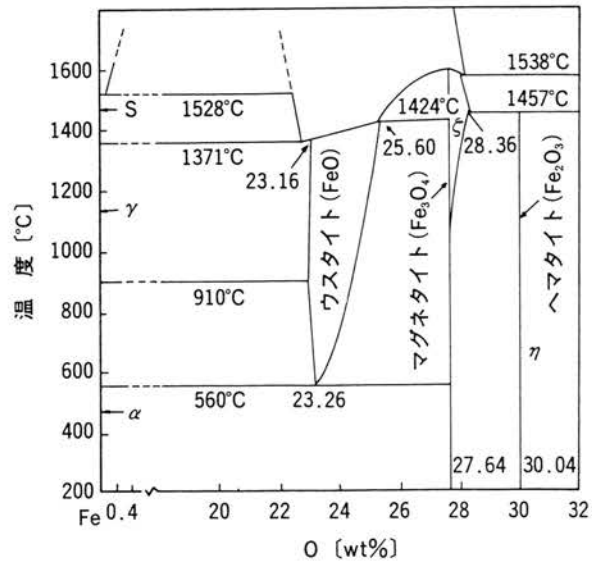
また同遺構から出土した椀形鍛冶滓 (URI-2) は、鉄素材の繰返し折り曲げ鍛接をおこなった際の鍛錬鍛冶滓に分類される。これもまた銅 (Cu) 分を多く含み、含銅磁鉄鉱を始発原料とする鉄素材を鍛冶加工した際の派生物と推定される。

特に8世紀代という列島内各地域で鉄生産が盛んに行われた時期のものであるため、含銅磁鉄鉱系の鉄生産地の比定および当地域での鉄素材流通の問題解明のため、当地域での製鉄・鍛冶関連遺物の分析資料の蓄積が望まれる。

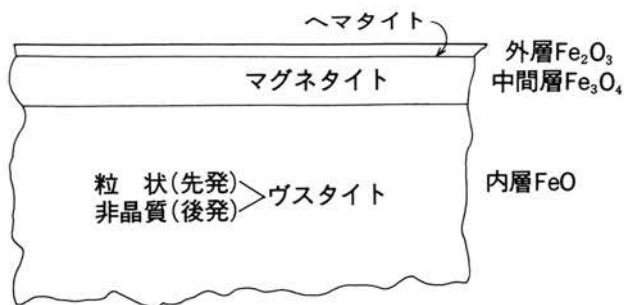
〈2〉 10世紀代に比定されるO地点の鍛冶工房群より出土した供試材のうち椀形鍛冶滓 (URI-3・4) はいずれも鉄素材の繰返し折り曲げ鍛接をおこなった際の鍛錬鍛冶滓に分類される。鉱物相・成分系からURI-3より4がより後段階の派生物であることが明らかになった。

また、時期の異なる (URI-2) とは銅 (Cu) の含有量に大きな違いみられた。ごく少数の分析試料の結果で断言はできないが、当地においては異なる2時期において鉄素材の供給のあり方が異なっていた可能性が考えられる。

鍛造剥片は酸化膜の内層ヴスタイトが粒状を保つものから非晶質まで認められ、鍛打作業の前半から後半まで行われていたことが明らかになった。なお、鍛造剥片はO-2地点鍛冶炉3より採取されたもの (URI-6) から、内層ヴスタイトが粒状を保つ鍛打作業の前半段階の派生物が認められた。これに対してO-1地点鍛冶炉10より採取されたもの (URI-8) はわずかにヴスタイトの結晶粒痕跡を残しつつも非晶質化の進んだものと、完全に非晶質化したもののみが確認された。鍛打作業の後半段階主体の派生物といえる。肉眼観察の段階から送付サンプルはURI-6の方がより大型・厚手のものが含まれる傾向が認められたが、分析もこれと符合する結果となった。複数の鍛冶炉群はある程度作業内容に違いを持っていた可能性が考えられる。



第1図 Fe-O系平衡状態図



第2図 鍛造剥片3層分離型模式図

(注)

- (1) 日刊工業新聞社『焼結鉍組織写真および識別法』1968 当刊行物にはヴスタイトの硬度値は450～500Hv、マグネタイト500～600 Hv、ファイヤライトが600～700 Hv、とある。
- (2) 粒状滓は鍛冶作業において凹凸を持つ鉄素材が鍛冶炉の中で赤熱状態に加熱されて、突起部が溶け落ちて酸化され、表面張力の関係から球状化したり、赤熱鉄塊に酸化防止を目的に塗布された粘土汁が酸化膜と反応して、これが鍛打の折に飛散して球状化した微細な遺物である。
- (3) 鍛造剥片とは鉄素材を大気中で加熱、鍛打したとき、表面酸化膜が剥離、飛散したものを指す。俗に鉄肌(金肌)やスケールとも呼ばれる。鍛冶工程の進行により、色調は黒褐色から青味を帯びた銀色(光沢を発する)へと変化する。粒状滓の後続派生物で、鍛打作業の実証と、鍛冶の段階を押える上で重要な遺物となる。^(注4)この鍛造剥片や粒状滓は極めて微細な鍛冶派生物であり、発掘調査中に土中から肉眼で識別するのは難しい。通常は鍛冶跡の床面の土砂を水洗することにより検出される。鍛冶工場の調査に当たっては、鍛冶炉を中心にメッシュを切って土砂を取り上げ、水洗選別、秤量により分布状態を把握できれば、工房内の作業空間配置の手がかりとなりうる重要な遺物である。^(注5)鍛造剥片の酸化膜相は、外層は微厚のヘマタイト(Hematite: Fe₂O₃)、中間層マグネタイト(Magnetite: Fe₃O₄)、大部分は内層ヴスタイト(Wüstite: FeO)の3層から構成される。このうちのヘマタイト相は1450℃を越えると存在しなく、ヴスタイト相は570℃以上で生成されるのはFe-O系平衡状態図から説明される。^(注6)鍛造剥片を王水(塩酸3:硝酸1)で腐食すると、外層ヘマタイト(Hematite: Fe₂O₃)は腐食しても侵されず、中間層マグネタイト(Magnetite: Fe₃O₄)は黄変する。内層のヴスタイト(Wüstite: FeO)は黒変する。鍛打作業前半段階では内層ヴスタイト(Wüstite: FeO)が粒状化を呈し、鍛打仕上げ時になると非晶質化する。鍛打作業工程のどの段階が行われていたか推定する手がかりともなる。
- (4) 大澤正己「房総風土記の丘実験試料と発掘試料」『千葉県立房総風土記の丘 年報15』(平成3年度)千葉県房総風土記の丘 1992
- (5) 大澤正己「奈良尾遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査」『奈良尾遺跡』(今宿バイパス関連埋蔵文化財調査報告書 第13集)福岡県教育委員会 1991
- (6) 森岡ら「鉄鋼腐食科学」『鉄鋼工学講座』11 朝倉書店 1975

第1表 供試材の履歴と調査項目

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	計測値		調査項目				備考		
					大きさ(mm)	重量(g)	メタル度	顕微鏡組織	ビッカース断面硬度	X線回折		CMA	化学分析
URI-1	浦入遺跡	A地点SH01 土坑出土	鉄釜?	8c代	80×72×14	272	L (●)	○					
URI-2	浦入遺跡	A地点SH01 Pit出土	椀形鍛冶滓	8c代	85×70×36	270	なし	○					
URI-3	浦入遺跡	01地点鍛冶炉12-2	椀形鍛冶滓	10c代	80×65×23	148	なし	○					
URI-4	浦入遺跡	01地点鍛冶炉14	椀形鍛冶滓	10c代	41×44×9	34	H (○)	○					
URI-5	浦入遺跡	02地点鍛冶炉3	粒状滓	10c代	-	-	なし	○					
URI-6	浦入遺跡	02地点鍛冶炉3	鍛造剥片	10c代	-	-	なし	○					
URI-7	浦入遺跡	01地点鍛冶炉10	粒状滓	10c代	-	-	なし	○					
URI-8	浦入遺跡	01地点鍛冶炉10	鍛造剥片	10c代	-	-	なし	○					

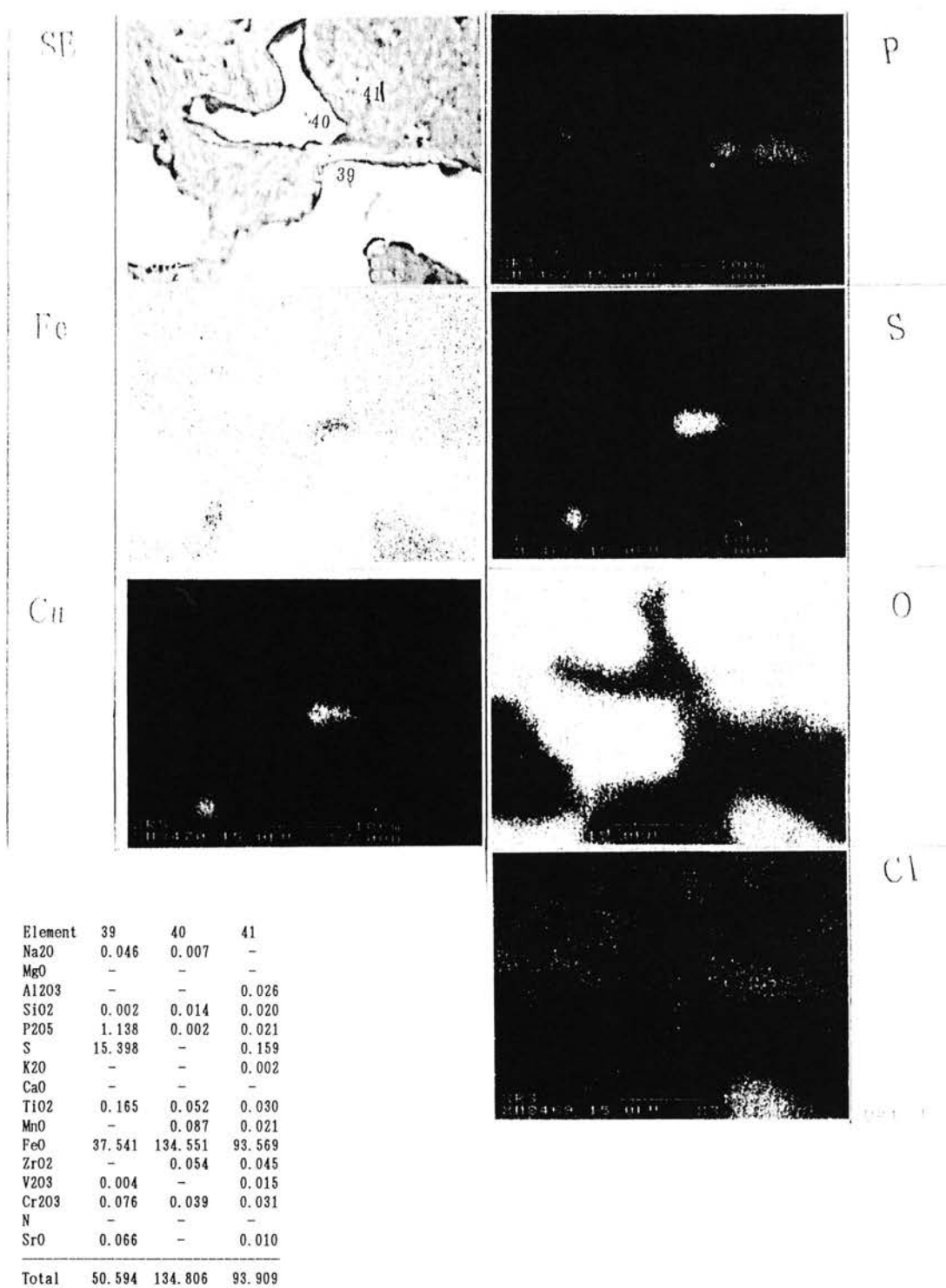
第2表 供試材の化学組成

符号	遺跡名	遺物名称	推定年代	全鉄分 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸化第1鉄 (FeO)	酸化第2鉄 (FeO)	二酸化珪素 (SiO ₂)	酸化アルミ (Al ₂ O ₃)	酸化カルシウム (CaO)	酸化マグネシウム (MgO)	酸化ナトリウム (Na ₂ O)	酸化クロム (Cr ₂ O ₃)	硫黄 (S)	五酸化リン (P ₂ O ₅)	炭素 (C)	バナジウム (V)	銅 (Cu)	造滓成分		
																			Total Fe	Total Fe	
URI-1	浦入遺跡	鉄釜?	8c代	70.22	35.33	25.00	22.10	2.36	0.99	0.01	0.09	0.04	0.018	0.08	0.37	3.34	0.00	0.23	3.51	0.050	
URI-2	浦入遺跡	椀形鍛冶滓	8c代	52.70	20.32	29.52	42.08	10.56	4.91	0.95	0.77	0.38	0.16	0.13	0.05	0.31	0.70	0.01	0.03	17.7	0.336
URI-3	浦入遺跡	椀形鍛冶滓	10c代	61.35	0.11	59.84	21.06	9.98	4.08	0.58	0.57	0.30	0.14	0.11	0.40	0.30	0.12	0.02	0.007	15.7	0.255
URI-4	浦入遺跡	椀形鍛冶滓	10c代	71.47	0.28	70.11	23.87	2.39	1.17	0.04	0.11	0.05	0.04	0.12	0.01	0.13	0.10	0.01	0.005	3.80	0.053

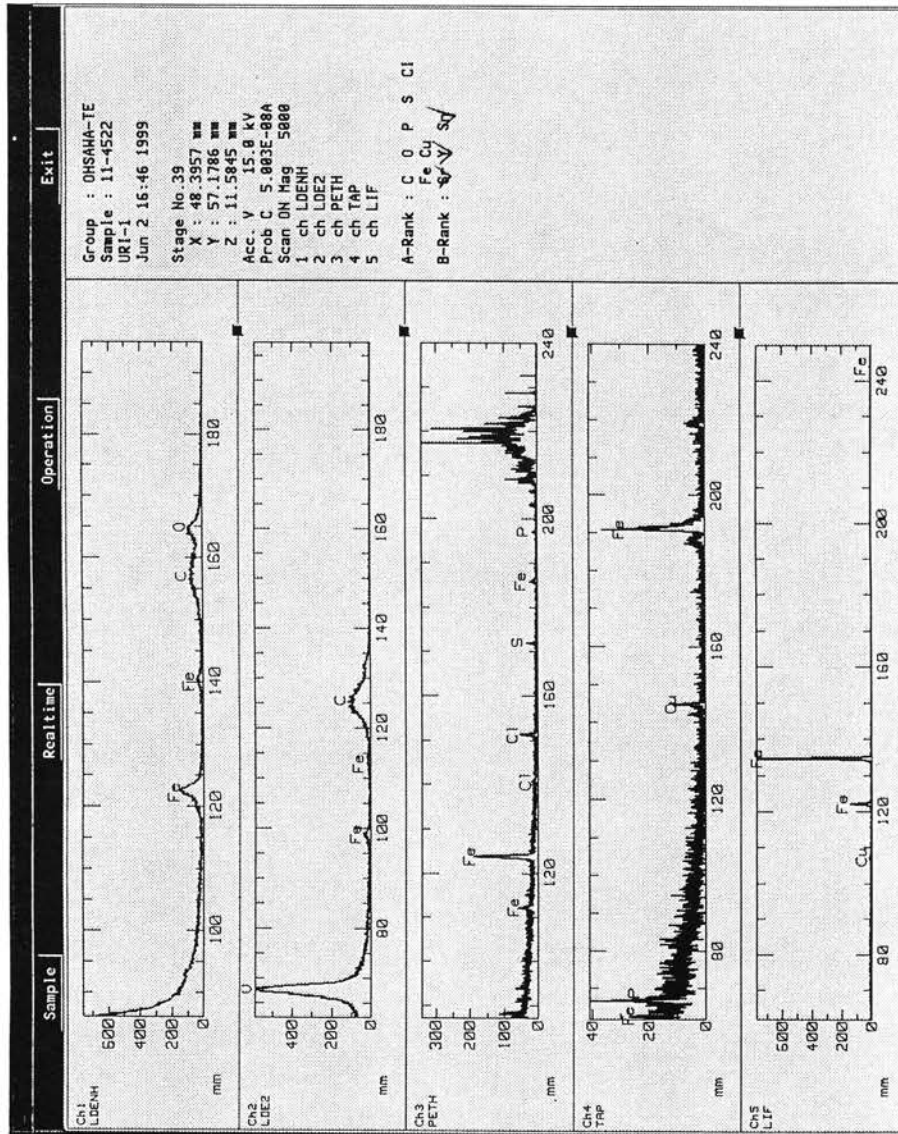
第3表 出土遺物の調査結果のまとめ

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	顕微鏡組織	調査項目							所見	
						Total Fe	FeO	塩基性成分	TiO ₂	V	MnO	ガラス質成分		Cu
URI-1	浦入遺跡	A地点SH01 土坑出土	鉄釜?	8c代	白錆鉄組織、自然腐食	70.22	22.10	0.10	0.05	0.00	0.04	3.508	0.23	鑄果・鋳割れ多い、始発原料は含銅鉄鉱
URI-2	浦入遺跡	A地点SH01 Pit出土	椀形鍛冶滓	8c代	W+F	52.70	42.08	1.72	0.38	0.01	0.13	17.73	0.03	含銅鉄鉱系鍛練鍛冶滓
URI-3	浦入遺跡	01地点鍛冶炉12-2	椀形鍛冶滓	10c代	W (粒内析出物) + F	61.35	21.06	1.15	0.40	0.02	0.11	15.65	0.007	鍛練鍛冶滓
URI-4	浦入遺跡	01地点鍛冶炉14	椀形鍛冶滓	10c代	W凝集	71.47	23.87	0.15	0.11	0.01	0.12	3.80	0.005	鍛練鍛冶滓、(URI-3) より後段階の派生物
URI-5	浦入遺跡	02地点鍛冶炉3	粒状滓	10c代	W+F	-	-	-	-	-	-	-	-	鉄素材突起箇所からの派生物
URI-6	浦入遺跡	02地点鍛冶炉3	鍛造剥片	10c代	3層分離型、内層粒状-非晶質	-	-	-	-	-	-	-	-	鍛打作業の前半～後半段階の派生物
URI-7	浦入遺跡	01地区鍛冶炉10	粒状滓	10c代	W+F、M	-	-	-	-	-	-	-	-	鉄素材突起箇所からの派生物
URI-8	浦入遺跡	01地区鍛冶炉10	鍛造剥片	10c代	3層分離型、内層W凝集-非晶質	-	-	-	-	-	-	-	-	鍛打作業の後半段階の派生物

W: Wüstite (FeO) 、F: fayalite (2FeO · SiO₂)、M: Magnetite (Fe₃O₄)、U: Ulvospinel (2FeO · TiO₂)、H: Hercynite (FeO · Al₂O₃)



第3図 鉄釜(URI-1)の特性X線像と定量分析値



第4図 鉄釜 (URI-1) のコンピュータプログラムによる高速定性分析結果 (Photo. 12 に対応)

第2表 竪穴式住居跡規模一覧表

地区名	遺構名	長辺	短辺	深さ	主軸	備考
N地点	SH05	4.6	2.0	0.15	N62° E	
	SH16	8.4	7.9	1.0	—	円形住居跡
	SH17	2.9	1.3	0.2	N45° E	
	SH28	*4.9	2.2	0.2	N63° E	
	SH31	7.4	1.8	0.4	N46° E	
	SH01	5.0	2.9	0.7	N17° E	SH04と重複
	SH04	4.1	1.2	0.5	N35° E	SH01と重複
	SH08	3.6	2.1	0.5	N46° E	SH09と重複
	SH09	5.2	2.6	0.5	N28° E	SH08と重複
	SH12	4.9	2.5	0.8	N72° E	
	SH15	5.2	3.3	0.35	N47° E	
	SH22	7.1	2.2	0.4	N50° E	SH14と重複
A地点	SH01	8.7	5.3	0.9	N42° E	

単位はm。

数値は最大検出値である。

第3表 テラス状遺構規模一覧表

地点名	遺構名	長さ	幅	深さ	主軸	備考
N地点	SH10	13.1	3.2	0.4	N42° E	SH11と重複
	SH11	*8.3	2.1	0.2	N42° E	SH10と重複
	SH24	8.1	1.6	0.55	N62° E	
	SH13	9.4	1.3	0.3	N48° E	
	SH14	*4.7	2.3	0.3	N46° E	SH22と重複
	SH19	18.6	3.4	0.6	N49° E	
	SH20	4.8	3.1	0.5	N55° E	SH23と重複
	SH23	*4.0	2.3	0.2	N50° E	SH20と重複
B地点	SH01	6.2	1.5	0.4	N19° E	
	SH02	11.3	2.5	0.9	N50° E	
	SH03	16.0	2.0	0.6	N59° E	
A地点	SH02	6.0	0.8	0.15	N42° E	
	SH03	6.0	0.6	0.15	N36° E	SB01と重複
	SH04	5.2	1.3	0.5	N23° E	SH05と重複
	SH05	4.2	1.2	0.3	N20° E	SH04と重複
	SH06	2.1	1.2	0.3	N14° E	
	SH08	*13.2	4.0	0.45	N22° E	

単位はm。

数値は最大検出値である。

第4表 N地点出土縄文土器観察表

番号	出土位置		分類	器種	部位	口径	胎土 砂礫	色 調		縄文	備考
	層位	地区名						外面	内面		
1	包含層Ⅲ		L I a 1	深鉢?	体部		Q, S	明赤褐色	にぶい橙色	L R	
2	包含層Ⅲ		L I a 2	深鉢?	体部			赤灰色	褐灰色	L R	
3	包含層Ⅲ		L I a 2	深鉢?	体部		Q	褐灰色	にぶい赤褐色	L R	
4	包含層Ⅲ		L I a 2	深鉢?	体下半 (接)		B, Q, S	赤褐色	にぶい橙色	L R	
5	包含層Ⅲ		L I a 2	深鉢?	体部		B, Q	灰褐色	黒色	L R	
6	包含層Ⅲ		L I c	深鉢?	口縁部		B	黒褐色	灰褐色		
7	包含層Ⅲ		L II a 1	深鉢?	体下半 (接)		B, Q	灰褐色	明灰褐色/ 黒褐色	L R	
8	包含層Ⅲ		L II a 1	深鉢?	体下半		B	鈍い橙色	黒色	L R	
9	包含層Ⅲ		L II a 1	深鉢?	体部		Q	黒褐色	にぶい褐色	R L?	
10	包含層Ⅲ		L II a 1	深鉢?	体部		B, Q	にぶい橙色	にぶい橙色	L R	
11	包含層Ⅲ		L II a 1	深鉢?	体下半		B, Q	黒色	黒褐色		
12	包含層Ⅲ		L II a 1	深鉢?	体下半		B, Q	明褐灰色	黒褐色	L R	
13	包含層Ⅲ		L II a 1	深鉢?	体下半 (接)		Q	黒褐色	灰褐色	L R (0段 3)	
14	包含層Ⅲ		L II a 1	深鉢?	体部		B, S	にぶい赤褐色	黒褐色	L R	外面に粘土塊付 着
15	包含層Ⅲ		L II a 1	深鉢?	体部		Q	明褐灰色	にぶい褐色	L R	
16	包含層Ⅲ		L II a 1	深鉢?	体部		Q	黒色	灰褐色	L R	
17	包含層Ⅲ		L II a 1	深鉢?	体部		Q	黒褐色	黒褐色	L R (0段 2?)	
18	包含層Ⅲ		L II a 1	深鉢?	体部		Q	にぶい赤褐色	にぶい橙色	L R	
19	包含層Ⅲ		L II a 1	深鉢?	体下半 (接)		Q	にぶい橙色	灰褐色	L R	
20	包含層Ⅲ		L II a 1	深鉢?	体部		Q	灰褐色	にぶい黄橙色	L R	
21	包含層Ⅲ		L II a 1	深鉢?	体部		Q	赤褐色	黒色	R L?	
22	包含層Ⅲ		L II a 1	深鉢?	体部		B, Q	黒褐色	にぶい赤褐色		
23	包含層Ⅲ		L II a 1	深鉢?	体部		B, Q	黒褐色	灰褐色	R?	
24	包含層Ⅲ		L II a 2	深鉢?	体下半		B	橙色	黒色	L R	
25	包含層Ⅲ		L II a 2	深鉢?	体下半 (接)			にぶい赤褐色	黒褐色	L R (0段 3)	
26	包含層Ⅲ		L II a 2	深鉢?	体部		B, Q	にぶい褐色	にぶい褐色	L R	
27	包含層Ⅲ		L II a 2	深鉢?	体部		B, Q	黒褐色	褐色	L R	
28	包含層Ⅲ		L II a 2	深鉢?	体下半 (接)		B, Q	黒褐色	明灰褐色	R L?	
29	包含層Ⅲ		L II a 2	深鉢?	体下半		B	にぶい赤褐色	灰褐色	L R	
30	包含層Ⅲ		L II a 2	深鉢?	体部		Q	黒褐色	にぶい赤褐色	L R	
31	包含層Ⅲ		L II a 2	深鉢?	体下半		B	黒褐色	黒色	L R	
32	包含層Ⅲ		L II a 2	深鉢?	体部		Q	灰白色	にぶい橙色	L R (0段 3?)	
33	包含層Ⅲ		L II a 2	深鉢?	体部		Q	にぶい褐色	灰褐色		
34	包含層Ⅲ		L II a 2	深鉢?	体部		Q	黒色	灰褐色	R L	
35	包含層Ⅲ		L II a 2	深鉢?	体下半		B	褐色	にぶい赤褐色	R L	
36	包含層Ⅲ		L II a 2	深鉢?	体部		B	暗赤褐色	赤褐色	L?	
37	包含層Ⅲ		L II a 2	深鉢?	体下半		Q	黒褐色	灰褐色	R L	
38	包含層Ⅲ		L II a 2	深鉢?	体部		B	暗赤褐色	にぶい赤褐色	R L	
39	包含層Ⅲ		L II a 2	深鉢?	体部			にぶい赤褐色	にぶい橙色	R L	
40	包含層Ⅲ		L II c	深鉢?	体部		Q	にぶい赤褐色	灰褐色		
41	包含層Ⅲ		L II b	深鉢?	体部		B, Q, S	灰褐色	褐灰色		

42	包含層Ⅲ		LⅡb	深鉢	体部		Q	にぶい橙色	黒色		内面に炭化物付着
43	流路跡S D01	h 6・i 6	MⅠ	深鉢	口縁部		Q	黄橙色/灰褐色	橙色	R L	
44	包含層Ⅱb		MⅠ	深鉢	胴部		B	にぶい橙色	灰黄褐色	R L	
45	包含層Ⅱb		MⅡ	深鉢	口縁部		Q	褐灰色	淡橙色	R L	
46	包含層Ⅱb		MⅡ	深鉢	頸部		Q	褐灰色	淡橙色	R L	
47	流路跡S D01	i 6・i 7	MⅢ	深鉢	口縁部		Q	橙色	にぶい赤褐色		
48	包含層Ⅰ	h10・i 10	MⅢ	?	体部		Q	赤褐色	灰褐色		
49	流路跡S D01	i 6	MⅡ	深鉢	口縁部		Q, B	暗赤褐色	赤褐色	R L	
50	流路跡S D01	i 7	MⅢ	深鉢	口縁部	37.6		淡黄色	淡黄色	R L	
51	包含層Ⅱa		MⅣ	深鉢	体部			赤褐色	暗赤褐色	R L	
52	包含層Ⅰ	h 11	MⅤ	深鉢	口頸部	26.0	Q	黄褐色	褐灰色		
53	包含層Ⅱa		MⅤ	深鉢	胴部		Q	黄橙色	褐灰色	R L 縄巻	
54	包含層Ⅱa		MⅤ	深鉢	胴部		Q	赤灰色	灰白色	R L 縄巻	
55	包含層Ⅱa		MⅤ	深鉢	口縁部		Q	灰褐色	淡黄色	R L 縄巻	
56	流路跡S D01	i 6	M=	深鉢	頸部		Q, B	黒褐色	暗赤褐色	L R 捻糸	
57	流路跡S D01	h 6・i 6	M=	?	体部		Q, B	明赤褐色	黒褐色		
58	流路跡S D01	h 6・i 6	M=	?	体部		Q	暗赤褐色	暗赤褐色	R L	
59	包含層Ⅰ	h10・i 10	M=	深鉢	体部		Q	暗赤褐色	明赤褐色	R L 捻糸	
60	流路跡S D01	g 5	M=	深鉢	口縁部	34.0	Q	褐灰色	灰褐色	L R 捻糸	
61	包含層Ⅱa		底	深鉢	底部	9.3	Q	黄橙色	灰褐色		
62	包含層Ⅰ	i 9	UⅠ	?	口縁部		Q	灰褐色	にぶい赤褐色		
63	流路跡S D01	h 6・i 7	UⅠ	深鉢	胴部		Q	にぶい橙色	黄褐色	L R	
64	包含層Ⅰ	i 11	UⅠ	深鉢	体部		Q	灰褐色	褐灰色		
65	包含層Ⅰ	h 11	UⅠ	深鉢	体部		Q	暗赤褐色	赤褐色		
66	包含層Ⅰ	h 10	UⅠ	深鉢	胴部		Q	灰褐色	暗赤褐色	L R	
67	流路跡S D01	h 6・i 6	UⅠ	?	体部		Q	黄橙色	灰褐色		
68	包含層Ⅰ	g 10	UⅠ	?	体部		Q	赤褐色	黒褐色		
69	包含層Ⅰ	i 10	UⅠ	深鉢	頸胴部		Q	明赤褐色	褐色		
70	包含層Ⅰ	g 10	UⅠ	深鉢	胴部		Q	橙色	淡橙色		
71	包含層Ⅰ	i 10	UⅡa	深鉢	口縁部		Q	暗赤褐色	赤褐色	L R	
72	包含層Ⅰ	i 10	UⅡa	?	口縁部		Q	にぶい赤褐色	赤褐色	L R	
73	包含層Ⅰ	g 10	UⅡa	深鉢	口縁部		Q	灰褐色	灰褐色	L R	
74	包含層Ⅰ	h 11	UⅡa	?	口縁部		Q	明赤褐色	にぶい褐色		
75	包含層Ⅰ	i 10	UⅡa	深鉢?	口縁部		Q	にぶい赤褐色	赤褐色	L R	
76	流路跡S D01	i 6・i 7	UⅡa	?	口縁部		Q	赤褐色	灰褐色		
77	包含層Ⅰ	g 10	UⅡa	?	口縁部		Q	にぶい赤褐色	明赤褐色	R L	
78	包含層Ⅰ	h 10	UⅡa	浅鉢?	口縁部		Q	灰褐色	灰褐色	R L	
79	包含層Ⅰ	h 9	UⅡa	?	口縁部		Q	暗赤褐色	橙色	R L	
80	包含層Ⅰ	g 11	UⅡc	?	口縁部			暗赤褐色	にぶい赤褐色	L R?	
81	包含層Ⅰ	h 11	UⅡc	?	口縁部		Q	暗赤褐色	黒褐色	L R	
82	流路跡S D01	h 6・i 7	UⅡc	?	口縁部		Q	明赤褐色	橙色		
83	包含層Ⅰ	h 10	UⅡb	深鉢?	口縁部		Q	赤褐色	黒褐色/黄褐色	L R	
84	流路跡S D01	h 6・i 6	UⅡb	?	口縁部		Q, B	褐色	黒褐色	L R	
85	包含層Ⅰ	h 11	UⅡb	深鉢	口縁部		Q	にぶい橙色	にぶい赤褐色		
86	包含層Ⅰ	h 10	UⅡb	深鉢	口縁-胴部		Q	赤褐色	黒褐色	R L	
87	包含層Ⅰ	h 8・h 9	UⅡb	深鉢?	口縁部		Q	明赤褐色	黒褐色	L R	

観 察 表

88	包含層 I	g10	U II b	深鉢	口縁部		Q	赤褐色	黒褐色	RL	
89	包含層 I	i10	U II b	浅鉢?	口縁部		Q	黒褐色	にぶい黄橙色	LR (3?)	
90	包含層 I	g10	U II b	深鉢	口縁部		Q	橙色	にぶい橙色	RL	
91	包含層 I	h10	U II b	浅鉢?	口縁部		Q	暗赤褐色	暗赤褐色	LR (3?)	
92	包含層 I	h10	U II a	?	体部		Q, B	暗赤褐色	暗赤褐色	LR	
93	包含層 I	g10	U II b	?	口縁部		Q, B	明赤褐色	黒褐色	LR	
94	包含層 I	h10	U II a	深鉢	胴部		Q	黒褐色	黒褐色	LR (3)	
95	包含層 I	g10	U II a	?	胴部		Q	橙色	灰白色	RL	
96	包含層 I	h11	U II a							LR?	
97	包含層 I	h10	U II a	?	体部		Q	にぶい赤褐色	黒褐色	LR	
98	包含層 I	h10	U II a	深鉢?	頸部?		Q	にぶい赤褐色	黒褐色	LR	
99	包含層 I	g10	U II b	深鉢?	体部		Q	赤褐色	にぶい赤褐色	LR?	
100	包含層 I	i10	U II b	?	体部		Q	暗赤褐色	灰褐色	LR	
101	包含層 I	g10	U II b	?	体部		Q	黒褐色	明赤褐色	RL	
102	包含層 I	h10	U II b	?	体部		Q	褐色	暗褐色	LR	
103	包含層 I	h9	U II b	?	体部		Q	暗赤色	黒褐色		
104	包含層 I	g10	U II b	深鉢	胴部		Q	にぶい赤褐色	黒褐色	RL	
105	包含層 I	h10	U II b	?	体部		Q	にぶい橙色	褐色	LR	
106	包含層 I	g10	U II b	?	体部		Q	赤褐色	褐灰色	RL	
107	包含層 I	h10	U II b	深鉢	胴部		Q	黒褐色	暗赤褐色	LR	
108	流路跡 S D01	i 6 · i 7	U II c	深鉢?	口縁部?		Q	黒褐色	暗赤褐色		
109	包含層 I	g10	U II b	深鉢	胴部		Q	明赤褐色	灰褐色	RL	
110	包含層 I	h10	U II b	深鉢	体部		Q	褐色	褐色	LR	
111	包含層 I	h10	U II b	?	体部		Q	黄褐色	にぶい黄褐色	LR	
112	包含層 I	h10	U II c	深鉢?	体部		Q	暗赤褐色	黒褐色		
113	包含層 I	g10	U II c	深鉢	胴部		Q	明赤褐色	黒褐色		
114	流路跡 S D01	j 7	U II c	?	体部		Q	にぶい赤褐色	にぶい褐色		
115	包含層 I	h10	U II c	?	体部		Q	にぶい褐色	にぶい褐色		
116	包含層 I	h11	U II c	深鉢	頸部		Q	明赤褐色	灰褐色		
117	包含層 I	g10	U III	鉢?	口縁部		Q	赤褐色	明黄褐色		
118	包含層 I	h9	U III	?	体部		Q	明赤褐色	黒褐色		
119	包含層 I	h 8 · h 9	U III	?	体部		Q	赤褐色	黒褐色		
120	包含層 I	h10	U IV	深鉢	口縁部		Q	浅黄橙色	浅黄橙色		
121	包含層 I	h12 · i12	U IV	深鉢?	口縁部		Q	橙色	にぶい褐色		
122	包含層 I	h10	U IV	?	体部			灰褐色	明灰褐色		
123	包含層 I	h 8 · h 9	U IV	深鉢?	頸部?		Q	褐灰色	明褐灰色		
124	包含層 I	h10	U V b	深鉢	口縁部		Q	にぶい橙色	にぶい橙色		
125	包含層 I	h10	U V b	深鉢	口縁部		Q	にぶい橙色	にぶい橙色		
126	包含層 I	g10	U V b	深鉢?	体部		Q	赤褐色	赤褐色		
127	包含層 I	h10	U V b	深鉢	体部		Q	にぶい橙色	にぶい橙色		
128	包含層 I	h10	U V b	深鉢	体下半		Q	にぶい橙色	にぶい橙色		
129	包含層 I	h10	U V b	深鉢	体下半		Q	にぶい橙色	にぶい橙色		
130	包含層 I	g11	U V b	深鉢	体下半		Q	赤灰色	にぶい黄褐色		
131	包含層 I	h10	U V c	?	口縁部		Q	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色		
132	包含層 I	g10	U V c	?	頸部?		Q	明赤褐色	明赤褐色		
133	包含層 I	i 10 · i 11	U V b	深鉢	体下半		Q	明赤褐色	にぶい赤褐色		
134	流路跡 S D01	h 6 · i 6	U V a	深鉢	体下半		Q	にぶい褐色	褐色	RL	
135	包含層 I	g10	U V d	深鉢?	口縁部		Q	にぶい橙色	灰白色		

136	包含層 I	h 11	UVd ?	体部		Q	橙色	橙色		
137	包含層 I	h 10	UVd 深鉢	胴部		Q	暗褐色	褐色		
138	包含層 I	g 10	底 深鉢	底部	底9.7	Q	灰白色	にぶい黄橙色		
139	包含層 I	h 11	底 深鉢	底部	底9.2	Q	橙色	にぶい橙色	RL?	
140	包含層 I	i 11	底 ?	底部	底7.5	Q	にぶい赤褐色	にぶい褐色		
141	石囲い炉跡		UV 深鉢?	口縁部			浅黄橙色	浅黄褐色		
142	石囲い炉跡		底	底部	底8.2		橙色	褐色		

部位欄の(接)は、接合部のあることを示す

胎土混和材記号は、Q：石英、B：雲母、S：繊維であって、その他は省略した

第5表 N地点出土弥生土器観察表

番号	器種	出土 地区	法量		技法上の特徴	胎土	焼 成	色調	備考
			口径	器高					
1	壺A	5 g	9.8	*6.7	擬凹線文なし、外面ナデ、内面ケズリ	1～5mmの石・長・赤・チャート	良	灰褐色	
2	壺A	—	11.1	*10.3	外面ハケ、内面ケズリ	1～3mmの石・長・雲	良	褐色	
3	壺A	5 g	11	*11.9	擬凹線文4条、外面ミガキ、内面ミガキ・ケズリ	1～3mmの石・長・チャート	良	褐色	
4	壺A	5 g	12.8	*13.3	擬凹線文なし、外面ハケ、内面ケズリ、ハケ	1～5mmの石・長・チャート	良	橙褐色	
5	壺D	6 h	16	*2.5	擬凹線文なし、外面不明、内面ナデ	1～2mmの石・長・雲	良	黄褐色	口縁部に文様あり、橙色塗布が一部残存
6	壺E	—	11.9	*5.7	外面ハケ、内面ケズリ	1～2mmの石・長・チャート	良	淡褐色	
7	壺C	5 g	10.3	*5.7	外面ミガキ、内面ケズリ	1～2mmの石・長・チャート・赤	良	橙褐色	内外面に橙色塗布が残存
8	壺C	5 g	12.0	*8.5	擬凹線文3条、外面ミガキ、内面ミガキ	1mm程度の石・長・チャート、精製の胎土	良	灰褐色	
9	壺C	—	12.2	*12.0	擬凹線文2条、外面不明、内面不明	1～5mmの石・長・チャート	良	橙褐色	外面に橙色塗布残存
10	壺B 1	—	14.7	*7.1	外面ハケ後ミガキ、内面ケズリ・ハケ	1～3mmの石・長・赤	良	褐色	
11	壺B 1	5 g	11.4	*6.9	擬凹線文なし、外面ハケ、内面ケズリ・ハケ	1～5mmの石・長・輝を多く含む	良	橙褐色	
12	壺B 1	—	13.2	*11.9	外面ミガキ、内面ケズリ	1～3mmの石・長	良	橙褐色	
13	壺B 2	5 g	13.2	*5.3	擬凹線文4条、外面不明、内面不明	1～9mmの石・長・チャート	良	淡褐色	円形の張り付け浮文あり
14	壺B 2	—	19.0	*9.6	擬凹線文7条、外面ミガキ、内面ミガキ	1mm程度の石・長・チャート・赤	良	橙褐色	ドーナツ状の張り付け浮文あり
15	壺B 1	6 g	18.2	*6.0	擬凹線文6条、外面ナデ、内面ナデ	1～3mmの石・長・雲を多く含む	良	黄褐色	
16	壺B 1	6 h	12.3	*6.0	擬凹線文なし、外面ナデ、内面ナデ	1～3mmの石・長・チャートを多く含む	良	淡褐色	
17	壺B 1	6 h	14.8	*9.6	擬凹線文なし、外面ハケ、内面ハケ	1～6mmの石・長・チャート	良	黄褐色	橙色塗布が部分的に残存
18	壺B 1	6 h	15.0	*9.3	擬凹線文3条、外面ハケ、内面ハケ	1～4mmの石・長・赤	良	橙褐色	
19	壺B 1	—	11.8	*5.4	擬凹線文3条、外面ハケ・ミガキ、内面ケズリ	1mm程度の石・長・チャート	良	褐色	
20	壺B 1	5 g	14.8	*3.8	擬凹線文3条、外面ナデ、内面ナデ	1～4mmの石・長・赤	良	黄褐色	文様あり
21	壺B 1	5 g	14.2	*4.7	擬凹線文なし、外面ナデ、内面ケズリ	1～3mmの石・長・チャート	良	淡黄褐色	
22	壺B 1	7 i	13.0	*7.4	擬凹線文なし、外面ハケ、内面ケズリ	1mm程度の石・長・チャート	良	褐色	
23	壺B 1	—	12.0	*21.0	擬凹線文3条、外面ミガキ、内面ナデ	1～3mmの石・長	良	橙褐色	

観 察 表

24	壺B 1	5 g	15.2	*20.6	擬凹線文4条、外面ハケ、内面ケズリ	1～2mmの石・長・赤を多く含む	良	淡褐色	橙色塗布が部分的に残存、外面に煤が付着
25	壺D	—	21.8	*6.6	擬凹線文5条、外面ハケ、内面ケズリ	1～2mmの石・長・赤を多く含む	良	淡黄褐色	
26	壺D	6 g	25.0	*8.0	擬凹線文4条、外面ミガキ、内面ケズリ	1～5mmの石・長・冴ト・赤	良	明橙褐色	橙色の塗布が部分的に残る
27	壺D	5 g	15.2	23.4	擬凹線文なし、外面ハケ・ミガキ、内面ケズリ	1～3mmの石・長・赤	良	黄褐色	
28	甕A 1	6 i	20.2	*3.5	擬凹線文3条、外面不明、内面不明	1～2mmの石・長	良	淡橙褐色	
29	甕A 1	5 g	15.4	*4.4	擬凹線文2条、外面板ナデ、内面ケズリ	1～3mmの石・長・赤	良	暗黄褐色	外面に煤が付着
30	甕A 1	6 h	15.4	*2.9	擬凹線文3条、外面ハケ、内面不明、	1mm程度の石・長・雲	良	褐色	
31	甕A 2	5 g	16	*5.6	擬凹線文なし、外面ハケ、内面ケズリ	2mm程度の石・長・赤	良	褐色	
32	甕A 2	4 f	19.2	*12.5	擬凹線文なし、外面ハケ、内面ケズリ・ナデ	1～3mmの石・長・赤	良	褐色	外面に煤が付着
33	甕A 1	6 h	17	*2.4	擬凹線文4条、外面不明、内面不明、	1～2mmの石・長・冴ト	良	淡黄褐色	外面に煤が付着
34	甕A 1	6 h	15	*11.0	擬凹線文3条、外面ハケ、内面ケズリ	1～3mmの石・長・赤	良	橙褐色	
35	甕A 1	6 h	16	*4.6	擬凹線文4条、外面不明、内面ケズリ	1～3mmの輝を多く含む	良	橙褐色	橙色の塗布が部分的に残る
36	甕A 2	4 f	19.2	*12.0	擬凹線文なし、外面細かいハケ、内面ケズリ	1～3mmの石・長・赤	良	灰白色	外面に煤が付着
37	甕A 2	5 g	15.4	*4.3	擬凹線文なし、外面ナデ、内面ケズリ	1～3mmの石・長・冴ト	良	暗褐色	
38	甕A 1	5 g	16	20.0	擬凹線文4条、外面ハケ、内面ケズリ	1～2mmの長・冴ト・赤	良	灰褐色	外面に煤が付着
39	甕A 1	6 h	20.4	*3.3	擬凹線文なし、外面不明、内面ケズリ	1～3mmの石・長・冴ト	良	黄褐色	
40	甕A 2	—	17.4	*7.1	擬凹線文なし、外面粗いハケ、内面ケズリ	1～5mmの石・長・輝を多く含む	良	暗灰色	
41	甕A 2	4 f	17.0	*7.9	擬凹線文なし、外面ハケ、内面ナデ後ハケ	1mm程度の石・長	良	淡褐色	外面に煤が付着
42	甕A 1	5 g	16	*5.8	擬凹線文6条、外面ハケ、内面ケズリ	1～2mmの冴ト・赤を多く含む	良	褐色	外面に煤が付着
43	甕A 2	4 f	17	*17.1	擬凹線文なし、外面ハケ、内面粗いケズリ	1～2mmの石・長・赤	良	淡灰褐色	外面に煤が付着
44	甕A 1	6 h	17.8	*5.5	擬凹線文2条、外面ハケ、内面ケズリ	1mm程度の石・長・冴ト	良	褐色	
45	甕A 1	5 g	15.8	*9.5	擬凹線文3条、外面粗いハケ、内面ケズリ	1～4mmの石・長・冴ト	良	褐色	
46	甕A 1	6 g	16	*4.6	擬凹線文4条、外面ナデ、内面ハケ	1～2mmの石・長・赤	良	淡黄褐色	橙色の塗布が部分的に残る
47	甕A 1	5 g	20	*3.6	擬凹線文3条、外面ナデ、内面ケズリ	1～3mmの石・長・冴ト	良	褐色	
48	甕A 1	5 g	15.0	*9.3	擬凹線文4条、外面ハケ、内面ケズリ	1～3mmの石・長を多く含む	良	黄褐色	
49	甕A 1	6 h	14.8	*5.0	擬凹線文3条、外面ハケ、内面ケズリ	1～2mmの輝・石・長	良	赤褐色	
50	甕A 1	5 g	17.2	*6.4	擬凹線文5条、外面ハケ、内面ケズリ	1～4mmの石・長	良	淡褐色	
51	甕A 1	5 g	17	*5.4	擬凹線文5条、外面ハケ、内面ケズリ	1～5mmの石・長・雲	良	褐色	外面に煤が付着
52	甕A 1	4 f	18.8	*8.1	擬凹線文3条、外面ハケ、内面ケズリ	1～2mmの石・長を多く含む	良	褐色	外面に煤が付着
53	甕A 1	4 f	17	*7.2	擬凹線文4条、外面ハケ、内面ナデ	1～2mmの冴ト・赤	良	黄褐色	外面に煤が付着
54	甕A 1	5 g	17	*11.0	擬凹線文なし、外面ハケ、内面ケズリ	1～2mmの石・長・冴ト	良	黄褐色	
55	甕A 1	6 h	19.0	*9.1	擬凹線文4条、外面ハケ、内面ケズリ	1～3mmの石・長の含む	良	橙褐色	
56	甕A 1	6 h	22.0	*3.2	擬凹線文3条、外面不明、内面ケズリ	1～2mmの石・長	良	淡褐色	
57	甕A 1	5 g	20.0	*10.4	擬凹線文4条、外面ハケ、内面ケズリ	1～3mmの石・長・冴ト	良	褐色	外面に煤が付着
58	甕A 1	—	19.8	*13.0	擬凹線文5条、外面ハケ、内面ケズリ	1～6mmの石・長・冴ト・赤	良	黄褐色	外面に煤が付着列点文あり
59	甕A 1	6 g	21.2	*9.5	擬凹線文2条、外面ハケ、内面ケズリ	1～3mmの石・長・冴ト・赤	良	黄褐色	
60	甕A 1	7 i	21.4	*3.6	擬凹線文6条、外面不明、内面不明	1mm程度の石・長	良	黄褐色	
61	甕A 1	5 g	16	*3.1	擬凹線文5条、外面不明、内面ケズリ	1mm程度の石・長	良	淡褐色	外面に煤が付着
62	甕A 1	5 g	18.0	*5.25	擬凹線文4条、外面ハケ、内面ケズリ	1～2mmの石・長・冴ト・赤	良	淡褐色	外面に煤が付着

63	甕A1	4 f	17	*10.2	擬凹線文5条、外面ハケ、内面ケズリ	1～3mmの石・長	良	灰褐色	外面に煤が付着
64	甕A1	5 g	18.5	*5.9	擬凹線文5条、外面ハケ、内面ケズリ	1～2mmの石・長・赤	良	黄褐色	外面に煤が付着
65	甕A1	5 g	16	*4.1	擬凹線文なし、外面ハケ、内面ケズリ	1～3mmの石・長・チャートを多く含む	良	淡褐色	肩部外面にハケ原体による列点文あり
66	甕A1	5 g	16	*7.5	擬凹線文3条、外面ハケ、内面ケズリ	1mm程度の石・長	良	淡褐色	外面に煤が付着
67	甕A1	5 g	22	*8.7	擬凹線文3条、外面ハケ、内面ケズリ	1～3mmの石・長・チャート・赤	良	褐色	外面に煤が付着列点文あり
68	甕A1	4 f	17.9	*10.3	擬凹線文6条、外面ハケ、内面ケズリ	2～5mmの石・長	良	橙褐色	外面に煤が付着
69	甕A1	5 g	14.3	*13.4	擬凹線文2条、外面ハケ、内面ケズリ	2～5mmの長・赤	良	黄褐色	外面に煤が付着肩部にハケ原体による列点あり
70	甕A1	5 g	20.0	*18.2	擬凹線文3条、外面ハケ、内面ケズリ	1～3mmの石・長・チャートを多く含む	良	橙褐色	肩部外面にハケ原体による列点文あり
71	甕A1	5 g	14	*4.6	擬凹線文3条、外面不明、内面ケズリ	1mm程度の石・長	良	淡黄褐色	
72	甕A1	6 h	13.4	*5.1	擬凹線文2条、外面不明、内面ケズリ	1～2mmの石・長・赤	良	黄褐色	
73	甕A1	—	16	*6.9	擬凹線文3条、外面ハケ、内面ケズリ	1～3mmの長・チャート	良	暗黄褐色	外面に煤が付着
74	甕A1	5 g	14.4	*6.2	擬凹線文3条、外面ハケ、内面ケズリ	1mm程度の石・長	良	赤褐色	
75	甕A1	4 f	13.5	*11.6	擬凹線文なし、外面タタキ、内面ケズリ	1mm程度の石・長	良	褐色	外面に煤が付着、橙色の塗布が部分的に見られる
76	甕A1	5 g	16	*6.9	擬凹線文5条、外面ハケ、内面ケズリ	1～2mmの石・長	良	褐色	外面に煤が付着、内面にコゲの痕
77	甕A1	5 g	14.8	12.8	擬凹線文5条、外面ハケ、内面ケズリ、底部外面ケズリ	1～3mmの石・長・チャート	良	明褐色	
78	甕A1	5 g	16	*7.2	擬凹線文5条、外面ハケ、内面ケズリ	1～4mmの石・長	良	褐色	外面に煤が付着
79	甕A1	5 g	14.7	13.1	擬凹線文3条、外面ハケ、内面ケズリ	1～3mmの石・長・チャート	良	橙褐色	底部外面から焼成前に穿孔
80	甕A1	—	14.2	*6.3	擬凹線文4条、外面ハケ、内面ケズリ	1～2mmの長・赤	良	黄褐色	外面に煤が付着
81	甕A1	5 g	14.8	*6.0	擬凹線文4条、外面ハケ、内面ケズリ	1～4mmの石・長	良	褐色	外面に煤が付着
82	甕A1	5 g	17.4	*6.3	擬凹線文5条、外面ハケ、内面ケズリ	1～3mmの石・長	良	灰白色	外面に煤が付着
83	甕A1	4 f	17.1	*10.3	擬凹線文4条、外面ハケ、内面ケズリ	1～4mmの石・長	良	黄褐色	外面に煤が付着橙色の塗布が部分的に残る
84	甕A1	5 g	15.3	*8.0	擬凹線文4条、外面ハケ、内面ケズリ	1～4mmの石・長	良	黄褐色	
85	甕A1	5 g	17	*10.0	擬凹線文4条、外面不明、内面ケズリ	1～3mmの石・長・赤	良	褐色	外面に煤が付着
86	甕A1	5 g	18.4	*7.0	擬凹線文1条、外面ハケ、内面ケズリ	1～2mmの長・赤	良	黄褐色	外面に煤が付着、内面にコゲの跡
87	甕A1	5 g・6 h	17.5	20.0	擬凹線文3条、外面ハケ、内面ケズリ	1～3mmの石・長	良	橙褐色	外面に煤が付着列点文あり
88	甕A1	5 g	16	*4.0	擬凹線文6条、外面ハケ、内面ケズリ	1～4mmの石・長・チャート	良	橙褐色	
89	甕A1	5 g	16	*3.9	擬凹線文5条、外面不明、内面ケズリ	1～3mmの石・長・赤	良	明褐色	外面に煤が付着
90	甕A1	4 f・5 g	18.0	*4.6	擬凹線文7条、外面ハケ、内面ケズリ	1～2mmの石・長・雲	良	褐色	外面に煤が付着
91	甕A1	4 f・5 g	16	*6.8	擬凹線文4条、外面ハケ、内面ケズリ	1～3mmの石・長	良	橙褐色	外面に煤が付着
92	甕A1	5 g	18.5	*6.9	擬凹線文3条、外面ハケ、内面ケズリ	1～4mmの石・長	良	淡黄褐色	外面に煤が付着
93	甕A1	6 h	12.8	*7.8	擬凹線文5条、外面不明、内面ハケ	1～4mmの石・長・チャート	良	赤褐色	
94	甕A1	4 f	12	16	擬凹線文5条、外面ミガキ、内面ケズリ後ミガキ	1～5mmの石・長	良	灰褐色	外面に煤が付着部分的に橙色塗布が残る

観 察 表

95	堯A 1	4 f	17	*4.7	擬凹線文10条、外面不明、内面ケズリ	1～2mmの石・長・雲	良	褐色	外面に煤が付着
96	堯A 1	4 f	15.8	*14.0	擬凹線文12条、外面ハケ後ミガキ、内面ケズリ	1～3mmの石・長・雲	良	褐色	
97	堯A 1	5 g	22.4	*7.1	擬凹線文5条、外面ミガキ、内面ケズリ	1mm以下の石・長・雲	良	淡黄褐色	外面に煤が付着
98	堯A 1	4 f	17.4	*16.7	擬凹線文4条、外面ハケ、内面ケズリ	1～3mmの石・長・雲	良	褐色	外面に煤が付着
99	堯A 2	—	15.8	*8.7	擬凹線文なし、外面不明、内面ケズリ	1～2mmの石・長	良	褐色	外面に煤が付着
100	堯A 2	4 f	17.5	*6.1	擬凹線文2条、外面不明、内面不明	1～3mmの石・長・珩	良	黄褐色	
101	堯A 2	5 g	17.8	*10.0	擬凹線文なし、外面タタキ後ハケ、内面ケズリ	1～3mmの石・長・珩	良	褐色	
102	堯A 2	5 g	17.7	*9.2	擬凹線文なし、外面不明、内面ケズリ	1～3mmの石・長・珩	良	黄褐色	
103	堯A 2	4 f	15.4	*13.1	擬凹線文なし、外面ハケ、内面ハケ	1～2mmの石・長・珩	良	褐色	外面に煤が付着
104	堯A 2	5 g	18.0	*11.8	擬凹線文なし、外面ハケ、内面ケズリ	1～2mmの石・長・赤	良	褐色	
105	堯A 2	—	18.0	*11.4	擬凹線文なし、外面ハケ、内面ケズリ	1～2mmの石・長・珩	良	橙褐色	
106	堯A 2	7 i	18.2	*8.7	擬凹線文なし、外面ハケ、内面ケズリ	1mm程度の石・長	良	淡褐色	外面に煤が付着
107	堯A 2	5 g	15.4	*7.3	擬凹線文なし、外面ハケ、内面ケズリ	1～2mmの石・長・雲を多く含む	良	褐色	外面に煤が付着
108	堯A 2	—	17.4	*8.9	擬凹線文なし、外面ハケ、内面ケズリ	1～2mmの石・長・雲	良	褐色	外面に煤が付着
109	堯A 2	—	17.0	*5.8	擬凹線文なし、外面ハケ、内面ケズリ	1～2mmの石・長・雲	良	橙褐色	外面に煤が付着
110	堯A 2	5 g	19.0	*5.9	擬凹線文なし、外面不明、内面ケズリ	1～4mmの珩を多く含む	良	暗褐色	外面に煤が付着
111	堯A 2	5 g	18.5	*6.1	擬凹線文なし、外面ハケ、内面ケズリ	1～5mmの石・長・珩を多く含む	良	橙褐色	外面に煤が付着
112	堯A 2	5 g	18.4	*6.8	擬凹線文なし、外面ハケ、内面ケズリ	1～3mmの石・長・珩を多く含む	良	黄褐色	
113	堯A 2	5 g	18	*4.7	擬凹線文なし、外面ハケ、内面ケズリ	1～3mmの石・長・珩を多く含む	良	黄褐色	外面に煤が付着
115	堯A 2	—	20	*6.1	擬凹線文なし、外面ハケ、内面ケズリ	1mm程度の石・長	良	黄褐色	外面に煤が付着
116	堯A 2	—	14.2	*7.5	擬凹線文なし、外面ハケ、内面ケズリ	1～4mmの珩を多く含む	良	褐色	外面に煤が付着
117	堯A 2	6 h	14.8	*17.5	擬凹線文なし、外面ハケ、内面ケズリ	1～4mm石・長・赤	良	橙褐色	
118	堯A 2	5 g	17	*13.7	擬凹線文なし、外面ハケ、内面ケズリ	1～3mmの石・長・珩	良	褐色	外面に煤が付着
119	堯A 2	4 f・5 g	18.5	*8.1	擬凹線文なし、外面ハケ、内面ケズリ	1～2mmの石・長	良	褐色	外面に煤が付着
120	堯A 2	7 i	18.2	*8.1	擬凹線文なし、外面タタキ、内面ケズリ	1～5mmの石・長・珩	良	淡黄褐色	
121	堯A 2	—	16	26	擬凹線文なし、外面ハケ、内面ケズリ	1～3mmの石・長・雲	良	淡橙褐色	
122	堯A 1	5 g	16	*4.6	擬凹線文2条、外面不明、内面ケズリ	1mm程度の石・長	良	褐色	外面に煤が付着
123	堯A 2	5 g	18.0	*3.6	擬凹線文なし、外面不明、内面不明、	1～3mmの石・長を多く含む	良	褐色	
124	堯A 2	5 g	17.4	*7.3	擬凹線文なし、外面ハケ、内面ケズリ	1～5mmの石・長・珩	良	褐色	
125	堯A 1	5 g	19.0	*8.1	擬凹線文2条、外面ハケ、内面ケズリ	1～2mmの石・長・珩	良	褐色	肩部に2条の沈線文、外面に煤が付着
126	堯A 1	5 g	17.0	*9.2	擬凹線文2条、外面ハケ、内面ハケ後ケズリ	1mm程度の石・長・珩	良	褐色	外面に煤が付着
127	堯A 1	5 g	20.9	*4.0	擬凹線文6条、外面ハケ、内面ケズリ	1～2mm程度の石・長・珩	良	淡黄褐色	外面に煤が付着
128	堯A 1	5 g	15.4	*4.3	擬凹線文5条、外面ミガキ?、内面ケズリ	1mm程度の石・長・赤	良	橙褐色	
129	堯A 2	5 g	16	*4.6	擬凹線文なし、外面ミガキ?内面ナデ	1mm程度の石・長・雲	良	黄褐色	
130	堯A 1	5 g	12.4	*5.6	擬凹線文なし、外面ハケ、内面ケズリ	1～3mmの石・長・赤	良	褐色	

131	甕A 2	7 i	15.8	*5.5	擬凹線文2条、外面ハケ、内面ナデ	1～2mmの石・長・チャート・赤	良	淡黄褐色	肩部に櫛状工具による施文、列点文が見られる
132	甕A 1	5 g	22.3	*13.8	擬凹線文4条、外面ハケ、内面ケズリ	1～4mmの石・長・赤	良	淡黄褐色	外面に煤が付着
133	甕B	—	15.8	*6.7	外面ハケ、内面ケズリ	1～2mmの石・長・赤	良	褐色	外面に煤が付着
134	甕B	5 g	25	*8.6	外面ハケ、内面ケズリ	1～4mmの石・長・チャート・赤	良	褐色	外面に煤が付着
135	甕B	4 f	12.8	*15.2	外面ハケ、内面ケズリ	1～4mmの石・長・チャート・赤	良	淡褐色	外面に煤が付着
136	甕B	5 g	14.2	*13.7	外面ハケ、内面ケズリ	1～5mmの石・長を多く含む	良	褐色	外面に煤が付着、内面にコゲの痕
137	甕B	5 g	14.2	*16.1	外面ハケ、内面ケズリ後ハケ	1～3mmの石・長	良	黄褐色	
138	甕B	5 g	13.4	*6.9	外面不明、内面不明	1～2mmの石・長	良	淡褐色	
139	甕B	5 g	15.2	*6.5	外面タタキ、内面ケズリ	1mm程度の石・長・チャート	良	褐色	
140	甕B	5 g	17.2	*3.9	外面ハケ、内面ケズリ	1～2mmの輝・チャート・赤	良	黄褐色	外面に煤が付着
141	甕B	—	17.7	*4.2	外面ハケ、内面ケズリ	1mm程度の輝・長・チャート	良	黄褐色	
142	甕B	5 g	18	*8.0	外面ハケ、内面ケズリ	1～2mm程度の石・長・チャート	良	黄褐色	
143	甕B	5 g	16	*7.1	外面ハケ、内面ケズリ	1～7mmの石・長	良	褐色	
144	甕B	6 h	18.0	*11.8	外面ハケ、内面ハケ	1～2mmの石・長・チャート・赤	良	黄褐色	外面に煤が付着
145	甕B	—	25.4	*13.0	外面ハケ、内面ナデ	1～5mmの石・長	良	橙褐色	
146	甕A 1	4 f・5 g	9.5	*3.4	擬凹線文2条、外面ミガキ、内面ケズリ	1mm程度の石・長・雲・チャート	良	灰黄褐色	外面に煤が付着
147	甕A 1	5 g	11	*7.2	擬凹線文4条、外面ハケ後ミガキ、内面ケズリ	1～2mmの石・長・チャート	良	褐色	外面に煤が付着
148	甕A 2	—	10.5	*9.5	擬凹線文不明、外面ハケ、内面ケズリ	1～2mmの石・長・チャート・赤	良	橙褐色	
149	甕A 2	6 h	7.9	*5.3	擬凹線文なし、外面ミガキ?、内面ケズリ	1mm程度のチャート・赤	良	橙褐色	
150	甕A 2	—	11	*9.0	擬凹線文不明、外面ハケ、内面ケズリ	1～4mmの石・長・雲・チャート・赤を含む	良	橙褐色	肩部に列点文あり
151	甕A 2	5 g	10.0	12.3	擬凹線文不明、外面不明、内面不明	1mm以下の石・長	良	橙褐色	
152	鉢A	—	8.2	4.7	外面ハケ、内面ハケ	1～2mmの石・長	良	黄褐色	
153	鉢A	4 f	11.8	8	擬凹線文なし、外面不明、内面不明	1～2mmの石・長・赤	良	橙褐色	
154	鉢B	6 h	14.3	11.0	擬凹線文3条、外面不明、内面ケズリ	1～3mmの石・長・チャート・赤	良	褐色	外面に橙色塗布が一部残存
155	鉢C	—	13.4	*4.8	外面ナデ、内面ハケ	1mm以下の石・長	良	褐色	外面に煤が付着、内面にコゲの痕
156	鉢C	—	14.0	9.5	外面ハケ、内面ケズリ	1～3mmの石・長・赤	良	褐色	
157	鉢D	5 g	—	12	外面ハケ、内面指ナデ	1mm程度の石・長・雲	良	黄褐色	
158	鉢C	5 g	15.1	*10.2	外面ハケ、内面ケズリ	1～3mmの石・長・赤	良	褐色	外面に煤が付着
159	鉢C	—	14.1	*8.7	外面ハケ、内面ハケ後ケズリ	1～4mmの輝を多く含む	良	褐色	外面に煤が付着
160	鉢C	5 g	15.7	*10.3	外面ハケ、内面ケズリ	1～3mmの石・長・輝を多く含む	良	褐色	
161	鉢C	6 h	16	*8.7	外面ハケ、内面ケズリ	1～3mmの石・長・チャート	良	淡黄褐色	
162	鉢C	5 g	18.9	*9.4	外面不明、内面ナデ	1～2mmの石・長・赤	良	黄褐色	外面は被熱により赤変色
163	鉢C	5 g	20	*7.5	外面ハケ、内面ケズリ	1～3mmの石・長・赤	良	褐色	橙色塗布が部分的に残存
164	鉢C	5 g	16	*8.4	外面ハケ、内面ケズリ	1～4mmのチャート・輝を多く含む	良	黄褐色	
165	鉢C	5 g	16	*9.5	外面ミガキ、内面ケズリ	1～3mmの石・長・チャート	良	黄褐色	外面に橙色塗布が一部残存
166	鉢C	5 g	20.0	*4.3	外面ハケ、内面ケズリ	1～2mmの石・長・チャート	良	褐色	外面に煤が付着
167	鉢C	5 g	19	12.4	外面ハケ、内面ケズリ	1～3mmの石・長	良	黄褐色	底部に穿孔

観 察 表

168	鉢B	5 g	13.5	*8.3	外面ハケ、内面ケズリ	1～5mmの石・長・赤	良	淡褐色	橙色塗布が部分的に残存
169	鉢B	5 g	13.8	10.1	擬凹線文3状、外面不明、内面ナデ	1～4mmの石・長	良	橙褐色	
170	鉢B	4 f・5 g	14.2	*4.3	擬凹線文なし、外面不明、内面ケズリ	1mm程度の石・長・冴ト・赤	良	褐色	外面に煤が付着
171	鉢B	5 g	15	*9.2	擬凹線文なし、外面不明、内面ケズリ	1～3mmの石・長・赤	良	褐色	外面に煤が付着
172	鉢B	6 h	21.3	*10.0	外面不明、内面ケズリ	1～2mmの石・長・冴ト・赤	良	黄褐色	
173	鉢D	5 g	14.0	*7.1	外面ナデ、内面ケズリ	1mm程度の石・長・冴ト	良	黄褐色	
174	鉢D	5 g	15.0	*5.8	外面ナデ、内面ケズリ	1～2mmの石・長	良	橙褐色	
175	鉢D	5 g	16	*8.9	外面ナデ、内面ケズリ	1～4mmの輝を多く含む	良	褐色	
176	鉢D	5 g	16	*5.4	外面ナデ、内面ケズリ	1～2mmの石・長・冴ト・赤	良	橙褐色	
177	鉢D	5 g	14.2	*6.0	外面ハケ、内面ハケ・ケズリ	1～4mmの石・長・冴ト	良	橙褐色	
178	鉢D	5 g	15.5	*10.9	外面ハケ、内面ハケ後ケズリ	1～2mmの石・長・冴ト・赤	良	橙褐色	
179	鉢D	—	13.0	12.0	外面ハケ、内面ケズリ	1～2mmの石・長・赤	良	褐色	橙色塗布が部分的に残存
180	鉢D	—	14.2	11.9	外面不明、内面不明、	1～3mmの石・長・冴ト・赤	良	赤褐色	
181	鉢D	4 f	16	13.0	外面ナデ、内面ケズリ	1～4mmの石・長・冴ト・赤	良	橙褐色	外面に接合痕を多く残す
182	鉢D	4 f	14.9	12.8	外面ナデ、内面ケズリ	1～4mmの石・長	良	橙褐色	底部に焼成前の穿孔
183	鉢D	—	18	13.3	外面ナデ、内面ナデ	1～4mmの石・長・冴トを多く含む	良	灰褐色	底部に焼成前の穿孔
184	鉢D	—	19.4	14.9	外面ハケ、内面ハケ	1mm程度の石・長	良	橙褐色	
185	鉢D	3 g	21.1	13.5	外面ナデ、内面ハケ・ケズリ	1～3mmの石・長・冴ト・赤	良	灰色	
186	鉢D	—	17	17	外面ナデ、外面ケズリ	1～4mmの石・長・冴ト・輝を多く含む	良	褐色	
187	鉢D	5 g	20.0	17	外面ハケ、内面ケズリ	1～4mmの石・長・冴ト	良	淡黄褐色	底部に焼成前の穿孔、口縁部外面に1条の沈線文
188	鉢D	—	15.4	17.1	外面ハケ、内面ケズリ	1mm程度の石・長・冴ト、精製された胎土	良	淡黄褐色	底部に焼成前の穿孔
189	鉢D	—	18.1	13.9	外面ハケ、内面指ナデ	1mm程度の石・長	良	淡褐色	底部に焼成前の穿孔
190	鉢D	5 g	17.3	10.1	外面ミガキ、内面ミガキ	1～3mmの石・長・冴ト	良	褐色	
191	鉢D	5 g	15.4	16	外面ハケ、内面ハケ後ケズリ	1～4mmの石・長・冴ト	良	橙褐色	
192	鉢D	5 g	16	15.0	外面ハケ、内面ケズリ	1～4mmの石・長・赤	良	淡黄褐色	
193	鉢D	5 g	18.8	*18.6	外面ハケ、内面ケズリ	1～4mmの石・長・冴ト	良	黄褐色	外面に橙色塗布が部分的に残存
194	高杯A	5 g	23.2	*5.4	擬凹線文なし、外面不明、内面ミガキ	1～4mmの石・長・冴ト	良	褐色	内面に橙色塗布が部分的に残存
195	高杯A	5 g	22.0	*8.0	擬凹線文3条、外面ミガキ、内面ミガキ	1～4mmの石・長・冴ト	良	淡褐色	
196	高杯A	—	23.2	*7.5	擬凹線文3条、外面不明、内面不明	1～2mmの石・長精製された胎土	良	黄褐色	
197	高杯A	6 h	21.4	*6.9	擬凹線文3条、外面ミガキ、内面ミガキ	1mm以下の石・長	良	橙褐色	
198	高杯A	5 g	22.0	*11.1	擬凹線文4条、外面ミガキ、内面ミガキ	1～4mmの石・長	良	橙褐色	
199	高杯A	6 h	24.4	*6.9	擬凹線文4条、外面不明、内面不明	1～2mmの石・長・赤	良	褐色	
200	高杯A	—	22.4	*15.8	擬凹線文4条、外面不明、内面不明	1～3mmの石・長	良	褐色	スカシは4方向
201	高杯A	5 g	23.8	*7.7	擬凹線文6条、外面ミガキ?、内面不明	1mm程度の石・長	良	橙褐色	

202	高杯A	5 g	25.0	*7.7	擬凹線文6条、外面ミガキ、内面ミガキ	1mm以下の石・長、精製された胎土	良	黄褐色	
203	高杯A	—	23.2	*5.7	擬凹線文5条、外面ミガキ、内面ミガキ	1～2mmの石・長	良	淡褐色	
204	高杯A	—	22.1	*5.4	擬凹線文6条、外面ミガキ、内面ミガキ	1mm程度の石・長	良	橙褐色	外面に橙色塗布が一部残存
205	高杯A	5 g	24.2	*4.8	擬凹線文5条、外面不明、内面ミガキ	1mm以下の石・長・輝	良	淡橙褐色	
206	高杯A	5 g	26	*5.3	擬凹線文5条、外面ミガキ、内面不明、	1～3mmの石・長・赤	良	橙褐色	外面に橙色塗布が一部残存
207	高杯A	5 g	25.0	*9.5	擬凹線文5条、外面ミガキ、内面ハケ後ミガキ	1～2mmの石・長精製された胎土	良	橙褐色	
208	高杯A	5 g	24.7	20	擬凹線文5条、杯部外面ミガキ、内面ミガキ脚部外面ミガキ、内面ハケ	1～2mmの石・長・輝	良	橙褐色	外面に橙色塗布が一部残存、スカシは3方向
209	高杯A	5 g	25.7	*5.6	擬凹線文5条、外面ミガキ、内面ミガキ	1～3mmの石・長	良	橙褐色	
210	高杯A	5 g	22.8	*4.8	擬凹線文6条、外面ミガキ、内面ミガキ	1～2mmの石・長	良	淡黄褐色	
211	高杯A	5 g	27	*4.8	擬凹線文4条、外面不明、内面ミガキ	1mm以下の石・長	良	黄褐色	
212	高杯A	—	26	*13.0	擬凹線文5条、外面不明、内面不明	1mm程度の石・長・雲	良	褐色	
213	高杯A	—	18.0	*4.3	擬凹線文2条、外面不明、内面不明	1～2mmの石・長	良	黄褐色	
214	高杯A	5 g	—	*16.7	杯部外面不明、内面ミガキ脚部外面ミガキ、内面ハケ	1mm以下の石・長・雲、精製された胎土	良	褐色	スカシは2方向が残存、本来は4方向か？
215	高杯A	5 g	25.3	20	擬凹線文不明、杯部外面ミガキ、内面ミガキ脚部外面ミガキ、内面ハケ	1mm以下の石・長、精製された胎土	良	赤褐色	スカシは1方向が残存
216	高杯B	6 h	15.0	16	擬凹線文2条、外面不明、内面不明	1mm程度の石・長・雲、精製された胎土	良	淡黄褐色	スカシは3方向
217	高杯B	6 h	19.1	*6.3	擬凹線文なし、外面不明、内面不明	1～3mmの石・長	良	褐色	
218	高杯B	5 g	17.4	18.5	外面不明、内面不明	1mm以下の石・長、精製された胎土	良	黄褐色	スカシは3方向
219	高杯C	6 h	9.8	*11.7	外面不明、内面不明	1～4mmの石・長	良	褐色	
220	高杯C	—	9.8	*8.7	外面不明、内面不明	1～2mmの石・長・赤	良	褐色	外面に橙色塗布が一部残存
221	高杯C	6 h	9.0	*16.7	外面ミガキ、内面ハケ	1～2mmの石・長	良	橙褐色	
222	高杯C	6 h	—	*19.0	外面不明、内面ハケ	1mm以下の石・長・雲、精製された胎土	良	黄褐色	
223	器台A	6 h・7 i	21.2	*3.8	擬凹線文4条、外面不明、内面不明	1mm程度の石・長	良	橙褐色	
224	器台A	5 g	23.8	*6.0	擬凹線文4条、外面不明、内面不明	1～3mmの石・長	良	黄灰色	
225	器台A	6 i	21.2	*3.6	擬凹線文4条、外面ハケ内面不明	1～3mmの石・長	良	橙褐色	
226	器台A	5 g	19.8	17.3	擬凹線文3条、外面ミガキ、内面ケズリ後ミガキ	1～2mmの石・長	良	褐色	スカシなし
227	器台A	5 g	16	*4.0	擬凹線文3条、外面不明、内面ミガキ	1～3mmの石・長・輝	良	褐色	
228	器台A	7 i	16	*4.3	擬凹線文3条、外面不明、内面不明	1～2mmの石・長・赤	良	赤褐色	
229	器台A	6 h	18	*3.6	擬凹線文6条、外面不明、内面ミガキ	1～3mmの石・長・赤	良	褐色	
230	器台A	6 h	17.2	17	擬凹線文5条、外面ハケ後ミガキ、内面ハケ・ミガキ	1～3mmの石・長・冴ト	良	褐色	スカシは4方向
231	器台B	6 i	23.9	*2.6	擬凹線文3条、外面不明、内面ミガキ	1mm程度の石・長・赤	良	黄褐色	スカシは2方向が残存
232	器台B	5 g	22.8	*3.1	擬凹線文3条、外面不明、内面ミガキ	1mm程度の石・長・赤	良	褐色	
233	器台B	7 i	21	*4.6	擬凹線文4条、外面ミガキ内面ミガキ	1～2mmの石・長	良	赤褐色	
234	器台A	6 h	20.8	*2.9	擬凹線文不明、外面不明、内面不明	1～2mmの石・長を多く含む	良	黄褐色	
235	器台A	6 h	21.3	*3.1	擬凹線文なし、外面ミガキ、内面ミガキ	1～4mmの石・長・冴ト	良	黄褐色	

236	器台A	5 g	19.8	*3.5	擬凹線文なし、外面ミガキ、内面ミガキ	1mm程度の石・長	良	淡褐色	
237	器台A	5 g	24.8	*2.3	擬黄線文4条、外面不明、内面不明	1mm程度の石・長	良	黄褐色	
238	器台A	6 h	20.1	*11.6	擬凹線文7条、外面ミガキ、内面不明	1～2mmの石・長・チャート	良	橙褐色	
239	器台A	6 h	22.2	*15.7	擬凹線文4条、外面ミガキ、内面不明	1～3mmの石・長	良	橙褐色	
240	器台A	7 i	25.8	*2.3	擬凹線文4条、外面ミガキ、内面ミガキ	1mm程度の石・長	良	淡褐色	
241	器台A	7 i	24.0	*13.9	擬凹線文4条、外面ミガキ、内面ミガキ	1～2mmの石・長	良	淡褐色	
242	器台脚部	4 f	—	*11.0	外面ミガキ・ハケ、内面ハケ	1mm以下の石・長・雲、精製された胎土	良	淡褐色	スカシは1方向残存、ハケの原体には細かいものと、粗いものがある
243	高杯脚部	4 f・5 g	—	*13.9	外面ミガキ、内面ハケ・ケズリ	1～4mmの石・長	良	灰褐色	スカシは3方向、外面に橙色塗布が残存、内面に刺突、絞り痕あり
244	高杯脚部	5 g	—	*12.8	外面ミガキ、内面ハケ後ケズリ	1～3mmの石・長	良	淡黄褐色	スカシは3方向、刳痕、ハケの原体には細かいものと粗いものがある
245	高杯脚部	5 g	—	*13.0	外面ミガキ、内面ハケ	1～4mmの石・長・雲・赤・チャート	良	黄褐色	スカシは3方向、内面に絞り痕あり
246	高杯脚部	5 g	—	*13.2	外面ハケ後ミガキ、内面ハケ・ケズリ	1～3mmの石・長・チャート・赤	良	灰黄褐色	スカシは3方向
247	高杯脚部	4 f	—	*12.0	外面ハケ後ミガキ、内面ハケ	1mm以下の石・長・雲、精製された胎土	良	淡褐色	スカシは1方向残存、橙色塗布が部分的に残存、内面に絞り痕あり
248	高杯脚部	—	—	*11.4	外面ミガキ・ハケ、内面ハケ後ケズリ	1～3mmの石・長・赤	良	褐色	スカシは確認できない
249	高杯脚部	—	—	*11.9	外面ミガキ、内面ハケ・ミガキ	1～2mmの石・長	良	褐色	スカシは確認できない、橙色塗布が残存
250	高杯脚部	6 h	—	*17.9	外面ミガキ・内面ハケ	1～5mmの石・長を多く含む	良	淡黄褐色	スカシは3方向、内面に絞り痕あり
251	蓋	—	8.0	*3.3	外面ナデ、内面ナデ	1～3mmの石・長	良	褐色	
252	蓋	7 h	—	*5.0	外面不明、内面不明	1～4mmの石・長	良	淡黄褐色	
253	蓋	—	—	*4.3	外面不明、内面不明	1～3mmの石・長・チャート	良	黄褐色	
254	蓋	7 i	—	*6.5	外面不明、内面不明	1～3mmの石・長・赤	良	暗褐色	
255	蓋	5 g	13.8	6	外面ハケ、内面ケズリ	1mm程度の石	良	橙褐色	
256	蓋	5 g	15.5	7.2	外面ケズリ後ナデ、内面ハケ・ケズリ	1～3mmの石・長・チャート・赤	良	橙褐色	
257	蓋	6 h	—	*5.8	外面不明、内面不明	1～3mmの石・長	良	淡褐色	
258	蓋	7 i	—	*4.7	外面不明、内面不明	1～3mmの石・長・赤	良	黄褐色	
259	蓋	5 g	14.0	7	外面ハケ後ミガキ後ケズリ、内面ケズリ	1～5mmの石・長・チャート	良	褐色	
260	蓋	7 i	—	*6.5	外面不明、内面不明	1～3mmの石・長	良	黄褐色	
261	蓋	6 h	14.5	6	外面ミガキ、内面ナデ	1～4mmの石・長・チャート	良	褐色	
262	蓋	—	15.1	5.9	外面ハケ、内面ハケ・ケズリ	1～4mmの石・長・輝	良	褐色	
263	脚台	6 h	—	*6.1	外面不明、内面不明	1～3mmの石・長	良	黄褐色	
264	脚台	5 g	—	*5.3	外面ハケ、内面ハケ	1～6mmの石・長	良	黄褐色	
265	脚台	6 h	—	*3.5	外面ナデ、内面ナデ	1～4mmの石・長・チャート	良	橙褐色	外面に煤が付着
266	脚台	5 g	—	*6.6	外面不明、内面不明	1～3mmの石・長・チャート・赤	良	淡褐色	
267	脚台	5 g	—	*3.7	外面ハケ・ミガキ、内面ハケ	1～3mmの石・長	良	淡黄褐色	橙色塗布が一部残存

268	脚台	5 g	—	*4.6	外面不明、内面ナデ	1～3mmの石・長	良	淡褐色	
269	脚台	5 g	—	*12.7	体部外面ミガキ、内面不明、脚台部外面ミガキ、内面ハケ	1～3mmの石・長・赤	良	黄褐色	橙色塗布が一部残存
270	脚台	5 g	—	*5.2	外面不明、体部内面不明、脚部内面ハケ	1～3mmの石・長	良	黄褐色	
271	脚台	6 h	—	*7.5	外面不明、内面不明	1～3mmの石・長・赤・輝	良	褐色	
272	脚台	5 g	—	*3.9	擬凹線文2状、外面ハケ、内面ケズリ	1～2mmの石・長・赤	良	淡褐色	橙色塗布が一部残存
273	脚台	—	—	*8.9	外面ナデ、内面ケズリ	1～3mmの石・長・チャート	良	灰褐色	橙色塗布が一部残存
274	脚台	6 h	—	*3.6	外面ハケ、内面ハケ	1～3mmの石・長	良	褐色	
275	脚台	5 g	—	*3.1	外面ハケ脚台部内面ナデ体部内面ケズリ	1～3mmの石・長	良	褐色	
276	底部	5 g	—	*8.7	外面ハケ、内面ハケ	1～2mmの輝を多く含む	良	淡褐色	底部に焼成前穿孔、外面に橙色塗布が一部残存
277	底部	5 g	—	*3.8	外面ミガキ、内面ケズリ	1mm程度の石・長	良	黄褐色	底部に焼成前穿孔
278	底部	5 g	—	*4.3	外面ハケ、内面ケズリ	1～3mmの石・長	良	黄褐色	底部に焼成前穿孔
279	底部	6 h	—	*4.2	外面ハケ、内面ケズリ	1～3mmの石・長	良	橙褐色	底部に焼成前穿孔
280	底部	5 g	—	*3.3	外面ハケ、内面ハケ	1mm程度の石・長・輝	良	黄褐色	底部に焼成前穿孔
281	底部	6 i	—	*6.6	外面不明、内面ケズリ	1～6mmの石・長	良	淡褐色	底部に焼成前穿孔
282	底部	5 g	—	*6.9	外面ナデ、内面ケズリ	1～3mmの石・長・チャート	良	橙褐色	
283	底部	5 g	—	*5.9	外面ハケ、内面ケズリ	1～3mmの石・長・チャート	良	橙褐色	焼成前穿孔、外面に橙色塗布が一部残存
284	底部	5 g	—	*6.1	外面ハケ、内面ケズリ	1～3mmの石・長・チャート	良	灰白色	焼成後穿孔（内→外）、底部外面に「×」の線刻
285	底部	5 g	—	*2.7	外面不明、内面不明	1mm程度の石・長	良	灰色	焼成前穿孔、底部に線刻
286	底部	5 g	—	*1.5	外面ハケ、内面ハケ底部外面ケズリ	1～4mmの石・チャート	良	褐色	
287	底部	5 g	—	*4.5	外面不明、内面ハケ	1～2mmの石・長・輝	良	暗褐色	橙色塗布が一部残存
288	底部	5 g	—	*6.2	外面ハケ、内面ケズリ底部外面ケズリ	1～2mmの石・長・チャートを多く含む	良	黄褐色	
289	底部	5 g	—	*9.4	外面ハケ、内面ケズリ底部外面ケズリ	1～3mmの石・長	良	淡橙褐色	
290	底部	5 g	—	*8.3	外面ハケ、内面ケズリ底部外面ケズリ	1～6mmの石・長・輝を多く含む	良	淡褐色	外面に煤が付着
291	底部	6 h	—	*4.6	外面ハケ、内面ケズリ	1～2mmの石・長	良	黄褐色	
292	底部	4 f	—	*8.2	外面ハケ、内面ケズリ	1～3mmの石・長・チャート	良	褐色	
293	底部	6 h	—	*5.8	外面ハケ、内面ケズリ	1～2mmの石・長	良	淡黄褐色	焼成後に穿孔を途中でやめた痕がみられる
294	底部	—	—	*8.8	外面ハケ、内面ケズリ	1～2mmの石・長を多く含む	良	褐色	
295	底部	5 h	—	*6.0	外面不明、内面ケズリ	1～3mmの石・長・チャート	良	淡橙褐色	
296	底部	5 g	—	*7.0	外面ナデ、内面ケズリ	1～4mmの輝を多く含む	良	淡凹褐色	
297	底部	5 g	—	*9.4	外面ハケ、内面ケズリ	1～2mmの石・長・チャート・輝	良	褐色	
298	底部	6 h	—	*14.1	外面ハケ、内面ケズリ	1～2mmの石・長・赤	良	黄褐色	橙色塗布が部分的に残存
299	底部	5 g	—	*4.2	外面タタキ後ハケ、内面ナデ	1～2mmの石・長・輝	良	灰白色	
300	底部	5 g	—	*6.1	外面ハケ、内面ケズリ	1mm程度の石・長	良	灰色	内面にコゲの痕

301	底部	-	-	*7.4	外面ハケ、内面ケズリ	1～3mmの石・長	良	淡黄褐色	
302	底部	6 h	-	*8.9	外面ハケ、内面ケズリ	1～5mmの石・長・チヤト	良	黄褐色	外面に橙色塗布が部分的に残存
303	底部	5 h	-	*2.5	外面不明、内面不明、	1～4mmの石・長・赤	良	淡褐色	
304	底部	6 e	-	*4.2	外面ハケ、内面ケズリ	1mm程度の石	良	黄褐色	
305	底部	6 j	-	*4.1	外面不明、内面不明	1～4mmの石・長・チヤト	良	淡橙褐色	底部外面に葉脈状の線刻
306	底部	6 h	-	*9.0	外面ナデ、内面ハケ	1～3mmの石・長・チヤト	良	淡黄褐色	外面は被熱により赤変色、底部外面に凹みが見られる

石；石 長；長 雲；雲 赤；赤色斑粒 輝；輝

第6表 N地点出土土器観察表

番号	種別	器種	法量 (単位はcm)		残存率	技法上の特徴	胎土	焼成	色調 (外面/ 内面)	備考
			口径	器高						

竪穴式住居跡 S H 31

1	土師器	高杯	16.0	*5.8	2/24	内外面ともナデか	3	良好	黄褐色	
2	土師器	高杯	15.0	*3.6	2/24	内外面ともナデ	3	良好	茶褐色	
3	土師器	甕	15.0	*4.3	5/24	内外面ともナデか	3	良好	橙褐色	
4	土師器	高杯	21.2	18.2	ほぼ 完存	杯部内外面ともナデ、脚部外面ナデ、脚部内面ケズリか	3	良好	黄褐色	脚部内面にわずかな赤色顔料付着

テラス状遺構 S H 10・11

5	須恵器	蓋A	12.2	4.0	4/24	内外面とも回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	1	堅緻	淡青灰色	焼け歪みあり
6	須恵器	蓋A	10.3	3.8	13/24	内外面とも回転ナデ、天井部ヘラ切り後不調整	4	堅緻	灰色	焼け歪みあり
7	須恵器	蓋A	15.5	3.9	8/24	内外面とも回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	1	堅緻	灰茶色	
8	須恵器	蓋B	11.8	*2.3	5/24	内外面とも回転ナデ	1	軟	灰白色	
9	須恵器	杯A	13.0	*3.8	7/24	内外面とも回転ナデ	2	堅緻	青灰色	
10	須恵器	杯A a	11.5	4.1	2/24	内外面とも回転ナデ、底部手持ちヘラケズリ	4	堅緻	灰色	
11	須恵器	杯A a	11.4	3.5	18/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ケズリ	1	堅緻	青灰色/ 濃青灰色	
12	須恵器	杯B c	8.0	3.0	7/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後不調整	3	堅緻	灰白色	全体的に摩滅気味のため調整は不明瞭
13	須恵器	杯B b	9.4	3.2	ほぼ 完存	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ起こし後不調整	2	堅緻	青灰色	
14	須恵器	杯B c	(6.5)	*2.7	6/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後不調整	1	堅緻	淡青灰色	
15	須恵器	杯B c	10.4	3.1	4/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り	4	堅緻	青灰色	
16	須恵器	杯B c	11.0	3.1	2/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後不調整	4	軟	灰色	
17	須恵器	高杯	(10.0)	*2.9	8/24	内外面とも回転ナデ	1	堅緻	濃青灰色	
18	須恵器	高杯	(12.8)	*10.2	脚部 完存	内外面とも回転ナデ、外面カキメ	3	堅緻	濃青灰色	2方向透かし
19	須恵器	蓋C a	16.6	3.2	3/24	内外面とも回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	4	堅緻	灰白色	
20	須恵器	壺か	(8.6)	*3.2	3/24	内外面とも回転ナデ、底部ケズリ後ナデ	1	堅緻	淡青灰色	
21	須恵器	杯C a	12.7	3.7	3/24	内外面とも回転ナデ、底部回転ヘラケズリ後ナデ	1	堅緻	灰色/ 淡青灰色	

22	須恵器	杯C a	13.2	3.5	2/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り	1	堅緻	灰色	
23	須恵器	杯C a	15.0	3.8	3/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り	2	堅緻	灰色／淡青灰色	
24	須恵器	杯C a	15.6	3.3	2/24	内外面とも回転ナデ	1	堅緻	濃青灰色／灰色	
25	須恵器	碗	(6.0)	*2.2	10/24	内外面とも回転ナデ、底部糸切り	2	堅緻	濃青灰色	
26	土師器	杯B	10.2	*2.9	4/24	内外面ともナデ	2	良好	橙褐色	
27	土師器	杯A	13.0	*4.2	6/24	口縁部内外面ともヨコナデ、底部ケズリ	3	良好	赤褐色	
28	土師器	杯A	13.2	*3.9	3/24	内外面ともナデ	4	軟	橙褐色	
29	土師器	杯B	11.4	*2.5	3/24	口縁部内外面とも強いヨコナデ、底部ケズリ後ナデ	2	良好	茶褐色	
30	土師器	杯A	14.7	*3.3	3/24	内外面ともナデ	1	軟	橙褐色	
31	土師器	高杯	13.5	*3.6	4/24	摩滅が著しく不明	4	良好	茶褐色	
32	土師器	小型丸底	—	*6.4	完存	内外面ともナデ、内面に指押さえ痕	4	良好	黄褐色	体部最大径10.1cm
33	土師器	杯D	(8.0)	*1.8	6/24	内外面とも回転ナデか	2	軟	灰黄色～橙褐色	
34	土師器	杯D	(10.5)	*2.2	8/24	内外面とも回転ナデか	4	軟	灰黄色	全体に摩滅が著しい
35	土師器	甕B	20.2	*5.8	5/24	口縁部内面強いヨコナデ	3	良好	黄褐色	口縁部やや焼け歪む
36	土師器	甕B	10.1	*3.4	2/24	口縁部内面強いヨコナデ	2	良好	橙褐色	
37	土師器	鉢か	10.4	*3.7	3/24	口縁部強いヨコナデ、体部内面ケズリ	2	良好	黄褐色	
38	須恵器	甕A	44.0	*13.1	5/24	口縁部内外面とも回転ナデ、体部タタキ	4	堅緻	濃青灰色	
299	土師器	竈	—	*36.2	3/24	外面ハケ、内面ナデ	3	良好	茶褐色	

竪穴式住居跡 S H08・09

39	須恵器	蓋A	10.4	*3.4	6/24	内外面とも回転ナデ	1	堅緻	灰色	内面に焼成時の付着物あり
40	須恵器	蓋A	12.6	*2.8	2/24	内外面とも回転ナデ	1	堅緻	灰色	
41	須恵器	蓋A	12.5	4.1	12/24	内外面とも回転ナデ、天井部ヘラ切り	4	堅緻	青灰色／灰色	
42	須恵器	蓋A	12.8	4.4	13/24	内外面とも回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	1	堅緻	灰色	
43	須恵器	杯A a	9.9	3.5	2/24	内外面とも回転ナデ、底部回転ヘラケズリか	4	堅緻	灰色	
44	須恵器	杯A	9.6	*2.9	3/24	内外面とも回転ナデ	2	堅緻	灰色	
45	須恵器	杯A	12.8	*2.5	1/24	内外面とも回転ナデ	2	堅緻	灰色	
46	須恵器	杯A a	13.1	3.7	5/24	内外面とも回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	4	堅緻	灰色	
47	土師器	杯B	11.8	*2.8	3/24	内外面ともナデか	3	良好	橙褐色	
48	土師器	甕A	15.6	*3.5	4/24	口縁部内外面ともナデ、体部内面ハケ	2	良好	赤褐色／暗茶褐色	
49	土師器	甕A	18.3	*9.6	7/24	口縁部内外面ともナデ、体部内面ケズリ	2	良好	黄褐色	
50	土師器	甕B	20.2	*6.2	12/24	口縁部内外面強いヨコナデ	2	良好	橙褐色	
51	土師器	甕A	23.4	*10.5	4/24	口縁部内外面ともナデ、体部外面ハケ	2	良好	橙褐色	
52	土師器	壺	12.4	*8.4	12/24	口縁部内外面ともナデ、体部外面ハケ、体部内面ケズリ	4	良好	黄褐色	
53	土師器	竈	—	*15.2	—	内外面ともナデ	2	良好	橙褐色	

竪穴式住居跡 S H15

54	須恵器	蓋A	12.8	3.8	13/24	内外面とも回転ナデ、天井部ヘラ切り後ナデか	2	良好	灰白色／黄灰色	
----	-----	----	------	-----	-------	-----------------------	---	----	---------	--

55	須恵器	杯A	11.3	4.3	3/24	内外面とも回転ナデ	1	堅緻	灰白色	
56	須恵器	杯A	11.6	3.6	8/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	2	堅緻	灰色	
57	土師器	杯A	10.9	4.3	ほぼ 完存	口縁部外面強いヨコナデ、底部ケズリか	2	軟	黄灰色/ 黄褐色	口縁が不正円のため 最大値は11.3cm
58	土師器	杯A	12.4	3.9	5/24	内外面ともナデ、底部ケズリか	2	良好	黄灰色	
59	土師器	杯A	12.9	4.6	13/24	口縁部外面強いヨコナデ、底部ケズリ	3	良好	茶褐色	
60	土師器	甕A	14.8	12.8	21/24	口縁部内外面ともナデ、体部外面ハケ、体部 内面ケズリ	3	良好	赤褐色	
61	土師器	甕A/ 甕B	15.0	*10.0	口縁部 完存	口縁部内外面ともナデ、体部外面ハケ、体部 内面ケズリ	3	良好	茶褐色	
62	土師器	甕A/ 甕B	18.6	*6.4	10/24	口縁部内外面ともナデ、体部外面ハケ、体部 内面ケズリ	3	良好	橙褐色	
63	土師器	甕A/ 甕B	21.0	*7.4	12/24	口縁部内外面ともナデ、体部外面ハケ、体部 内面ケズリ	2	良好	黄褐色	

土坑SH21

64	須恵器	蓋B	8.1	*2.5	7/24	内外面とも回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ 後ナデ	2	堅緻	灰色	
65	須恵器	蓋B	8.2	*1.7	8/24	内外面とも回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	2	堅緻	濃青灰色	
66	須恵器	杯B a	10.0	3.3	3/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ起こし後ナデ	3	堅緻	濃青灰色 /淡青灰 色	
67	須恵器	杯B a	10.4	3.7	3/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	2	堅緻	灰色	外面底部粘土附着
68	須恵器	杯B a	10.8	4.0	6/24	内外面とも回転ナデ、ヘラ起こし後ナデ	2	堅緻	灰色	
69	須恵器	杯B a	11.4	*2.4	4/24	内外面とも回転ナデ	2	堅緻	灰色	外面に沈線状の凹 線が1条ある
70	須恵器	甕	11.0	*2.5	2/24	内外面とも回転ナデか	2	軟	灰白色	
71	須恵器	甕	-	*3.0	9/24	内外面とも回転ナデ	3	堅緻	濃青灰色 /淡青灰 色	
72	土師器	杯B	11.2	*3.0	4/24	内外面ともナデ、口縁部外面に強いヨコナデ	2	良好	茶褐色	
73	土師器	杯A	13.2	*3.4	3/24	内外面ともナデ、口縁部外面に強いヨコナデ	2	良好	橙褐色	
74	土師器	甕	20.8	*5.5	5/24	内外面ともナデ	3	良好	黄褐色	
75	土師器	甕B	30.8	*6.6	6/24	口縁部内外面ともナデ、体部外面ハケ	2	良好	黄褐色	
76	土師器	甕B	23.2	*5.2	1/24	口縁部内外面とも強いヨコナデ、体部外面ハ ケ	3	良好	茶褐色/ 黄褐色	

竪穴式住居跡SH12

77	須恵器	蓋B	11.0	*1.6	2/24	内外面とも回転ナデ	2	堅緻	灰白色	
78	須恵器	蓋	15.1	*2.1	10/24	内外面とも回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	2	堅緻	青灰色	
79	須恵器	杯B b	9.8	3.2	12/24	内外面とも回転ナデ	2	堅緻	灰色/ 灰白色	
80	須恵器	杯B b	11.8	3.4	12/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	2	堅緻	淡青灰色	
81	須恵器	杯C a	13.1	4.9	3/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ヘラケ ズリ	1	堅緻	灰色	
82	土師器	杯B	9.7	2.1	3/24	内外面ともナデか	4	良好	橙褐色	
83	土師器	杯B	9.6	*2.3	2/24	内外面ともナデ、底部指押さえか	2	良好	茶褐色	
84	土師器	杯B	11.8	*2.4	4/24	内外面ともナデか	3	良好	橙褐色	
85	土師器	皿A b	16.2	3.5	13/24	口縁部外面強いナデ、底部不定方向のケズリ	3	良好	茶褐色	
86	土師器	皿A a	17.5	*3.5	4/24	内外面ともナデ	3	良好	黄褐色～ 橙褐色	
87	土師器	甕A	19.0	*5.4	12/24	内外面ともナデ、体部内面ケズリか	3	良好	橙褐色	全体に摩滅が著し い

88	土師器	鍋A	33.6	*6.3	3/24	口縁部内外面ナデ、体部外面ハケ、体部内面ケズリ	3	良好	橙褐色	
----	-----	----	------	------	------	-------------------------	---	----	-----	--

竪穴式住居跡 S H01

89	土師器	杯B	12.0	*2.8	小片	内外面ともナデもしくはミガキ	2	良好	黄灰色	
90	土師器	壺	15.2	*5.1	7/24	内外面ともナデ、頸部外面指押さえ痕	3	良好	橙褐色	頸部外面に工具痕か
91	土師器	甕B	17.9	*6.0	12/24	口縁部内面強いヨコナデ、体部外面ハケ	3	良好	橙褐色	
92	土師器	甕B	24.6	*4.0	2/24	口縁部内外面強いヨコナデ、体部外面ハケ	3	良好	橙褐色	

竪穴式住居跡 S H07

93	須恵器	高杯	15.4	*4.2	4/24	内外面とも回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	2	堅緻	灰褐色	
94	土師器	杯A	16.0	*4.5	4/24	内外面ともナデか	2	良好	茶褐色	
95	土師器	皿A	19.0	*2.8	2/24	内外面ともナデか	3	良好	橙褐色	
96	土師器	甕B	36.0	*6.7	2/24	口縁部内面強いヨコナデ、体部外面ナデか、体部内面ケズリか	3	良好	黄褐色	

テラス状遺構 S H13

97	須恵器	蓋B	9.8	*1.9	5/24	内外面とも回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	2	堅緻	灰白色	
98	須恵器	蓋B	10.4	*2.2	3/24	内外面とも回転ナデ	2	堅緻	灰白色	
99	須恵器	蓋B	12.2	*1.4	10/24	内外面とも回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	4	堅緻	灰色	
100	須恵器	蓋C a	15.5	2.6	4/24	内外面とも回転ナデ、天井部ヘラ切り後回転ヘラケズリ	2	堅緻	濃青灰色	
101	須恵器	杯B a	11.0	3.1	2/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ起こし後ナデ	2	堅緻	淡青灰色	
102	須恵器	杯B a	11.2	3.0	10/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ起こし後ナデ	3	堅緻	灰白色	
103	須恵器	杯B a	11.2	2.9	5/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ起こし後ナデ	2	堅緻	濃青灰色	
104	須恵器	杯B b	10.8	3.6	4/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後不調整	3	堅緻	灰色	
105	須恵器	杯B b	12.4	*3.7	7/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ起こし後ナデ	4	堅緻	灰色	
106	須恵器	杯B b	12.6	*3.9	6/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	3	堅緻	灰色	
107	須恵器	杯B b	15.2	4.2	2/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	2	堅緻	灰色	
108	須恵器	杯C a	12.9	4.4	3/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	2	堅緻	淡青灰色	
109	須恵器	杯C a	14.6	4.4	5/24	内外面とも回転ナデ、ヘラ切り後ナデ	2	堅緻	灰白色	
110	須恵器	杯C a	17.1	4.1	8/24	内外面とも回転ナデ、	4	堅緻	灰色	
111	須恵器	杯C a	19.4	4.2	2/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	2	堅緻	灰白色	
112	須恵器	壺	8.4	*3.8	5/24	内外面とも回転ナデ	2	堅緻	灰色	
113	須恵器	壺	8.9	*4.7	4/24	内外面とも回転ナデ	3	堅緻	青灰色	
114	須恵器	甕	—	*8.2	—	外面回転ナデ、底部手持ちヘラケズリ	2	堅緻	灰色	
115	須恵器	小型壺か	3.8	*3.7	小片	内外面とも回転ナデ	3	堅緻	灰色	
116	土師器	杯A	10.8	*3.8	4/24	口縁部外面強いヨコナデ、底部ケズリか	3	良好	黄褐色	
117	土師器	杯A	11.2	*3.0	2/24	内外面ともナデ	3	良好	橙褐色	
118	土師器	杯A	13.4	*5.5	3/24	内外面ともナデ	3	良好	橙褐色	
119	土師器	碗A	11.0	*2.4	2/24	内外面ともナデか	2	良好	橙褐色	
120	土師器	碗A	11.6	*2.7	3/24	内外面ともナデ	3	良好	黄褐色	
121	土師器	杯B	15.7	*3.3	3/24	内外面ともナデ	2	良好	橙褐色	
122	土師器	皿B	12.5	*2.9	4/24	内外面ともナデ	3	良好	茶褐色	
123	土師器	皿A b	15.7	*3.0	3/24	内外面ともナデ、底部ケズリか	3	良好	茶褐色	

124	土師器	皿B	16.0	*3.4	1/24	摩滅が著しく調整不明	2	良好	橙褐色	
125	土師器	皿B	18.4	*2.7	3/24	内外面ともナデ、口縁部強いヨコナデ	2	良好	茶褐色	
126	土師器	甕B	18.0	*4.3	7/24	口縁部内面強いヨコナデ	3	良好	黄褐色	
127	土師器	甕B	21.2	*5.0	2/24	口縁部内面強いヨコナデ、体部内面ケズリか	4	良好	橙褐色	
128	土師器	甕B	18.2	*5.5	6/24	口縁部内面強いヨコナデ、体部内面ケズリ	3	良好	黄褐色	
129	土師器	甕	23.6	*14.8	11/24	体部外面ハケ、内外面とも指押さえ痕	4	良好	橙褐色	

土坑 S K 02

130	須恵器	蓋	—	*2.3	—	内外面とも回転ナデ、天井部はヘラ切り後ナデ	4	堅緻	灰色	
131	須恵器	蓋	17.6	*1.6	4/24	内外面とも回転ナデ、天井部ヘラ切り後回転ナデ	2	堅緻	灰色	
132	須恵器	蓋	17.8	*2.0	2/24	内外面とも回転ナデ、天井部ヘラ切り後ナデ	4	堅緻	淡青灰色	
133	須恵器	杯B b	9.0	3.2	ほぼ完存	内外面とも回転ナデ	2	堅緻	濃青灰色	
134	土師器	杯C	12.0	*2.4	11/24	内外面ともナデか	2	良好	橙褐色	
135	土師器	杯C	16.4	*3.6	3/24	内外面ともナデ	2	良好	茶褐色	
136	土師器	椀A	11.0	*3.5	3/24	内外面ともナデ、口縁部外面に強いヨコナデ	2	良好	橙褐色	
137	土師器	杯B	10.0	*2.7	4/24	内外面ともナデ	3	良好	茶褐色／暗茶褐色	
138	土師器	甕B	14.4	*5.0	1/24	口縁部内面強いヨコナデ、体部内面ケズリ	2	良好	黄褐色～橙褐色	
139	土師器	甕B	12.8	*6.0	5/24	口縁部内面強いヨコナデ、体部内面ケズリ	3	良好	黄褐色	

テラス状遺構 S H 19

140	須恵器	蓋A	10.3	3.9	4/24	内外面とも回転ナデ、天井部ヘラ切り	2	堅緻	灰色	
141	須恵器	蓋B	12.0	*1.8	7/24	内外面とも回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	3	堅緻	灰色	
142	須恵器	蓋B	14.1	*1.7	3/24	内外面とも回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	4	堅緻	灰色	
143	須恵器	蓋C b	15.2	2.1	3/24	内外面とも回転ナデ、天井部ヘラ切り後ナデ	2	堅緻	灰色	
144	須恵器	蓋C a	15.5	2.5	ほぼ完存	内外面とも回転ナデ、天井部ヘラ切り後ナデ	4	堅緻	灰色	つまみは中心よりずれる、歪み著しい
145	須恵器	蓋C a	15.8	2.9	2/24	内外面とも回転ナデ、天井部ヘラ切り後ナデ	3	堅緻	灰色	
146	須恵器	蓋	10.4	2.7	4/24	内外面とも回転ナデ、天井部ヘラ切り後ナデ	2	堅緻	濃青灰色／灰色	天井部外面に粘土付着
147	須恵器	杯B	10.3	3.5	4/24	内外面とも回転ナデ、天井部ヘラ切り後ナデ	2	堅緻	灰色	
148	須恵器	杯C	(10.2)	*3.3	4/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り	3	堅緻	淡青灰色／青灰色	
149	須恵器	杯C	(10.1)	*3.1	4/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	2	堅緻	灰白色	
150	須恵器	杯C a	16.8	5.0	5/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	2	堅緻	灰色	
151	須恵器	壺	14.0	*4.5	5/24	内外面とも回転ナデ	2	堅緻	灰色	口縁部に別の土器片付着
152	須恵器	高杯	(9.6)	*5.9	15/24	内外面とも回転ナデか	2	堅緻	灰白色	
153	須恵器	練り鉢	20.4	*9.5	3/24	内外面とも回転ナデ	2	堅緻	濃青灰色	外面タタキ痕跡は確認できない
154	須恵器	練り鉢	(7.8)	*4.5	6/24	内外面とも回転ナデ、底部手持ちヘラケズリ	2	堅緻	濃青灰色	
155	土師器	杯A	12.0	*3.0	3/24	内外面ともナデ、口縁部内外面とも強いヨコナデ	3	良好	橙褐色	
156	土師器	杯A	12.5	*3.0	3/24	内外面ともナデ、口縁部内外面とも強いヨコナデ	3	良好	橙褐色	内面に暗文あり

157	土師器	杯A	15.4	5.4	13/24	内外面ともナデ	3	良好	茶褐色	口縁歪みあり
158	土師器	杯B	12.0	*3.3	4/24	内外面ともナデ、口縁部内外面強いヨコナデ	2	良好	橙褐色	
159	土師器	杯B	13.2	*3.2	2/24	内外面ともナデ、口縁部内外面ともやや強いヨコナデ、	2	良好	橙褐色	
160	土師器	杯B	12.2	3.0	13/24	内外面ともナデ	3	良好	橙褐色	
161	土師器	皿B	16.0	2.7	3/24	口縁部内外面ともヨコナデ、底部ケズリ	2	良好	黄褐色	口縁焼け歪みあり
162	土師器	甕A	23.8	*5.2	19/24	口縁部内外面ともナデ、体部内面ケズリ後ナデ	3	良好	橙褐色	
163	土師器	甕B	23.6	*6.8	5/24	口縁部内外面ともナデ、体部外面ハケ、体部内面ケズリ	3	良好	茶褐色	
164	土師器	甕B	26.3	*8.4	2/24	口縁部内外面ともナデ、体部外面ハケ、体部内面ケズリ	2	良好	茶褐色	
165	土師器	甕B	16.2	*7.8	5/24	口縁部内外面ともナデ、体部外面ハケか、体部内面ケズリ	3	良好	茶褐色	
166	土師器	甕B	13.8	*4.8	4/24	口縁部内外面ともナデ、体部外面ハケ、体部内面ケズリ後ナデ	3	良好	橙褐色／ 暗茶褐色	
167	土師器	鍋C	40.0	*6.8	2/24	口縁部外面ヨコナデ、口縁部内面ヨコハケ、体部外面ハケ、体部内面ナデ	3	良好	橙褐色～ 黄褐色	
168	土師器	鍋C	49.0	*7.5	2/24	口縁部外面ヨコナデ、口縁部内面ヨコハケ、体部内外面ナデ	3	良好	黄褐色	

溝S D 02

169	須恵器	蓋B	12.4	3.6	2/24	内外面とも回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	2	堅緻	灰白色	
170	須恵器	鉢か	18.2	6.8	5/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラケズリ	2	堅緻	淡青灰色	外面沈線1条
171	須恵器	小型壺	6.3	*4.3	5/24	内外面とも回転ナデ	2	堅緻	濃青灰色	
172	土師器	杯B	13.0	*3.3	3/24	口縁内外面ともナデ、部外面やや強めのヨコナデ	2	良好	橙褐色	内外面に赤色顔料塗布か

テラス状遺構 S H06

173	須恵器	杯C	(12.5)	*1.6	2/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後回転ナデ	2	堅緻	淡青灰色	
-----	-----	----	--------	------	------	-----------------------	---	----	------	--

テラス状遺構 S H22

174	須恵器	蓋C a	13	3.8	5/24	内外面とも回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ後回転ナデ	2	堅緻	灰色	
175	須恵器	蓋	16.0	—	1/24	内外面とも回転ナデ、天井部ヘラ切り	2	堅緻	灰色	
176	須恵器	蓋F	—	—	5/24	内外面とも回転ナデ	4	堅緻	灰色	
177	須恵器	杯Bか	—	—	5/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	2	堅緻	灰色	口縁端部欠損
178	須恵器	杯B b	12.5	3.7	6/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後不調整	3	堅緻	濃青灰色	
179	須恵器	杯B c	12.4	3.6	ほぼ 完存	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	4	堅緻	灰色	底部に+のヘラ記号あり
180	須恵器	杯B c	12.8	3.1	3/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	2	堅緻	灰色	
181	須恵器	杯B c	12.8	3.6	6/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	2	堅緻	灰白色	
182	須恵器	杯C a	15.8	4.2	2/24	内外面とも回転ナデ	2	堅緻	灰色	
183	須恵器	杯C a	14.0	4.0	7/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後不調整	3	堅緻	灰色	
184	須恵器	杯C a	13.0	3.6	4/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	2	堅緻	淡青灰色	
185	須恵器	碗B	16.1	*4.1	2/24	内外面とも回転ナデ	3	堅緻	灰色	口縁部内面に沈線を意識したナデ
186	須恵器	壺	(10.2)	*15.8	体部 完存	内外面とも回転ナデ、体部外面下半回転ヘラケズリ、底部回転ヘラケズリ	4	堅緻	青灰色	
187	須恵器	壺	18.8	*2.4	2/24	口縁部内外面とも回転ナデ	2	堅緻	灰色	口縁部外面に波状文あり
188	土師器	皿B	13.7	2.3	2/24	内外面ともナデ、口縁部外面強いヨコナデ	3	良好	黄褐色	外面に赤色顔料を塗布か

観 察 表

189	土師器	杯C	16.6	*3.2	1/24	内外面ともナデ	2	良好	黄褐色-橙褐色	内外面とも赤色顔料を塗布か
190	土師器	杯C	16.6	3.3	6/24	内外面ともナデ、口縁部外面強いヨコナデ	3	良好	黄褐色	
191	土師器	杯A	11.6	*3.4	5/24	口縁部内外面とも強めのヨコナデ、体部外面ケズリ	3	良好	橙褐色	
192	土師器	杯A	12.8	*3.3	4/24	口縁部内外面とも強めのヨコナデ、体部外面・底部ケズリ後ナデ	3	良好	橙褐色／黄褐色	
193	土師器	杯A	16.8	*3.7	4/24	内外面ともナデ、口縁部内外面とも強いヨコナデ	3	良好	橙褐色	
194	土師器	甕B	18.0	5.3	1/24	口縁部強いヨコナデ、体部外面ハケ、体部内面ケズリ後ナデ	4	良好	茶褐色	
195	土師器	甕A	18.0	*4.0	3/24	口縁部ヨコナデ、ヨコナデ、体部外面ハケ、体部内面ケズリ後ナデ	2	良好	橙褐色	
196	土師器	甕A	*17.8	*5.09	6/24	口縁部外面ハケ後ナデ、口縁部内面・体部外面ハケ、体部内面ケズリ後ナデか	4	良好	橙褐色	

テラス状遺構SH14

197	須恵器	蓋B	11.0	*1.8	3/24	内外面とも回転ナデ	2	堅緻	淡青灰色	焼け歪みあり
198	須恵器	蓋C a	13.0	2.9	6/24	内外面とも回転ナデ、天井部ヘラ切り後回転ナデ	2	堅緻	灰色	
199	須恵器	蓋C a	14.5	2.4	6/24	内外面とも回転ナデ、天井部ヘラ切り後回転ナデ	2	堅緻	灰色	
200	須恵器	蓋C a	13.8	2.9	3/24	内外面とも回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	2	堅緻	灰色	
201	須恵器	蓋C a	15.9	1.7	3/24	内外面とも回転ナデ、天井部ヘラ切り後回転ナデ	2	堅緻	灰色	
202	須恵器	蓋C a	16.2	2.6	4/24	内外面とも回転ナデ、天井部ヘラ切り後回転ナデ	3	堅緻	灰色	
203	須恵器	蓋C a	16.5	2.9	8/24	内外面とも回転ナデ、天井部ヘラ切り後ナデ	2	堅緻	灰色	
204	須恵器	蓋	13.6	*1.4	4/24	内外面とも回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ後回転ナデ	2	堅緻	青灰色	
205	須恵器	蓋	15.8	*1.7	4/24	内外面とも回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	3	堅緻	灰色	
206	須恵器	蓋	16.3	*2.2	7/24	内外面とも回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ後回転ナデか	4	堅緻	灰白色	
207	須恵器	蓋	19.2	*1.3	7/24	内外面とも回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	2	堅緻	灰～青灰色	
208	須恵器	蓋	19.4	*1.7	3/24	内外面とも回転ナデ、天井部ヘラ切り後回転ナデ	2	堅緻	灰色	
209	須恵器	杯B b	9.0	3.4	3/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ起こし後不調整	3	堅緻	青灰色／灰色	
210	須恵器	杯B b	—	*2.0	13/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ起こし後不調整	3	堅緻	灰色	
211	須恵器	杯B b	11.6	3.8	8/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後不調整	2	堅緻	灰色	
212	須恵器	杯B c	12.0	3.7	10/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	4	堅緻	灰色	
213	須恵器	杯B c	12.4	3.8	11/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	2	堅緻	灰色	
214	須恵器	杯B c	13.0	3.9	14/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	3	堅緻	灰色	
215	須恵器	杯B c	13.0	3.8	4/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	4	堅緻	灰色	底部に未乾燥時に板状のものに置いた痕がある
216	須恵器	高杯B	(7.6)	*4.7	6/24	内画面とも回転ナデ	3	堅緻	淡青灰色	外面刻み11条
217	須恵器	皿A	14.7	*2.0	4/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	3	堅緻	淡青灰色	
218	須恵器	椀か	17.8	*2.5	2/24	内外面ともナデか	2	堅緻	灰～青灰色	
219	須恵器	杯C a	11.2	4.0	1/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデか	2	堅緻	灰色	
220	須恵器	杯C a	12.9	4.2	3/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後不調整	4	堅緻	灰色	著しく焼け歪む

221	須恵器	杯C a	14.6	3.5	4/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	3	堅緻	灰色	
222	須恵器	杯C a	15.5	4.0	5/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後回転ナデか	4	堅緻	灰色	
223	須恵器	杯C a	15.5	3.8	5/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切りか	2	堅緻	灰色	
224	須恵器	杯C a	15.6	3.5	4/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後不調整か	2	堅緻	灰白色	高台が全体的に内傾
225	須恵器	杯C a	15.2	3.9	4/24	内外面とも回転ナデ、体部下半・底部回転ヘラケズリ後回転ナデ	4	堅緻	青灰色	
226	須恵器	杯C a	15.8	4.2	9/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後不調整	2	堅緻	青灰色	
227	須恵器	杯C a	15.7	4.7	6/24	内外面とも回転ナデか、底部ヘラ切り後不調整か	2	堅緻	灰白色	若干焼け歪む
228	須恵器	碗Aか	14.8	*2.3	4/24	内外面とも回転ナデ	2	堅緻	灰色	口縁部内面に沈線が1条めぐる
229	須恵器	碗Aか	15.4	*3.0	5/24	内外面とも回転ナデ	2	堅緻	灰色	
230	須恵器	碗Aか	17.0	*5.3	6/24	内外面とも回転ナデ、体部下半回転ケズリ後回転ナデか	3	堅緻	濃青灰色	
231	須恵器	皿C	(10.1)	*3.1	3/24	内外面とも回転ナデ	2	堅緻	青灰色	
232	須恵器	皿C	(10.0)	*2.4	6/24	内外面とも回転ナデ	2	堅緻	灰色	
233	須恵器	皿C	(9.6)	*2.4	5/24	内外面とも回転ナデ	2	堅緻	灰色／濃青灰色	
234	須恵器	碗C	(6.2)	*4.5	18/24	内外面とも回転ナデ、底部糸切り	2	堅緻	灰白色	見込みが凹む
235	須恵器	甕A	22.6	*9.5	6/24	内外面とも回転ナデ体部外面に平行タタキ、体部内面に当て具痕あり	3	堅緻	灰色	口縁部ヘラ状のもので掻き上げ痕あり
236	須恵器	甕A	32.6	*8.5	3/24	口縁部内外面とも回転ナデ、内面に当て具痕あり	3	堅緻	濃青灰色	
237	土師器	杯B	11.6	*2.6	2/24	内外面ともナデ	2	良好	橙褐色	
238	土師器	杯C	12.0	*3.1	2/24	内外面ともナデ、口縁部外面ヨコナデ	3	良好	橙褐色	
239	土師器	杯B	12.0	*2.3	2/24	内外面ともナデ	3	良好	橙褐色	
240	土師器	杯C	12.0	*3.0	3/24	内外面ともナデ、口縁部外面強めのナデ	3	良好	橙褐色	
241	土師器	杯C	10.2	2.3	6/24	内外面ともナデ	3	良好	橙褐色	
242	土師器	杯B	13.0	*3.1	3/24	内外面ともナデ	3	良好	橙褐色	
243	土師器	皿B	14.0	*2.7	2/24	内外面ともナデ、口縁部外面強いヨコナデ	3	良好	橙褐色	口縁歪みが大きい
244	土師器	皿B	14.0	*2.8	2/24	内外面ともナデ、口縁部外面にやや強いヨコナデ	3	良好	橙褐色	
245	土師器	皿B	14.0	*3.1	4/24	内外面ともナデ、口縁部外面強めのヨコナデ	3	良好	橙褐色	
246	土師器	皿B	14.0	*2.5	8/24	内外面ともナデ、口縁部外面強めのヨコナデ	4	良好	橙褐色	
247	土師器	皿B	14.0	*3.0	5/24	内外面ともナデ	3	良好	橙褐色	
248	土師器	皿B	15.5	*2.8	4/24	内外面ともナデ	2	良好	橙褐色	
249	土師器	杯C	(9.8)	*2.1	21/24	内外面とも回転ナデか、底部ヘラ切り	2	良好	黄灰色	
250	土師器	甕B	12.4	*4.4	4/24	口縁部内外面・体部外面ナデ、体部内面ケズリ	3	良好	橙褐色／暗茶褐色	
251	土師器	甕A	15.7	*4.6	3/24	口縁部内外面・体部外面ナデ、体部内面ケズリ	3	良好	橙褐色	
252	土師器	甕Cか	18.3	*5.4	2/24	口縁部内外面ナデ、体部外面ハケ、体部内面ケズリ	3	良好	橙褐色	形状そのものに歪みが認められる
253	土師器	甕B	22.4	*5.1	2/24	口縁部内外面・体部外面ナデ、体部内面ケズリ	3	良好	茶褐色	
254	土師器	甕B	25.4	*6.7	5/24	口縁部内外面・体部外面ナデ、体部内面ケズリ	3	良好	茶褐色～橙褐色	
255	土師器	甕B	32.6	*6.3	2/24	口縁部内外面・体部外面ナデ、体部内面ケズリ	4	良好	黄褐色～橙褐色	

256	土師器	甌	20.9	*12.1	5/24	口縁部内外面・体部外面ナデ、体部内面ケズリ後ナデか	3	良好	黄褐色／ 橙褐色	
257	土師器	鍋A	—	*6.2	小片	口縁部内外面ナデ、体部外面ハケ、体部内面ケズリか	3	良好	黄褐色	

テラス状遺構 S H20

258	須恵器	蓋C	16.8	2.4	1/24	内外面とも回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	3	堅緻	灰色	
259	須恵器	蓋	16.0	*1.7	2/24	内外面とも回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	2	堅緻	青灰色	
260	須恵器	杯C a	11.8	3.3	2/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り	2	堅緻	青灰色	
261	須恵器	杯C a	13.0	3.4	3/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り	2	堅緻	青灰色	
262	須恵器	杯C a	12.8	4.7	1/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切りか	3	堅緻	灰白色	
263	須恵器	杯C a	12.8	4.4	3/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り	2	堅緻	灰色	外面に工具の当たり痕が目立つ
264	須恵器	杯C a	13.4	4.3	1/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り	3	堅緻	灰色	
265	須恵器	杯C a	14.0	4.2	7/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	3	堅緻	青灰色／ 灰色	
266	須恵器	杯C a	15.2	3.9	1/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り	2	堅緻	灰色	
267	須恵器	杯B c	12.5	2.8	2/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	2	堅緻	灰色	
268	須恵器	杯B c	13.5	3.2	3/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り	2	堅緻	灰色	内外面火だすきあり
269	須恵器	碗Aか	15.0	*4.0	3/24	内外面とも回転ナデ	2	堅緻	灰色	
270	須恵器	碗Aか	16.4	*4.3	6/24	内外面とも回転ナデ	2	堅緻	灰色	
271	須恵器	長頸壺	10.0	*6.1	4/24	内外面とも回転ナデ	2	堅緻	灰色	
272	須恵器	長頸壺	11.0	*6.6	7/24	内外面とも回転ナデ	2	堅緻	灰色	焼け歪み大きい
273	須恵器	長頸壺	12.0	*5.8	3/24	内外面とも回転ナデ	3	堅緻	灰色	
274	須恵器	碗B	17.4	5.8	3/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切りか	3	堅緻	灰色	口縁部内面に沈線が1条めぐる
275	須恵器	杯B b	11.6	4.2	5/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後不調整か	4	堅緻	灰色	
276	須恵器	杯B b	13.8	*3.5	3/24	内外面とも回転ナデ	2	堅緻	灰色	
277	須恵器	甕B	17.6	*4.8	4/24	内外面とも回転ナデ	4	堅緻	灰色	焼成前に器表面を舐る
278	須恵器	甕A	22.8	*5.4	6/24	内外面とも回転ナデ	3	堅緻	灰色	
279	土師器	皿B	13.6	*2.7	4/24	内外面ともナデ、口縁部内外面ともヨコナデ	3	良好	黄褐色	
280	土師器	皿B	14.0	*2.9	5/24	内外面ともナデ	2	良好	橙褐色	
281	土師器	皿B	15.1	*3.1	2/24	口縁部外面強めナデ、内面ミガキか	2	良好	橙褐色	
282	土師器	皿B	14.8	*2.6	2/24	内外面ともナデ	3	良好	黄褐色	外面に赤色顔料塗布
283	土師器	杯B	10.4	*2.5	3/24	内外面ともナデ、口縁部外面強いヨコナデ、	2	良好	橙褐色	
284	土師器	杯A	14.2	*4.1	1/24	口縁部外面強いヨコナデ、内面ナデ	3	良好	茶褐色	
285	土師器	甕B	23.8	*6.5	2/24	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ハケ、体部内面ケズリ	3	良好	橙褐色	
287	土師器	鍋B	35.8	*6.6	5/24	内外面とも強いヨコナデ	3	良好	黄褐色／ 橙褐色	
286	土師器	甌	25.4	*11.0	2/24	内外面ともナデ、内面ケズリか	3	良好	茶褐色	

テラス状遺構 S H23

288	須恵器	蓋	15.0	*1.0	2/24	内外面とも回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	2	堅緻	灰色	
289	須恵器	蓋	16.8	*1.5	3/24	内外面とも回転ナデ	3	堅緻	灰色	

290	須恵器	皿A	16.0	*2.0	2/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	2	堅緻	灰色	
291	須恵器	杯C	(9.0)	*2.6	9/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	2	堅緻	灰色	
292	須恵器	杯C a	14.7	4.0	1/24	内外面とも回転ナデ	2	堅緻	灰色	
293	須恵器	杯B c	14.2	3.3	1/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	2	堅緻	灰色	
294	須恵器	杯B c	14.9	*3.2	2/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	2	堅緻	灰色	
295	須恵器	碗B	—	*4.0	1/24	内外面とも回転ナデ	2	堅緻	灰色	口縁部内面に沈線1条あり
296	土師器	杯B	12.9	*2.5	3/24	内外面ともナデ、口縁部内外面にやや強めのナデ	3	良好	黄褐色	
297	土師器	壺	18.4	*5.7	2/24	口縁部強いヨコナデ、体部外面ハケ後ナデ、体部内面ケズリ後ナデか	3	良好	茶褐色	
298	土師器	鍋A	39.2	*7.5	3/24	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ、体部内面ケズリ	3	良好	黄褐色	

第7表 B地点出土土器観察表

番号	種別	器種	法量		残存率	技法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
			口径	器高						

テラス状遺構SH01

1	須恵器	杯A	10.3	3.1	15/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	2	堅緻	青灰色／灰色	
2	須恵器	杯B	9.7	4.3	ほぼ完存	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	2	堅緻	灰白色	口縁に焼けひずみ
3	須恵器	杯B	9.7	3.6	15/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデか	3	堅緻	青灰色	
4	須恵器	碗	(5.0)	*1.9	10/24	内外面とも回転ナデ、底部糸切り	2	堅緻	濃青灰色	
5	土師器	甕B	16.6	*3.0	2/24	内画面ともヨコナデ	3	良好	黄褐色	
6	土師器	甕C	21.0	*6.0	5/24	口縁部内外面ナデ、体部外面ハケ、体部内面ケズリ後ナデ	4	良好	橙褐色	

テラス状遺構SH02

7	須恵器	蓋C a	16.4	3.1	完形	内外面とも回転ナデ、天井部ヘラ切り後ナデ	4	堅緻	灰色	若干焼けひずみ
8	須恵器	杯C	(8.8)	*2.3	5/24	内外面とも回転ナデ	2	堅緻	灰色	
9	土師器	杯B	—	*3.1	2/24	内外面ともナデ	2	良好	橙褐色	
10	土師器	杯A	16.0	*3.5	3/24	内外面ともナデか	2	良好	橙褐色	
11	土師器	杯C	10.6	*2.9	2/24	内外面ともナデ	2	良好	橙褐色	
12	土師器	皿B	12.0	*2.2	3/24	内外面ともナデか	2	良好	橙褐色	
13	土師器	皿B	13.6	2.4	5/24	内外面ともナデ、底部ユビオサエ後ナデ	2	良好	橙褐色	
14	土師器	甕	—	*6.1	—	内外面ともハケ後ナデ	3	良好	茶褐色	

テラス状遺構SH03

15	須恵器	蓋	—	*2.0	—	内外面とも回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	2	堅緻	灰色	
16	須恵器	杯B	12.8	3.9	2/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後未調整	2	堅緻	灰色	
17	須恵器	杯	15.6	*3.2	3/24	内外面とも回転ナデ	2	堅緻	灰褐色／灰色	高杯の杯部の可能性あり
18	須恵器	杯B	—	*2.3	9/24	内外面とも回転ナデ	2	堅緻	灰褐色	底部にハケ状の痕跡あり、糸切りか
19	須恵器	杯	12.6	*2.4	7/24	内外面とも回転ナデ	3	堅緻	灰褐色	焼けひずみあり
20	須恵器	杯C	13.3	*3.0	3/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	2	堅緻	灰色	高台欠損

21	須恵器	杯C	13.6	4.0	2/24	内外面とも回転ナデ、底部回転ヘラ切り後回転ナデ	2	堅緻	灰褐色	
22	須恵器	杯C	(8.4)	*2.0	2/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	2	堅緻	灰褐色/ 灰色	
23	土師器	皿B	11.4	2.0	2/24	内外面ともナデ、口縁部外面ヨコナデ	3	良好	橙褐色	
24	土師器	杯B	13.0	*2.5	5/24	内外面ともナデ	2	良好	橙褐色	
25	土師器	杯A	15.8	*3.5	2/24	内外面ともナデ	3	良好	橙褐色	
26	土師器	甕B	21.5	*3.2	3/24	口縁部内面強いヨコナデ、体部内面ケズリ	3	良好	橙褐色	
27	土師器	甕B	22.0	*6.6	5/24	口縁部内面強いヨコナデ、体部内面ケズリ後ナデ	4	良好	橙褐色	
28	土師器	鍋A	39.6	*8.8	2/24	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ハケ	3	良好	橙褐色	

土坑SH04

29	須恵器	杯A	9.8	*2.8	4/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後未調整	3	堅緻	灰褐色	
30	須恵器	蓋C	14.5	*0.7	2/24	内外面とも回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	3	堅緻	青灰色	
31	須恵器	杯	12.5	*3.0	2/24	内外面とも回転ナデ	3	堅緻	青灰色	
32	須恵器	杯C	15.5	3.8	9/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後回転ナデ	4	堅緻	灰色	
33	須恵器	杯C	15.8	4.1	3/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後回転ナデ	3	堅緻	濃青灰色/ 青灰色	外面に付着物あり
34	須恵器	杯C	(9.0)	*2.6	11/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	2	堅緻	青灰色	
35	須恵器	壺	(7.8)	*8.5	18/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後回転ナデ	3	堅緻	灰褐色/ 灰色	内面底部に粘土塊 付着
36	須恵器	甕C	19.6	*4.7	2/24	口縁部内外面とも回転ナデ	3	堅緻	灰色	
37	須恵器	壺	—	*8.1	11/24	内外面とも回転ナデ、体部回転ヘラケズリ・ 回転ナデ	3	堅緻	灰褐色	
38	土師器	杯	—	*2.7	1/24	内外面ともナデ	3	良好	橙褐色	小片のため口径不明
39	土師器	杯	—	*2.4	小片	内外面ともナデ、口縁部内外面とも強いヨコ ナデ	3	良好	橙褐色	小片のため口径不明
40	土師器	杯B	12.2	2.4	3/24	内外面ともナデ、口縁部外面強いヨコナデ	3	良好	橙褐色	
41	土師器	杯B	12.6	*2.5	2/24	内外面ともナデ、口縁部外面強いヨコナデ	3	良好	橙褐色	
42	土師器	杯A	16.6	*2.9	3/24	内外面ともナデ、口縁部内外面とも強いヨコ ナデ	3	良好	橙褐色	
43	土師器	甕B	19.2	*5.6	1/24	口縁部内面強いヨコナデ、体部外面ハケ後ナ デか、体部内面ケズリか	3	良好	橙褐色	
44	土師器	甕A	22.0	*4.1	2/24	口縁部内外面ともナデ	3	良好	黄褐色	
45	土師器	甕B	24.2	*4.1	3/24	口縁部外面ナデ、口縁部内面強いヨコナデ	3	良好	橙褐色	
46	土師器	甕把手	—	—	—	ナデ、体部内面ケズリ	3	良好	茶褐色/ 橙褐色	
47	須恵器	鉢B	30.4	*4.3	3/24	口縁部内外面ともヨコナデ、体部外面ハケ後 ナデ	3	堅緻	灰～黒褐色 /灰褐色	
48	瓦質土 器	鍋	28.2	*8.5	1/24	内外面ともナデ、体部外面ユビオサエ痕	3	良好	黒褐色	

64	土師器	甕A	15.4	*7.6	5/24	口縁部内外面ともヨコナデ	4	良好	橙褐色/ 暗茶褐色	
65	土師器	鍋B	25.8	*3.0	3/24	口縁部内面強いヨコナデ	3	良好	黄褐色/ 橙褐色	
66	土師器	鍋B	34.6	*5.2	2/24	口縁部内外面とも強いヨコナデ、体部内外面ともナデ	4	良好	黄褐色～ 橙褐色	

溝S D01

67	須恵器	蓋C a	14.1	*2.7	14/24	内外面とも回転ナデ、天井部ヘラ切り後ナデ	4	堅緻	灰色	
68	須恵器	蓋C a	16.2	2.1	7/24	内外面とも回転ナデ、天井部ヘラ切り後ナデ	2	堅緻	灰色	
69	須恵器	蓋	15.4	*0.9	2/24	内外面とも回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	2	堅緻	青灰色	
70	須恵器	蓋F	14.0	5.6	9/24	内外面とも回転ナデ、天井部ヘラ切り後ナデ	4	堅緻	灰褐色	
71	須恵器	椀	18.6	*5.2	5/24	内外面とも回転ナデ	2	堅緻	濃青灰色/ 淡青灰色	
72	須恵器	杯C a	10.6	3.8	3/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	2	堅緻	灰色	
73	須恵器	杯C a	14.2	3.7	2/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	4	堅緻	青灰色	
74	須恵器	杯C a	16.5	3.7	5/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後不調整	2	堅緻	灰色	
75	須恵器	杯	14.8	*3.8	3/24	内外面とも回転ナデ	2	堅緻	灰褐色/ 淡灰色	
76	須恵器	杯	15.9	*3.3	2/24	内外面とも回転ナデ	2	堅緻	灰色	
77	土師器	鍋A	38.9	4.1	1/24	口縁部内外面ともヨコナデ	3	良好	茶褐色	

テラス状遺構S H08

78	須恵器	蓋C a	13.7	1.8	6/24	内外面とも回転ナデ、天井部回転ヘラ切り後ナデ	2	堅緻	灰色	
79	須恵器	蓋	14.5	*1.4	2/24	内外面とも回転ナデ、天井部回転ヘラ切り後ナデ	2	堅緻	灰色	
80	須恵器	蓋	15.0	*1.8	4/24	内外面とも回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ後ナデ	2	堅緻	灰色	
81	須恵器	蓋	15.4	*1.5	5/24	内外面とも回転ナデ、天井部回転ヘラ切り後ナデ	2	堅緻	灰色	
82	須恵器	蓋C a	14.3	2.4	7/24	内外面とも回転ナデ、天井部ヘラ切り後ナデ	3	堅緻	青灰色	若干焼け歪む
83	須恵器	蓋C a	16.0	2.5	5/24	内外面とも回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	3	堅緻	灰色	
84	須恵器	蓋	15.8	*2.1	5/24	内外面とも回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ後回転ナデ	2	堅緻	灰色	
85	須恵器	蓋	16.0	*2.0	7/24	内外面とも回転ナデ、天井部ヘラ切り後回転ナデ	2	堅緻	灰色	
86	須恵器	蓋F	12.0	*2.5	1/24	内外面とも回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ後ナデか	2	堅緻	灰色	
87	須恵器	短頸壺	10.0	*10.5	5/24	内外面とも回転ナデ、体部下半回転ヘラケズリ後ナデ	2	堅緻	灰褐色/ 灰色	
88	須恵器	杯B b	—	*1.6	8/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ起こしか	3	堅緻	灰色	
89	須恵器	杯B c	12.6	*3.3	3/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデか	2	堅緻	灰色	
90	須恵器	杯B c	14.0	3.1	4/24	内外面とも回転ナデ、底部回転ヘラ切り	2	軟	灰白色	
91	須恵器	杯C a	14.4	3.6	2/24	内外面とも回転ナデ、底部回転ヘラ切り	2	堅緻	灰白色	
92	須恵器	杯C a	14.0	4.0	1/24	内外面とも回転ナデ、底部回転ヘラ切り後ナデ	2	堅緻	灰色	体部外面に融着した土器片
93	須恵器	杯C a	13.2	4.3	1/24	内外面とも回転ナデ、底部回転ヘラ切り後ナデ	2	堅緻	灰色	
94	須恵器	不明	(14.5)	*3.6	4/24	脚部内外面とも回転ナデ	3	堅緻	青灰色	
95	土師器	杯D	(10.2)	*1.8	4/24	内外面とも回転ナデか、底部ヘラ切り後ナデか	2	良好	橙褐色	
96	土師器	杯D	(10.1)	*2.1	8/24	内外面とも回転ナデ下、底部ヘラ切り	3	良好	橙褐色	
97	土師器	皿B	13.0	2.5	1/24	内外面ともナデ	2	良好	橙褐色	

観 察 表

98	土師器	皿B	14.2	2.5	4/24	内外面ともナデ	3	良好	橙褐色	
99	土師器	皿B	13.8	2.3	3/24	内外面ともナデ	2	?	白	生焼けの須恵器の可能性あり
100	土師器	皿	14.0	1.6	1/24	内外面ともナデ	2	良好	橙褐色	回転台使用の可能性もある
101	土師器	甕A	13.8	*2.4	3/24	口縁部内外面ともナデ	2	良好	橙褐色	
102	土師器	杯A	18.6	*3.4	4/24	内外面ともナデ、底部ケズリか	3	良好	黄褐色	
103	土師器	鍋A	44.0	*10.7	2/24	口縁部外面ナデ、口縁部内面ハケ、体部外面ハケ、体部内面ナデか	3	良好	橙褐色	
104	土師器	鍋A	45.2	*8.6	6/24	口縁部内外面ともヨコナデ、体部外面ハケ、体部内面ケズリ	3	良好	橙褐色	

テラス状遺構SH06

105	須恵器	杯C a	14.0	3.6	2/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後回転ナデ	3	軟	灰白色	
-----	-----	------	------	-----	------	-----------------------	---	---	-----	--

不明遺構SH12

106	須恵器	杯C a	(8.9)	*2.9	5/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後回転ナデ	2	堅緻	灰色	
107	須恵器	碗	(10.4)	*2.1	7/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り	2	堅緻	灰色	

不明遺構SH11

108	須恵器	杯B c	11.7	2.7	1/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	2	堅緻	青灰色	
109	須恵器	杯C a	13.9	*2.9	4/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り	3	堅緻	灰色	

土坑SK01

110	須恵器	蓋	16.0	*1.1	2/24	内外面とも回転ナデ、天井部ヘラ切り後ナデ	2	堅緻	青灰色	
111	須恵器	杯C a	(10.4)	*2.1	4/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後回転ナデ	2	堅緻	灰色	

テラス状遺構SH02

112	土師器	甕B	23.6	*2.8	3/24	口縁部内外面ともナデ、体部内面ケズリか	3	良好	橙褐色/ 黄褐色	
-----	-----	----	------	------	------	---------------------	---	----	-------------	--

テラス状遺構SH10

113	須恵器	蓋	13.6	*1.6	6/24	内外面とも回転ナデ、天井部ヘラ切り後回転ナデ	2	堅緻	青灰色	
-----	-----	---	------	------	------	------------------------	---	----	-----	--

竪穴式住居跡SH01

114	須恵器	蓋C a	14.2	2.1	ほぼ 完存	内外面とも回転ナデ、天井部ヘラ切り後回転ナデ	3	堅緻	灰色	
115	須恵器	蓋C a	14.6	2.3	7/24	内外面とも回転ナデ、天井部ヘラ切り後不調整	3	堅緻	灰色	
116	須恵器	蓋C a	15.0	2.2	4/24	内外面とも回転ナデ、天井部ヘラ切り後回転ナデ	3	堅緻	灰色	
117	須恵器	蓋C a	15.5	1.8	15/24	内外面とも回転ナデ、天井部ヘラ切り後回転ナデ	3	堅緻	青灰色	
118	須恵器	蓋C a	15.7	2.8	8/24	内外面とも回転ナデ、天井部ヘラ切り後回転ナデ	3	堅緻	灰色	
119	須恵器	蓋C a	17.0	2.1	6/24	内外面とも回転ナデ、天井部ヘラ切り後回転ナデ	2	堅緻	灰色	
120	須恵器	蓋C a	16.8	2.1	4/24	内外面とも回転ナデ	3	堅緻	灰色	
121	須恵器	蓋D	17.6	*2.0	18/24	内外面とも回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	3	堅緻	青灰色	
122	須恵器	蓋	16.7	*1.4	3/24	内外面とも回転ナデ、天井部ヘラ切り後回転ナデ	2	堅緻	灰色	
123	須恵器	蓋C a	19.0	2.9	2/24	内外面とも回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	3	堅緻	灰褐色	胎土分析試料-01
124	須恵器	蓋F	11.7	4.1	15/24	内外面とも回転ナデ、天井部ヘラ切り後回転ナデ	3	堅緻	灰褐色	焼け歪み著しい天井部内面自然釉・付着物
125	須恵器	蓋F	13.1	3.6	3/24	内外面とも回転ナデ、天井部ヘラ切り後回転ナデか	3	堅緻	灰褐色/ 灰色	外面全体に自然釉と石が付着
126	須恵器	蓋D	17.6	2.5	4/24	内外面とも回転ナデ	3	堅緻	青灰色	

127	須恵器	杯	13.8	*2.6	3/24	内外面とも回転ナデ	3	堅緻	青灰色	
128	須恵器	小型壺?	—	*2.9	12/24	内外面とも回転ナデ、底部ナデ	2	堅緻	淡灰色	底部外面に十のヘラ記号
129	須恵器	杯C a	12.3	4.0	3/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ、	2	軟	白	
130	須恵器	杯C a	13.0	3.8	4/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	3	堅緻	灰色	外面に1のヘラ記号
131	須恵器	杯C a	13.1	3.2	3/24	内外面とも回転ナデ	2	堅緻	灰色	全体的に焼け歪む
132	須恵器	杯C a	13.5	3.9	4/24	内外面とも回転ナデ	3	堅緻	青灰色	
133	須恵器	杯C a	13.2	3.5	9/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	3	堅緻	青灰色	
134	須恵器	杯C a	14.0	3.7	10/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り	3	堅緻	灰色	
135	須恵器	杯C a	14.0	3.5	4/24	内外面とも回転ナデ	4	堅緻	青灰色	
136	須恵器	杯C a	13.6	3.9	3/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り	2	堅緻	灰色	
137	須恵器	杯C a	16.0	4.1	8/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	3	堅緻	灰色	底部内面に横一文字のヘラ記号(傷か)
138	須恵器	杯C a	15.9	4.0	1/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	3	堅緻	灰色	
139	須恵器	杯C b	16.7	4.0	18/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	3	堅緻	灰褐色	口縁部内面に棒状工具による沈線1条
140	須恵器	杯C a	17.0	3.8	7/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	3	堅緻	灰色	
141	須恵器	杯C a	18.2	4.2	2/24	内外面とも回転ナデ、体部下回転ヘラケズリ後回転ナデか、底部ヘラ切り後ナデ	3	堅緻	灰褐色/灰色	
142	須恵器	杯C a	20.8	4.1	2/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	3	堅緻	灰褐色/青灰色	
143	須恵器	杯C a	17.8	6.4	2/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	3	堅緻	灰色	
144	須恵器	碗A	16.2	5.6	12/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	2	堅緻	灰褐色/灰色	
145	須恵器	碗A	17.0	5.7	6/24	内外面とも回転ナデ、体部下回転ヘラケズリ後回転ナデ、底部ヘラ切り後不調整	2	堅緻	灰褐色/灰色	
146	須恵器	碗A	17.7	5.3	7/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	2	軟	白	
147	須恵器	碗A	18.5	6.5	1/24	内外面とも回転ナデ、体部下回転ヘラケズリ後回転ナデ、底部ヘラ切り後不調整	3	堅緻	灰色	
148	須恵器	碗A	18.2	*6.1	4/24	内外面とも回転ナデ、体部下回転ヘラケズリ	3	堅緻	青灰色	
149	須恵器	碗B	18.3	*4.7	8/24	内外面とも回転ナデ	3	堅緻	灰色	
150	須恵器	壺	15.0	*3.7	5/24	口縁部内外面とも回転ナデ	3	堅緻	灰色	頸部外面に沈線1条
151	須恵器	長頸壺	10.4	*5.0	6/24	口縁部内外面とも回転ナデ	2	堅緻	灰色	
152	須恵器	甕A	24.9	*6.9	12/24	口縁部内外面とも回転ナデ、体部外面タタキ	2	堅緻	灰褐色	
153	土師器	杯A	11.5	*3.3	2/24	内外面ともナデ	2	良好	橙褐色	
154	土師器	杯A	11.6	*3.2	5/24	内外面ともナデ	3	良好	橙褐色	
155	土師器	杯B	8.0	2.1	1/24	内外面ともナデ	3	良好	橙褐色	
156	土師器	杯B	12.4	*2.2	6/24	内外面ともナデ	?	不明	橙褐色	
157	土師器	皿B	15.4	2.5	3/24	内外面ともナデ	3	良好	橙褐色	
158	土師器	甕A	16.6	*3.0	7/24	口縁部内外面ともヨコナデ、体部内面ケズリ	3	良好	橙褐色	
159	土師器	甕A	18.2	*5.8	2/24	口縁部内外面ともヨコナデ、体部外面ナデか、体部内面ケズリ	3	良好	茶褐色~黒	体部外面2次焼成によるひはげで表面剝離
160	土師器	甕A	21.1	*5.5	3/24	口縁部内外面ともヨコナデ、体部内面ケズリか	3	良好	黄褐色	
161	土師器	鍋A	37.6	*6.2	4/24	口縁部外面ヨコナデ、口縁部内面ハケ後ナデ、体部外面ハケ、体部内面ケズリか	3	良好	黄褐色	

土坑SH09

162	須恵器	蓋C a	15.0	2.2	14/24	内外面とも回転ナデ、天井部ヘラ切り後回転ナデ	3	堅緻	青灰色	
163	須恵器	蓋C a	15.9	3.5	完存	内外面とも回転ナデ	3	堅緻	青灰色	
164	須恵器	蓋D	25.0	*2.5	9/24	内外面とも回転ナデ、天井部ヘラ切り後回転ナデ	2	堅緻	青灰色	環状つまみか
165	須恵器	杯B c	12.1	3.6	1/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後回転ナデ	3	堅緻	白	
166	須恵器	杯B c	12.9	3.3	16/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後不調整	3	堅緻	白	
167	須恵器	杯B c	13.4	3.7	12/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	3	堅緻	灰色	
168	須恵器	杯C a	10.8	4.1	5/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	2	堅緻	灰色	
169	須恵器	杯C a	13.4	3.9	3/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	2	堅緻	灰色	
170	須恵器	杯C a	13.4	4.0	16/24	内外面とも回転ナデ	2	堅緻	灰褐色/ 灰色	
171	須恵器	杯C a	13.0	3.9	6/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	2	堅緻	灰色	底部外面に粘土 小塊が付着する
172	須恵器	杯C a	13.5	4.0	7/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデか	3	堅緻	青灰色	焼け歪みが著しい
173	須恵器	杯C a	13.8	4.0	12/24	内外面とも回転ナデ	3	堅緻	青灰色	
174	須恵器	杯C a	13.8	3.5	8/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	2	堅緻	灰色	
175	須恵器	杯C a	15.2	3.5	8/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後回転ナデ	3	堅緻	青灰色	
176	須恵器	椀A	15.2	*4.4	3/24	内外面とも回転ナデ	2	堅緻	青灰色	
177	須恵器	椀A	20.2	5.7	5/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後不調整	3	堅緻	青灰色	
178	土師器	皿B	14.4	3.0	7/24	内外面ともナデ、口縁部外面やや強めのヨコナデ	3	良好	橙褐色	
179	土師器	皿B	14.8	2.3	3/24	内外面ともナデ	3	良好	橙褐色	
180	土師器	杯A	15.2	*3.9	3/24	内外面ともナデ	3	良好	橙褐色	
181	土師器	甕A	14.4	*5.4	5/24	口縁部内外面ともヨコナデ、体部外面ハケ、体部内面ヘラケズリ	3	良好	橙褐色/ 暗茶褐色	
182	土師器	甕B	22.0	*10.3	6/24	口縁部内面に強いヨコナデ、体部外面ハケ後ナデ、体部内面ケズリ	3	良好	茶褐色	
183	土師器	甗	34.4	21.9	6/24	口縁部内外面ナデ、体部外面ハケ、体部内面上半ハケ、体部内面下半ケズリ	3	良好	茶褐色	

不明遺構SK09

184	須恵器	蓋	—	*1.7	—	内外面とも回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ後ナデか	3	堅緻	灰色	
185	須恵器	杯C	(8.6)	*1.7	6/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデか	2	軟	灰白色	
186	須恵器	杯B b	—	*1.8	7/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後不調整	2	堅緻	灰色	
187	須恵器	長頸壺	9.0	*6.2	2/24	口縁部内外面とも回転ナデ	2	堅緻	灰色/ 青灰色	
188	須恵器	甕A	30.4	*5.8	5/24	口縁部内外面とも回転ナデ	3	堅緻	灰褐色/ 青灰色	
189	土師器	甕A	14.9	*5.0	4/24	口縁部内外面ともヨコナデ、体部外面ハケ、体部内面ケズリ後ナデか	3	良好	橙褐色	

土坑SK05

190	須恵器	杯D	16.3	6.4	7/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後回転ナデ	3	堅緻	灰色	
191	須恵器	皿D	13.3	3.4	6/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後回転ナデ	3	堅緻	灰色	かすかに焼け歪む

不明遺構SK11

192	土師器	鍋A	42.0	*4.9	5/24	口縁部外面ヨコナデ、口縁部内面ヨコハケ後ナデ、体部外面ハケ、体部内面ケズリ後ナデ	2	良好	茶褐色	
-----	-----	----	------	------	------	--	---	----	-----	--

不明遺構 S K 06

193	須恵器	杯B c	13.3	3.1	1/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	3	軟	灰白色	
-----	-----	------	------	-----	------	---------------------	---	---	-----	--

溝 S D 02

194	須恵器	蓋	14.4	*1.4	3/24	内外面とも回転ナデ、天井部ヘラ切り後ナデ	2	堅緻	灰色	著しく焼けひずむ
195	須恵器	蓋	15.6	*1.5	12/24	内外面とも回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	2	堅緻	灰色	
196	須恵器	蓋	—	*1.3	—	内外面とも回転ナデ、天井部回転ヘラケズリか	2	堅緻	灰褐色/ 青灰色	著しく焼けひずむ
197	須恵器	蓋	19.8	*1.6	3/24	内外面とも回転ナデ	2	堅緻	濃灰色/ 灰色	
198	須恵器	杯C	(8.8)	*1.4	8/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後不調整	2	堅緻	青灰色/ 灰色	
199	須恵器	高杯A	—	*7.7	—	脚部内外面とも回転ナデ	2	堅緻	濃青灰色	

第9表 O-1 地点出土土器観察表

番号	種別	器種	法量		残存率	技法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
			口径	器高						

製塩炉 4

1	須恵器	杯B c	13.6	3.6	9/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	3	やや軟	灰白色	摩滅が著しい
2	須恵器	杯B c	13.6	3.6	11/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り	3	やや軟	灰白色	
3	須恵器	杯B c	14.2	3.5	6/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	3	やや軟	灰白色	摩滅が著しい
4	須恵器	碗か	15.4	*4.2	3/24	内外面とも回転ナデ	3	堅緻	灰色	
5	須恵器	杯C a	13.2	4.0	10/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り	3	堅緻	青灰色	
6	須恵器	杯C a	10.3	4.8	3/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り	3	堅緻	灰色	
7	土師器	杯D	(11.0)	*1.7	9/24	内外面とも回転ナデか	3	良好	黄褐色	摩滅が著しい
8	土師器	杯か	—	*3.0	9/24	内外面ともナデか	3	良好	橙褐色	摩滅が著しい
9	土師器	甕A	12.6	*6.6	5/24	口縁部内外面ともナデ、体部外面ナデか、体部内面ケズリ	3	良好	橙褐色	
10	土師器	甕A	15.2	*5.3	6/24	口縁部内外面ともナデ、体部外面ナデか、体部内面ケズリ	3	良好	橙褐色	
11	土師器	甕A	17.8	*4.5	3/24	口縁部内外面ともナデ、体部外面ハケ、体部内面ケズリ	3	良好	橙褐色	

製塩炉 1

12	須恵器	蓋	14.3	*1.7	3//24	内外面とも回転ナデ、天井部ヘラ切り後ナデ	2	軟	灰色	
13	須恵器	蓋	14.2	*2.1	11/24	内外面とも回転ナデ、天井部ヘラ切り後ナデ	2	堅緻	灰色	
14	須恵器	蓋	14.8	*1.2	5/24	内外面とも回転ナデ、天井部ヘラ切り後ナデ	3	堅緻	青灰色	焼け歪みあり
15	須恵器	蓋	18.8	*1.3	2/24	内外面とも回転ナデ、天井部ヘラ切り後ナデ	2	堅緻	灰色	
16	須恵器	杯A a	12.8	*4.8	5/24	内外面とも回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	2	堅緻	灰色	
17	須恵器	杯A	13.2	*2.7	5/24	内外面とも回転ナデ	2	堅緻	青灰色	
18	須恵器	杯B c	10.8	3.8	3/24	内外面とも回転ナデ	2	堅緻	灰色	
19	須恵器	杯B c	11.5	3.6	12/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	2	堅緻	灰色	
20	須恵器	杯B c	13.9	3.5	8/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	3	軟	白	

21	須恵器	皿A	13.4	1.9	4/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	3	堅緻	灰色	
22	須恵器	杯C a	14.8	5.8	1/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り	2	堅緻	灰色	
23	須恵器	杯C a	15.7	5.8	10/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り	3	堅緻	青灰色	
24	須恵器	鉢	15.9	*3.5	2/24	内外面とも回転ナデ	2	堅緻	灰色	
25	須恵器	皿B	16.5	3.6	4/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り	3	堅緻	灰色	
26	土師器	杯A	11.6	*4.7	3/24	口縁端部強いヨコナデ、体部外面ケズリ、体部内面ナデ	3	良好	茶褐色	
27	土師器	皿A a	14.6	*2.1	7/24	内外面ともナデ	3	良好	黄褐色	
28	土師器	甕A	16.6	*4.0	3/24	口縁部内外面ともヨコナデ、体部外面ハケ、体部内面ケズリ	3	良好	茶褐色	
29	土師器	鍋A	43.4	*7.1	9/24	口縁部内外面智也や強めのナデ、体部外面ハケ、体部内面ケズリか	3	良好	橙褐色	

製塩炉 2

30	須恵器	蓋	17.2	*1.9	2/24	内外面とも回転ナデ、天井部ヘラ切り後ナデ	3	堅緻	青灰色	
31	須恵器	杯A a	11.8	3.5	4/24	内外面とも回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	2	堅緻	灰色	
32	須恵器	甕B	15.7	*9.1	5/24	口縁部内外面とも回転ナデ、体部外面タタキ後カキ目、体部内面当て具痕あり	3	堅緻	青灰色	
33	土師器	甕B	25.2	*4.3	4/24	口縁部内外面とも強いヨコナデ、体部外面ハケ	3	良好	橙褐色	

製塩炉 3

34	須恵器	蓋	16.2	*1.2	2/24	内外面とも回転ナデ、天井部ヘラ切り後ナデ	3	堅緻	青灰色	
35	須恵器	皿B b	14.4	2.1	3/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り	2	堅緻	灰色	
36	須恵器	杯C	16.5	4.4	20/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り	2	堅緻	青灰色	
37	土師器	杯B	10.4	*2.7	2/24	口縁端部強めのヨコナデ、体部外面ケズリ、体部内面ナデ	2	良好	橙褐色	
38	土師器	杯A	12.2	3.7	4/24	内外面ともナデ	3	良好	橙褐色	

溝S D01

1	黒色土器	皿	10.1	1.9	20/24	内外面とも回転ナデ、底部糸切り	2	良好	黒褐色	
2	黒色土器	椀	16.0	*5.0	4/24	内外面とも回転ナデ、底部糸切り	4	良好	灰黄色／黒褐色	
3	黒色土器	椀	15.3	5.3	10/24	内外面とも回転ナデ、底部糸切り	3	良好	灰黄色／黒褐色	
4	須恵器	蓋	17.8	*2.1	3/24	内外面とも回転ナデ、底部糸切り	2	堅緻	青灰色／灰色	
6	黒色土器	椀	16.4	*3.3	4/24	内外面とも回転ナデ、底部糸切り	2	良好	灰黄色／黒褐色	
7	須恵器	壺	(5.0)	*7.2	13/24	内外面とも回転ナデ、底部糸切り	2	堅緻	淡青灰色	
8	黒色土器	椀	(6.4)	*1.6	21/24	内外面とも回転ナデ、底部糸切り	4	良好	灰黄色／黒褐色	
9	黒色土器	椀	12.7	*4.2	3/24	内外面とも回転ナデ、底部糸切り	2	良好	黄灰色／黒褐色	

第10表 O-2 地点出土土器観察表

番号	種別	器種	法量		残存率	技法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
			口径	器高						
製塩炉 S X 13 および周辺										
1	須恵器	蓋	13.8	*2.0	3/24	内外面とも回転ナデ、天井部ヘラ切り後ナデ	2	堅緻	灰色	
2	須恵器	蓋	18.0	*1.3	4/24	内外面とも回転ナデ、天井部ヘラ切り後ナデ	2	堅緻	灰色	
3	須恵器	杯 B c	11.7	3.5	5/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り	2	堅緻	灰色～ 灰白色	
4	須恵器	杯 C	(8.6)	*3.8	4/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	2	堅緻	灰色	
5	須恵器	杯 C	(12.7)	*2.1	5/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切りか	2	堅緻	灰色	
6	須恵器	椀	(7.2)	*3.4	9/24	内外面とも回転ナデ、底部糸切り	4	堅緻	灰色	
7	須恵器	杯 C a	13.4	3.7	5/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切りか	2	堅緻	灰色	
8	須恵器	杯 C	(11.6)	*3.2	4/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切りか	2	堅緻	灰白色	
9	須恵器	杯 C a	12.9	3.9	4/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切りか	2	堅緻	灰色	
10	須恵器	杯 C	(11.4)	*1.8	10/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切りか	2	堅緻	灰色	
11	須恵器	椀	(7.2)	*3.0	完存	内外面とも回転ナデ、底部糸切り	4	堅緻	灰色	
12	須恵器	杯 C a	14.8	4.0	1/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り	2	堅緻	灰色	
13	須恵器	杯 C	(9.7)	*4.0	4/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切りか	3	堅緻	青灰色	
14	須恵器	杯 C a	17.7	3.1	1/24	内外面とも回転ナデ	4	堅緻	灰色	
15	須恵器	杯 C a	15.6	3.2	4/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	3	堅緻	青灰色/ 灰色	
16	須恵器	杯 C	(7.6)	*1.7	23/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切りか	2	堅緻	灰色	
17	須恵器	杯 C	(7.0)	*2.4	完存	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切りか	2	堅緻	灰色	
18	須恵器	杯 C	(7.4)	*2.5	10/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切りか	2	堅緻	灰色	
19	須恵器	椀か	(8.4)	*1.7	4/24	内外面とも回転ナデ、底部糸切り	3	堅緻	濃青灰色	
20	須恵器	甕 A	23.1	*6.6	4/24	内外面とも回転ナデ	4	堅緻	青灰色	
21	須恵器	壺	(10.2)	*7.0	2/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	3	堅緻	灰色	
22	須恵器	甕 A	19.5	*4.4	4/24	内外面とも回転ナデ	4	堅緻	青灰色	
23	須恵器	甕	—	*5.9	—	内外面とも回転ナデ	4	堅緻	青海色/ 淡青灰色	
24	土師器	杯 C	13.3	2.7	3/24	内外面ともナデ	3	良好	橙褐色	
25	土師器	椀か	(7.0)	*3.0	4/24	内外面とも回転ナデか	4	良好	茶褐色～ 橙褐色	
26	黒色土器	椀 A	16.5	*3.3	3/24	内外面とも回転ナデ、内面ミガキ	2	良好	灰褐色/ 黒褐色	
27	黒色土器	椀 A	(6.8)	*1.8	13/24	内外面とも回転ナデ、内面ミガキ、底部糸切り	2	良好	灰黄色/ 黒褐色	
28	土師器	杯 D	(6.0)	*1.7	4/24	内外面とも回転ナデか	3	良好	橙褐色/ 黄褐色	
29	土師器	杯 D	(8.0)	*1.2	2/24	内外面とも回転ナデか	2	良好	橙褐色	
30	土師器	椀	(7.4)	*2.5	4/24	内外面とも回転ナデか、底部糸切り	2	良好	茶褐色	
31	土師器	椀	(5.0)	*1.2	完存	内外面とも回転ナデか、底部糸切りか	4	良好	黄灰色	
32	土師器	椀	(6.0)	*1.0	4/24	内外面とも回転ナデか、底部糸切りか	2	良好	黄灰色	
33	土師器	椀	(5.9)	*1.2	完存	内外面とも回転ナデか、底部糸切りか	3	良好	橙褐色	

観 察 表

34	黒色土器	椀A	15.0	*3.4	4/24	内外面とも回転ナデ、内面ミガキ	4	良好	灰褐色／ 黒褐色	
35	土師器	甕A	19.0	*3.3	1/24	口縁部内外面ともヨコナデ	3	良好	茶褐色	
36	土師器	甕A	23.3	*4.7	2/24	口縁部内外面ともヨコナデ	4	良好	茶褐色	
37	土師器	甕C	19.2	*7.2	8/24	口縁部内外面ともヨコナデ、体部外面タタキ、体部内面ケズリ	4	良好	黄褐色～ 橙褐色	
38	土師器	甕A	30.1	*5.3	2/24	口縁部内外面ともヨコナデ、体部内面ケズリ	3	良好	橙褐色	
39	白磁	碗	16.2	*1.7	2/24	内外面とも回転ナデ、施釉	1	良好	灰白色	

暗茶褐色土層

1	須恵器	蓋F	10.1	*2.1	1/24	内外面とも回転ナデ	2	堅緻	灰褐色／ 淡灰色	
2	須恵器	蓋	11.8	*0.8	2/24	内外面とも回転ナデ、天井部ヘラ切りか	2	堅緻	灰色	
3	須恵器	蓋	14.4	*2.3	1/24	内外面とも回転ナデ、天井部ヘラ切りか	3	堅緻	青灰色	
4	須恵器	蓋	7.2	*2.5	2/24	内外面とも回転ナデ	4	堅緻	灰色	
5	須恵器	杯C	(7.2)	*2.5	6/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切りか	1	堅緻	灰色	
6	須恵器	杯C	11.9	3.5	11/24	内外面とも回転ナデ	4	堅緻	灰色	
7	須恵器	杯C	(11.0)	*1.7	4/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切りか	2	堅緻	灰色	
8	須恵器	杯C	(9.6)	*2.1	5/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切りか	1	堅緻	灰色	
9	須恵器	杯	12.4	*4.3	5/24	内外面とも回転ナデ	4	堅緻	灰色	
10	須恵器	椀B	16.0	*3.7	1/24	内外面とも回転ナデ	2	堅緻	灰色	
11	須恵器	皿A	14.2	2.4	4/24	内外面とも回転ナデ	2	堅緻	灰色	
12	須恵器	皿D	14.0	3.4	1/24	内外面とも回転ナデ	2	堅緻	灰色	
13	須恵器	短頸壺	9.4	*3.8	4/24	内外面とも回転ナデ	4	堅緻	灰色	
14	須恵器	壺	(13.0)	*5.4	7/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切りか	4	堅緻	灰色	
15	土師器	杯C	13.4	4.0	6/24	内外面ともナデ	3	良好	橙褐色	
16	土師器	杯C	13.2	3.8	4/24	内外面ともナデ	4	良好	橙褐色	
17	土師器	杯B	14.0	*2.8	3/24	内外面ともナデ	2	良好	橙褐色	
18	土師器	皿B	14.6	*2.6	1/24	内外面ともナデ	2	良好	黄褐色	
19	土師器	杯C	15.2	3.4	4/24	内外面ともナデ	4	良好	黄褐色～ 橙褐色	
20	土師器	杯C	16.2	3.4	6/24	内外面ともナデ	4	良好	橙褐色	
21	黒色土器	椀A	15.5	*3.1	2/24	内外面とも回転ナデ、内面ミガキ	2	良好	灰黄色／ 黒褐色	
22	黒色土器	椀A	15.1	*4.1	3/24	内外面とも回転ナデ、内面ミガキ	3	良好	灰黄色／ 黒褐色	
23	黒色土器	椀A	16.9	*3.7	7/24	内外面とも回転ナデ、内面ミガキ	3	良好	灰褐色／ 黒褐色	
24	黒色土器	椀A	17.0	*4.2	7/24	内外面とも回転ナデ、内面ミガキ	4	良好	灰褐色／ 黒褐色	
25	土師器	杯	12.6	3.9	3/24	内外面ともナデ	4	良好	黄褐色	
26	瓦器	椀	15.8	3.3	3/24	口縁部ヨコナデ、外面ナデか、内面ミガキか、	2	良好	黒灰色	磨減著しい
27	土師器	椀	(6.4)	1.3	完存	内外面とも回転ナデか、底部糸切りか	1*	良好	橙褐色	
28	黒色土器	椀A	(5.7)	1.6	18/24	内外面とも回転ナデ、内面ミガキ、底部糸切り	2	良好	黒灰色／ 黒褐色	
29	土師器	椀	(6.0)	1.2	完存	内外面とも回転ナデか、底部糸切り	2	良好	橙褐色	

30	黒色土器	碗A	(6.5)	1.4	完存	内外面とも回転ナデ、内面ミガキ、底部糸切り	4	良好	灰褐色／黒褐色	
31	黒色土器	碗A	(9.6)	2.9	完存	内外面とも回転ナデ、内面ミガキ、底部糸切り	2	良好	灰褐色／黒褐色	
32	土師器	甕A	14.3	3.9	3/24	口縁部内外面ともにヨコナデ、体部外面ハケ、体部内面ケズリか	3	良好	橙褐色～黄褐色	
33	土師器	甕A	24.8	4.3	2/24	口縁部内外面ともにヨコナデ、体部外面ハケ、体部内面ケズリか	3	良好	黄褐色	
34	土師器	甕A	26.4	5.3	3/24	口縁部内外面ともにヨコナデ、体部不明瞭	3	良好	黄褐色	
35	土師器	鍋D	23.6	6.4	1/24	内外面ともナデ	4	良好	暗茶褐色／黄褐色	
36	土師器	甕A	14.8	5.0	2/24	内外面ともナデ	2	良好	橙褐色	
37	土師器	甕A	18.2	4.9	3/24	口縁部ナデ、口縁部内外面・体部外面ハケ、体部内面ハケ	4	良好	橙褐色	
38	土師器	鍋	31.4	3.4	1/24	外面ハケ後ナデ、内面ハケ	2	良好	橙褐色	
39	土師器	鍋D	30.8?	5.2	1/24	内外面ともナデ、口縁部内面ハケ後	4	良好	暗茶褐色／橙褐色	

黒褐色土層

1	須恵器	蓋E	13.0	1.1	6/24	内外面とも回転ナデ、天井部ヘラ切り後ナデ	2	堅緻	青灰色	
2	須恵器	蓋	13.5	*2.0	2/24	内外面とも回転ナデ、天井部ヘラ切り	2	堅緻	灰色	
3	須恵器	蓋	14.8	*1.8	1/24	内外面とも回転ナデ、天井部ヘラ切り後ナデ	2	軟	灰橙色／灰白色	生焼け
4	須恵器	蓋D	—	—	—	内外面とも回転ナデ	3	堅緻	灰色	
5	須恵器	蓋D	18.3	*3.0	7/24	内外面とも回転ナデ、天井部回転ヘラケズリか	3	堅緻	灰色	
6	須恵器	蓋	20.2	*1.8	3/24	内外面とも回転ナデ、天井部ヘラ切り	3	堅緻	灰色	
7	須恵器	杯B c	11.5	*3.0	1/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り	2	堅緻	灰色	
8	須恵器	杯B c	14.4	*4.2	2/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	2	軟	灰白色	
9	須恵器	杯B c	16.6	*4.1	2/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	2	軟	灰白色	
10	須恵器	杯C	(13.4)	*3.3	2/24	内外面とも回転ナデ	2	堅緻	灰色	
11	須恵器	杯C a	12.0	4.4	4/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	2	堅緻	灰色	
12	須恵器	杯C a	10.5	4.8	2/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切りか	2	堅緻	灰色	
13	須恵器	杯C a	13.0	3.7	2/24	内外面とも回転ナデ	2	堅緻	灰色	
14	須恵器	杯C	(12.0)	*1.5	5/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切りか	3	堅緻	青灰色	
15	須恵器	杯C a	12.0	3.4	1/24	内外面とも回転ナデ	2	堅緻	灰色	
16	須恵器	杯C a	12.6	4.1	7/24	内外面とも回転ナデ	3	堅緻	灰色	
17	須恵器	杯C a	14.5	3.7	2/24	内外面とも回転ナデ	2	堅緻	灰色／灰褐色	
18	須恵器	杯C	(10.3)	2.4	6/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切りか	2	堅緻	灰色	
19	須恵器	杯C a	21.3	4.5	3/24	内外面とも回転ナデ	3	堅緻	青灰色	
20	須恵器	皿D	14.6	*2.4	3/24	内外面とも回転ナデ	2	軟	灰色	
21	須恵器	皿D	14.2	3.0	6/24	内外面とも回転ナデ	2	軟	灰色	
22	須恵器	皿D	(7.6)	*2.4	6/24	内外面とも回転ナデ	3	軟	白	
23	須恵器	壺	(5.0)	*3.9	11/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切りか	2	堅緻	灰色	
24	須恵器	壺	(10.1)	*3.8	4/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切りか	2	堅緻	灰色／?	
25	須恵器	壺	(9.0)	*3.7	15/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り	3	堅緻	灰色	
26	須恵器	碗C	14.0	4.4	2/24	内外面とも回転ナデ、底部糸切り	2	堅緻	灰色	

27	須恵器	壺	(10.2)	*8.4	7/24	内外面とも回転ナデ	3	堅緻	青灰色	
28	製塩土器?		11.1	*3.7	3/24	内外面ともハケ後ナデ	3	良好	茶褐色	
29	緑釉陶器	椀	(6.4)	*1.1	11/24	内外面とも回転ナデ、施釉	2	軟	緑色	削り出し高台
30	緑釉陶器	椀	(7.2)	*1.3	完存	内外面とも回転ナデ、施釉	2	軟	灰黄色	削り出し高台
31	土師器	皿B	13.6	1.7	2/24	内外面ともナデ	2	良好	橙褐色	
32	須恵器	皿B	13.4	2.3	1/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切りか	2	堅緻	灰色	
33	土師器	杯B	14.4	*3.0	2/24	内外面ともナデ	2	良好	橙褐色	内面に暗文あり
34	土師器	杯C	12.8	2.7	4/24	内外面ともナデ	3	良好	橙褐色	
35	土師器	杯か	(5.2)	2.5	7/24	内外面とも回転ナデか	2	良好	橙褐色	
36	土師器	杯D	(8.6)	*1.6	6/24	内外面とも回転ナデか	2	良好	橙褐色	
37	土師器	杯D	(7.3)	*2.4	4/24	内外面とも回転ナデか	2	良好	橙褐色	
38	土師器	杯D	(8.4)	*2.5	6/24	内外面とも回転ナデか	2	良好	橙褐色	
39	土師器	甕B	16.0	*4.1	3/24	口縁部内外面ともヨコナデ、体部内外面ともナデか	3	良好	橙褐色	
40	土師器	甕A	18.0	*6.5	3/24	口縁部内外面ともヨコナデ、体部外面ハケ後ナデ、体部内面ナデか	3	良好	橙褐色／ 黒褐色	
41	土師器	甕A	21.0	*6.8	2/24	口縁部内外面ともヨコナデ、体部外面ハケ後ナデ、体部内面ケズリ	3	良好	橙褐色	
42	土師器	甕A	18.8	*4.8	1/24	口縁部内外面ともヨコナデ、体部内外面ともナデ	4	良好	茶褐色	
43	土師器	甕C	25.0	*7.1	3/24	口縁部内外面ともヨコナデ、体部外面タタキ、体部内面ナデか	3	良好	橙褐色／ 黄褐色	
44	瓦器	椀	12.9	*2.7	4/24	内外面ともナデ	1*	良好	暗灰色	
45	土師器	椀	(3.9)	*1.4	8/24	内外面ともナデ	2	良好	灰黄色	
46	黒色土器	椀A	15.4	*2.0	3/24	内外面とも回転ナデ、内面ミガキ	2	良好	灰黄色／ 黒褐色	
47	黒色土器	椀A	(7.0)	*1.6	完存	内外面とも回転ナデ、内面ミガキ、底部糸切り	2	良好	灰黄色／ 黒褐色	
48	緑釉陶器	椀	16.2	*1.7	2/24	内外面とも回転ナデ、施釉	?	堅緻	緑色	
49	白磁	椀	(5.8)	2.9	14/24	内外面とも回転ナデ、施釉	?	堅緻	灰白色	
50	白磁	椀	16.4	6.7	2/24	内外面とも回転ナデ、施釉	?	堅緻	灰白色	
51	土師器	甕C	36.8	*3.0	1/24	口縁部内外面ともヨコナデ	4	良好	橙褐色	

黒色炭層

1	須恵器	蓋	11.9	*1.3	8/24	内外面とも回転ナデ、天井部ヘラ切り後ナデか	2	堅緻	青灰色	
2	須恵器	蓋	13.0	*1.0	1/24	内外面とも回転ナデ、天井部ヘラ切り後ナデか	2	堅緻	灰色	
3	須恵器	蓋	13.0	*1.1	2/24	内外面とも回転ナデ	2	軟	灰白色	生焼け
4	須恵器	蓋	13.9	*1.9	5/24	内外面とも回転ナデ、天井部ヘラ切り後ナデ	3	堅緻	灰色	
5	須恵器	蓋	15.4	*1.8	3/24	内外面とも回転ナデ、天井部ヘラ切り後ナデ	3	堅緻	灰色	
6	須恵器	蓋E	14.0	1.0	2/24	内外面とも回転ナデ、天井部ヘラ切り後ナデか	3	堅緻	灰褐色	
7	須恵器	蓋	14.5	2.1	6/24	内外面とも回転ナデ、天井部ヘラ切り後ナデ	3	堅緻	青灰色	
8	須恵器	蓋C	15.0	2.3	1/24	内外面とも回転ナデ、天井部ヘラ切り後ナデ	3	堅緻	灰色	
9	須恵器	蓋	15.5	*1.4	2/24	内外面とも回転ナデ	3	堅緻	灰色	
10	須恵器	蓋	16.4	*1.5	4/24	内外面とも回転ナデ、天井部ヘラ切り後ナデ	3	堅緻	灰色	

11	須恵器	蓋	18.8	*1.8	2/24	内外面とも回転ナデ、天井部ヘラ切り後ナデ	2	堅緻	灰色	
12	須恵器	蓋	19.7	*1.3	2/24	内外面とも回転ナデ	2	堅緻	灰褐色	
13	須恵器	蓋E	14.3	1.2	6/24	内外面とも回転ナデ、天井部ヘラ切り後ナデか	3	堅緻	灰色	
14	須恵器	蓋D	—	*1.8	12/24	内外面とも回転ナデ	3	堅緻	灰褐色	
15	須恵器	杯B c	14.1	3.5	2/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデか	2	軟	灰白色	
16	須恵器	杯B c	12.8	3.3	7/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	2	軟	灰白色	
17	須恵器	椀B	10.4	*2.7	1/24	内外面とも回転ナデ	2	堅緻	灰色	
18	須恵器	杯C	(5.6)	*2.0	6/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り	3	堅緻	灰色	
19	須恵器	杯C	(6.2)	*3.0	22/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデか	3	堅緻	灰色	
20	須恵器	杯C	(6.6)	*3.0	9/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデか	2	堅緻	灰色	
21	須恵器	杯C	(8.1)	*2.0	9/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデか	2	軟	灰白色	
22	須恵器	杯C	(8.2)	*1.8	7/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	2	堅緻	青灰色	
23	須恵器	杯C a	11.5	4.6	2/24	内外面とも回転ナデ	2	堅緻	灰色	
24	須恵器	杯C a	12.6	3.9	6/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	2	堅緻	灰褐色/ 灰白色	
25	須恵器	杯C	(8.4)	*1.8	4/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデか	2	堅緻	黒灰色/ 灰色	
26	須恵器	杯C	(9.0)	*2.0	9/24	内外面とも回転ナデ	2	堅緻	灰褐色/ 灰色	
27	須恵器	杯C	(11.0)	*2.5	5/24	内外面とも回転ナデ	2	堅緻	灰色	
28	須恵器	杯C	(8.5)	*2.4	12/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	3	堅緻	灰色	
29	須恵器	杯C a	12.9	3.8	10/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデか	2	堅緻	灰色	
30	須恵器	杯C a	14.7	3.8	ごく わずか	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデか	3	堅緻	灰褐色/ 灰色	
31	須恵器	杯C	(11.0)	*2.2	5/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	3	堅緻	灰色	
32	須恵器	杯C a	18.0	3.8	1/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	2	堅緻	灰色	
33	須恵器	杯C a	15.8	5.2	3/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	2	軟	灰白色	
34	須恵器	杯C	—	*5.0	—	内外面とも回転ナデ	3	堅緻	青灰色	
35	須恵器	杯C a	16.3	5.8	2/24	内外面とも回転ナデ	4	軟	灰白色	
36	須恵器	杯C	(14.8)	*1.7	3/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	2	堅緻	灰色	
37	須恵器	椀	16.8	*5.1	3/24	内外面とも回転ナデ	2	堅緻	灰色	
38	須恵器	椀	(8.4)	*2.0	ほぼ 完存	内外面とも回転ナデ	2	堅緻	灰色	
39	須恵器	壺	(5.4)	*4.8	14/24	内外面とも回転ナデ	3	堅緻	灰色	
40	須恵器	皿A	13.4	2.5	5/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデか	3	堅緻	灰色	
41	須恵器	皿A	15.4	1.8	4/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	2	堅緻	灰色	
42	須恵器	皿A	15.5	2.1	4/24	内外面とも回転ナデ	2	堅緻	灰色	
43	須恵器	高坏	—	*6.2	—	内外面とも回転ナデ	2	軟	灰白色	脚部外面に沈線を2条ほどこす
44	須恵器	長頸壺	—	*9.8	—	内外面とも回転ナデ	3	堅緻	灰褐色	口縁部外面に沈線を2条ほどこす
45	須恵器	水瓶か	—	*8.6	—	内外面とも回転ナデ	2	堅緻	灰褐色	
46	須恵器	甕A	—	*9.7	—	口縁部内外面とも回転ナデ、体部摩滅のため不明	3	堅緻	灰色	
47	土師器	杯B	13.8	*2.6	1/24	内外面ともナデ	3	良好	茶褐色	

48	土師器	杯B	13.8	*3.5	2/24	内外面ともナデ	3	良好	茶褐色	
49	土師器	杯B	12.8	*3.3	5/24	内外面ともナデ	4	良好	橙褐色	
50	土師器	杯E	(7.9)	*2.5	6/24	内外面とも回転ナデか、底部ヘラ切り	2	良好	灰黄色	
51	土師器	杯E	(5.3)	*1.3	13/24	内外面とも回転ナデか、底部ヘラ切り	2	良好	橙褐色	椀底部の可能性あり
52	土師器	杯E	13.8	4.8	9/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り	3	良好	橙褐色	
53	土師器	杯か	—	*3.0	7/24	内外面ともナデ	3	良好	黄褐色	
54	土師器	甕A	15.6	*3.3	3/24	口縁部内外面ともヨコナデ、体部内面ケズリ	2	良好	橙褐色/ 黄褐色	
55	土師器	甕A	17.9	*4.5	1/24	口縁部内外面ともヨコナデ、体部外面ハケ、体部内面ケズリ	3	良好	橙褐色	
56	土師器	甕A	17.4	*5.0	1/24	口縁部内外面ともヨコナデ、体部外面ハケ、体部内面ケズリ	2	良好	黄褐色	
57	土師器	甕B	22.8	*3.0	2/24	口縁部内面に強いヨコナデ	3	良好	黄褐色	
58	土師器	甕B	22.8	*3.5	4/24	口縁部内面に強いヨコナデ	3	良好	黄褐色	
59	土師器	甕A	23.2	*4.2	2/24	口縁部内外面ともにヨコナデ、体部内外面ともナデ	3	良好	橙褐色	
60	土師器	鍋B	31.5	*3.4	1/24	口縁部内面に強いヨコナデ、口縁部・体部外面ナデ、体部内面ナデ	3	良好	黄褐色	
61	土師器	鍋A	38.8	*7.6	3/24	口縁部内外面ともヨコナデ、内外面ともナデ	3	良好	黄褐色・ 橙褐色	
62	土師器	鍋B	38.6	*6.6	4/24	口縁部内面強いヨコナデ、口縁部外面ヨコナデ、体部外面ハケ後ナデ、体部内面ナデ	3	良好	橙褐色/ 黄褐色	
63	土師器	鍋B	52.0	*7.7	5/24	口縁部内外面ともヨコナデ、体部外面ハケ、体部内面ケズリ	3	良好	黄褐色	

掘立柱建物跡 S B01

1	土師器	甕A	20.4	*6.0	3/24	口縁部内外面ともナデ、体部外面ハケ、体部内面ケズリ	3	良好	橙褐色	
2	土師器	甕A	22.6	*5.0	5/24	口縁部内外面ともナデ、体部外面ハケ、体部内面ケズリ	3	良好	橙褐色	

土坑 S K09

3	土師器	杯B	11.6	3.7	4/24	内外面ともナデ	3	良好	橙褐色	
4	土師器	甕A	23.3	*7.1	5/24	口縁部内面ハケ後ヨコナデ、口縁部外面ヨコナデ、体部外面ハケ、体部内面ケズリか	2	良好	橙褐色	

溝 S D05・06

5	須恵器	蓋	18.5	*1.2	3/24	内外面とも回転ナデ、天井部ヘラ切り	2	堅緻	灰色	
6	須恵器	蓋	14.2	*1.3	2/24	内外面とも回転ナデ	3	堅緻	灰色	
7	須恵器	杯C	(8.6)	*3.3	8/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデか	3	堅緻	灰色	
8	須恵器	杯C a	13.1	3.5	1/24	内外面とも回転ナデ	3	堅緻	青灰色	
9	須恵器	杯C a	12.9	3.7	2/24	内外面とも回転ナデ	3	堅緻	灰褐色	
10	須恵器	杯C a	13.6	3.8	1/24	内外面とも回転ナデ	3	堅緻	灰色	
11	須恵器	杯B c	11.7	2.6	1/24	内外面とも回転ナデ	2	堅緻	灰色	
12	須恵器	皿A	15.8	2.0	3/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデか	3	堅緻	灰色	
13	土師器	杯C	14.6	3.2	3/24	内外面ともナデ、口縁部外面やや強めのヨコナデ	3	良好	橙褐色	
14	土師器	杯A	14.0	*3.2	1/24	内外面ともナデ、口縁部外面やや強めのヨコナデ	3	良好	橙褐色	
15	土師器	鍋A	—	*3.3	1/24	口縁部内外面ともヨコナデ	3	良好	黄褐色	
16	土師器	甕A	14.8	*6.2	2/24	口縁部内外面ともヨコナデ、体部外面ハケ後ナデ、体部内面ケズリ	3	良好	橙褐色	

17	土師器	甕A	24.8	*6.1	2/24	口縁部内外面ともヨコナデ、体部外面ハケ後ナデ、体部内面ケズリ	2	良好	橙褐色	
18	土師器	甕A	22.9	*5.8	2/24	口縁部内外面ともヨコナデ、体部内外面ともナデか	3	良好	橙褐色	

溝SD03

19	須恵器	杯	13.1	*3.6	4/24	内外面ともナデ	2	堅緻	灰色	
20	土師器	杯	14.7	*2.5	1/24	内外面ともナデ、口縁部内外面ともやや強いヨコナデ	2	良好	橙褐色	
21	土師器	甕	15.8	*3.2	1/24	口縁部内外面ともヨコナデ、体部外面ハケ、体部内面ナデか	3	良好	橙褐色	口縁部ややつまみ上げ気味
22	土師器	鍋B	34.2	*4.0	1/24	口縁部内面強いヨコナデ、口縁部外面ヨコナデ、	2	良好	橙褐色	

溝SD01

23	須恵器	杯	(6.6)	*2.0	15/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切りか	3	堅緻	灰色	
----	-----	---	-------	------	-------	-------------------	---	----	----	--

溝SD08

24	土師器	甕B	22.3	*6.9	3/24	口縁部内面強いヨコナデ、口縁部外面ヨコナデ、体部外面ハケ、体部内面ケズリ	3	良好	橙褐色	
----	-----	----	------	------	------	--------------------------------------	---	----	-----	--

製塩炉SX14

25	土師器	甕A	20.7	*6.9	—	口縁部内外面ともヨコナデ、体部外面ハケ、体部内面ナデか	3	良好	茶褐色	
----	-----	----	------	------	---	-----------------------------	---	----	-----	--

土坑SK06

26	土師器	甕A	17.1	*3.7	3/24	口縁部内外面ともヨコナデ、体部内外面ともナデか	3	良好	橙褐色	
----	-----	----	------	------	------	-------------------------	---	----	-----	--

最終焼土面下層

1	須恵器	蓋	—	*2.3	—	内外面とも回転ナデ、天井部ヘラ切り後ナデ	2	堅緻	灰色	
2	須恵器	蓋	12.8	*1.2	2/24	内外面とも回転ナデ、天井部ヘラ切り後ナデ	2	堅緻	灰色	
3	須恵器	蓋	15.8	*1.5	1/24	内外面とも回転ナデ、天井部ヘラ切り後ナデ	2	軟		生焼け
4	須恵器	蓋Ca	13.8	2.5	1/24	内外面とも回転ナデ、天井部ヘラ切り後ナデ	3	堅緻	灰色	
5	須恵器	蓋	13.5	*1.7	6/24	内外面とも回転ナデ、天井部ヘラ切り後ナデ	3	堅緻	灰色	
6	須恵器	蓋	18.0	*1.5	1/24	内外面とも回転ナデ、天井部ヘラ切り後ナデ	3	堅緻	灰色	
7	須恵器	杯Ca	11.4	4.5	1/24	内外面とも回転ナデ	3	堅緻	青灰色	
8	須恵器	杯Ca	13.0	3.6	3/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデか	3	堅緻	灰色	
9	須恵器	杯Ca	12.8	3.8	4/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデか	3	堅緻	青灰色	
10	須恵器	杯Ca	13.6	3.5	7/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデか	3	堅緻	青灰色／灰色	
11	須恵器	杯Ca	13.8	3.9	5/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデか	3	堅緻	青灰色	
12	須恵器	杯Ca	14.0	3.4	4/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデか	3	堅緻	灰色	
13	須恵器	杯Ca	14.9	3.9	1/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り	3	堅緻	灰褐色／灰色	
14	須恵器	杯C	(10.0)	*1.9	12/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデか	3	堅緻	灰色	
15	須恵器	杯C	(7.5)	*2.8	8/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	3	堅緻	灰色	
16	須恵器	杯C	(11.3)	*2.5	5/24	内外面とも回転ナデ	3	軟	白	
17	須恵器	杯C	(11.7)	*1.4	4/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデか	3	堅緻	灰色	
18	須恵器	杯C	(11.4)	*1.6	5/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデか	3	堅緻	灰色	
19	須恵器	杯C	(12.4)	*1.4	4/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデか	2	軟	白	
20	須恵器	杯C	(6.6)	*1.6	14/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデか	3	堅緻	灰色	
21	須恵器	杯C	(8.5)	*1.2	5/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデか	3	堅緻	灰色	

観 察 表

22	須恵器	杯C	(8.2)	*1.5	4/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデか	3	堅緻	灰色	
23	須恵器	杯C	(9.8)	*1.9	3/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	2	堅緻	灰色	
24	須恵器	皿A	13.7	2.1	4/24	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切りか	3	堅緻	灰色	
25	須恵器	高杯	—	*7.1	—	内外面ともナデ	3	堅緻	灰色	
26	須恵器	壺か	—	*3.6	—	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	3	堅緻	灰色	
27	須恵器	長頸壺		*11.7	—	内外面ともヨコナデ	3	堅緻	灰色	口縁部外面に沈線を2条ほどこす
28	土師器	杯B	12.3	*2.4	1/24	内外面ともナデ	3	良好	橙褐色	
29	土師器	杯B	14.0	*2.2	1/24	内外面ともナデ	2	良好	橙褐色	
30	土師器	杯B	17.6	*2.9	1/24	内外面ともナデ	2	良好	橙褐色	
31	土師器	杯/椀	14.5	*3.1	1/24	内外面ともナデ	3	良好	橙褐色	
32	土師器	杯Eか	14.6	*3.0	1/24	内外面とも回転ナデか	2	良好	橙褐色	
33	土師器	杯Eか	(6.4)	*0.8	—	内外面とも回転ナデか、底部ヘラ切りか	2	良好	橙褐色	
34	土師器	甕A	20.0	*4.7	1/24	口縁部内外面ともヨコナデ、体部外面ハケ、体部内面ナデか	3	良好	橙褐色	
35	土師器	甕A	22.4	*3.8	4/24	口縁部内外面ともやや強めのヨコナデ	3	良好	黄褐色	
36	土師器	甕A	17.5	*4.3	2/24	口縁部内外面ともやや強めのヨコナデ	3	良好	橙褐色	
37	土師器	甕A	24.2	*5.5	8/24	口縁部内外面ともヨコナデ、体部外面ハケ、体部内面ナデか	3	良好	橙褐色	
38	土師器	甕A	29.0	*6.9	2/24	口縁部内外面ともヨコナデ、体部内外面ともナデか	3	良好	橙褐色	
39	土師器	甕B	26.2	*4.3	2/24	口縁部内面強いヨコナデ、口縁部外面ヨコナデ	3	良好	橙褐色	

第11表 出土鞆羽口観察表

番号	出土地点	層位・遺構	太さ (cm)	穴の径 (cm)	残存高 (cm)
1	N地点	S H14	(3.3~5.7)	(2.7~3.0)	5.3
2	O-2地点	攪乱土	(4.0~5.8)	(1.5~2.0)	3.8
3	A地点	S H08	(5.8~6.7)	(1.7~2.2)	5.8
4	O-1地点	鍛冶炉跡群包含層	(5.0~7.4)	(2.0~2.3)	7.3
5	O-2地点	炉跡4周辺	(5.9~8.0)	(2.4~3.3)	7.9
6	B地点	S H01周辺	5.1~8.0	2.3~2.4	13.1
7	O-2地点	炉跡4周辺	5.0~7.3	2.6~2.7	11.3
8	O-1地点	金床石周辺	5.8~7.9	2.4~3.0	10.8
9	A地点	包含層	4.4~6.5	2.1~2.2	8.2
10	O-2地点	黒褐色土層	6.4	2.0	8.2
11	N地点	S H14	(5.4~7.6)	(2.1~4.2)	6.3
12	O-2地点	最下層	7.9~8.5	2.5~3.2	7.5
13	O-1地点	鍛冶炉跡群包含層	(9.4~10.5)	(3.2~4.2)	9.4
14	O-1地点	鍛冶炉5直上	8.4~10.7	3.0~4.2	10.1

第12表 出土鉄滓観察表

番号	出土地点	層位・遺構	最大長 (cm)	重さ (g)
1	O-1地点	鍛冶炉12炉底	4.2	—
2	A-3地点	包含層	4.5	30
3	O-1地点	鍛冶炉3周辺	7.5	80
4	B地点	S H01周辺(S K 01)	5.2	35
5	N地点	製塩炉3周辺	5.2	64
6	B地点	S H01周辺	6.3	76
7	B地点	S H01周辺	6.7	91
8	B地点	S H01周辺	8.3	135
9	B地点	S H01周辺	7.1	191
10	B地点	S H01周辺	8.7	101
11	A-1地点	S H08Pit 5	8.2	120
12	A-3地点	S X03	8.0	227
13	O-1地点	鍛冶炉14炉底	9.8	—
14	O-1地点	海浜部	9.3	269
15	A-3地点	S X03	8.5	—
16	A-1地点	S H08Pit 7	9.1	—
17	O-1地点	鍛冶炉7周辺	10.0	221
18	N地点	S H10周辺	10.2	178
19	B地点	S H01周辺	8.4	166

第11表・第12表とも、番号は図版第146に対応する。

第13表 出土木器観察表

番号	種別	出土地区	法量		
			全長	幅	厚み
1	馬形	VII D-19 d	*27.2	4.1	0.8
2	馬形		25	4.9	0.8
3	馬形	VII D-19 d	*26.5	3.6	0.5
4	人形	VII D-1 b	*8.6	3.4	0.6
5	人形	VII D-18 g	*10.0	4.2	0.7
6	人形	VII C-20 t	55.5	5.9	0.5
7	人形	VII D-2 t	*22.3	3.8	0.5
8	人形	断ち割りEライン	20.5	3.1	0.7
9	人形	VII D-18 d	*14.6	3.8	0.4
10	人形	VII D-10 c	*14.3	2	0.5
11	人形	VII C-20 t	*12.2	2.3	1.2
12	人形	VII D-10 c	*11.3	2.5	0.5
13	下駄		21	8.3	1
14	下駄		18.3	9.2	1.3
15	下駄	VII C-1 t	*17.5	3.6	1

番号	種別	出土地区	法量		
			全長	幅	厚み
16	下駄	VII D-17 e	*11.4	8.1	1.1
17	木匙	VII D-18 e	10.6	6.2	0.8
18	曲物底	VII D-19 c	*10.7	*5.0	1
19	曲物底	VII D-17 e	9.2	*5.2	0.8
20	火鑽白?	VII C-1 t	*58.3	7.7	1.7
21	不明木製品	VII D-18 e	33.6	3.3	2.3
22	火鑽白?	VII D-20 a	*14.6	2.6	1.3
23	火鑽白?	VII D-17 f	*11.6	2.5	2.1
24	人形?	VII D-18 e	*25.1	2.4	1.9
25	人形?	VII D-18 f	*22.5	2.6	1.4
26	人形?		*20.6	2.3	2.3
27	人形?	VII D-19 g	*14.9	4.2	1.2
28	人形?	VII D-18 a	*16.2	3	2.6
29	人形?	VII D-20 t	*16.5	2.2	2.1
30	人形?	VII C-2 t	*6.3	2.1	0.8

31	人形?	断ち割りEライン	*10.7	4.6	1.4
32	人形	VII D-18 e	*9.0	1.3	0.3
33	箸		*8.8	1	0.6
34	箸	VII D-18 f	*5.3	0.4	0.4
35	箸	VII D-18 f	*7.9	0.7	0.4
36	箸	VII D-18 f	*8.9	0.6	0.5
37	箸	VII D-18 f	*9.8	0.8	0.5
38	箸	VII D-18 f	*9.8	0.6	0.5

39	箸	VII D-18 f	*12.5	0.6	0.6
40	箸	VII D-2 a	*12.7	0.5	0.5
41	箸	VII D-18 f	*11.0	0.6	0.5
42	箸	VII D-18 f	*11.5	0.5	0.6
43	箸	VII D-18 f	*12.1	0.5	0.5
44	箸	VII D-18 f	*14.6	0.6	0.5
45	不明製品				

第14表 出土石器観察表

番号	器種	出土地点	層位・遺構	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	石材	備 考
1	石鏃	A-3地点	S P221	(1.7)	(1.2)	(0.3)	安山岩	
2	石鏃	N地点	包含層Ⅱ	1.8	1.4	0.25	安山岩	
3	石鏃	N地点	包含層Ⅲ	2.3	1.7	0.7	チャート	
4	石鏃	O地点		2.7	1.9	0.4	安山岩	
5	石鏃	N地点	包含層Ⅱ	2.2	1.2	0.4	安山岩	
6	石鏃	A-1地点	S H08	2.1	1.7	0.4	安山岩	
7	石鏃	A-1地点	包含層	(0.9)	1.4	(0.4)	チャート	
8	石鏃	N地点	包含層Ⅲ	2.0	1.5	0.5	チャート	
9	二片	N地点(縄文)	包含層Ⅲ	3.0	2.0	0.8	チャート	
10	石匙	O-1地点	海浜部精査中	2.4	4.1	0.8	頁岩	両面に敲打痕あり
11	礫石錘	N地点		9.5	7.5	1.6	砂岩	二片素材
12	敲石	N地点		8.5	8.0	4.65	砂岩	
13	石核	N地点		10.1	9.5	4.1	砂岩	

第15表 出土土錘観察表

番号	出土位置			分類	法量		
	地点	地区・遺構	層位		長さ (cm)	径 (cm)	重さ (g)
1	不明			a類	3.4	1.0	4
2	A-1地点	S H08		a類	3.0	1.9	5
3	A-1地点	S H08		a類	4.0	1.2	5
4	A-1地点	S H08		a類	4.2	1.3	6
5	A-1地点	S H08		a類	4.0	1.1	5
6	A-1地点	S H08		a類	4.2	1.1	6
7	A-1地点	S H01		a類	3.9	2.0	13
8	A-1地点	S H01		a類	3.9	1.9	12
9	A-1地点	S H01		a類	*4.3	1.7	*13
10	A-1地点	S H01		a類	3.6	1.9	15
11	A-1地点	S H01		a類	3.9	2.0	15
12	A-1地点	S X02		a類	5.0	1.5	*11
13	A-1地点	S H08		b類	5.0	2.2	21
14	A-1地点	S H08		c類	5.5	1.7	13
15	A-1地点	S H08		c類	6.2	1.8	20
16	不明			c類	6.3	1.5	15
17	A-1地点	S H03		c類	6.4	1.7	20

番号	出土位置			分類	法量		
	地点	地区・遺構	層位		長さ (cm)	径 (cm)	重さ (g)
18	A-3地点	S P212		c類	4.3	1.6	12
19	A-1地点	S H05		c類	6.3	1.5	16
20	A-3地点	S P191		c類	5.9	1.6	17
21	A-3地点	S X03		c類	6.9	1.5	20
22	A-3地点	S X03		c類	6.5	1.5	15
23	A-3地点	S X03		c類	6.5	1.5	16
24	A-1地点	S H01		c類	6.7	1.8	18
25	A-1地点	S H01		e類	7.3	4.4	142
26	A-3地点	S K03		d類	6.4	3.3	84
27	N地点	出土地区不明	包含層	a類	3.1	1.0	2
28	N地点	出土地区不明	包含層	b類	4.9	2.2	21
29	N地点	出土地区不明	包含層	d類	5.1	2.3	26
30	N地点	出土地区不明	包含層	d類	*5.7	2.5	29
31	N地点	出土地区不明	包含層	d類	6.0	3.0	50
32	N地点	出土地区不明	包含層	d類	6.1	2.2	26
33	N地点	出土地区不明	包含層	d類	6.8	2.4	34
34	N地点	S H12		a類	5.0	1.9	20

35	N地点	SH12		b類	5.1	1.7	21
36	N地点	SH12		b類	5.9	1.5	19
37	N地点	SH14		a類	3.5	1.5	6
38	N地点	SH14		a類	5.0	1.5	15
39	N地点	出土地区不明	包含層	b類	6.7	1.6	17
40	N地点	SH14		b類	7.0	1.7	21
41	N地点	出土地区不明	包含層	b類	5.8	1.9	22
42	N地点	出土地区不明	包含層	b類	5.8	2.0	19
43	N地点	出土地区不明	包含層	b類	6.4	1.8	24
44	N地点	SH15		b類	6.9	1.7	21
45	N地点	SH19		b類	7.3	1.5	18
46	N地点	SH20		b類	6.7	1.3	15
47	N地点	SH22		b類	6.2	1.7	17
48	N地点	SH22		b類	6.0	1.6	17
49	N地点	SH22		d類	*6.2	*3.6	*82
50	不明			d類	6.3	2.7	49
51	N地点	出土地区不明	包含層	b類	6.4	1.3	11
52	N地点	SH23		f類	2.8	3.0	22
53	N地点	SH23		f類	2.5	3.5	28
54	N地点	SH23		f類	*3.0	3.0	25
55	N地点	VID-10 e	包含層	a類	3.6	0.9	2
56	N地点	VID-10 g	包含層	a類	4.2	1.1	4
57	N地点	製塩炉2		a類	3.6	1.6	5
58	N地点	SX01		a類	4.0	1.4	7
59	N地点	VID-12 e	包含層	a類	4.2	1.8	9
60	N地点	VID-11 f	包含層	a類	4.6	2.0	15
61	N地点	VID-12 i	包含層	b類	4.8	2.1	17
62	N地点	出土地区不明	包含層	b類	4.7	2.1	17
63	N地点	VID-12 f	包含層	d類	5.2	2.3	21
64	N地点	VID-12 f	包含層	b類	4.9	2.3	21
65	N地点	製塩炉2		b類	4.8	2.0	19
66	N地点	VID-12 f	包含層	b類	4.8	2.2	*20
67	N地点	VID-12 f · 11 g	包含層	b類	4.9	2.1	20
68	N地点	出土地区不明	包含層	c類	5.4	1.7	22
69	N地点	VID-11 g	包含層	c類	5.0	1.8	19
70	N地点	VID-12 f	包含層	b類	4.3	2.2	20
71	N地点	VID-12 f	包含層	c類	5.2	1.9	17
72	N地点	VID-12 f	包含層	d類	5.0	2.0	18
73	N地点	VID-12 f	包含層	d類	5.0	2.1	24
74	N地点	VID-12 g	包含層	a類	4.6	1.8	21
75	N地点	SH22		d類	5.1	2.0	21
76	N地点	製塩炉2		d類	5.2	2.0	22
77	N地点	VID-10 g	包含層	c類	5.3	1.5	12
78	N地点	VID-11 e	包含層	c類	5.4	1.4	11
79	N地点	VID-11 e	包含層	c類	5.3	1.6	16
80	N地点	VID-10 g	包含層	d類	*5.6	2.1	21

81	N地点	VID-12 h	包含層	c類	5.7	1.5	16
82	N地点	VID-12 f · 11 g	包含層	c類	5.9	1.9	20
83	N地点	D-12 f · 11 g	包含層	c類	6.5	1.7	20
84	N地点	製塩炉1		c類	6.9	1.3	12
85	N地点	VID-11 g	包含層	c類	7.1	1.3	14
86	N地点	VID-9 g	包含層	c類	7.0	1.4	18
87	N地点	製塩炉2		d類	*6.2	3.1	*43
88	N地点	出土地区不明	包含層	d類	*7.6	*3.4	*41
89	N地点	出土地区不明	包含層	d類	6.3	3.6	82
90	N地点	SX04		e類	5.8	4.5	135
91	N地点	出土地区不明	包含層	f類	2.8	3.2	29
92	B地点	試掘		a類	4.1	1.3	
93	B地点	SH02		c類	5.2	1.8	16
94	B地点	試掘		f類	3.2	3.6	
95	O-2地点	VID		b類	4.8	2.0	17
96	O-2地点	VI e	暗茶褐色土層	d類	5.2	2.3	28
97	O-1地点	VID-16 g	礫面直上	d類	5.1	*2.1	*18
98	O-1地点	VID-16 g	礫面直上	d類	5.1	2.4	27
99	O-2地点	VI C	暗青灰色粘土層	d類	5.4	2.4	32
100	O-2地点	VI C	黒褐色土層	d類	*4.7	2.1	*21
101	O-2地点	C	黒褐色土層	d類	5.2	2.0	22
102	O-2地点	VID	焼土面	c類	5.1	1.7	18
103	O-2地点	VI C	暗茶褐色土層	c類	6.3	1.6	19
104	O-2地点	VI C	暗茶褐色土層	c類	6.3	1.3	16
105	O-2地点	VI B	ベース直上	c類	7.3	1.7	20
106	O-1地点	VID-16 g	礫面直上	d類	5.5	3.4	64
107	O-2地点	VID · VID	暗茶褐色土層	e類	9.4	4.6	216
108	O-2地点	不明	暗茶褐色土層	f類	3.7	3.7	48
109	O-2地点	IV E	暗茶褐色土層	c類	5.3	1.4	12
110	O-2地点	24D		c類	5.7	1.3	11
111	O-2地点	VI C	黒褐色土層	c類	5.5	1.4	12
112	O-2地点	VI C	黒褐色土層	c類	5.9	1.4	11
113	O-2地点	C		c類	6.6	1.4	14
114	O-2地点	VI C		b類	4.3	2.0	17

観 察 表

115	O-2 地点	ⅦC・D		b 類	4.2	2.2	16
116	O-2 地点	24D		b 類	4.2	2.8	*31
117	O-2 地点	ⅦC	黒色炭層	d 類	5.2	2.2	27
118	O-2 地点	ⅦD	黒褐色土層	d 類	6.6	2.5	42
119	O-2 地点	ⅦC		c 類	5.4	1.4	10
120	O-2 地点	ⅦC		c 類	5.8	1.7	13
121	O-2 地点	不明		c 類	6.2	1.8	15
122	O-2 地点	ⅡD	黒褐色土層	c 類	6.9	1.5	16
123	O-2 地点	ⅦC	黒褐色土層	c 類	7.3	1.7	19
124	O-2 地点	不明		f 類	*2.0	2.5	10
125	O-2 地点	不明		f 類	*2.3	3.1	19
126	O-2 地点	ⅦC	黒褐色土層	f 類	*3.5	3.5	36
127	O-2 地点	24D		f 類	3.1	3.1	27
128	O-2 地点	ⅦC	黒色炭層	d 類	6.8	3.0	38
129	O-1 地点	ⅦC-20 t	精査中	c 類	5.1	1.2	7
130	O-1 地点	ⅦD-16 g	精査中	c 類	6.1	1.5	13
131	O-1 地点	ⅦD-18 e	精査中	c 類	6.4	1.5	15
132	O-1 地点	ⅦC-19 t	精査中	c 類	6.9	1.4	16
133	O-1 地点	ⅦD-16 g	礫面	c 類	7.6	1.4	15
134	O-1 地点	ⅦD-17 f	精査中	c 類	6.1	1.6	16
135	O-1 地点	ⅦD-16 g	礫面	c 類	*6.9	1.5	16
136	O-1 地点	ⅦD-19 a	精査中	d 類	6.7	2.1	31
137	O-1 地点	ⅦD-17 f		d 類	6.3	2.1	25
138	O-1 地点	ⅦD-16 g	精査中	c 類	6.7	1.9	26

139	O-1 地点	ⅦD-18 b	精査中	a 類	3.3	1.9	9
140	O-1 地点	土層断ち割り	Aライン	a 類	3.3	1.9	11
141	O-1 地点	土層断ち割り	Aライン	a 類	4.6	1.8	14
142	O-1 地点	土層断ち割り	Eライン	b 類	4.2	*2.0	13
143	O-1 地点	ⅦD-16 g	精査中	a 類	4.4	1.9	12
144	O-1 地点	ⅦD-16 g	精査中	a 類	4.7	1.7	11
145	O-1 地点	土層断ち割り	Aライン	d 類	5.0	2.4	22
146	O-1 地点	ⅦD-17 f	精査中	d 類	5.1	2.1	20
147	O-1 地点	ⅦD-16 f	灰色	d 類	5.2	2.2	21
148	O-1 地点	ⅦD-2 a	精査中	d 類	5.4	2.0	20
149	O-1 地点	ⅦD-16 f	灰色	b 類	4.8	2.3	23
150	O-1 地点	ⅦD-17 e	精査中	d 類	*5.5	2.1	24
151	O-1 地点	ⅦD-17 f	精査中	d 類	5.2	2.1	24
152	O-1 地点	ⅦD-17 d	礫面	d 類	5.2	2.6	33
153	O-1 地点	ⅦD-16 f	精査中	d 類	5.5	2.6	30
154	O-1 地点	ⅦC-7 q	焼土面	d 類	5.3	2.1	21
155	O-1 地点	ⅦD-19 a	精査中	d 類	5.7	2.9	45
156	O-1 地点	ⅦD-16 g	精査中	d 類	6.0	3.9	75
157	O-1 地点	ⅦC-6 q	焼土面	d 類	*8.3	3.4	107
158	O-1 地点	ⅦD-19 b	精査中	f 類	2.9	3.4	26
159	O-1 地点	ⅦC-1 t	礫面	f 類	3.5	4.2	53
160	O-1 地点	ⅦD-16 f	礫面	f 類	2.8	3.4	26
161	O-1 地点	ⅦC-7 q	黒褐	f 類	3.1	3.3	30
162	O-1 地点	ⅦD-17 f	礫面	f 類	2.2	3.5	16
163	O-1 地点	ⅦD-17 g	精査中	f 類	3.1	3.0	22
164	O-1 地点	鍛冶炉跡群	Pit 2	e 類	10.1	4.3	204
165	O-1 地点	土層断ち割り	Aライン	e 類	*6.5	5.4	161

報告書抄録

ふりがな	うらにゅういせきぐん							
書名	浦入遺跡群							
副書名								
巻次								
シリーズ名	京都府遺跡調査報告書							
シリーズ番号	第29冊							
編著者名	辻本和美・田代 弘・藤井 整・筒井崇史							
編集機関	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター							
所在地	〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40-3			Phone	075(933)3877			
発行年月日	西暦 2001 年 3 月 26 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
うらにゅう いせきぐん 浦入遺跡群	まいづるしちとせ はながくち・いけ かなる 舞鶴市千歳花ヶ 口・池カナル	202		35° 31' 30"	135° 20' 40"	19950619 ～ 19980318	28,690	火力発電所 建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
浦入遺跡群	集落・生産遺跡	縄文時代 弥生時代 古墳～飛鳥時代 奈良～平安時代		石囲炉・焼土 竪穴住居・流路跡 竪穴住居・テラス状遺構 竪穴住居・テラス状遺構 製塩炉跡・鍛冶炉跡		縄文土器・石器 丸木舟 弥生土器・石器 銅鏃 土師器・須恵器 土師器・須恵器 木製品・銭貨 鍛冶関連遺物 製塩土器		

京都府遺跡調査報告書 第29冊<本文編>

平成13年3月26日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Phone (075)933-3877 (代)

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル
Phone (075)256-0961 (代)

『京都府遺跡調査報告書』第29冊正誤表

	頁	場所	誤	正	
本文編	IV頁	下から3行目	1. 縄文土器	1. 縄文時代の土器	
		下から2行目	2. 弥生土器	2. 弥生時代後期から古墳時代前期の遺物	
	V頁	上から17行目	126	125	
	VI頁	上から14行目	A-3 地点土層	A-3 地点・O-2 地点土層	
	VII頁	上から4行目	136	135	
	28頁	第10図キャプション	流路SD01	流路跡SD01	
	129頁	上から12行目	執筆者名抜け	(筒井崇史)を追加 *	
	131頁	上から32行目	執筆者名抜け	(伊藤栄二)を追加 *	
	134頁	上から6行目	接合部に＝	接合部に柵	
	174頁	上から15行目	M＝	MVI	
	174頁	上から16行目	M＝	MVII	
	174頁	上から17行目	M＝	MVII	
	174頁	上から18行目	M＝	MVII	
	174頁	上から19行目	M＝	MVI	
図版編	VI頁	下から5行目	N地点竪穴式住居跡SH22全景	N地点テラス状遺構SH23全景 *	
	VII頁	上から6行目	A-2 地点	A-1 地点	
	VIII頁	上から10行目	製塩土器集積遠景	製塩土器集積全景	
	IX頁	上から17行目	製塩炉・SX11	製塩炉SX11	
		下から1行目	O-1 地点	O-2 地点	
	図版第172	(3)のキャプション	SH22	SH23	
	図版第192	(2)のキャプション	段状遺構SX焼け石	段状遺構SX01焼け石 *	
	図版第204	(1)のキャプション	O-2 地点下層製塩炉SX11・14、溝SD01全景(南東から)	O-2 地点下層製塩炉SX11全景(南東から) *	
		(2)のキャプション	O-2 地点下層製塩炉SX14全景(南東から)	O-2 地点下層製塩炉SX11北半近景(南東から) *	
		(3)のキャプション	O-2 地点下層製塩炉SX14製塩土器出土状況(南東から)	O-2 地点下層製塩炉SX11南半近景(南東から) *	
	図版第205	(1)のキャプション	O-2 地点下層製塩炉SX11全景(南東から)	O-2 地点下層製塩炉SX11・溝SD01近景(東から) *	
		(2)のキャプション	O-2 地点下層製塩炉SX11北半近景(南東から)	O-2 地点下層製塩炉SX11土層断面(南東から) *	
		(3)のキャプション	O-2 地点下層製塩炉SX11南半近景(南東から)	O-2 地点下層溝SD01遺物出土状況(南東から) *	
	図版第219	(3)のキャプション	R地点丸木舟取り上げ作業風景	R地点丸木舟下層検出種実貯蔵土坑(西から) *	
	図版第232		遺物番号抜け	77-230	(79-298)
		()は番号が記入されているもの	(78-255)	(78-261)	
			80-314	80-307	
			80-334	80-322	

*を付したものについては、お手数ですが別添のシールを貼付してください。